
スウィートリベンジ 一天草未来の野望

檜山英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スウィートリベンジ 一天草未来の野望一

【Nコード】

N7450K

【作者名】

檜山英

【あらすじ】

今時、天下を狙う時代錯誤な女子高生天草未来、それに反抗する不器用男子の松平祐一、そして祐一を見守るクラスメイト和川真奈美。そんな3人が偶然、戦乱渦巻く異世界へ！
剣あり、策あり、魔法なし！ そしてアダルトまでちょっとアリな、痛快女の子だらけの本格異世界三國志戦記。

プロローグ（前書き）

初めての方もそうでない方も宜しくお願いします。

プロローグ

0

天草未来。

名字はあまくさ。

名はみらい。

皆さんはこの名前を聞いて、コイツがどんな人間だろうと想像力を働かせるだろうか？

まあ、女の子の名前であろう。

むさ苦しい男やオッサン、そしてオバハン……ましてペットとか想像してしまった方には猛省を促す。見かけで人を判断してはいけません、よく言われる言葉だが、それを今日は上回って、名前だけで判断してみようかと思う。

天草未来。

芸名っぽい、アイドルの名前でもありそうだ。

天草未来。

可愛い名前だ、名は体を表すの通り、少なくとも平均以上のルックスを持っているそうだ。

天草未来。

頭も悪くは無さそう、いや、むしろ良さそうだ、漫画ではよく見るが、実際は酷い虐めの原因にもなりそうな掲示板に張り出される学期末テストの順位表、あれでベスト10に入っているだろう。

天草未来。

運動神経も抜群に良さそうだ、変態みたいだが、白い体操服に紫のスパッツが似合いそうだ。

そろそろ皆さんも焦れて来た頃合いだろうから、答えを教えよう。

全部正解である。

天草未来は実在する。

しかし……天草未来は超を幾つ付けても足りない位の危ない奴なのである。

この物語は天草未来というトンデモ女子高生と俺、松平祐一、まつだいら ゆういちそして何故か巻き込まれた、1人の不幸な同級生が造り上げた本来ならば、無かったであろう、ある世界での歴史だ。

夢うつつである。

暖かな日差しが差してくる5月27日の午後12時3分は、彼の睡眠時間になりかわっていた。

「松平君……起きようよ」

古典の老教師の視線を気にしながら、和川真奈美^{かずかわ まなみ}は机に顔を横に倒し、熟睡態勢に入ったとも言える祐一を、隣の席からシャーペンで軽くつつく。

反応は無い。

「松平君……」

首の中程までのショートカットにゆるやかな輪郭、どんぐり眼の高校二年生の割に童顔な少女、和川真奈美は困った顔を見せる。

「真奈美……止めなよ、無駄だってば、寝かしといてあげなよ」

友人の女子が、真奈美に声をかけてくる。

「……でも」

「どうせ、アイツが昼休みに現れるんだから、松平君は休んでるのよ」

その友人はケータイを覗ながらで、授業にすら興味なさげである。

「もう……やめてあげればいいのに……松平君が可哀そうだよ」

「じゃあ、真奈美があいつに言えば？ 松平君は見逃してくれって、聞く耳持つとは思えないけど」

「ううっ……」

真奈美はたじろく。

「ね!？ ああいう輩は、やりたい奴ら同士に任せておけば良いのよ」

「……松平君も相手にしなければいいのに」

「本人同士も楽しんでるわよ、何だったら真奈美が奴と勝負すれば良いんじゃない？ 勝てそうな競技があれば……文句のある奴は何でもかかってこい、って言ってるわよ」

さらっと言う友人に真奈美が頭を垂れ、

「勝てる物が……無い……と思う」

そう自信無げに答えた時である、4限目の終了を告げるチャイムが鳴り響き、古典の教師が教室から立ち去っていく。

「……和川」

不意に名前を呼ばれて真奈美は、

「ハイッ!」

と、振り返る。

いつの間にか、顔を横に机につけて寝ていた祐一が目を開けていた。

顔つきは整い、髪は短く切っている。

かなりの美形で可愛らしい印象もある美少年。

それが松平祐一だ。

「今のチャイム……昼休みになったのか？」

「う……うん、もうお昼休み……松平君、二時間目の途中から、ずっと寝ていたからね」

「悪かったな」

祐一の目つきが鋭くなると、真奈美はしまったという表情を浮かべ、

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい」

と、頭を下げる。

「別にいいよ……ったく、そんなに謝るなら一言多い癖を直しやいいだろ？」

祐一は立ち上がった。

身長は170？ほど、154？の真奈美から見れば大きいのが、男子としては特別に身長が高い程でもなく、身体つきもどちらかと言えば細いだろう。

「松平君……今日もあの人来るの？　もう相手にしなければどうか

な？」

「また、一言多い」

眉をしかめる祐一。

「あ……あ、ごめんなさい……すいません」

ペコペコ頭を下げる真奈美に、

「まあ、和川から見ればあんな事だろうな……でもな、俺はあいつと白黒付けなきゃ気が済まない」

そう祐一が拳を握り締めるのを待っていたかのように、教室のドアが明らかに威圧的な勢いで開く。

「グッモーニング！ 2年F組の皆さん 本艦只今、原子力にて航行中！ なんてね、本校の皇帝天草未来、参上！ 私の独裁制に文句のある奴はあらゆる勝負に打ってきなさい！ 私は逃げないわよ！」

そこには、普段の学校生活では見られないナニコレな珍景色があった。

数人の男子生徒の担ぐ御輿の上で、胡坐をかいて不敵な笑みを浮かべるセーラー服の少女。

黒髪のショートボブカットに、少し釣り上がった強気そうな瞳。

スツと高級万年筆でひいた様な整った輪郭、高くも無く低くもない細い鼻筋、そして不敵な笑みを浮かべた薄い唇。

その少女の名前は天草未来^{あまくさ みらい}、紛れもない美少女であつた。

「2年F組、天草軍団に楯突く最後の抵抗勢力！ いざ最終決戦！
進めっ！」

「オスッ！」

指を差す未来。

御輿を担いでいた男子6人は、未来の気合いの声と共に声を張り上げて、教室内に突撃しようとしたが、ガツと嫌な音が立ち、御輿の一部がドアに突っかかり、バランスが崩れる。

当然、担がれていた未来は、前のめりに御輿から転げ落ちるが、

「なんのっ！」

未来は叫びながら、軽い身のこなしでクルリと、身体を一回転させてから、見事に着地したのである。

オオツと、クラス中に沸き上がる歓声。

「いや、いや、ありがとう、ありがとう……学園の支配者としては無様な姿は見せられないのよ、これが……また」

得意げに歓声に手を振る未来。

「まあ、最初にそんな御輿に乗って教室に入ってこようとしたのが、マヌケなんだけどな……」

祐一が未来の前に立つと、未来の目つきが変わる。

「来たわね、最後の抵抗勢力……大人しく天草未来の天下布武に従ってれば良いものを」

「ふざけろ、お前のふざけた時代遅れの番長ごっこもこれでしまいだ……」

睨む祐一。

「じゃあ、この天草未来に立ち向かう、愚かな松平祐一に問うわ……あんた、私と何で勝負する？」

不敵な表情で薄笑いを浮かべる未来。

「俺が今まで将棋とか麻雀とか、答えた事があったかよ？ この学校で天下とりたきゃ、俺をこれで押し通せよ！」

祐一が右拳を未来に向かって突き出す。

「やっぱそうよね……私もそれが一番嬉しいのよ」

未来は腰に手を当てながら胸を張った。

室内に緊張が走る。

天草未来と松平祐一。

それをオロオロしながら見守る和川真奈美。

3人はこれからまったく想像もつかないスケール、そして世界で、互いがたくさんの命運を背負っていく事を知らなかった。

「クソッ、天草の奴……思いっきりやりやがって」

昼休みの終了間際の水のみ場、祐一は蛇口から直接水を頭にかぶる。

「……これを使って、安い物だから気にしないで」

そこに駆け寄り、ハンカチを差し出す真奈美。

「和川か、サンキュ……あいつに蹴られた頬……腫れてるか？」

「えと、だ、大丈夫だよ、少し赤いけど、あまり目立ってない」

祐一の整った顔の頬はわずかに腫れていたが、目立つ程ではない。顔を近づけてきた祐一、真奈美は赤面しつつ、慌てて首を振った。

「そうか、あの野郎……今度はギャフンと言わせてやるぜ！」

祐一はその可愛らしさすら感じさせる整った顔立ちに似合わない事を言い、右拳で左手の平を叩く。

「ねえ、松平君」

「なんだよ？」

「どうして天草さんと……あんなにむきになる必要があるの？ 学園の支配者とか皇帝とかって勝手に言わせておけばいいのに、別に普段から何を言われる訳でもないんだから」

真奈美はハンカチを水に濡らす祐一を覗き込む。

天草未来のやっている事は、ひと昔前の漫画にあったいわゆる番長争いと大差はない。

未来は何故か、この時代に学園の支配者を名乗り、立ち向かってきた生徒は力づくでねじ伏せる、また時には、その生徒が得意な競技等で自分の力を見せ付けて勝利し、部下に加える様に取り巻きを増やしている。

しかし、未来がその力で一般生徒から不当なカンパを募ったり、理不尽な事をさせている話は聞かない、だから一般生徒は未来の主張を黙認していれば良いのである。

真奈美のそんな言葉に潤は何も答えず、その場に座った。

「……違うかな？ また一言多たって怒られるかも知れないけど、相手は女の子だし……怪我なんかさせちゃったら大変な事になる気がする」

祐一と少し間を開けて座る真奈美。

「……和川」

祐一は真奈美を呼び、顔を見つめてくる。

「な……なに？」

ジッと見つめられてしまい、焦る真奈美。

「多分、和川みたいに天草を扱うのが利口なんだと思うぜ……でも、なんかそうできないんだ、天草が嫌いとかそういう事じゃなくてな」

ポツリと言って、祐一は真奈美から視線をよく晴れた空に向けた。

「……松平君」

「それに俺だって女の子に手を上げるのは遠慮したいさ、でも天草は真剣に勝負をしてくる、そんな相手に手加減するのはもっと遠慮したいんだ……それに天草がもしもの時、自分が女の子という事を利用して被害者面する様な奴だったら、それまでの奴だった、と笑ってやるさ」

空を見続ける祐一。

「それって、ある意味、信頼？」

真奈美は、空を見上げる祐一の横顔を見た。

「さあな、よくわからんが……天草と俺はもしかしたら生まれてくる時代を間違えたかな？　ちなみに天草は性別もか？　いやアイツには関係ないか」

祐一はクッククツと笑う。

「……松平君」

胸の奥に何かの痛みを覚えた、真奈美は祐一の名前を呼ぶ。

『本人同士も楽しんでいるわよ』

授業中に友人に言われた言葉を思い出し、思わず俯いてしまう。

「……俺からしたら、逆にみんなが無関心でいられる方が不思議だな」

「……」

「俺ってさ、テレビでやってる政治の汚職とか企業の不正とかにも結構、熱くなっちまうんだよ」

頭を掻き、苦笑してくる祐一に、
「そうなんだ？」

真奈美は顔を上げた。

「変だろ？ 政治家がいくら汚職しようが、企業が原材料を誤魔化そうがほとんど関係ないのにな」

祐一は肩を竦める。

言う通りだ。

真奈美もテレビでやっている連日の様に報じられている汚職、不正は目になっている。

酷いと思う。

しかし、それよりも休日前ならば、明日は誰か友人を誘って買い物に出かけようか？ 平日ならば、明日の学校で借りていたCDを返さないと、等と考えて、風呂に入っている内に頭の隅に押しやられる。

所詮、直接自分に関係しなければ基本的に無関心に近い、それよりも自分の身の回りの出来事。

またやってるよ、程度の呆れ、それが普通の反応だろう。

「おそらく天草も、そんな俺みたいな奴なんだと思うんだ……」

「政治家になれるかもね」

返す言葉に迷い、真奈美が笑うと、

「武闘派過ぎらあ」

祐一は再び空を仰ぐ。

あいつと俺は生まれた時代を間違えた……

祐一のさっきの台詞。

冗談混じりの言葉と真奈美はとったが、本心からの嘆きなのかもしれない。

そんな事を真奈美が考えていると……

「見つけたわよ、この反逆者！　こんな所で負けた悔しさを幼なじみに慰めてもらっているなんて、なんて漫画チックな奴！」

聞き覚えのあるハキハキした声が、水のみ場に大きく響く。

「何が負けだ、和川は幼なじみじゃねえよ！　よく現れたな、俺の右のローの威力はどうだった？　歩けるのかよ、皇帝さん！」

座っていた祐一は跳ね起きる。

その視線の先には……そう、天草未来が腰に手を当てて、不敵な笑いを浮かべていた。

「あんたのヘロヘロローキックでは私は膝を曲げる事もないわよ！　さあ、第二ラウンドよ」

「望むところ！　サメ軟骨か、ヒアルロン酸入りの何とかの定期購入予約しておけよ、今からてめえの膝を壊してやるからよ」

互いに構えあう。

「あ……」

座ったままの真奈美には2人の意識は一切ない。
互いしか見ていない。

『私は2人の間に入る事は出来ない？　2人は互いに……この今の

……現代の生活に足りない物を見つけている?』

「いくわよ! 皇帝に逆らう謀反人!」

「おう! 下剋上を再現してやらあ」

遠慮無しに走りだし、激突しようとする2人。

性別もない。

手加減も無い。

見合う時代も無い。

『そして、私なんて見えていない! 嫌だ!』

真奈美は素早く立ち上がり、2人に向かって走りだした。

何も考えていなかった、ただ2人の間に……自分の存在を入れてしまいたかっただけだった……

「祐一くん!」

「なっ!?! 何よ!」

「和川?」

交錯し、ぶつかり合った時だ。

まばゆいばかりの光が、三人を囲んだのである。

第1話に続く

第1話「偃月刀の少女」

1

土の壁に藁の屋根の粗末な小屋から、赤子の泣き声が聞こえてくる。

「産まれたっ！」

「どうだ？」

老人達の声。

「……女」

粗末な着物を着た産婆が首を振ると、

「そうか……」

同じく質の悪い布の着物に、身を包んでいる老人達も肩を落とす。

「ご苦労だったな」

母親になった若い娘を労い、老人の1人は小屋を出て天を仰いだ。

「ああ……もう、この国には男は産まれんのか」

「兄上！」

一人の少女が、声を上げながら、竹林の中をキョロキョロしていた。

長い金髪を首の後ろで纏めて、背中から腰の辺りまで流している。鋭く蒼い瞳、高くはないが整った鼻筋。

肌はぬけるように白く、絶世の美少女だ。

しかし、身長は低く、決して裕福とは言えない着物に身を包む身体は、胸元の起伏が殆どなく、幼児体型なのが目立つ。

それと同じ位に目を引くのは、彼女が腰から差した偃月刀である。

「アーシェか……」

竹林の影から聞こえた声に、

「兄上!？」

彼女は振り返る。

そこには一本の太い竹に寄りかかり、寝そべる一人の少年。

短い黒髪的美少年。

どこか中性的で一見、美少女にも見える。

「兄上……外で寝ていたのか、せっかく一泊させてくれる家があるのだから、外に出てくる必要はないだろうに？」

アーシェと呼ばれた金髪的美少女は腰に手を当てながら、眉をかめる。

「嫌だ、せっかく宿を見つけてくれたアーシェには悪いが、昨晚……俺のあてがわれた部屋に、家の次女とかいう娘がやってきてね、赤子を授かりたいから、手伝ってくれ、ってな」

少年がため息をつくど、

「それはっ！ な、なるほど、この村にも……適当な年齢の男子はおらぬ……と聞いていた……が、ま……まあ、兄上のような美形は、そうはおらぬから、じ……次女殿の望みも、わ、解らぬ事ではないが」

金髪の美少女、アーシェはその白い肌の頬を真っ赤にした。

「で！？ ど、ど……うなされたのです？」

赤面したまま、吃るアーシェ。

「どうも何も、断ってなきゃ、外で野宿なんてしてないだろうが、ここで寝てたんだよ」

少年が首を振ると、アーシェはハツとなり、

「そ、それもそうだ……あつ、そうだった、そんな事があったなら、早々に立ち去るのが良いな……早くミオを連れ戻し、礼の金を置いて立ち去りましょう、では兄上はここにいて、待っていてください」
慌てた自分を修正する様にアーシェは踵を返し、竹林を出ていく。

「まったく……その手の話はこの世界の女には珍しくてんでダメだ

な、アーシェの奴は……」

竹に寄りかかったまま、着物を着た美少年、松平祐一はアーシェの後ろ姿にクスリと笑った。

2

『生まれた時代を間違えたとは思うが、これは凄い修正が入ったな』

アーシェが竹林から去った後、祐一はあの日、3人でまばゆい光に包まれた後の事を思い出す。

気が付くと、1人で原っぱに寝転んでいた。

校庭の隅の水のみ場にいた筈なのだが、まったく知らない場所にまるで瞬間移動した様であった。

流石に祐一もパニックになり、一緒にいた和川真奈美や天草未来を捜したが、一面に広がる足首程の高さの草があるだけで、2人の存在はまったく見出だせなかった。

遠くに見える山々には、良くある高圧電線の鉄塔も見えない。

『3人でぶつかった拍子に気絶でもして、俺は夢でも見ているのだろうか？』

いよいよ、頬をつねるという古典的な行為に、及ぼうかと思った時である。

兄上、と声がして、背丈は小さいが、とびっきりの金髪の美少女が遠くから歩いて来たのである。

綺麗な娘だが、更に格好を見て愕然としてしまふ、着物だ、それも昔の日本の時代劇とかで見た感じでは無く、中国のそれを思わせる着物であり、腰には剣を帯びていた。

「兄上、ここにいられたのですか？ どうやら話を聞けば、この幽州おおとりきみちの鳳公子様の軍が黄巾征伐の為に兵を募集しているとの話、遅れない様に早くしましょう」

金髪の美少女はまるで無警戒に歩み寄ってくる。

「兄上？」

眉をしかめる祐一。

突然、近寄ってきた金髪の美少女の言葉は理解できない単語ばかりだ。

「昨日、義兄妹の契りを私とあなた、そしてミオの3人で交わしたばかりでしょう？ あなたが長兄、私が長女であなただの妹、ミオが末妹と決めたではありませんか、ならば兄上と呼ぶのにも早く慣れていただかないと……」

腰に手を当てて、ため息をつく少女。

「……」

少女を見つめて祐一は考え込む。

「なあ、兄上と呼ぶ前には、お前は俺の事を何と呼んでいた？」

祐一が聞くと、少女は怪訝な表情で、

「祐一殿か松平殿と呼んでいましたが、それが如何いたしましたか？　これからは兄上と呼ぶが……」

と、答える。

「お前の事は何て、呼べばいいかな？」

「……今まで通り、アーシェで結構です、だいたい別の名で呼ばれた覚えがありません」

続けての質問に少女は眉をしかめる。

『これは……！？　一体、どういう事なんだ？』

目の前の金髪の美少女は名前をアーシェというらしい、そして彼女はミオという者、そして祐一と義兄妹の契りを交わしたと言っている……もちろん、祐一自身にそんな記憶は無い。

混乱する思考。

一番簡単に今の状況を整理するのは、これが夢だと考えてしまう事だが、それを採用するには目の前の光景はリアル過ぎた。

『……別人と勘違いをしている？ 有り得にくい、これはもしかすると』

あまり想像力が逞しいとは自分でも思わない祐一だが、一つの結論を導きだしていた。

『俺はもしかしたら……タイムスリップ、いや、同姓同名でアーシエが違和感を感じていない俺がいるのだから、漫画でいうパラレルワールドに來たんじゃないだろうか？』

膝が震えていた。

「アーシエ、お前の前にいる俺は、本当にお前と義兄妹の契りを交わした松平祐一に間違いないか？」

声も震えていただろう、祐一のおかしな質問にアーシエは、

「兄上は何が言いたい？ 私を何か試しているのか、それとも、私やミオと義兄妹の契りを結んだ事を後悔してられるのか？」

と、蒼い瞳を鋭くして迫ってくる、背が低い彼女だが迫力はある。

「いや……そういう事じゃなくてだ」

少し引き気味に首を振る祐一。

「良かった、兄上の口から昨日の誓いが偽りであった等と言われよう物なら、このアーシエ・アルザード、この青龍偃月刀で同年同月

同日に死せん、と誓った約束を即日に実行せねばならぬ所だった」

アーシェは真面目な表情で、腰に差した刀の柄に手をかけている。

『……まずい、とても俺が何処か別の場所から来た別の松平祐一だ、なんて気安く名乗れる感じがしないじゃないか……何か、彼女を納得させられる物があれば良いのか！？ ……そうだ、携帯だ！』

祐一は思い付く。

目の前の少女の格好、周りの景色。

信じたくないが、タイムスリップにしても、パラレルワールドにしても、この世界はおそらく元に祐一が暮らしてきた世界より、時代背景は前に見える。

ならば文明の利器を見せれば……

しかし、携帯電話は無かった……と言うより、着ていた筈のブレザーの学生服を自分が着用していない事に今、気付いた。

着ているのは粗末な着物に足元は草鞋だ。

周りの変化に驚いていたのか、全く気付かなかったのである。

何故か、違和感も特に無かった。

「兄上？」

身体中をまさぐる様な仕草をした祐一に、アーシェは不思議そうな視線を送ってくる。

「アーシェ……俺は昨日から、この格好か？」

そんな問いをすると、

「ええ……」

彼女は頷き、

「今日の兄上は何かおかしいな？ 何かあられたのか、何かあったのなら遠慮無く、妹に相談してくれれば良いのに……」

心配そうに祐一を覗き込んで来た。

『……』

祐一は息を飲み。

「アーシェ……この国は何という国だ？」

思い切って聞いてみる、いよいよアーシェは怪訝な表情を露にし、

「兄上……一体、どうされた？ ここは漢^{かん}帝国、漢の国だ！」
と、声を上げた。

「に……日本は？」

茫然と呟く祐一。

「にほん？ 私は聞いた事が無いな、いずれ西方か南蛮にはそんな国があるかも知れないが……私はあまり詳しくない」

アーシェは眉をしかめて答えた。

『……』

混乱する頭の中で必死に状況の整理を試みるが、今はそれが不可能であると気付く、解るのは自分が全く知らない世界に来てしまっている事だけ、漢の国と言うのは聞いた事がある、昔に少しだけ呼んだ事のある漫画か何かで……

『ああっ、確か中学生の時に図書室に置いてあった、やたら長い漫画だ！ そう……三国志だ！』
と、顔を上げた。

『……ならば、ここは中国なのか？ でも昔の中国に松平祐一にアーシェとかって、明らかに何かが違うだろう……わからない』

ショックからか、祐一は思わず座り込む。

「兄上、今日は何かがおかしい、ミオを呼ぶから近くで宿を借りて休もう」

座り込む祐一の肩に優しくアーシェは手を置いてくる。

混乱、不安がぐるぐると頭を回り、祐一は思わず、優しくしてくれる目の前の金髪の美少女を抱き締めたのである。

「あ、あ、あ……兄上？ ど、どうされたんだ！ 本当に……あ、あ、あ」

身長は150?を少し越える位で、身体の線も全体的に細い。
しかし、いきなり放り出され、訳も解らない状況で自分を心配し
てくれている女の子だ。

「わ、悪い……っ」

祐一は彼女を離し、両肩に手を置く。

「いや……別に」

赤面するアーシェ。

「実は俺、さっきから前の記憶が無いんだ……一時的な物かは解ら
ないが、覚えていない……お前の事ももう1人のミオって奴の事も、
この国の事も」

そう打ち明けた。

もちろん、嘘である。

しかし、事実を話してもアーシェが余計に混乱し、話が拗れてし
まうだけだろうと考えたのだ。

「兄上……本当か? 何も覚えていないのか?」

驚愕の表情をアーシェは見せる。

「ああ……本当だ、覚えているのは自分の名前ぐらいな物だ」 頷
く祐一。

「……嘘ではないな」

彼女は薄い唇をぐっと引き締め、祐一を見つめてくる。

「ああ……」

祐一が更に一度、深く相槌を打つと、

「な、何という、何という事……何という事だ！」
沈痛な叫び声を上げ、地面に伏してしまった。

「本当に悪い……だから、俺は……君とは一緒にいけそうにない……
……本当に悪かった」

口裏を合わせて、彼女を頼る選択はアーシェのあまりにも真面目で、切な態度の前に祐一は考えなかった訳では無かった、しかしどうにも選べなかった。

「ミオって奴にもすまないと伝えて置いてくれ……じゃあな」

彼女の肩に手を置く。

泣いていた、美しい瞳、白い肌の頬に涙をアーシェは流していた。

それを見ているのは辛く、祐一は背中を向けて歩きだす。

「これから……どうするつもりだ？」

背中から涙声が聞こえてくる。

「……」

何も答えなかった、何も解らない世界では答えようが無い、何を答えてもアーシェを悲しませるだろう。祐一は黙って歩みを速めた。

もちろん、彼女を頼りたい、しかし、今の自分は彼女の望む松平祐一では無いのである。

背中に衝撃を覚えた。

後ろから刺されても文句は言えないな、と薄々感じていたが、そんな冷たい感触では無い。

柔らかで暖かく……そして、愛おしいまでに心地よい感触。

アーシェが背中に抱きついてきていた。

「嫌だ！ 兄上が何を失おうとも私は一緒だ、離れたくない！」

「……アーシェ」

振り返る祐一。

彼女の毅然とした美しい顔は、涙で一杯だった。

「あなたが何を失ってもいい！ 私が取り返してみせる、何も解ら

ないのなら私が教える！ 私はあなたから離れない！ だから……
だから私の前から立ち去るのだけは……」

涙声をアーシェは草原に響かせた。

「……」

言葉が出ない祐一。

「私はあなたと確かに誓った、この腐敗と争いが巻き起こる世界から人民を救うと！ そして、私達は常に共にあると！ 例え生まれ
た日は違えども……同年同月同日に死せんと！ 誰とでもない、あ
なたと！」

アーシェの顔はもう涙でぐちゃぐちゃだ。

訳も解らない世界にやってきての自暴自棄な感情、そして、アー
シェに対する変な男の意地の様な物は消え失せた。

「アーシェ！」

出会ってほんの少しの時間の少女が愛おしくて堪らなくなり、祐
一はアーシェ・アルザードを思いつき
り抱き締めていた。

「兄上！」

身体を揺すられ、祐一は目を覚ます。

「……おっ、また寝ていたのか」

竹に寄りかかっているうちに、もう一寝入りしていた様だ。
肩に手をかけてきていたアーシェを見上げる。

金髪を首の後ろに布で縛り背中に垂らした、蒼い瞳の美少女。
祐一の義兄妹だ。

「ミオは？」

「ダメだ、昨日の晩に私達の知らない間に家の主人と酒を飲んだくれて、寝入ったままだ」

目を擦りながら聞いた祐一に、アーシェは呆れ声で答える。

「……ったく、あいつは水よりも酒が必要な娘だからな、先を急ぐんだ、担いででも行こう」

立ち上がろうとする祐一に、

「ええ……そうですね」

アーシェは微笑みながら手を差し出してくる。

「わりいな……こんな所で寝たせいで身体が冷えきっちゃったぜ、ミオから酒でももらうかな？」

苦笑いを浮かべ、祐一はアーシェの手を取って立ち上がった。

第2話に続く

第2話「末妹ミオ」

1

「みお」

昼の森に、小さな鳴き声が聞こえる。

「みお」

猫の様だが、猫ではない、少しとぼけた調子の少女の声。

「みお」

「うるさい！」

別の少女の怒鳴り声が響くと、殺気を感じたのか、森の野鳥達が、バタバタと羽根を休めていたであろう森の樹から飛び立つ。

「いい加減に起きないか！ この飲んだくれ！」

金髪を首の後ろで縛り、腰まで垂らした碧い眼の美少女が怒鳴る。その少女の名はアーシェ・アルザード。

身長150？を僅かに越えた位の小さな身体、腰に差した偃月刀が目立つのだが、彼女は自分よりも大きな少女をおぶり、歩いていたのである。

「みお」

少し緑かった髪の少女はアーシェにおぶられたまま、目をつぶり、また声を上げた。

おぶられた少女は夢心地の様子。

「おい、アーシェ……やっぱり、俺が背負うか？」

先を歩いていた祐一が振り返るが、

「いえ、結構です兄上、別に重いわけではない……この呑んだくれの寝言がうるさいだけです」

アーシェは答えた。

身体の小さな彼女だが、辛そうには見えない、自分よりも少なくとも身長が大きいミオをかかえても、足取りは普通に歩くのと、なら変わらない。

「そうか？」

「まったく心配無用」

気遣う祐一に、アーシェはキツパリ答えて再び歩きだした。

祐一がアーシェとミオと旅を初めて、数日が経過していた、アーシェに色々と教えてもらい、祐一が理解した事は、この世界はおそ

らく祐一が住んでいた現代から、ただタイムスリップしただけの世界では無いという事だ。

簡単な地理の説明をアーシェに受けた所、地名や地図から昔の中国だとは、すぐにわかったのだが、アーシェはどう見ても中国人というより、ヨーロッパの白人に見えるし、ミオにいたっては髪の色は緑かかっているが、肌は黄色系で、武田^{たけだ}ミオという日本人らしき名前である。

聞けば、アーシェの名前もミオの名前も、この国ではそれほど珍しいと言われる程では無いらしく、祐一から見れば、日本人風の名前もヨーロッパ系の名前も中国系の名前も、同じ位の割合で入り混じっているらしいのだ。

そして、祐一がより驚く事柄をアーシェは告げてきた。

なんと、漢帝国では原因不明だが、数十年も前から新生児に男子が産まれる確率が、極端に低くなっているらしいのである。

地方によって話は変わるが、10人に1人、または30人に1人……果ては1000人に1人とまで、様々だが人々は奇病として扱い、不思議がっているらしいのだ。

その上、漢帝国はすでに腐敗し、国土の各地で治安は乱れ、反乱が相次いでいるという。

「兄上は見た目も……その……良いので、盗賊等にも狙われやすい」

そう赤面したアーシェに注意される。

治安が乱れている為、各地に現われている盗賊は女ばかりのグループもいて、顔立ちの整った若い男は危険という事だ。

「なるほどなあ……」

その時は実感がなく、空返事をアーシェに返した祐一だが、何日かで何度かそれを実際に感じていた。

昨日の宿を借りた家で、部屋に訪ねてきた、一見、大人しそうな次女に、迫られたのがよい例だ。

氣立ての良さそうな、おとなしめの娘が大胆にも、一泊を求めてきた一行の祐一に子供が欲しいと夜這いをしてきたのである。

当然、思春期の男子である祐一。

成人君子には、程遠いと思っているくらいだが、それでも誘惑に打ち勝てたのは、やはりアーシェ達との旅であった事が大きく、真面目なアーシェに事が知れたら、腰の偃月刀の切れ味を祐一が味わいかねない、との恐れがあったからだろう。

知らない世界を1人で旅をしていたら、おそらく誘惑に負けていたと、本人でも思う。

『嬉しいには嬉しいかもしれないが、この世界の男は大変と言えば、大変だ』

祐一は天を仰ぎ、せめて盗賊が俺を狙うなら、美人の盗賊に狙って欲しい、などと考えていた。

2

「そろそろ日が落ちるな……兄上、この近くに小さな村があります、

そこで一泊の宿を借りて、明日にでも鳳公子様の軍に馳せ参じましよう」

アーシェがグルリと周りを見渡しながら言うと、やっと起きて、暇そうにアーシェと祐一の後ろをついてきていたミオも、

「賛成だ、ミオには酒が足らん、酒が飲める」
と、ぼやけた声で喜ぶ。

武田ミオ。

祐一、アーシェとの3人の義兄妹の末妹。
身長は160?半ば、体格は特に普通で、痩せても太ってもいない年相応の女の子だ。

緑かった髪を肩に触れる程度まで伸ばしているが、自然とそうなっている様子であまり気を遣ってはいない様子だ。

所々、髪が跳ねている時も多い。

顔立ちは一重のたれ目まぶたに気にならない程度の丸みを帯びた輪郭。

鼻筋、口元は特に高い鼻でも無く、唇も厚くも薄くもない。

アーシェに感じるような特にずば抜けて整った容姿ではないが、十分な可愛らしさと愛嬌が感じられる容姿ではある。

「ミオ……! 今日酒は飲ませんぞ、酔い潰れたお前を、私は昼過ぎまで背負って歩いたんだぞ!」

ミオに怒鳴るアーシェ。

「みお!」

だが、ミオは餌を獲られた猫のような声を上げて反論する。

「まともに喋れ！」

「うおー、いーやーだー！ 姉貴ー」

ミオは頬を膨らませ、アーシェを睨む。

「ダメだ、少しは酒を断つ事をおぼえろ！」

「みおー！！」

睨み返すアーシェ、せっかく普通に喋ったのに、また猫のような声をミオは上げた。

「まったく……ミオの奴は……構わねえよ、明日アーシェや俺に背負われる程に飲まなきゃいいよ、その代わり誰かに迷惑をかけたら、遠慮なく置いていくから覚悟しろよ！」

頭を掻きながら祐一が言うと、ミオは、

「兄貴ー、さすがー！ ミオは兄貴好きー」

と、とぼけた声を上げ、まるでご主人様に飛び付く猫の様に祐一に抱きつく。「ちゃんと量をわきまえろよ」

ミオの頭を撫でる祐一にアーシェは腰に手をあて、

「まったく兄上はミオには甘いんだから……」

と、不満げな顔を見せ、腰に両手を当てながらため息をついたが、

「別にそうじゃねえよ、ミオだって俺との約束が守れないなら叱る、

アーシェだって甘えたいなら甘えてもいいぜ」

そう祐一に言われると、真っ赤になり、

「け……結構！」

と、そっぽを向く。

少しふざけ過ぎだか？

祐一は思ったが、彼女達のお陰で、こんな異世界でも少しは余裕が出てきている事に感謝したのだった。

第3話に続く

第3話「決意」

「そうです、現在の漢帝国は、まさに内憂疾病に冒されている病人です、重税で民は喘ぎ、日照り水害で田畑は荒れ、若者は盗賊に走り、中央政府では賄賂と不正が横行しております」

粗末な馬小屋の隅で蝋燭の光に照らされたアーシェは頷いた。

ミオは痩せた一頭の農耕馬とすっかり馴れて、一緒に寝ている。

「それで民に不満が溜まり爆発して、黄巾党が各地で反乱を起こしたのか……うーむ、わからんでもないか」

祐一は腕を組む。

傍らには剣が一振り置いてある、いつの間にか腰に差していた者だが、アーシェによると前の祐一はかなりの業物だと自慢していたという。

今は幽州という地の貧しい村で宿を借りている、とはいっても馬小屋だ。

貸してくれたのは村の齢70を越えていそうな村長だが、別に冷たく扱われた訳ではない。

祐一を見るなり、あまり人目について幽州に巢食う黄巾党にばれれば、只では済まないとの心遣いであった。

そして、この何日かは夜はアーシェに今のこの世界がどうなっているのかを一般常識を含めて教えてもらっているのだ。

「……でも今は逆に民は黄巾党を恐れている様にも見えるけどな」

「左様、黄巾党は天公將軍ヴィクトリア、そして地公將軍張宝、人公將軍の張梁の3人の義姉弟が中心となっており、それぞれが各地で10万を越える黄巾軍を指揮して反乱を起こし、黄巾党に加わればよし、そうでない者には掠奪、殺戮を成すがままです、貧民を救う為の戦いが何時の間にもやら欲望を満たす物になってしまっている……民も黄巾党を怖れる始末です」

アーシェは吐き捨てる様に言った。

「そうか……」

頷く祐一。

「それを憂い我等3兄妹は民を苦しめる者を討ち、永遠に平和の国を造る為に義兄妹の誓いをしたのだ」

アーシェがズイツと顔を近づけてくる。

「な、何だよ!？」

「兄上には……覚えていないにしても、その覚悟は今、決めておられるか?」

「どういう事だよ?」

たじろく祐一。

「剣をとり理想の世界を造る為に戦う覚悟」

「……」

アーシェの目付きが鋭くなる。

祐一は何も言い返せなかった、この世界の前の自分はそういう理

想で、剣を持っていたのかもしれないが自分は違う、数日前まで天草未来と本気で喧嘩はしていたが、剣を持ち殺すまでは当然ながら思っていなかった。

「正直、わからない……今の俺には黄巾党と言われても酷い連中なんだな、とは思うが剣をとって戦うかはまた別だと思う……少し考えさせてくれ」

「……わかりました、その件が決まらなければ我々が鳳殿の元に参っても無駄になりますからね……では私も休ませて頂きます」

アーシェは頷き、祐一から少し離れた所の藁を片付け、そこに横になり目をつぶった。

祐一は胡坐をかいて自分の所有物であるという剣を見つめる、よく価値は解らないが高価なのだろう。

『……確かに俺は向こうにいた時はこんな剣が天下を決める様な世界の方が合っているんじゃないかと思っていたけどな……いざ来ると踏ん切りなんて簡単にはつかないな』

剣を鞘から抜く。

蠟燭の灯りに照らしだされる鈍い刀身の光が顔に反射してくる。

『ゲームじゃないんだよな、実際に人を斬るんだよな……いや、俺なんて素人は斬られるかもな』

そう苦笑した。

『人殺し……になるって事か？ 戦争時はやむを得ないと言うけれどな』

祐一は剣を鞘に収めてさらに考え込む。

『そういえば天草や和川はどうしているのだろうか……俺だけでなく、あいつらもこの世界に飛ばされて来ていたら、天草にはこの世界はお誂え向きで天下統一でも目指しかねないな……いや、あいつなら当然、目指すよな』

自分もそう天草に思われているかもしれないし、逆に天草もこの世界に悩んでいるかもしれない。

この動乱の世界。

そこで自らを試してみたい気持ちはある。

現代社会で疎外感がある程に孤立化していた訳ではないが、何か物足りなさを感じていた、しかしそれを決断する事は自らを現代人に戻れなくしてしまうのではないだろうか？

『元の世界に帰るなんて……もう出来ないかもしれないのに変な期待を持ってるな、でもいきなりこの世界で理想の国を造るなんて……簡単には切り替えられる訳ないよな』

そう深く祐一が息をついた時、外から怒号の様な大声と叫び声が響き渡ってきたのである。

「!?!? なんだ?」

顔を上げて、馬小屋の木窓から外の様子を見ようと腰を上げようとする祐一。

「あぶねえよ」

だが、いつの間にか起きたミオに頭を押さえ付けられてしまう。

「ミオ?」

「兄上……気をつけて」

驚く祐一の袖を掴んでくるアーシェ。

「お前達、いつの間にか起きたんだよ」

「どうしても良い事……それよりもこれは黄巾党に違いありません」

アーシェは祐一の唇に左手の人差し指を当て、右手に持った偃月刀の刀身で蠟燭の火を潰す様に消す。

「黄巾党!?!? こんなちいさな村に?」

小声で眉をしかめる祐一に、

「目的を見失い暴徒化した奴らにとって村の大小は関係ありません」

アーシェは頷く。

再び聞こえてくるのは阿鼻叫喚の叫び声と怒号、更に何かが崩れ去る音。

「様子はどうか？」

木窓から慎重に外を伺うミオ、アーシェは祐一の唇に当てた人差し指を離し、外の様子を聞く。

「……姉貴、やっぱり黄巾だ、黄色い頭巾をして暴れ放題やってやるぜ、馬に乗ってる奴もいる」

普段はのんびりした雰囲気のみオが鋭い視線で外を睨んでいる。
アーシェも窓から外を伺うと、

「俺にも見せてくれ」

祐一は頭を抑える様に置かれたみオの手をどかして顔を上げた。

「……！！」

目を見開く祐一。

そこには何人もの村人達が倒れていた、決して立派とも言えない家屋も紅蓮の炎が包んでいる。

その炎に照らしだされる黄色い頭巾をした男女達はそれぞれ槍や剣を持ち、無力な村人を容赦なく切り捨てていたのだ。

「兄上……これが今のこの国の現実です、力なき民が泣き、暴力を振るう者がその生命をまるで紙屑同然に切り裂く」

アーシェは祐一にそう告げると、

「行くぞミオ、一宿の恩のある村を無法者に蹂躪されて黙ってはられん！」

ミオと顔をあわせて頷き合い、

「兄上は裏手の土手に伏せていて下さい……様子を見れば奴等は50程度の小集団、私とミオで血祭りに上げて御覧にいれる」と、祐一に振り返る。

「……2人ですか？ 相手は50人はいるんだろ？」

無謀にも思える行為を平然と口にするアーシェに祐一は声を上げた。

アーシェは一度、目をつぶると悲しげな表情を浮かべた。

「兄上……以前の貴方ならば、相手が1万いようとも、私達より先に奴らに向かっていったる」

「……」

返事が出来なかった、自分はアーシェやミオと義兄妹の契りを結んだ松平祐一ではないのだ、平和な現代社会からいきなり入れ替わる様に来てしまったのだ。

「……行ってきます」

「兄貴は隠れてろよ、見つかなよ」

粗末な木戸を開け、外の出っていくアーシェとミオ。

アーシェもミオもまだ腕前は披露した事が無いが、武術の腕は立ちそうだ。

2人でどうにでも出来るかもしれない。

しかし、祐一はそんな事は関係無かった。
込み上げてくる感情。

『そう……俺は確かにアーシェ達と契りを結んだ前の俺じゃない……でも……こんな状況で土手で腹ばいになりながら観ていられる様な男でもねえ！』

足元の藁にいつの間にやら埋もれつつあった剣を手にとると、祐一は2人の妹達を追い抜く様に馬小屋から走り出していた。

第4話に続く

第4話「謝罪」

「アーシェ、ミオ！」

妹達の後ろ姿に叫び、祐一は剣を片手に駆け寄った。

「おっ！？　きたの？」

何やら嬉しそうな顔を浮かべるミオ。

「当たり前だ、奴等は個人的に気に入らねえよ、俺はそういう奴を見ると、一泡ふかせてやりたいくて仕方がなくなるんだ」

祐一は笑う。

「……よろしいのですか？　私は例え痩せ我慢でも、そんな兄上をみれて、今は正直に嬉しいのですが……」

アーシェは燃える家屋の周りで村人を追い、暴れる黄巾賊の者から視線を切らないまま呟く。

黄巾賊の者は、まだ逃げ惑う村人達を殺戮するのに夢中で、3人の男女が歩み寄ってくる事に気が付いていない。

祐一はアーシェとミオに並ぶ。

「痩せ我慢こそ男の真骨頂だぜ！　おれ達は義兄妹なんだろう！……だったら……生まれた時は違えども」

「願わくば……」

と、アーシェが偃月刀を抜き放ち、

「同年同月同日に……」

ミオも腰の剣に手をかけ、三兄妹顔を合わせ、

「死せん！」

と、声を合わせ、黄巾賊の集団に走りだした。

「武器を持たぬ者を集団で襲って何が太平道か！ 恥を……知れっ！」

まさにアーシェは空を舞った、黄巾賊の女が振り返るが遅過ぎた、アーシェが振り下ろした偃月刀は彼女をまさにから竹割りに斬ったのである。

「……！！」

黄巾を付けた者達は絶句した、今の今まで狩りを楽しむ様な余裕すらあった表情が凍り付く。

「わが名はアーシェ・アルザード！ 黄色い頭巾を被った鼠ども、覚悟を決めるがいい！」

150？程しかない背丈の金髪の少女の咆哮。

黄巾賊は数人に1人の割合で中年の男も混じってはいたが関係なく、アーシェの気迫に圧されている。

しかし、倒されたのはたったの1人、それも不意打ちだ、50人

はくだらな人数が戦意を完全に失いはしなかった。

「相手はたったの3人だ、滅多斬りにしろ！」

黄色頭巾を被った30代くらいの女が叫ぶと、集団は一斉に3人目がけて襲いかかって来る。

「よし、こゝい！」

ミオが集団に向かって走りだすと、

「行くぞ、兄上！」

偃月刀を振りかざし、後に続くアーシェ。

50人に向かって3人で正面から立ち向かう。

狂気に近い沙汰だが、祐一は不思議と恐怖は感じなかった、いや感じていたのかも知れないが、それ以上の感情がそれを覆いつくしていたのだ。

興奮、高揚なんと言っているのか解らないが、

「よっしゃあ！ 悪党どもには女が相手でも容赦はしねえぜ！」
喚き散らし、祐一も剣を持ち、走りだしていた。

「うおりゃああ」

ミオが少しのんびりした声で気合いを入れ、横風ぎに剣を振り、黄巾賊の1人の胴体から首を刎ねた。

返す剣でもう1人の胴体を腰から分断する、更にもう1人が隙を

見てミオに斬り掛かるが、ミオの蹴りが顔面に命中すると、その賊の首が嫌な角度に曲がり地面にうつ伏せに倒れる。

ほんの数秒で3人をミオは倒してしまう。

続くのはアーシェ。

「死滅せよっ、逆賊！」

小さな身体から振られる偃月刀は槍や刀を構えて、受けようとした賊2人を武器ごと切り裂き、更にそれに驚愕し足を止めた者の首を刎ねる。

ほんの数秒だけで、ミオとアーシェは6人を圧倒的な力で血祭りにあげてしまったのだ。

「な……なんだ！？ こいつらは？」

黄巾賊の集団に動揺が走り、向かってきていた筈の足が完全に止まる。

まだ数的には十倍を超える有利さがあるのだが、しょせんは盗賊くずれだ、それを活かす戦いなど知ろう筈はなかった。

「アホ野郎！」

ミオが足を止めた集団に飛び込み剣を豪快に振るうと、更に2人が一度に宙を舞い絶命する。

アーシェが早いと例えるよりも鋭いと言った方が合っている動きで低い姿勢で偃月刀を構え、オロオロした黄色い頭巾をした女性3人に接近、肩から袈裟斬り、腰から胴を裂き……そして、腿から両足を横風ぎに斬り、両方の腿から鮮血が噴水のように宙に舞い、女は

断末魔の叫びを上げた。

『アーシェ……ミオ、なんて強さだ！ 奴ら格が違いすぎて斬りかかる事も出来てない』

祐一は息を呑む。

ミオもアーシェも臂力、スピード共に常識はずれである、ほんの数秒で見せられた絶望的な力の差の前に黄巾をした賊は斬りかかる事の意味を理解してしまい、斬りにいけないのだ。

仲間が数十人いようと勝ち目は無い、アーシェとミオに襲い掛かる事は自殺に等しいと本能が感じ取っているに違いない。

「しねっ！」

不意に声がした、そちらを睨むと黄色い頭巾をした少女が祐一の左手から刀を片手に襲ってきたのだ。

「！！」

少女を睨み付ける祐一、腹を目がけて突き出された刀を鞘がついたままの剣で軽く受け流すと、勢いづいた少女は祐一に正面からぶつかった。

少女の突進を受け流した動きは意識してした物ではない、不意に身体が反応した物だった。

「くっ！」

ぶつかってきた少女の衝撃を踏みこらえ転倒を避けた時、少女は祐一に再び刀を振る、刀身が顔の目と鼻の先を通り過ぎた。空振りだ。

つんのめる様になる少女の背中を、祐一は左手で地面にはたき落とす。

かなりの衝撃で地面に叩きつけられた少女、しかし致命的な傷を負った訳では無い、無防備な背中を祐一は右手に持った剣を振り下ろさず、左手で押したただけなのだ。

「わりいな！」

倒れた少女を飛び越え、アーシェ達の後にくこうとする祐一に振り返ったアーシェが叫んだ。

「兄上！ ダメだっ」

「!？」

祐一はアーシェの叫びの意味が解らなかったが、コンマ数秒後に身体で知る。

背中にはしる鋭く熱い痛み。

倒れた黄巾の少女が素早く振り返り、通り過ぎようと見せた祐一の背中に刀を投げつけていたのだ。

「ぐあああっ！」

声にならない叫び。

体験した事の無い痛みに祐一は背後を振り返る。

そこには倒れた後に、刀を投げた丸腰の黄色い頭巾の少女がいた。

「あ……ったり……まえ……だよな……これは殺し合いなんだよな」
痛みに堪えながら呟く祐一。

そして、右手の剣を倒れた少女に振り上げると、その強気な表情が怯えた物に変わる。

「……ごめんな、こんな覚悟も出来てなかった情けない男で……あなたの顔は忘れないと思う」

祐一は少し口元に笑みを浮かべて、少女に向かって剣を振り下ろした。

倒れた少女の肩から胸にかけての一撃。

「うあああっ！！」

悶絶した少女の粗末な鼠色の着物が赤く染まる。

そこで……祐一の意識は途切れた。

第5話に続く

第5話「高天原老与」

1

「兄上……兄上」

身体を揺すられて、祐一はうつすらと目を開ける。

アーシエが倒れた自分の身体を抱きかかえ、中腰になったミオが覗き込んでいた。

「アーシエ……ミオ」

「よかった……気付かれましたね、兄上」

「お」

祐一が擦れ声を出すと、アーシエは微笑みを浮かべ、ミオは手を叩く。

「俺……やられたんだっけか？」

祐一が苦笑すると、アーシエは首を振った。

「いいえ……兄上は見事に賊を1人倒しました、背中の傷は浅く薬も塗って血は止まっています」

「そうか……浅かったのか、スゲエ痛かったよ」

「致命傷ほど痛くない、半端な傷ほど痛いもんだ……兄貴、起きれる」

ミオはそう言って、祐一に手を差し出してくる。

「ああ、2人ともありがとうな……そう言えば黄巾の連中は逃げちまっ……」

ミオの手を借りて立ち上がりながら、周りを見渡した祐一は、言葉を送中で止めてしまった。

黄巾の連中は逃げてなどいなかったのだ、祐一達3人の周りを黄色の頭巾を被った男女が囲むようにしていたのである。

ただし……その全てが凄惨な死体であったのだが。

「これは……」

「5、6人は逃げにかかった時点で、倒れた兄上の子が気になったので追いませんでしたが、それ以外は討ち取りました」

アーシェは立ち上がり、平然と告げ、

「兄貴……ミオの方がたくさん討ちとったぞ！ 剣がダメになっちゃったよ」

ミオは曲がった剣を祐一に見せながら笑う。

50人はいたであろう黄巾賊をアーシェとミオはたった2人でほぼ殺してしまったのである。

「それは……凄いな」

祐一は驚き少し顔を俯き加減にした、正直に言えば直視出来なかった。

『……だが、これがこの世界の闘い、この散乱した戦死体の中には俺が殺した少女もいるんだ!』

そう思い直すと祐一は顔を上げ、何かを言おうとした時、破壊された村の残骸の影から次々と老人や女性達が現れる。

逃げ惑っていた村の者達だ、男といえば老人ばかりで他は若い者も中年も子供も殆ど女性だ、小さな男の子が2人だけいたが、やはりこの村も女性ばかりになっている。

「怯えなくていい、黄巾賊は退治した!」

アーシェが村人に凜とした声を上げると、村人達は歓声を上げた。その中から祐一達に馬小屋を貸してくれた村長が歩み寄ってくる。

「ありがとうございます、あなた方は命の恩人にございます、そんな方々を馬小屋に泊めてしまうなど私は何という……幾つかの家は燃えましたが、あなた方がいなければ村は全滅していたでしょう、今夜はもてなしますのでどうかもう一泊していただくさい」

「いや、馬小屋の件はいいんですよ……我々が目につかない様に配慮して頂いたのはわかってますから……もう一泊か」

アーシェは村長に優しく笑いかけて、

「兄上……どうする?」

と、振り返ってくる。

「いや……」

だが、祐一は首を横に振った。

「今は一刻も早く黄巾賊を倒すのが先決だ、当初の予定通りここを立ち、鳳公子様の軍に合流しよう……3人で誓った国を造る為に、今は急ごう」

決意を込めた言葉。

「兄上……」

「兄貴」

妹2人は、それを理解した様子でそれぞれ祐一を見つめてくる。

「じゃあ……村長、俺たちは先を急ぎます」

まず村長に頭を下げ、祐一は妹達に振り返って、

「さあ、行こうぜ！ この世界を本気で世直ししてやる、頼みにしてるぜ！ アーシエ、ミオ！」

と、歩き出したのだった。

「お前達、3人が一体何を出来るんだ？ 黄巾の間者の可能性もあるぞ」

アーシェとミオと決意を固めて、数日の旅の末にたどり着いた目的地で、衛兵の男に言われた言葉は疲れてはいたが、黄巾賊を打倒しようと張り切っていた気持ちを挑発する様だった。

幽州・北平郡太守、鳳公子おおとり きみこが、中央政府からの黄巾討伐の義兵の募りに応じて軍を挙げる、それに加わろうと北平までやってきたのだが、陣を訪れた途端に入口の衛兵にこの扱いをうけてしまったのだ。

「……間者などではありません、我々は黄巾賊を打倒しようという鳳様に賛同し、末席に加えさせて頂きたく参上いたした次第」

アーシェが一步踏み出て衛兵に申し出るが、

「……何処の馬の骨とも分らん奴を義兵軍に加えられるか！」
と、衛兵の男がバカにするように笑い、周りの衛兵の女達もそれに倣う。

「こゝやゝつゝらゝ！」

ミオもアーシェに並んで前に出ようとするが、祐一はミオの前に手を出して制する。

「兄貴！」

何で、と言わんばかりのミオ、だが祐一はただ首を振った。

『ここはアーシェに任せるのが良さそうだ』

素直にそう思ったからである、ミオはぼんやりした口調に猫みた
いになつっこい面があるが、基本的に短気だし、自分でもまだこの
世界の常識に疎い上に短気な面があるので、三兄妹の中では一番ア
ーシェがこういう話に合っていると思ったのだ。

「我々は既に戦力は充実して明日にでも出陣できるのだ、今さらお
前達など加わる場所はない！」

にべもない衛兵に、

「何卒、雑用でも何でも申されて下さい」
根気よく頭を下げるアーシェ。

祐一はアーシェだけにそれをさせるのは不憫とミオの頭を押さえ
つけながら、自分も頭を下げた。

「ほう……」

衛兵はそのアーシェの言葉に興味を示して、彼女に顔を近づけ、

「だったら……お前だけに用事がある、ちょっとこちらで俺とゆっ
くりしようか？ お前の出方次第ではここを通していいぜ」

そう言って、いやらしい笑いを浮かべた。

「オイッ！」

それには流石に祐一も黙っていないが、今度は祐一をアーシェが振り返らずに手で制する。

「衛兵殿……それはどういう意味か？」

アーシェの口調にわずかの殺気を感じ嫌な予感がした祐一。
たが、それは黄巾賊との鬼気迫る闘いを見ていたからこそ感じたのかもしれない、それに気づいた様子の無い衛兵は美しいアーシェの首筋に手を伸ばし、いやらしい笑いを浮かべ、

「わかってんだろ？ それに随分と格好のいいお兄さんも連れてるじゃねえか、そいつもあいつらに貸してくれや……」
と、後ろにいる数人の衛兵の女達を鼻で差す。

「そんな美形をあんた達2人で絞り尽くしたら勿体ない、あたし達にもやらせなよ、それにあんたもたまには別の男に抱かれるのも悪くはないよ」

鼻で差された女の1人がアーシェに軽口をたたいて、せせら笑う。

「……てめえら」

嫌悪感を抱き思わず呟く祐一だが、それよりも派手な行動にいきなり出た者がいた。

アーシェだ。

「下衆な憶測で我々を見るなあ！」

そう叫ぶと、150? 少しの身体で、どう見ても20? は背が高いであろう衛兵の男を不意に持ち上げて、

「下衆は下衆同士で仲良くしている！」

と、男を女達の方に投げ付けたのである。

空中に舞い上がった男の身体は、見事な弧を描き、女達に命中して、共に地面に崩れ落ちた。

「ミオ、暴れちまって良いぜ！ 俺もそのつもりだからさ、後の事はまた考えようぜ！」

「みおー！ 言われんでもやる！」

立ち上がり、殺気立つ衛兵達を睨むアーシェに並ぶ祐一とミオ。

「兄上……申し訳ない、どうやら鳳様の軍に加わる事は出来そうにない」

申し訳なさそうに謝るアーシェに、

「構わんさ、人を迎える陣の入口にこんな奴等を立たせておく軍なんて程度が知れてるぜ！」

そう祐一が言いながら笑った時である、

「やめて！」

よく通る少女の声が周囲に響いた。

そこには碧い着物に身を包み、腰に剣を帯びた1人の少女が立っている。

首筋を隠し肩にかかるくらいの黒髪。

黄色系だが、肌は色白。

瞳は優しい丸みを帯びながらも、凜とした意志の強さも感じ、鼻筋、口元ともに変に主張をせずに高いレベルで整っていた。

身長はアーシェとミオの中間くらいで、160？前後に見え、体つきは細くも太くもないが胸元は豊かに見える。

『ヨーロッパ系と日本人系に別れるけど、アーシェに勝るとも劣らない美少女だ』

非常時だが、正直に祐一は思う。

「何者ですか？」

強めの口調で、突然現れた美少女を睨むアーシェ。

それに対して彼女は、

「私は高たか天原まがはらの壺いよ与、この鳳公子様の軍に将として仕えているの
だけ
ど」

と、人懐っこく可愛らしい笑顔を浮かべた。

第6話に続く

第6話「壱与対アーシェ」

1

「高天原壱与……鳳公子殿の武将か」

目を細めるアーシェ。

普段ならば、アーシェはもっと礼儀正しいに違いないが、まさに今からひと暴れしようと決めた時だ、武将が相手でもそんな気は毛頭無さそうな目つき。

「怖いなあ……何があつたか話してくれてもいいと思うけど」

アーシェに対して、壱与と名乗った少女は笑いながら言った、その笑顔は嫌味がなく、友好的な態度すら見て取れる。

「……詳しい事ならば、そこに集団で寝ている衛兵共達に聞けば結構！ 陣において初めに人を迎えるべき衛兵を見れば、おのずと軍の内容など見て取れる、天下に名高い北平太守の鳳公子様だが、しよせん雑兵の集まりに過ぎない、我ら3兄妹が仕える価値は皆無と見た！ それだけの事！」

怒ると意固地な面のあるアーシェは感情を隠さず言い放って、壱与に対して踵を返す、愚弄されたからとはいえ、それを衛兵達の上官に当たる彼女に訴え、その処置により溜飲を下げる様な考えは小柄だが、威風堂々とした金髪的美少女には無い。

とりなし無用。

こちらから既に三行半を叩きつけた、と言わんばかりの態度だ。祐一も壺与の気を遣おうとする態度に対してただ立ち去るのはどうかと思うが、基本的にはアーシェに賛成である、それに今から壺与に話をつけてもらい、鳳軍に加わるのは彼女やミオが納得すまい。

「……と、いう訳だ、声をかけてくれたあんたには悪いと思うけど、妹や俺たち兄妹をバカにするような衛兵がいる軍じゃ俺も御免だからな」

祐一は壺与に肩を竦めて笑いかけた、少し照れくさいのは、実は壺与という少女が自分の好みだったからかも知れない。

立ち去ろうとするアーシェの背中に壺与は言った。

「何かしらこちらに否があれば謝罪したいんだけど……どうかな？ 謝罪を受け容れて、我が軍に加わるか、そのまま立ち去るか、私達は武人なんだから口で決めてもしようがないんじゃない？」

少しあっけらかんとした口調にもとれる壺与の発言、既に陣とは反対方向に歩き出していたアーシェは歩みを止めて振り返り、

「ほうう……武人としてか、言ってくれるな、そういう挑発は相手を見てやらないとな」

と、不敵な笑みを浮かべた。

荒野に対峙する美少女が2人。

首筋を隠し肩にかかる位の美しい黒髪、首の後ろで束ね腰の辺りまで流された見事な金髪。

黄色系の白い肌に、ヨーロッパ系のぬけるような白い肌。

パツチリとした黒い瞳に、鋭い青い瞳。

160? 少しくらいの身長に、150をやっと越した程の身長。

痩せ過ぎず太過ぎない体格に豊かな胸元、均整は取れているが身長が低く、か細さを感じえない幼児体型。

高天原壺与とアーシェ・アルザードは祐一から見ても、どちらも甲乙付けがたく、そして対称的な魅力を持っている異性だった。

2人の手にはそれぞれ槍が握られている。

「良いの? 私……槍術は得意中の得意なんだけどな、そっちの得物に変えてもいいんだよ」

構えた壺与に、友好的な笑顔は消えている。

「真の武人たるもの武器の得手不得手などは無いようにするのが当然の事」

口を真一文字に結び、臨戦態勢のアーシェ。

周囲には祐一とミオの他にいつの間にか黒山の人だかりが出来ていた、噂を聞きつけた鳳軍の兵士達。 半数……いや、約9割近

くが女性だ、やはり男子の出生率の低下が祐一のやってきた現代社会において、ほぼ完璧な男性中心である軍隊も女性を中心になっているのだろう。

「壺与様相手にあんな小さい娘が、何合打ち合える物かしらね」

「壺与様は優しいから腕試し程度ならば、怪我はさせないわよ」

「あの金髪の娘、何を勘違いしてるのやら……」

「でも可愛いわね」

「4合で壺与様が決める気がするわ」

口々に耳に入ってくる話し声のかしきさは、やはり女性が集まる特有の物があつたが、その内容はどれもアーシェがどんな敗北をしてしまふかに興味があるといった感じだ。

現代人の祐一に言わせれば、完全なアウェイ。

中にはアーシェに野次を飛ばす者もいる。

「ミオ……アーシェはいつもの偃月刀じゃないけど、平気なのか？」

傍らのミオに祐一は話しかけた、耳元でささやく小声だ、沢山のギャラリに紛れて祐一達がアーシェの連れだとは気付かれていないが、もし気づかれたら悶着がありそうな気がしたからだ。

「姉貴にそういう心配はいらねーよ、でも……」

「でも？」

「アイツ強そうだ」

普段は少しとぼけた感のあるミオだが、壺与を見る視線は険しかった。

「せいりゃあああっ!!」

誰が開始の合図を出した訳でも無く、アーシェの烈迫の気合いが2人の対決の開始となった。

気合い一閃で振り下ろされたアーシェの一撃、壺与は槍を両手で横に持って受け止める、槍と槍がぶつかり合う音。

喚声上がる。

あまりにもアーシェの一撃が鋭く重い一撃だったのが、素人目にもハッキリ解ったからである。

素直に言えば、今の単純な攻防が祐一にはほとんど見えなかった。アーシェが槍を振り下ろしたのも壺与が見事に受けたのも速過ぎたのだ、おそらくそれは周りの兵士達も同じだ、だからこそ単純な攻防に喚声が上がったのだろう。

「す、凄いなあ……こんなまともに入ったら刺されなくても致命傷だね、そんな身体の何処からそんな力を出してるのかな？」

攻撃を受け止めた壺与が歯を食い縛り言うと、

「良い受け方だ、大抵の奴は受けられないで脳天を打ち割られるか、受けても槍ごとやはり脳天を打ち割られるのだから」

アーシェは笑う。

「そういうのは御免だね、今度はこっちの番」

壱与は槍を弾き返し、素早く槍を構えるとアーシェ目がけて槍を突き出した。

またもや上がる喚声。

それと呼んだのは、壱与が繰り出した突き。

それは鋭く速いという表現が陳腐に感じる程のスピードだった、壱与の手元も槍先も速過ぎて、目にも止まらない、まるでミシンの高速縫いの様な連続攻撃。

だが……アーシェもそれを正面から受け、一撃一撃を槍で受けていたのである。

神速の攻防。

「な……何なんだよ？」

祐一は思わず声を上げてしまう。

周りの兵士達も驚愕せざるえない。

「すげえよ！ あんなにスピードを上げてるのに単純な連弾じゃない、一撃一撃の場所を打ち分けてるんじゃないか？ それをアーシェも受け止めてる、本当に凄すぎる」

鋭い壱与の突きが、ただ単に速いだけでは無い事に気付いた祐一が興奮状態で言うと、

「それに気づく兄貴も中々のもんだ」

ミオは笑顔を浮かべた。

壱与とアーシェ。

たった一回の攻防で、2人は自分達が、周りに英雄と呼ぶに相応しい武人である事を知らしめたのである。

第7話に続く

第7話「迎える拍手」

1

「チイツ！」

気合いを込めた一閃を軽やかな動きで躲され、舌打ちするアーシエ。

躲した壱与もすぐに反撃に出ようとするが、相手に隙がないのを悟り、唇を噛み槍を構えなおす。

アーシエと鳳軍の将、高原壱与との一騎討ちは続いていた。

すでに何回攻守を変え、時には攻め合いながらの槍の攻防をしただろうか、その間、祐一とミオはもちろん樂觀的に観ていた筈の鳳軍の兵士達も、その場を動かず対決を見守っていた。

『鳳軍の兵士達が樂觀的になってたのもわかるな、あの腕前ならば、壱与って娘が負ける筈がないと思うようになってもしかたがないよな』

頬にいつの間にか汗が伝うのを祐一は気付く。

「……まじいな」

傍らのミオが眉をしかめた。

「どうした、ミオ!？」

小声で言いながらミオを肘でつつく、視線は槍を構え合い、いつ

電撃の攻防を再び開始しようかという2人から切れない。

「こりゃ死ぬ迄、やめれんぞ……お互い」

「なっ!？」

ミオの呟きに驚く祐一。

「そこまでする事かよ？」

元はと言えば謝罪を受け容れるか、容れないかの事だ、それで命に関わる一騎討ちをしては意味がない。

祐一の考えはそれだ。

「いやあ、姉貴もアイツもいい加減頑固そうだぞ、強敵との一騎討ちは武人の誉れだし、手加減出来る差が全く無くてエスカレートしてるし……私から見てもどっちが死んでもおかしくないな」

祐一の考えを見透かした様に、ミオはのんびりした様な口調で言いながら口をへの字に結ぶ、ミオなりにアーシェを心配しているのは当然である。

「よし!」

唐突に踏み出す祐一。

「おっ！？ 兄貴も大胆だねえ」

ミオは笑う。

「アーシェを止められるのは兄貴の俺だろ！ それに壺与ちゃんも個人的に気に入ったんで、どっちに勝ってもらっても困る！」

覚悟を決めた笑いすら浮かべた祐一は、いよいよぶつかり合うアーシェと壺与に向かい全力で走る。

「そこまでだっ！ それ以上は無しだぜ！」

「……あなたは！」

「……兄上！」

2人の間に割りいった祐一にアーシェと壺与は声を上げた。

「兄上、余計な事を武人の一騎討ちに割り入る者が何処にしようか！」

「……」

興奮気味に抗議をしてくるアーシェ、壺与はわずかに目線をきつくしただけで何も言わなかった。

しかも、この一騎討ちを中断させられて不本意なのは2人だけではない、周囲を取り囲んだ鳳軍の兵士達でもある。

「邪魔するな！」

「壺与様を愚弄するか」

「せっかく良い所だったのに！」

「武人の一騎討ちを邪魔する奴がいるか！」

たちまち祐一に浴びせられる罵声。

だが、祐一はキツと鋭い瞳を向け怒鳴り散らしたのである。

「うるせえ！ 味方になれる者同士の一騎討ちが何の誉れだ！ この2人がどんだけてめえらの生命を黄巾から救えるのが解んねえのか！ 続きが見てえなら、見学じゃあねえ！ 一騎討ちは実地でやってもらうぜ、異義のある奴は俺が一騎討ちしてやる！」

雄々しい声が草原に響き渡り、辺りが静寂に包まれた。

「兄上……」

「悪いなアーシェ、謝罪を受け容れるかどうかは別にして、壺与ちゃんとの生命を賭けての一騎討ちは違うと思うぜ……」

まだ不満げなアーシェを祐一は睨む。

「お前にしても、壺与ちゃんにしても、その力で幾らでも黄巾からここにいる兵士……そして、戦乱に迷う人達を救けられる筈だぜ、どちらかを失う様な闘いをお前達が勝手にするのは黄巾賊が喜ぶのみだ、自分の誉れの為なら人々を救う使命を捨てれんのかよ？」

「……そ、それは」

アーシェは戸惑いの顔を見せる。

戦乱に喘ぐ民を救ける為に誓いをして立ち上がったのだ、誉れを大切にするアーシェもそれを言われると弱いのだろう。

「文句あるか？ 2人の腕前は遜色無く、武人としての誉れは十二分に見せてもらった！ アーシェも壱与ちゃんも立派なもんだぜ、アーシェ……どうだ？ お前と対等に闘える武人が謝りたい、って言ってくれてるんだ、素直に相手を認めて受け容れるのも立派な武人の態度ってもんじゃないのか？」

「兄上……兄上だって、先程は壱与殿にここにはいられないと申したではないですか……」

「ああ、それは言った、でも壱与ちゃんが謝ってくれりゃ無し！ 武人っていうのは頑固者って意味じゃないだろ？ 相手の出方が改まりゃ、こっちが改まるのも礼儀だぜ」

控え目ながらも反論するアーシェだが、祐一に胸を張って堂々と即答されてしまうと、

「それでは私がまるで頑固者の悪者みたいです」

罰の悪そうに顔を逸らして頬を搔く。

「悪い、悪い、そんなつもりじゃない……」

「1人だけ話が解るように……ズルいです、私はそれは頑固者かもしれないけれども」

「……いや違うって、アーシェは頑固者だとか言ってる訳じゃなく……」

「言ってるような物じゃないですか」

ズバツと言っては見たものの、拗ねるアーシェに祐一が今度は困る。

壱与は槍を両肩で担ぐよう持ち、そのやり取りを見ながら笑った。

「もう……いいよね？ みんなで黄巾から人々を救おう為に頑張ろうよ」

その壱与の言葉に、周りの鳳軍の兵士の1人が手を叩き始め、いつしかそれは数十、そして数百の拍手に変わり、

「壱与様、これからも我が軍をお願いします！」

「壱与様と互角の方が味方になってくれるなんて頼もしい限り！」

「アーシェ様とその御兄妹、鳳軍にようこそ！」

「黄巾軍を完膚無きまでに叩くぞ」

と、いう黄色い声が中心の声援が多数加わったのである。

「3人共、本当に部下の非礼は詫びるから……御免なさい」

万雷の拍手声援の中で頭を下げた壱与。

祐一は笑いを浮かべながらウインクをする。

「アーシェも負けてないが……壱与ちゃん、あんたも本当にいい女の子だな、いくら男が少なくても壱与ちゃんやアーシェが余る様な事は無いな！」

「え……!?!」

突然の言葉に壱与は素っ頓狂な声で顔を上げ赤面し、祐一の背後に迫った1人の少女は、

「みおゝはゝ!?!」

と叫び、自己主張を兼ねた強烈な蹴りを祐一に喰らわせたのであった。

第8話に続く

第8話「北平太守鳳公子」

1

「それじゃ……私達と一緒に戦ってくれるんだね？ 宜しくね」

壺与がにっこりと笑顔を見せ、祐一に右手を差し出してくる。

「ああ……こちらこそ」

それに祐一が応じ、2人が握手すると、周りの兵達は更に歓声を上げた。

「良かった……」

壺与は息をつき、

「それじゃあ……3人を公子様に紹介するよ、ついてきてくれるかな？」

と、踵を返し、沢山のテントと木製の柵が立ち並ぶ陣地に向かって歩きだしていった。

もちろん破格の待遇に違いない。

おそらく数千は擁している鳳軍に無為無冠の3人兄妹が仕官しようが、所詮は雑兵として取り立てられるのが関の山で、鳳公子は当然、一軍の将軍である壺与と話す事すら有り得なかっただろう。

『それを考えれば……アーシェに危険はあったが、このひと悶着は全くの無駄じゃ無かった……って考えるのがいいか』

祐一は壱与の後ろ姿に妹2人と続きながら、そんな事を考えた。

「公子様は中々忙しいからね、少し待っててね……誰かに会っている可能性もあるから」

壱与は笑顔で振り返ると走りだしていく。

『明るいし、可愛いし……プロポーションも抜群……レベル高いよな』

祐一が壱与の走り去る後ろ姿に口元を緩めると、

「兄上はああいう娘がお好みで？」

アーシェは不機嫌そうに目を細めた。

あまりにも絶妙なアーシェの言葉のタイミングに、祐一は気の利いた嘘をつく事も否定もできず、

「ああ、アーシェと同じくらいタイプだぜ」

そう素直に笑って答え、彼女を真っ赤にする位の切り返ししか出来なかったし、それを美人判定から漏れたと解釈したミオのドロップキックを受ける予想外の被害もうけてしまったのであるが……

「鳳公子といいますが、話はすでに陣中で話題になって聞いてますよ」

30分程度は待っただろう、周りの物とは一回り大きな天幕、壺与に案内された先に鳳軍総大将の鳳公子がいた。

年齢は若そうだ。

祐一より年上なのは判るが、おそらく7、8歳年上なだけだろう。真ん中から両方に分けたショートカットに見えるが、よく見ればアーシェと同じように首の後ろで髪を結わいて、長く背中まで垂らしていた。

優しい顔立ちが印象的な、お嬢様の雰囲気を持つ相当な美人。

「宜しく願います、俺は松平祐一です、こっちがアーシェ、そしてミオ、オレ達は義兄妹で、ちなみに壺与ちゃんと一騎打ちしたのはアーシェです」

祐一は妹2人を紹介して頭を下げる。

「アーシェです」

「ミオ」

2人も兄にならない、それぞれ挨拶をして頭を下げた。

「まあ……可愛いわね」

公子は確実に変な挨拶をしたミオを見て、頬に手を当てながら穏やかに笑う。

「……んっ!? ミオの事かな?」

首をかしげるミオ。

「そうよ」

ニコニコ笑いながら、公子はミオを手招きする。

「鳳殿!？」

「みおー!」

咄然とするアーシェを尻目に、ミオはまるでなついた猫の様に座っている公子に寄っていく。

「オイオイ……ミオ、その人はなあ……」

「構わないですよ……さあ、いらっしゃい」

呆れる祐一に公子は笑いかけ、膝を軽く叩いた。

「みーおー」

ゴロゴロと公子に膝枕をされるミオ。

「壺与ちゃん?」

祐一が傍らの壺与に視線を向けると、

「まあ、気が合ってるんだから良いんじゃないかな？ 私も公子様は掴み所が無い所があって……たまうに戸惑うんだけどね」
壺与は苦笑して頬を掻いた。

3

「中央先鋒隊を指揮は出来ますか？ 規模はおよそ500くらいです」

しばらくの自己紹介を兼ねた雑談の後で、鳳公子はミオに膝枕を続けたまままでにつこり笑いながらいきなり切り出してきた。

「先鋒隊を!？」

目を丸くするアーシェ。

アーシェに基本的な事を教わってはいるが、この世界の軍事にまだ疎い祐一でも、相当な抜擢を受けたのが、その態度から推測できる。

「でも……おれ達は軍隊の指揮の経験がありません、抜擢をして頂けるのは嬉しいのですが……」

正直に祐一は白状する、決心した世界を造る為に軍隊を率いる経験を持つ事は必須科目と理解はしていたが、基本も知らないうちにいきなり過ぎると考えたのである、アーシェやミオも一騎当千の強者であるのは確かだが、軍隊を率いた経験はないだろう。

素人の祐一にも、アーシェやミオが見せる個人的な武勇は、確かに兵を率いる事に重要な点ではあるに違いないが、軍をまとめ動かすのは、また別の経験や素質が必要な事は容易に想像がつくのである。

「軍隊を率いた経験は皆無ですか？」

首を傾げる公子に、

「はい、喜んで受けたいのは確かなんですが、見栄で受けてしまった、じゃ恩義を仇で返す事になりますから」

祐一は頭を下げる。

「ん」

しかし、公子は膝の上のミオを撫でながら、

「そうだ、壱与ちゃん……あの方は確か兵法を研究される学士でしたよね？」

そう傍らに立つ壱与に話を振った。

「ええ……客将のパティーさんですよね？」

笑顔で壱与が答えると、

「そう、そう！ パティーちゃん！」

公子も笑顔になり、どうなるのか？ と顔を上げる祐一に言った。

「徐州の兵法学士で、今は我が軍に客将として留まっている方が居られます、その方をあなた方3人につけます、それで実地を兼ねながら勉強されると良いでしょう」

「……兵法学士ですか」

祐一は即答を避け、妹達……いや、膝枕でゴロゴロしていない方の妹に意見を求める様に目配せする。

アーシェは頷く。

祐一は口元をわずかに緩めた、わが意を得たりといった所だ。

学士が基本から教えてくれるのならば文句は無い、早いうちに迷惑を極力かけずに、軍隊指揮経験を師事付きで積めるのは願ったり叶ったりである。

そして、祐一は公子にもう一度頭を下げた。

「わかりました、そこまでして頂いたのならば、俺達3人はきっと鳳様の役に立ちたいと思い……命懸けで兵を率います！」

幕内に迷いのない声が響き渡り、

「宜しく願います、先鋒隊500の命を任せましたよ……それでは後で兵達と学士の元に案内させますので、一旦は陣内に用意し

ました幕舎で休んでいて下さい」

公子も見慣れた笑顔から真剣な表情で応じる。

「ありがとうございます、では……」

祐一は再び礼をし、アーシェも倣い2人でテントを出ていく。

「みおっ！」

膝枕で気持ちよさそうにしていたミオもスクツと立ち上がった。

「残っていてもいいんですよ」

公子は膝をポンポン叩くが、

「いゝやゝ、でもありがとうな」

と、ミオはテントの外に出た兄と姉を追いかけて駆け足で出ていった。

「振られちゃいました」

2人だけになり、壺与に公子は苦笑をして見せる。

「フフッ」

壺与が笑顔で応じ、

「思い切った拔擢をされましたね……でも私も賛成です、きっとあの3人は見事な働きをしてくれると思います」

そう頷く。

「……でしょうね」

公子は目を細め、

「あなたと共に我が軍の中心になってくれるか……3人兄妹揃って討ち死にしてくれると良いのですが」と、立ち上がる。

「……公子様」

あからさまに眉をしかめ呟く壺与。

「うふふ……冗談よ、ミオちゃんのせいで膝が痺れちゃったわ」

両膝を叩きながら、公子は笑った。

第9話「パティールと500の兵士達」

1

「こんにちわっす」

3人で使って構わないと、公子に用意された陣内の幕舎を1人の少女が笑顔で訪ねてきた。

栗色のショートカットに、どんぐり眼、眼鏡をかけた童顔の少女だ。

身長は150?程で小さく、肌は白人系の白い肌である。

「誰だ? てめー」

陣中だ、と酒を飲むのをアーシェに咎められ、機嫌を悪くしていたミオが少女を睨む。

「うわっ、ごめんなさいっす、機嫌悪いっすね」

少女が苦笑いしながら頭をかくと、

「こらっ、ミオ! お前はさっきの鳳様の話を聞いてなかったのか! こちらが鳳様からの紹介された兵法学士の方に違いない、よくぞ来られました」

アーシェがミオを叱りながら、立ち上がり、少女に歩み寄る。

「まあ、そういう事になるっす……パティー・クレタというっす」

少女は頭を下げると、傍らにいた祐一を見て、

「うわっ、最近は珍しい美形っすね！ 美少年っす」
と、笑顔を浮かべる。

「宜しく、兵法や軍隊の扱いは素人なんだ、1から頼むぜ」

パティーの人見知りのなさそうな態度に、祐一もニツコリ笑い返す。

「うわわっ、カワイイっす！ 美少年スマイルっす、こっちこそマ
ンツーマンで、色々とお互いに教えあいたいっす！」

悶えるパティー。

そんな様子を見て、アーシェは眉をしかめながら、

「パティー殿、マンツーマンは困る！ きちんと私達にも教えてほ
しい」

と、咳払いをした。

2

パティーを加えて4人になった祐一達は、預けられた兵士達の様
子を見ようという事になり、幕舎を出て陣内を歩き、兵士達が待機

している場所に向かう。

「現在の鳳殿の兵力はいかほどだろうか？」

歩きながらアーシェが尋ねると、

「客将の身分っすから詳しくは知らねえですけど、だいたい6000程の兵だって聞いてるっす」

「そのうち500を預かったんだから、期待されていると思っていいかな」

「それは間違いねえっす」

祐一の言葉に頷くパティー。

「先鋒隊……あたしはいいぞ〜！」

ミオは文句がなさそうである。

やはりアーシェが壱与と互角に闘ったのが評価を得たのだ、それはいかに壱与が鳳軍で信頼され、重要に扱われているのかも解る。

「壱与殿とはどのような人物か？」

「すごい人っす！」

続いてのアーシェの問いにパティーは即答して、

「槍を使えば天下無双、頭も切れますし……なによりもあのお人柄っす、真っ直ぐで優しい方っす……いやあ、かなわねえっす」

そう嬉しそうに話し、

「だからアーシェさんが互角に闘ったという話は陣内で多分知らない者はいないっすよ、アーシェさんも見てはいませんがスゲェっすよ」

と、アーシェを褒めた。

「……勝ってもいない闘いを自慢にはしたくない」

少しだけ不機嫌そうに顔を背けるアーシェ。

「俺が止めちまったからな、でも俺は後悔してないぜ、アーシェはもちろん、壱与ちゃんも心強い味方だしな」

祐一が笑うと、

「えらく壱与殿を気に入られたようで！」

アーシェは頬を膨らませたが、

「もちろん、でも……アーシェも気に入ってるけど」と、祐一に切り返され、真っ赤になってしまったのである。

何度か憶えのある光景。

もちろん、これで祐一が笑って終わりにはならない。

「ミオは？」

強烈なコブラツイストを末妹に食らう羽目になる。

その様子にパーティーは、

『この3人と一緒にいるのも面白くなりそうっす、そろそろ客将も終わりにしないといけないっす』
と、微笑んだのだった。

3

率いるべき500の兵士達は、案外と素直に、祐一達を歓迎で迎えてくれた。

やはり物をいったのは壱与と互角に闘った事実であり、さらに、

「3人は互角の実力の持ち主」

「強さの順番で兄妹関係を決めた義兄妹」

「兄が怒り恫喝一つで、アーシェと壱与がたじろぎ闘いを止めた」

など、事実とそうでない部分を合わせた噂が出来上がり、指揮官は強いに越した事のない兵士達が素直に歓迎したのである。

祐一は、ざっと500人の兵士達を見渡す。

やはり女性が半数以上いて、男もいるが、かなりの率で歳をとった老兵だ。

「やっぱり女性が多いよなあ」

そう呟くと、

「それは仕方がないっすよ、今は女の戦の時代っす！ 若い男は貴重なんすよ、特に祐一さんみたいな美形はいないっす」

パティーは笑った。

「ありがとな……じゃあパティー、さっそくだけど色々と教わりたいから、ご教授を頼むぜ」

祐一がウインクすると、

「了解っす、今日中に編成を考えるっすよ……今夜にでも編成表を作成するので私の幕舎に来てもらえると嬉しいっす」

パティーもウインクを返してきた。

「わかった……じゃあ、一応兵士を預かる身だからな、挨拶をするか」

祐一は座りながら、色々な事をしている兵士達をもう一度、見渡した。

仲の良い者で集まり、円になっている者。

地べたに寝転がり、惰眠を貪る者。

供出された武器を一生懸命磨いている者。

様々である。

かなり騒がしい。

「騒ぐんじゃねえ！ お前達！ きけっ！」

祐一は怒鳴った。

かなりの声量。

すうっと騒がしくなっていた兵士達が黙っていく。

「よし……」

黙っていく兵士に祐一は頷いて、息をスウツと吸い込み……

「俺がお前達を鳳公子様から預かった松平祐一だ！ この2人は俺の義兄妹のアーシェ・アルザードと武田ミオ、そしてこちらが兵法学士のパティ・クレタ……これから俺達は全員が兄弟みたいな物だ、全員が全員を護り……そして、黄巾をぶっ倒し名を上げて、朝廷様から余る位の恩賞を頂こう、約束するぜ！ 俺が貰った恩賞は全部が全部山分けするぜ！ 俺達には高天原壺と互角に渡り合える勇者がここに揃ってる、黄巾なんか眼じゃねえ！ 斬って斬って斬りまくってやろうぜ！」

と、喉が枯れるかというような大声でまくし立てたのである。

上がる歓声。

壹与と互角の者が揃っているという文句が効いているのだ。

「兄上も随分と……」

沸き上がる500の兵士達を見て、アーシェは苦笑して肩を竦めたのだった。

第10話に続く

第10話「黄巾軍現る！」

1

北平太守鳳公子率いる黄巾討伐義勇軍が、集合地点である幽州北平から約6000の兵を率いて、黄巾党の主要拠点である冀州目指し、進軍を開始したのは、松平祐一が公子の傘下に加わって一週間が経過していた。

義勇兵ではあるが、鳳公子自身の出身が裕福な商家であるらしく、実家と黄巾党に商売を妨害されている幽州や冀州の商人による援助を受けているとの話であり、鳳軍の兵士たちの装備品はかなり整っている為、軍隊としての身なりはまるで正規軍の様だった。

馬上の公子を先頭に、幽州から黄巾党の重要拠点に向かう鳳軍は通り過ぎる街や村などの住民から笑顔で見送られた、目的を失い、民衆をも相手に暴れる黄巾賊からはすでに民衆の心が離れている証拠だが、やはり名士としての公子の幽州における人気の高さも伺える。

「北平太守としてしっかりと政治をされている様子ですね」

アーシェが口元に笑みを浮かべながら、手を振る農民を見た。

「穏やかそうな人だったからな、頭も切れそうだし、伊達に義勇兵なんて挙げてないな」

傍らの祐一が感心してみせると、

「兄上もなかなか人をまとめ上げ盛り上げるのが上手になりました」
そう祐一に笑みを浮かべたまま振り返るアーシェ。

「なにがだよ？」

怪訝な顔をする祐一にアーシェは、

「初めて部下にする兵士達に勇気と自信を与える見事な挨拶でしたよ」

と、答えた。

「ああ……あの挨拶かよ、とりあえず俺についてくる気にはしな
いと思っただけだぜ、それにミオとアーシェがいるんだ、壺与ちや
んに並ぶ者が揃っている、っていうのは嘘じゃないだろ？ 俺がそ
うだと言った覚えは無いから嘘をついた訳じゃないよ」

祐一が照れ臭そうに頭を掻くと、

「確かに……」

アーシェは少し吹き出す様に笑う。

「兄貴のお気に入りのお壺与が来たぞ」

笑いあうアーシェと祐一に少し後ろを歩いていたミオが告げてく
る。

「え？」

祐一が顔を上げると、前方を進んでいた味方の隊列から黒い髪の少女が、栗毛の馬を部隊の進む方向から逆進し、祐一達に向かって走らせてきた。

「祐一君！」

「壺与殿、どうなされたのだ？」

手綱を引いて馬を止めながら、名前を呼んできた壺与に祐一が答えようとすると、アーシェが一步前に出て馬上の壺与を見上げた。

「アーシェさん」

下馬する壺与。

その様子は少し急いでいる様子だ。

「何かあったか？」

単なる祐一達の様子を見に来た訳では無さそうな真剣な壺与の表情。

アーシェもそれを察知した様子だ。

「どうしたんだ、壺与ちゃん？」

祐一も尋ねると、壺与は祐一とアーシェ、そして後ろにいるミオを見渡し、

「この先の草原にどうやら私達を止めようと黄巾党の軍勢がいるらしいの、公子様から私と祐一君の先鋒隊で当たる様に、ってご命令が出たんだ」

と、告げてから口を引き締め、頷いた。

「……そうか、分かった」

頷き返しつつも、いきなり訪れた初めての戦だ。

祐一は全身が一度、震えるのを感じていた。

2

冀州に向け、南下する鳳公子軍の前に立ちはだかったのは、幽州黄巾党軍約2万の軍勢。

率いる将は幽州黄巾党の頭領である程遠志ていえんしという武将だ。

筋骨隆々とした禿げた男で上半身裸で馬に乗り、片手で鉄の棍棒を振り回し、幽州の官軍を叩きのめしてきた幽州黄巾党随一の武勇を誇っている。

「程遠志様、どうやら北平太守の鳳公子率いる義勇軍が来ました」

黄色い頭巾を付けた副将エリンが報告した。

長い金髪の白い肌が目立つ美人だ、腰には剣を差し、手には槍を

持っている。

「鳳公子かぁ、美人らしいな……引っ捕えて、3日3晩可愛がってやる」

程遠志が涎を垂らさんばかりの不気味な笑みを浮かべると、

「部下の高天原壺与は中々の武勇を誇り高名です、私は彼女を討ち取りたいと思っております」

そうエリンは不敵な笑みを返す。

そこに黄色い頭巾を付けた伝令が現れる。

「程遠志様、エリン様……鳳公子軍が我々に気付き、先鋒を繰り出した様です、どうやら3000程！」

片膝を付き報告する伝令の言葉を聞き、

「3000だと？ そんな雑魚どもなど、ひと揉みで片付けてくれるわ！」

程遠志は吠え、巨体を椅子から起き上がらせた。

鳳軍の先鋒は高天原壺与率いる2500と松平祐一率いる500の合わせて3000。

対する黄巾軍は主将程遠志、副将にエリンを据えた2万の大軍だ。両軍は幽州南部の草原で向かい合う。

「すげえ大軍だな！」

祐一が感嘆の声を上げると、

「勝てる相手だよ」

馬上の壱与が笑う。

「やけに自信があるね、壱与ちゃん」

「もちろん、良く相手を観察してみて」

肩を竦めた祐一に、壱与は笑顔で黄巾軍を指差す。

「左様っす」

いつの間にか祐一に並んできたパティーも眼鏡を直しながら頷く。

「……んー!? ああ、なるほどな」

目を細めて黄巾軍を見直し、祐一は声を上げた。

「気づいたよね？」

首を傾げてくる壱与に祐一は笑い返した。

「ああ……あいつら数ばかりだ、よく見れば家族連れみたいのがいるし、武器だって無いのがある……そしてオレ達も少ないけど、相手には馬が全くないな」

「当たり前！」

壱与はそう言うとも馬の手綱を引き、

「200ばかりの騎兵で私が突入するから、後は祐一君達に任せよう」

と、走り去る。

「見事な観察力っすよ、騎兵の有無、武装、そして兵の質を見抜ければ上々っす、あと敢えて言えば相手陣形のでたらめさを指摘できれば更に褒めたっす」

「いやいや、まだまだ修行不足だな……よし壱与ちゃんが突入したらオレ達も真っ向勝負だ！　いくぜ、アーシェ、ミオ！」

兵法の師匠であるパティーに誉められ、照れ臭そうに頬を掻いた後、祐一はアーシェとミオに振り返り拳を振り上げた。

第11話に続く

第11話「無双、ミオとアーシェ」

1

「ぬうううっ！」

黄巾軍の将、程遠志は思わず齒軋りをした。

2万の軍勢ならば、数分の一に過ぎない鳳軍、ましてや先鋒部隊などはあつという間に蹴散らせると思い込んでいたが、それは見事に裏切られたのだ。

高天原壱与率いる騎馬部隊が、側面に回り込み突撃を開始すると、対応処置の訓練などロクに受けていない上に家族連れで移動までしている黄巾軍は、逃げ惑う流民と変わらない体たらくを見せた。

もちろん、武器を持ち戦える者の数も多かったが、訓練を受けていないのは同様であるし、短い間に軍に広がった動揺の渦に巻き込まれる。

「……やりにくい相手でもあるよね」

馬上にて、自慢の槍術で黄巾軍を蹴散らしながらも壱与は舌打ちする。

相手が強いという意味ではまったくない。

騎兵の突撃にあっさりと算を乱した相手は、予想以上に手応えがないと感じていたのだが、槍をふるっていると所々で武器を持たない老人や子供が視界にはいつてくるのである。

それらは逃げ惑うばかりで、抵抗を見せてこないのが幸いかもしれない。

「祐一君……そろそろだよ、お願いね」

壱与は、馬上から乱れた黄巾軍に正面からぶつかる祐一達の先鋒部隊を見つめ呟いた。

祐一が率いるのは自分が公子から預かった500の兵と壱与の預けていった2000を少し越える程の兵だ、算を早々に乱したとはいえ2万の黄巾軍の約十分の一だ。

しかし、祐一の号令で突撃した兵達は黄巾軍とは練度や装備において一枚も二枚も上手な事に加えて、黄巾軍にとっては目を見張るような格差があった。

それは豪傑ミオとアーシェの存在だった。

「みーおー！ お前らみんなぶち殺してやるぜー」

悠長で少しのんびりさすら感じさせるミオの叫びだが、手に持った武器は周りの人間の度肝を抜いた。

彼女は何と3メートルはあろうかという両手を回して、ようやく両手を合わせられるかという太さの丸太に穴を開け、縄を通して持ち手にし、両手でそれを持ち上げて棍棒の様に振り回していたのである。

「おりゃりゃりゃ！」

ミオの怪力で振られる丸太は風を切る音を立てながら、黄巾兵を吹き飛ばす。

懷に飛び込むような隙はない、まるで細身の棒を振るようなスピードで旋回する丸太の威力はまさにその重さも手伝い絶大で、当たった黄巾兵は骨を砕かれ、内臓を潰され、周りの兵は畏れミオに背中を向けて逃げていく。

竜巻の様に暴れまくるミオに対して、アーシェは敵陣を突き抜ける稲妻の如し。

黄巾兵も半数以上は女性だ、150？少しの彼女の身長は敵の集団に斬り込めば隠れてしまう、だが驚くべき強さで周りの敵を斬り倒し、その姿が確認できる様になると敵兵はまるで死神からそうするように、我先にアーシェに背中を向けて方向など関係なく逃げたしていくのである。

「……強すぎるよな……妹にこういうのはなんだけど、化け物だな」

右手に剣を持った祐一は唸るしかなかった。

「兄貴、丸太の届く範囲に入んなよ！ 関係なく殴っちゃうぞ」

「お……おう！」

丸太でぶん殴り、敵兵を宙に舞い上げながらミオが声をかけてくる。

祐一の目の前に現れた2人の黄色い頭巾の敵兵が現れる。
まだ合戦が始まり、敵と戦っていない祐一に緊張が走った。

「きやがれっ！」

逃げる訳には当然いかないと祐一は構えたが、敵兵はいきなり側面からまるで舞い降りた鷹の様に現れた偃月刀を持つ金髪の少女に一合も合わせられず、頭から縦に割られ、胴体を横風ぎに切断されてその場に骸を晒す。

「兄上……平気か？」

振り返るアーシェ。

「まいったな、俺にも手柄を分けてくれよ」

祐一は強がり言いながら肩を竦めた。

「怖かったくせに、うそつけ」

ミオが丸太を軽々と担ぎながら笑いかけてくる。

「うるせえよ」

そうミオに怒鳴りながらも祐一の心中は、戦いながらも自分の身を案じる余裕すらある妹達の凄まじい武勇に感嘆してしまったのである。

「このままではマズい、しかし側面に回り込んだ奴といい正面から攻撃してくる奴といい、幽州の義勇軍ごときにこれだけの猛者がいたとは……！」

程遠志は数分の一の鳳軍に押されまくる味方に焦っていた。少数の騎兵の乱されてしまう自らの軍の腑甲斐なさに思わず震える。

「程遠志様、このままでは敗北しかねません」

副将のエリンも意外な苦戦に口調が慌てていた。

「どうする？」

「我々は騎兵を捕捉する手立てを持ちません、ならば正面からの歩兵を程遠志様と私が先頭に立ち、打ち破ればいいのです、正面からの敵を破れば騎兵もいつまでも戦ってはいられないでしょう」

「それがよさそうだ」

程遠志はエリンの策に頷いた。

前線に打って出た程遠志とエリンの黄巾の2人の将は、台風と稲

妻の如く暴れ回るミオとアーシェを見つける。

「あいつらが正面からの敵の元凶か！」

「そうに違いありません、程遠志様があの丸太を振り回している奴を！ 私が偃月刀の金髪を片付けます、そうすれば敵の勢いも減ずるはずです」

エリンはそう程遠志に告げると返事を待たず、腰の剣を抜き放ち、アーシェの前に立った。

「覚悟せよ！ 私は幽州黄巾軍副将エリン」

叫びながらアーシェに駆け寄る。

しかし、出来た行為はそれだけだった。

驚異的なスピードで間合いを詰めたアーシェの両手で振り上げた大上段からの偃月刀の一撃、エリンは受け止めた筈の剣もろとも脳天をから竹割りにされて、絶命してしまう。

「なっ！」

あまりにも呆気ないエリンの最期に二の句が次げない程遠志の前に、緑がかった髪を毛先が肩にかかる位まで伸ばした少女が不敵な笑みを浮かべながら立ちふさがった。

「おう、オッサン！ 大将たる？ ミオと勝負しろや！」

丸太を軽々と担つ少女。普通の女の子よりは少し背は高いし、体格もしっかりしていそうだが、気になる程ではないし、愛嬌のあ

りそんな顔立ちだ。

一体、何処にそれほどの膂力があるのか見当も付かないが、程遠志としては崩れかけた味方の一因にもなっている彼女を倒す為に前線に来たのである、逃げる道理はない。

「誰がオッサンだ！ 俺は幽州黄巾党大将の程遠志だ、お前のそんな丸太など俺の自慢の鉄棒で吹き飛ばしてやる！」

ミオの丸太程の大きさでは無いが、程遠志も兵が二人がかりでやっと持ち上がるような鉄製の棍棒を振り回す力自慢だ。

前線の味方を蹴散らす強敵を討ち取るべく、鉄棒を構えて走り込むが程遠志にとってミオはエリンがアーシェに向かうのと同様に相手が悪かったのだ。

「どりゃあああっ！」

程遠志が烈迫の気合いを込めてミオに振り下ろした鉄棒を、

「おりゃ！」

と、少し棒読みの声で丸太を軽く振り上げて弾き飛ばすミオ。

「な、なんだ！？」

弾かれた鉄棒を持つ手が痺れ、程遠志の背中に冷たい悪寒が走る。一撃合わせただけで実力差が解った。

「ば……化け物だ！」

そう呟く程遠志……だが全ては遅かったのだ。

ミオと対峙した時点で、大将という立場など打ち棄て、逃げるしか彼が生き残る術はなかったのである。

「じゃあな、オッサン！」

まるで普通の棒を扱うようなミオの丸太の連撃が繰り出され、程遠志は頭を叩き割られて膝から崩れ落ちた。

相次いで主将、副将を失った黄巾軍はさらに戦場を迂回した公子率いる本隊が背後に現われるといよいよ混乱は極に達し、幽州黄巾軍2万は半数にも満たない6千の鳳公子軍に蹴散らされたのである。

第12話「お待たせしました、私です」

0

行方不明。

失踪。

誘拐。

駆け落ち。

はたまた神隠し。

両親。

親戚。

学校の友人。

みんなは私がどうなったと思っているのだろうか？

あの光に包まれた私は全く知らない土地にいた。

目の前に広がる大きな河に、檜の穂先のように鋭い連山。

着ている物すらいつの間にか中華風の着物に代わっているのに気付く前に、

『ああ……ここは日本じゃないな』

と、推測してしまうような景色だった。

それからは状況を把握するのに、苦心の連続。

すぐに解ったのは推測通りにここは私の生きていた平成の日本ではない事、私は全く覚えがないけど、今までこの世界で生きていたという事。

そして、最も驚き理解をするのに時間がかかってしまったのが、私の立場であった。

私、和川真奈美は漢帝国の荊州長沙郡の太守ミネア・ヴァルナログの配下の文官だったのである。

1

「真奈美、よそ見するのはやめるのです」

長沙の城の一室。

真奈美と同じく長沙太守ミネア・ヴァルナログに文官として仕える大瀬秋夜おおせ あきよのゆったりとした口調の注意に、真奈美は、

「ご……ゴメンね！ ええつと……次は兵糧の残高計算だっけ？」
と、慌てて筆をとる。

「まったく……あなたが記憶を失い仕事に難が出ているから、こんな夜まで私がおしえてるんですよ」

口をへの字にする秋夜。

大瀬秋夜。

年齢は真奈美と同じ。

背中くらいまでの黒髪のロングヘア、顔つきは童顔、身長は小柄な真奈美より更に小さい幼児体型。

この少女に意味も分からずに、この世界にやってきた真奈美は随分と助けられていた。

真奈美が現状を把握できていない自分を何らかの事故で記憶を失っているの説明すると、彼女は同じ文官仲間として長い間、支え合ってきたからと、何でも積極的に協力してくれているのである。

どうやら秋夜は、この世界の自分と親友付き合いをしていたらしい、もちろん成り代わる様にやってきた真奈美にはわからない事であったが、自分の不安とこの世界に関する無知を精一杯の努力で何とかしようとする目の前の少女に、真奈美は感謝と親近感を強く感じていた。

「兵糧計算は終わったから此処に書いたからね」

「……って、計算速すぎです、記憶を失う前よりそういう事はずば抜けて凄くなりましたね」

紙に書かれた兵糧の計算を終えた真奈美に、秋夜は驚きの声を上げた。

中学生までやっていた算盤のおかげで暗算が早いのが少ない自慢の一つであるが、それが役に立った様子だ。

この世界に来てそろそろ一月が経つ。

秋夜や話すようになった自分の同僚達から聞いて真奈美が推測したのは、この世界は古代中国、それも読み物や演劇の花形作品と言っても良い、三国志の世界に似て非なる世界である事であった。

似て非なる所は随所に見られた。

真奈美は古代中国に詳しい訳ではないが、大瀬秋夜という現代日本人にしか聞こえない名前の人間がいるとは思えなかったし、文化的な発展も少し違うと感じている。

例えば、目の前に計算を書いた紙だ。

もちろん、現代社会で見るとような白い上質紙ではなく、何かで煮詰めた様な色合いの粗末な物だが、頻繁に使われている。

古代中国は紙はあったが高価で、主流はおそらく木簡と呼ばれる木の板と板を繋ぎ合わせた物だったと本で読んだ記憶があった。

そして、真奈美がこの世界で驚いたのは、男子の出生率の極端な下落がこの頃の完全なる男性中心であったであろう社会を女性中心に逆転させている事実だ。

古代中国がそんな状態にあったなんて、読書を趣味として十年程の年月が経っていたが聞いた事も無かったのである。

『……秋夜のお陰でこの世界の様子も何とか掴めてきたし、一応、仕事があって生活出来てるけど……この先、どうしよう?』

何度も悩んだ事と同じ悩みをせっせと計算をしている秋夜を見ながら考えていると、

「コラッ、真奈美! サボってんのか? 記憶が無いんだったら、秋夜の二倍頑張るつもりでやったらどうなんだい!」

と、豪快な声を上げて、真奈美と秋夜に割り当てられた仕事部屋の前に一人の女が現れたのであった。

2

「ミネア様!？」

真奈美と秋夜は揃って声を上げる。

そこに立っていたのは身長は百七十?をかなり越える体付きのしっかりした赤茶色のショートカットの女性だ。

彼女の名前はミネア・ヴァルナログ。

長沙太守にして、真奈美と秋夜の主君である。

傍らには長女のサライ・ヴァルナログも母親と一緒に笑顔を浮かべていた。

「もう夜です、どうされたのですか？」

真奈美は驚きながら席から立ち上がった、この世界の主従関係には元々が大人しく、目上に礼儀正しい真奈美はすでにある程度の慣れが出来てきている。

「出陣だよ！」

嬉しそうにミネアは声を上げると、

「荊州から少し北の地の宛^{えん}で黄巾軍約三万が正規軍を苦しめているらしいのよ、だから私達が兵を募って出陣するのよ」

と、サライが張り切る母親に苦笑しながら真奈美たちに説明した。

ミネアは年齢は三十半ばで長女のサライは十七歳だが、母親のミネアは豪快な面が目立ち、長女のサライは少し大人しめな印象を真奈美はもっている。

サライ・ヴァルナログ。

銀髪を首筋が隠れる程度に伸ばし、瞳は優しく可愛らしい顔立ちだ。

身長は母親まではいかないが、百七十？近い。

「なるほど……それで兵糧の相談に？」

「そういう事、今回の戦でヴァルナログ家を天下に轟かせてやる、それにはまず軍隊だ、そして軍隊が動くには兵糧がいるからさ」

秋夜がミネアとサライの登場の理由を推測すると、ミネアは頷きながら部屋に入ってきて、真奈美と秋夜の整理した資料が乗っている机の空いた部分に直接、腰を降ろす。

「お母さま」

眉をしかめるサライ。

彼女には机の上に座ってしまう母親の豪放さは遺伝していないようだ。

「現在のこの長沙郡の兵糧の備蓄分ですと、約八千の長沙の兵を総動員しますと、約四ヶ月の遠征が可能だと計算できます」

真奈美が答える。

普段から秋夜と真奈美は文官として兵糧管理等の後方支援任務をこなしていた、だから即答するのはそれほど難しい事ではなかった。

「兵糧の備蓄を全部持っていくのも兵士を総動員するのも考えものだよね、相手は三万かあ」

腕を組むミネアに、

「その通りです、お母さま……長沙の住民に何かあるかもわかりま

せんしね、ある程度は備えがなければ」

と、サライは顎に手を当てる仕草をした。

「だったら、どんくらいにする？　どれくらい兵を出せば、奴等を宛から叩きだせると思う？」

ミネアは長女への問いに少し笑みを込めている、娘を試している様に真奈美は感じた。

数秒間、サライは顎に手を当てながら俯き考えていたが、銀髪の端整な顔を上げ、

「四千も出せば宛から賊を追い出しましょう」と、答えた。

「四千！？　だって相手は三万だって……」

真奈美は声を上げてしまう、兵力数でおよそ八対一であり、圧倒的な差である事は軍事に疎い真奈美にも容易に理解できた。

しかし、長女の答えを受けたミネアも平然と、

「そんなもんだよな、よし！　四千だ！」

強く頷いてから真奈美と秋夜に振り返り、

「ああ、真奈美と秋夜にも兵糧管理の任務で従軍してもらおうからな」と、ニツコリ笑ったのであった。

第13話に続く

第13話「サライと瑜貴」

0

「真奈美は鎧はいらないのですか？」

「着てみたけど……動けなくなっちゃうし重いし、私はどうせ戦えないし」

「……わたしもです、こーゆーのを逆効果というのですね、せめて懐刀を持っておくのが関の山」

着物のままで私の返事に俯く秋夜に、

「そうだね」

と、頷きながら私は着物の帯に小さな剣を挟む。

長沙ちようさの城の中庭で、兵士達が慌ただしく出陣準備をしている隅っこ。

私と秋夜の出陣準備は簡単に終わってしまう、武器を受け取るうにも槍なんて使えないし、長剣も振るえない、弓なんて引けもしない。

だったら、限りある武具なんだから、使える人に使ってもらう方が賢明だ、という私と同じように非力な秋夜の意見に私は同意し、二人で壁に寄りかかりながら兵士達の出陣準備をぼんやりと眺めていたのである。

「あつ、真奈美ちゃんと秋夜ちゃん、お早う！」

そんな私達の耳に入ってくる、いかにも元気なハスキーボイス。声だけでその天真爛漫な性格を推測できてしまう典型的な声質だ。

慌ただしい中でも彼女の声は目立ち、少女に周りの兵士達が神妙に挨拶すると、彼女は元気に周りの兵士達に気軽に声をかけて挨拶をしながら、壁ぎわにいた私達に歩み寄ってきた。

「アイシャさん」

「アイシャ」

私と秋夜の二人は、それぞれに少女の名前を呼びながら立ち上がる。

「あゝ、真奈美ちゃん、また私の事をさん付けして呼んだし」

少女が膨れるが、

「やっぱりいくら友達になったからって……ミネア様の娘、サライ様の妹を呼び捨ては無理だよ」
私が手を振ると、

「いいでしょ！ そんなの関係ないよ、友達は友達なんだから！」
アイシャは膨れっ面のままで腕を組んだ。

そう彼女……アイシャ・ヴァルナログは私の現在の主君と仰ぐ、
ミネア様の次女なのである。

赤茶の髪はサライ様とは違い、母親ゆずり。

それをセミロングまで伸ばし、後頭部には中華娘の定番？ の白
いカチューシャを左右に付けている。

瞳はパッチリとしていて、顔立ちの美人さでは姉より目立たない
が、明るい表情に可愛らしさが前面に出ている美少女だ。

性格は見ての通り。

落ち着いた雰囲気姉サライ様を月とするなら、彼女は太陽だ。

彼女も私の言った記憶を失っているという言い訳を信じてくれて、
秋夜と共に良くしてくれている感謝すべき相手なのである。

そして、人懐っこいその性格で兵士達からはミネア様、サライ様
とはまた別の慕われ方もされている女の子だ。

「アイシャもミネア様やサライ様と出陣ですか？」

「違うよ、留守番なんだってえ」

秋夜の問いに口を尖らせて、不満をまったく隠さないアイシャ。

「そうなんだ……アイシャさ……いや、アイシャも一緒に行ってく

れたらいいのにね」

私も頷く。

さん付けをしそうになったのを気付かれ、口を尖らせたままで少し睨まれてしまった。

「まあ、戦いに出ても母さんや姉さんみたいには私はいかないからなく、それにお留守番も重要な役目だと思うしね……そうそう真奈美、その調子だよ、アイシャで本当にいいからね」

私がさん付けをやめたので、アイシャは尖らせた口元を笑みに変えた。

「うん……わかったよ、アイシャ」

私は彼女に微笑んだ。

アイシャが怪我しない様にね、と城内に戻っていつてから小一時間。

「よし！ 出陣だ、黄巾賊どもを宛の城から叩きだしてやろう！」

中庭に集まった兵士達にミネア様の号令一喝。

「オオオオッ！」

兵士達からは気合いを込めた声上がり、長沙太守ミネア・ヴァルナログとその長女サライ・ヴァルナログ率いる約四千の軍勢は荊州しゅうの北部に位置する南陽郡宛なんようを目標に出陣をしたのである。

1

荊州は中国大陆のほぼ中心に位置する州であり、北は首都洛陽らくように、東は肥沃な長江流域の揚州、南に未開の南方地域交州、そして西には深い山河に守られた益州に通じる交通に伴い文化、経済的にも発展した重要地域である。

荊州南部に位置する長沙から北部の宛への遠征。

ミネア・ヴァルナログ率いる軍勢は一路荊州を北上していた、長沙郡に隣接している南郡を通過そして、襄陽郡にさしかかった所で襄陽太守劉表の出迎えを受けたのである。

襄陽城の前に並んだ万に達しようかという兵士達と大量の幕僚達の前に立つ、白髪混じりの初老の男が劉表であった。

ミネアを迎える劉表の顔は笑っている。

ミネアも頭を下げて、二人はしばらく言葉をかわすと頭を下げてから、サライや真奈美達の方に笑顔のままで戻ってきた。

「母上」

声をかけたサライ、ミネアはまだ城門の前で笑っている劉表に振り返らずに呟く。

「あのジジイ……自分のすぐ近くの争乱だっているのによ、自分の治める地域だけ万の兵士で守ろうって算段かい、気に入らない」

笑顔で話を交わしていたので、ひょっとしたら援軍や食糧の無償補充すら期待していた真奈美だったが、どうやら劉表の腹積りはミネアに協力的なのは表面だけの様子だ。

「黄巾がすぐ近くの宛で暴れている、この期に及んで万の兵士を動かさぬどころか、我々に協力もしないとは……自分の土地のみを見て苦しむ近隣の民を見捨てる行為……」

珍しくサライが目細めるが、

「まあ、サライ落ちつけ」

と、傍らの武将が声をかけると、

「うん」

素直にサライは返事をして頷く。

サライを収めた武将は、腰までの黒髪の美しい、まさに美少女。切れ長の黒い瞳。

高い鼻から薄い唇。

身長は百六十センチ半ばで、身体の線は細い。

真奈美や秋夜と年齢がほとんど変わらないとは思えない程の完成された美しさだった。

「瑜貴^{ゆき}、何かいい考えがあるのかい？ あたしなんか短気だから、笑顔の維持がキツイんだが」

ミネアの言葉に、瑜貴はフツと笑い、

「それならば襄陽などさっさと立ち去れば良い事、ここで短気を起こしても帰り道が不安になるだけ、非協力の償いは後でたっぷりと払わせますので……ここは手でも振りながら通過すれば宜しいのです」

と、ミネアに答えてからサライの手を引き、

「行こう、あんな下衆共をいつまでもお前の視界に入れているのは私の気持ちが悪くないのだ」

そう襄陽城に身を翻し、歩き始める。

「うん」

サライと瑜貴は手を繋いだまま、真奈美達の前を歩き去っていく。

銀髪のショートカットと黒いロングヘアーの美少女が手を繋ぎながら歩く姿に、

「どう思う？ ああいうのは……？ どうも私くらいの世代は少し分らん」

と、腰に手を当て複雑そうなミネア。

「良いじゃないですか、男性も少ないですし、女性同士の婚姻も最近は普通に認められてきてますからね……あの二人はあるんじゃないですか？ 結婚」

そう平然と答えた秋夜に対して、

「そうなの！？」

と、真奈美は驚きの声を上げてしまったのである。

第14話に続く

第14話「陰謀推察」

1

「そろそろ……南陽郡に入りますね」

襄陽城から数日の行軍。

歩きながら秋夜が眩く、劉表の治めている地域を過ぎて、いよいよ黄巾軍の支配地域に入る。

「偵察を密に……数を増やして先行させないといけませんね」

サライがミネアに提案した、正しい行動だ。

「うん……」

ミネアも当然、解っているので同意したが、真奈美の傍にいた瑜貴は、

「まあまあ……母上、お待ちください」と、留める。

「何だよ!?! 偵察を出さなきゃいけないだろ?」

真奈美としてはミネアを母上と呼んだ方が気にはなったが、呼ば

れて本人はそうでもないらしい。

「出さなければいけないのは、当然……おそらく黄巾軍は伏兵を潜め、我々を待ち構えているのは必定にてございますからね」

長く美しい黒髪をなびかせ、不敵に笑う瑜貴。

「必定！？ ……なんですか？」

真奈美は思わず口にしてしまい、慌てて口をつぐむ。 従軍文官の立場で軍師の瑜貴に意見するなどもっての他だ、と思ったのだ。

「うん……そうだね、必定は少し言い過ぎじゃないかな？」

サライが真奈美に同意する、普段の付き合いでは、瑜貴についていく大人しい印象がある銀髪のショートカットの少女だが、言う事はきちんとと言える自立心は持っている娘である。

「確かに偵察を出そう、と提案したのは私だけど……それは当然の用心、情報に疎い黄巾軍が私達の接近を必ず察知しているとは思えないんだけどな」

サライの言葉に瑜貴は、彼女に自然に手を伸ばし、その首筋までかかる銀髪に手で軽く透いた。

「……瑜貴！？」

突然の瑜貴の行為に赤面するサライ。

「サライには酷な事を要求してしまう……」
「!？」

瑜貴の薄い唇から発せられた台詞の意味が解らず、秋夜、真奈美、ミネアの三人は同時に首を傾げた。

「どういう事!？」

やはりサライも意味が解らない様だ、赤面しつつも正面から見据えたサライに、瑜貴は口元を緩め、

「襄陽の愚か者ども……醜い奴らの企みを、清らかなサライが理解できないのは致し方ない事か」
と、呟いたのである。

「バカな！」

ミネアが叫び、

「襄陽……まさか、劉表が黄巾軍に!？」
サライが驚く。

「襄陽太守ともあろう者が黄巾軍と繋がっていると言うんですか？」
眉をしかめる秋夜。

その口調に緊迫感はないが、それは元来なので仕方ないだろう。

「……何も完全に手を結んでいる必要はない」

瑜貴は腕を組んだ。

「黄巾軍の幹部と知り合いの者がいるとか、同郷のよしみがあるとか……ある程度の確度の情報の行き来が出来る……それが互いに悪くない」

「……なるほど、劉表軍は黄巾軍の領内への侵入があるかないかの情報を得て、黄巾軍は我々のような荊州方面からの義勇軍の行動を知る……ですか？」

真奈美が緊張気味に口を開くと、

「ああ……いい予想だ、あくまでも敵同士であるが、何処かで情報の共有をしている……と見ていい」

真奈美に笑いかけながら、頷く瑜貴。

「でも……なぜ？」

誰に問うわけでもない秋夜の言葉に、真奈美は目を細めた。

「この先に……劉表にとってミネア様が障害になると見ている……それを黄巾軍によって間接的に成し遂げようとしている」

その言葉に瑜貴はほう、と言いたげに口を開けて、

「真奈美は兵糧担当の文官にしておくには惜しいな……当たり前だよ、これから先に訪れる漢王朝の力不足が招く戦乱を予想すれば、荊州で劉表が覇を唱えるのに最大の障害が……ヴァルナログ一族に違いない」

と、宛に続く北の方向を瑜貴は指を差し、

「この先には劉表からの情報で我々の規模、目標を把握した敵軍が手ぐすねをひいて待ち構えている」

そう断言したのである。

事態は把握出来た、あくまでも瑜貴の予想の範疇なのだが、真奈美には絵空事には全く思えない。

黄巾軍を利用した劉表のどす黒い策略が待ち構えている。

皆が暗くなると思ったが、そうでは無かった。

総大将のミネアは爛々と目を輝かせ、ニイツと歯を見せて笑って言った。

「面白いじゃないか！ あの前髪ジジイ、奴の思惑を打ち破るチャンスが早々に来るとは私も運がいい、邪魔なのはお互い様なんだよ！」

「夜に来たか！」

宛黄巾軍の武将超静は、部下の報告に笑った。

「ハッ、ミネア・ヴァルナログ率いる長沙軍は松明を掲げて、街道を進んでいる模様です！」

「襄陽に侵入をせずという条件で劉表が我々に情報を提供していて、行動が筒抜けになっている事も知らずに……愚かな事だ、すでに貴様らが進む街道の行く手の森にも、山にも、四方向から合計一万の伏兵が手ぐすねをひいておるわ」

超静は立ち上がり、

「行くぞ！ 奴らを全滅させて官軍を震え上がらせてやる！」
と、氣勢を吐いた。

「……よし！」

ヴァルナログ軍の松明の明かりを山の本の影から確認し、頷く超静。

「愚か者どもを殲滅し、天公將軍ヴィクトリア様に捧げる！ 各部隊に一斉突撃を命じるのだ」

命令と同時に四方の山や森に合図の松明が振られ、黄巾軍の一万の伏兵がヴァルナログ軍目がけて一斉に突撃を開始したのである。

「あれが突撃の合図の松明か……ならば敵の大將はあれだな！ 松明の付いた竹みんな捨てろ、西の山から来る奴らを抜けるぞ、私に続けっ！ 他の方向は無視しろ！」

ミネア率いる五百の兵士達は一定間隔で火の付いた松明を何本も付けた長い竹を御輿を担ぐ様に、二人一組で持っていたのである、これでいかにも四千の軍が夜行進軍しているように見せていたのだ。兵士達はそれを一斉に捨てて、明かりを消し、西の超静率いる本隊に迷う事無く、突撃を開始したのである。

四方から突撃をした黄巾軍は目標の明かりは消えたが、ヴァルナログ軍のいると思われる位置に殺到し、当たる敵と闇の中で大混戦の阿鼻叫喚の嵐に陥る。激しい剣と剣のぶつかり合いの中、ある事に気付いた中年兵がいた。

「て……敵がない!？」

しかし、その兵に一人の女性兵が槍を突き立て、胸を貫く。

「……よ、よくみろっ……お前と同じ黄色い……頭巾を……してるだ……ろ」
「えっ!？」

苦しみながらに真実を伝える中年兵士に驚く女性兵、だがもう遅い。

よほど注意しないと、頭巾の色まで見分けるのは、興奮状態の戦闘中に確認の訓練を積んだ兵士にしか出来ない。

現にその女性兵にも、同じ過ちに気付かない兵が後ろから剣を突き刺した。

「馬鹿な奴らだ……闇夜の奇襲は慣れた軍隊でも、多くの同士討ちの危険性を孕むというのに……愚かな犬が餌にありつけると飛び付いたら、餌が消えて大喧嘩という所か……」

「お母様は餌!？」

明らかに侮蔑の表情で闇夜の向こうの喧騒を見つめる瑜貴に、サライが苦笑してみせる。

「あくまでも比喩的な表現だ……だいたいミネア様が餌な物か……誰が食べれると言うんだ」

瑜貴は眉をしかめる。

「もう……言いたい放題言っ……お母様は予定通りに西の山から来る敵に突撃をしていると思うわ」

そう瑜貴に笑うと、サライは改めて顔を引き締めてから上げ、

「私達は残りの同士討ちをしている敵に突撃をかけましょう!」
と、号令を下した。

第15話に続く

第15話「顔を上げて走りだす」

1

「四方向からの見事な奇襲だな！ 敵は慌てて明かりを消しているが構うな！ 奇襲を受けた敵に出来る事など目標になる明かりを消して、その場で円陣を組んで守りに徹するか逃げるくらいだ、殲滅しろ！ 奴らを皆殺しにするんだ！」

超静は、興奮気味に部下たちに怒鳴り散らす。

彼は闇夜に紛れての四方向からの完璧な奇襲作戦の成功を確信していた、その作戦の成功の鍵が同じ官軍である劉表軍からの情報のリークだとは誰が気付けるだろうか？ 気付ける訳はない、そう超静は感情を昂ぶらせて、仲間の三つの部隊が長沙からの官軍を叩いているところに止めの一撃を加えんと、本隊を急行させようとしていた。

だが……それは、全てが裏目であった。

奇襲を受け、明かりを消した官軍が、実は五百程の先行部隊に過ぎず、その先行部隊はその場で円陣などという行儀の良い戦術などは選んでいなかった、奇襲を十分に予測し、周囲からの攻撃を交わす様に真っ直ぐ超静率いる本隊に向け、突撃を開始していたのである。

超静が官軍を叩いていると信じていた三つの黄巾部隊は、すでに敵のいない闇夜の戦場に各方向から殺到し、その練度不足もたたって壮絶で不毛な同士討ちをしていたのだ。

「……超静様?! 何かが近づいてきます」
「ん……!?!」

超静が部下の言葉に耳を傾けると、彼にも確かに何百もの駆け足の足音が聞こえた。

「味方が戦っている方向からだな」
「そうだな」

音に気が付いた別の兵士達も足を止めた。

「何の足音でしょう？」

部下の疑問には武将は明確に答え、対策を立てなければいけない。

「奇襲を受けた敵が算を乱して、こちらの方向に脱出路を求めて逃げてきたに違いない、飛んで火にいるとはこの事だ、奴らに絶望を味あわせるのだ!」

超静がそう告げると部下たちは歓喜し、士気が上がった。

だが、その判断は間違えだった、ミネアが自ら率いた五百の集団はもちろん命からがら逃げてきた敗残の部隊などではなく、戦意揚々に超静を打ち取るべく、突撃をかけてきたヴァルナログ軍の精鋭だったのである。

「あれだ！ 鈍い奴等め、一気につき崩せ！」

ミネアは叫び、先頭に立って超静率いる三千の本隊に突撃する。
驚いたのは超静だ。

「な、何なんだ！ 何で奴等は……蹴散らされ、逃げてきた動きではない」

「もしかして敵は我々の奇襲を受けて分散して、それぞれに突撃をしたのでは？」

「そんな時間はない、奇襲を受けた部隊が夜にそんな動きに直ぐに移行できる訳がない！」

超静は部下の言葉に首を振った。

「奇襲なんて、そもそも成功してないのさ！」

そこにミネアが、不敵な笑いを浮かべて現れた。

「な、何者だ？」

超静の問いに、ミネアは首筋を隠すくらいの赤茶色の髪を夜風に
なびかせて、

「私はヴァルナログ軍の総大将のミネア・ヴァルナログ……由緒正
しい血統の直系である私の刃にかかって戦場に散る事を誇りに思う

がいい……黄巾の鼠」

そう威風堂々と名乗りを上げた。

「お……俺は……」

まさか総大将が目の前に出てくるとは思っていなかった超静も慌てて、名乗りを上げようとしたが、

「鼠に名前など……いらんだろうに！」

と、一喝して大剣を振りかざし、ミネアは超静を正面からから竹割りにしてしまったのである。

勝敗は決した。

超静を討ち取られた本隊はミネア部隊の突撃に散々に蹴散らされ、残る三部隊も同士討ちをしている所をサライ率いる三千の部隊に攻撃を受けると呆気なく潰滅し、宛城方面に退却をしていったのである。

この戦いで宛黄巾軍は繰り出した一万の軍の内、脱走や負傷をいれて約五千以上が損害をうけたが、ヴァルナログ軍は殆ど目につくような損害は受けなかったのであった。

「大勝利ですね」

夜が明けて太陽の光が射し込む戦場を見て、秋夜が呟いた。
嬉しくはあるのだろうが、どこか棒読みなのはいつもの事である。

「そうだね」

真奈美はそう答えつつも戦場を正視は出来なかった、そこはまさに死屍累々だったのだ。

死肉をついばむつもりか、カラスや野犬がちらほらと目を逸らした方向に見える。

「どうしたのですか？」

秋夜が首を傾げた。

「いや、その、秋夜は大丈夫なんだ？ 私がたくさん死体をみるなんてどうにも辛くて」

真奈美が口元に手を当てながら聞くと、

「少しは慣れましたよ、真奈美は記憶に無いかも知れませんが、ミネア様に仕えていれば山賊討伐、湖賊討伐は当たり前前のように行われていましたです」

と、秋夜は答えた。

「慣れ……かあ」

真奈美は顔を背けたままで、ため息をつくど、

「まあ、こんな世の中……自分も何時あの遺体の仲間入りをしてしまふかはわからないのです」

秋夜はそう言ってから、

「私達には仕事が出来たのです、敵軍の撤退した野外陣地にはきつと兵糧もあるのです、急いでいってそれを把握するのです」

と、真奈美を促して歩きだした。

「……」

真奈美は顔を上げた。

幸い風向きの関係か、悪臭はしなかったが、見ているだけで吐き気が込み上げてくる。

死体の中には多くの女性兵士の姿、自分ほどの年齢の少女もいるだろう、明日は我が身かも知れない。

正直に言えば怖い。

泣きだしそうだ。

何でこんな世界にやってきてしまったのか？

もう戻れないのか？

この世界にやってきて既に何千何万と考えた感情が湧きだしそうになる。

『でも……』

真奈美は目をつぶり、

『負けない』

そして、見開く。

『もう、この数週間で驚くも……迷う事も……そして泣く事もたくさんしちゃったんだから、あと出来る事は精一杯にこの世界で私を生きる事……きっとあの人達もそうしているに違いないから！』

真奈美は大分遠くなった秋夜の後ろ姿に向かって走りだした。

ヴァルナログ軍が宛城に籠もった黄巾軍に猛攻を加え、宛城を見事に攻略したのはそれから二週間の後であった。

第16話に続く

第16話「董子と真里亜」

1

「下曲陽に集結した黄巾軍は約八万、対して我々は二万六千だが、鳳公子殿のような義勇軍が駆け付けて来れば五分とはいかずとも、質で兵士数を補うまでに至りましょう」

「なるほどねえ、義勇軍ねえ……そんなに頼りになるのお？」

黄巾の中心の三姉弟の一人である張宝が押さえる冀州北部の地、下曲陽で黄巾軍と対峙する官軍の幕舎。

参謀役を務める支永真里亜^{はせなが まりあ}の言葉に、訝しげに机に頬杖をついたのは下曲陽攻略司令官である志道董子^{しどうとうし}だ。

支永真里亜。

年齢は弱冠十九歳。

支永家は四代に渡り、漢王朝に大臣を輩出した名門であり、彼女も本家の妾の娘ながら長女である。

切れ長の青い瞳。

顔立ちも鼻が高く、端整で、セミロングの黒髪に細身の身体はいかにも名門のお嬢様の風を感じさせる美少女だ。

それに対して、志道董子は年齢二十九歳。

漢帝国西方の涼州^{りょうしゅう}の中でも、西の西涼^{せいりょう}の出身。

容姿はもみ上げを長く伸ばした茶色い髪のショートカットで、顔立ちは強い色艶を感じさせる。

薄いわけではないが、色気のある唇の左下にある黒子が印象的で、身体も豊満な胸元が目立つグラマーな美女である。

互いに美しいが、真里亜はまだ少女を抜け切れてなく、董子は成熟した妖しく、言い方は適切かは疑問であるが高級娼婦のそれを感じさせる美しさであった。

「幽州北平の太守鳳公子殿は、数倍の幽州黄巾軍を瞬く間に撃破しており、信用がおけると思えますし、わたくしの旧友が率いる義勇軍もこちらに急行しておりますゆえ……司令官はどうかお気を強く」

真里亜がその細く整った瞳を閉じて言うと、

「別に気弱になった覚えはないわよ、じゃそいつらを先鋒にしちゃいましょ、あわよくば黄巾軍を弱らせる事が出来るだろうしね、で、あんたの友達も間に合えば先陣にしてあげるわ」

頬杖をついたまま、董子は答える。

「確かに先陣は武人の誉れ、しかし、せっかく来た義勇軍を多勢の様子の解らぬ相手にぶつける捨て駒の様に扱うのは……」

あからさまに異論有りげな態度の真里亜、だが董子は動じもせず、

「様にじゃないわ……捨て駒よ」

と、真里亜をバカにしたように横目で見て、

「義勇軍なんてどっからか沸いてきた黄巾軍と何が違うのよ？ そ

んな連中と正規兵を同じ扱いできるわけないでしょ」

そう冷たく妖しげな表情で笑ったのである。

「……！」

唇を噛み締める真里亜。

義勇兵に特別な思い入れはないが、味方に駆け付けた者に対する物言いとは思えない台詞に思わず唇を噛んでしまう。

「真里亜ちゃんも名門支永家の長女なのだから、その辺りをきちんと区別が出来るようにならないと痛い目みちゃうわよ」

ニヤニヤ笑う董子。

互いに数秒の間が空いたが、

「……敵軍の情報を偵察部隊にとらせてきます、それでは失礼します」

怒りを押さえて頭を下げ、真里亜は足早に幕舎を出てしまったのである。

司令部の幕舎から偵察部隊を指揮する部下のいる幕舎までの草原、真里亜はセミロングの黒髪をなびかせながら、

「何よ……あいつは？ 考えられないわ、あんな奴が漢帝国の軍司令官になっている！ ああ、虫酸が走るわ、あんな淫売女にバカに

された、有り得ないわ、有り得ないわ、有り得ないわ、有り得ないわ、四代に渡り三公を輩出した支永家の長女の私があんな女に……有り得ないわ、有り得ないわ、有り得ないわ」

と、まるで呪咀の様に繰り返し歩き、通り過ぎる兵士達を不気味がらせたのである。

2

「下曲陽攻略の第一陣に北平太守、鳳公子殿が適任と方面司令官である志道董子様が決められた」

「決められた!？」

そう使者からの連絡を受けて、鳳公子は少しだけ太めの眉をしかめる。

前髪は真ん中で分け後ろ髪は縛って背中まで垂らし、普段はおっとりした雰囲気を持ち、それが人気の一員でもある北平太守の彼女だが、使者に対して聞き返した声には明らかな反抗心が見られた。

「その通り、貴公は義勇軍だが、志道董子様の指揮下に入っている行動を決めるのも董子様である」

中年の肥った男の使者も尊大だ。

公子の幕舎で一緒に使者を迎えた壺与、そして祐一、アーシエ、

ミオも愉快的な態度ではない使者に程度の差はあれ癩に触る。

「兄貴……酷い奴もいたもんだな、下曲陽に着いてからしばらく経つにもかかわらず会いもしないで、いきなり先陣やれなんて」

ミオが呟く。

それが聞こえた様である肥えた使者は、ミオを睨んで何かを言い掛けたが、

「承知しました、鳳公子、不肖ではありますが全力を尽くして先陣を承りましょう、功を成せば方面司令官殿にもお目どおりかないますでしょうからね」

と、公子が口を挟んで立ち上がったので一悶着はなく、素直すぎるミオに祐一は肝を冷やした。

使者の帰った直後に祐一は公子に頭を下げて、

「申し訳ありません、ミオが余計な事を……」
と、謝る。

「良いのよ、ミオちゃんの言ってる事が間違ってるとは思えないしね……どにしろ断る選択肢があるとは思えないもの、ミオちゃん、おいで」

公子は笑いながらミオを手招きする。

「みおー！」

ミオは公子に駆け寄り、幕舎の地面に敷かれた絨毯に座る彼女の膝の上に頭を乗せて寝転がった。

「ミオ！」

アーシェが注意しようとするが、公子は首を振りそれを制すると、

「先陣ならば逆に味方に邪魔はされないし、功を成せばいいのよ、今はそういう時代……この黄巾賊はチャンスをくわえて走ってきてくれたと思わなくちゃね、祐一君、また先鋒お願いできるかしら」
そう言つて、ニツコリと祐一に微笑んだ。

第17話に続く

第17話「賭け」

1

「チエツ、助けにきたのにさ、やっぱり煙たがれてるんじゃない？」

ミオは変わった形の槍状の武器を、肩にかけながらぼやいた。

「ぼやくな、心ない方面司令官なんてあんな物だ、鳳殿を使いつぶして程よい所で手勢を繰り出して、手柄を上げるつもりだろう……まったく帝国も人民からの義勇の兵を……情けない限りだな」

アーシエはため息をついて、偃月刀を手取る。

「まあ、いいさ……ミオ、武器を変えたのか？　丸太はやめたのか？」

傍らで聞いていた祐一が会話に混じると、

「うん！　なんでも公子さんの軍の中に幽州でも一番か二番の武器職人がいるらしくて、頼んで造ってもらったんだぞ」

ミオは笑って嬉しそうに答えた。

変わった形である。

槍状のなのだが、刃は蛇行しているのだ。

「変な形だな、刃先が蛇みたいだぜ」

祐一が素直な感想を述べると、

「兄上、それは蛇矛じやぼうという武器です、あまり使っている人間もないのですが……」

「いやあ、何だか人と違う武器を持ちたくて、ミオちゃん大物だからね」

アーシェの説明にミオは胸を張り、

「へえ、いろんな武器があるんだな」
祐一は頷いた。

「御三人は度胸があるっすね」

その様子を見ていた学士のパティーが眼鏡を指で上げた。

「なんで!?!」

ミオが首を傾げると、

「何では、ねえっすよ、目の前に数万の黄巾軍が突撃してきているというのに悠々とし過ぎっす」

パティーは草原の彼方から一斉に突撃をしてくる黄色い頭巾の集団を指差して、苦笑したのだった。

そう、まさに下曲陽の黄巾軍討伐の先鋒を任された鳳公子率いる義勇軍約六千は、黄巾軍先鋒高昇率いる三万と正面からぶつかろうとしていたのである。

「公子様！ 黄巾の攻撃が我々の先鋒に達しました、松平祐一様の部隊が戦っております」

伝令が白馬に跨った公子に告げる。

普段は着物の文官スタイルの公子も、今は鎧に身を包み、普段のほんわかした雰囲気はない。

「ご苦労様でした」

公子は伝令に丁寧な頭を下げると、傍らで青鹿毛の馬に乗る壺与に、

「壺与ちゃん、私達を無下に扱う志道董子様に眼にも物を見せましよう」

と、笑ってから、

「小細工なしで敵軍の中央を突破してあげます、正面を打ち破れ！」
手を大きく上げて命令を下した。

「合図が出た！ 突撃だ、敵を正面から突破しちまえっ、それじゃ行くぜアーシエ、ミオ！」

「オウツ！！」

祐一が剣を振り上げて走りだすと、アーシエとミオもそれにつき従う。

鳳公子軍の先陣を切る祐一率いる五百の兵は、強く引き絞られ放たれた矢の様な勢いで、鶴翼に開きながら向かってくる黄巾軍に正面から突撃する。

「敵軍がかなり両翼を拡げているな、迫る程にどんどん拡げている」

偃月刀を持ち走るアーシエに、

「拡げてるんじゃないくて、そうなっちゃってるんすよ、足並みを揃えての突撃は案外難しいっす、足の早さには個人差があるっすからね、万単位の軍で編成が出鱈目で、訓練皆無ならなおさら、前の人間を抜かしたり、前方の視界を得ようとしてどんどん横に陣形はひろがるっすよ、いわゆる紡錘陣形や鋒矢陣形のようなまとまりのある突撃陣形をとることは、あの黄巾軍には不可能っすよ！」

そうパティーも走りながら答えて笑った。

「だからこそ……」

「一見、無謀に思える数倍の敵への正面突破が成算のある作戦に変わるのです、策とは常に変化にあらず敵の力量を見抜いての正攻法もまた策なのよ」

祐一の先鋒の直後に続く本隊、公子は走る馬上で鶴翼に広がる黄巾軍を見て含み笑いを浮かべ、

「壱与ちゃん！ 祐一君達に助太刀して、鶴を切り裂く槍の穂先は鋭い程に良いわ」

横を馬で走る壱与に命令を下す。

「わかりました！ 手勢を率いて先鋒に合流します」

壱与は頷き、愛馬の手綱を扱き祐一の率いる先鋒に駆けていく。

3

「あれは……」

後方の本営から、その様子を見ていた支永真里亜は声を上げる。

「包囲されつつある……敵は周囲から包み込んで来てるんじゃない？ 下手すりゃ全滅だわ」

一緒に督戦する司令官志道董子は、呆れた様なため息をついた。

「わかりません、ひょっとしたら勝てるかもしれませんが、少なくとも鳳殿は無策で突入をしたとは思えませんし」

そう答える真里亜に、

「何がよ？ まさか相手が懷の薄い陣形で突撃したからといって、数分の一の兵力でそうそう中央突破から分断、そして各個撃破なんて美味い展開になると思ってんの？ なんないわよ、私は涼州で腐るほど包囲戦はやってるのよ、機動力に差が大差が無ければ、鳳公子は包囲されるわ」

董子はにやついて肩を竦めた。

『また人を馬鹿にして……有り得ないわ』

何も答えずに真里亜は董子を一瞥しつつも、

『確かに志道董子、この戦にやる気をほとんど感じないけど、涼州で姜族の鎮圧の経験が長いだけはあるわ、言っている事に理がある、馬も少なく機動力に大して優ってなければ、あれだけの兵力差が中央突破を許さない可能性がある』

と、目を細め、少なくとも志道董子がまったくの無能ではないと考える。

董子のいう姜族とは、中国北西部の牧羊民族で強力な武力を持つ。

政治的立場は時によりけりで、中国歴代王朝によっては併合されていたり、激しく争っていたりしている、漢帝国とは小競り合いが絶えず、涼州はその主戦場とも言えた。

「しかしながら、志道董子様……それは戦慣れして機動力に優れた姜族ならばでの事、あの相手ならば効果的な包囲に突撃から移行出来るだけの練度はありますまい」

真里亜と董子の話に割り込んできた男がいた。

背も小さく小太りな粗末な着物を着た四十代半ばの、ハッキリ言えど醜男。

「……誰よ？ あんた」

あからさまに不機嫌な態度を隠さない董子に真里亜が、

「私の部下の田豊でんほうと申す者です」

と、答える。

「あっ……そ」

聞いておいて興味なさげに、そっぽを向く董子に田豊は、

「これはこれは失礼をいたしました、つい司令官様が誤った判断をされそうになされてますからな、助言差し上げたまで」

と、ニヤリと笑う。

「……あん？ 私が間違っている」と

董子は田豊を睨むが、田豊はいやらしい笑いを浮かべたままで、

「左様、鳳公子様は拙者の見立てではまず負けませぬ、黄巾軍は綿を裂くように散り散りになりましたよう」

平然と答える。

「あんたね……断言してくれるじゃない？ じゃあ鳳公子が負けたら、私を間違えてるなんて抜かした責任をとれるの？」

唇を噛む董子。

「責任を持った発言でございしますれば」

うやうやしく頭を下げる田豊。

「じゃあ、鳳公子が負けたら、あんた討ち首」

「……なっ！」

董子が平然と言いつた言葉に、驚きの声を上げたのは傍らにいた真里亜であったが、

「構いませぬ、軍師なれば読みが外れて死ぬのはよくある事、しか

し読みが当たれば褒美が欲しいですな」

当人の田豊はまったく動じない。

「良いわよ、命懸けならそれなりの者をあげる、言ってみなさいよ」

真里亜を無視して話を進め、不敵な笑いを浮かべる董子に田豊は言った。

「いやあ、董子様は美しい、美しいがまだ青々しい我が主君と違
いまして、実りきった艶々しさがございます……」

その言葉に董子は今度は何とも言えない冷笑を浮かべ、真里亜は信じられないと言った表情をしたのであった。

第18話に続く

第18話「アーシエ、中央突破する」

1

「で……田豊っ！ あなたは何を言ってるの！ 戦の結果を賭けにして、男女の……男女のち、契りを、だ、だ、だ、ダメに決まっます、取り消しなさい！」

耳まで真っ赤にした真里亜は叫ぶ。

「誰が契りを賭けたなんていつてるのよ」

董子が苦笑し、

「左様、真里亜様は何か深く意味をとりましたか？」

田豊も笑うと、

「だ、だ、だって……ち、違うのなら良いけど」

そう真里亜が息をつこうとする。

しかし董子は、

「まあ当たり前だけど……良いわよ、田豊とやら、鳳公子が勝ったら今晚はこの身体を自由に食るといいわ！ 公子が負けたら……おいで華蘭！」

と、黒いショートカットの二十代半ばの女を呼び寄せた。

華蘭からんと呼ばれた女は、身長は百六十？半ば、鎧を身に付けて手には柄の長い斧を持っている。

董子は後ろに立つ彼女を親指で差し、

「鳳公子が負けたら、我が配下の者で武勇一を誇る華蘭に脳天から真っ二つよ」

と、笑う。

「な、な……ダメに決まってるわ、勝っても負けても何があるのよ、止めなさい、あり得ないわ！」

慌てて真里亜は董子の前に立つが、傍らの田豊はそんな主君はまったく無視し、醜い中年顔の頬を思いつきり上げて、

「結構、勝てば快樂、負ければ地獄、戦はこうでなければ」
と、カカカと笑ったのであった。

2

「祐一君、大丈夫！？ 助太刀に来たよ！」
「おっ、壺与ちゃん！」

戦いの最中に先鋒に合流した壺与が、祐一を見つけて馬を近づけ声をかけると、祐一も剣を片手に笑顔

を見せた。

「もう少しで敵を突破できるぜ！」

「うん、頑張ってるね、一気に行っちゃおう！ さあ手を出して」

壱与はそう言うのと、祐一に手を伸ばしてきた。

「え！？ ああ」

壱与の手を握る。

「飛んで！ それっ！」

声をかけられたので、その通りにジャンプすると、ひょいと持ち上げられて、馬に乗る壱与の後ろに乗せられてしまった。

「い……壱与ちゃん？」

「このまま中央突破をしちゃおう！」

驚く祐一に壱与が振り返りながら、ウィンクすると、

「まったく、度胸もすわってるし可愛いし、壱与ちゃんは本当にいい女の子だね！ 断るわけないだろうがよ！」

祐一は頷いた。

「よし！」

馬上から槍を振るい、兵士達の先頭に立つ壱与。周りの黄巾の兵士達を右に左に槍を繰り出して、蹴散らしていく。

「じゃ……邪魔になってないかな？」

いざ後ろに乗ったものの、馬上戦闘の経験のない祐一は落ちないようにしているのがやっただ。

「いいよ！ 腰に手を回していいから、落ちないようにしてね」
「……お、おうっ」

それでも馬上から敵を牽制しようと剣を構えた祐一、だが馬が動きバランスを崩し、慌てて壱与に手を回した。

「平気かな？ ごめんね、落ちないでね」

壱与が苦笑した時である、黄巾兵が近くで数人血飛沫を上げて絶命し、

「壱与、何をしている？ 兄上は馬には上手く乗れないのだ、降ろせ！」

と、血を吸ったばかりの偃月刀を持ったアーシェが怒鳴ってきたのである。

「アーシェさん、だって戦場では馬に乗れた方が有利、戦は機動力が物をいうしね」

怒気をはらんだアーシェの声とは正反対に壱与の声は明るい、だが、

「いいから降ろせ！ 落馬でもさせたらたじやおかんぞ」

祐一を馬から降ろさなければ、強引にでもと言いだしそうなアーシェの剣幕に、

「ハイ、ハイ……もう」

と、眉をしかめながら、

「祐一君、ごめんね」

そう謝って祐一を馬上から降ろし、近くの兵卒を呼び寄せると、馬をあずけて壱与もひょいと地に降り立つ。

「別にそなたが馬を降りる必要はなからう」

訝しげな表情を見せたアーシェに壱与はニツコリと笑った。

「だって、祐一君を援けて来るように言われているからね、傍になきや」

「ああ……そうなんだ、鳳さんにも氣を使わせちゃってるな」

壱与の答えになんとも言えない苦笑をした祐一、だがアーシェは瞳を鋭くし、

「不必要！ 黄巾の賊を中央突破するくらい我ら三兄妹揃えば造作

もない！ 観ている高天原壱与、今すぐにこのアーシェ・アルザー
ドがそれを証明して御覧にいれる！」

そう烈迫の声を上げると、偃月刀を片手に正面の黄巾軍に走りだ
していく。

「お、おいつ、アーシェ！ 待てよっ」

祐一は止めるがアーシェは、

「兄上も観ていられよ、これくらいの賊など余所の者の助太刀無し
で突破してみせよう」

と、返事をする。と雲霞の如くいる大軍にアーシェは単身で身を躍
らせた。

一見、ただの自殺行為。

しかし、アーシェの武勇はその常識を凌ぐ。

「うおおおおおっ！」

身長僅か百五十？を少し越えるくらい金髪的美少女は、まるで
竜巻の様に偃月刀を振り回し、黄巾兵の黄色の頭巾を凄まじい勢い
で真っ赤に染めていく、まるで手が付けられない、アーシェの鬼神
の様な強さに黄巾兵は我先に逃げ出し、そこから生じた乱れに錐の
様に兵士達は穴をこじ開けるに突入する。

「チャンスだよ！ まったくアーシェさんの強さはどれくらいなんだか？」

壱与が祐一に告げる。

しかし、祐一はまったく嬉しそうな表情など浮かべずに、

「ミオ、行くぞ！ 壱与ちゃんも援護を頼む」

と、近くで戦っていたミオを呼び寄せ、アーシェの暴れている方向に向かって、全力疾走を始めたのである。

「なんだ？ なんだ？」

少し離れて戦っていたので、今までの様子を理解していないミオが壱与の近くにやってくる。

「さあ？ どうしたんだろ、でもほら、祐一君行っちゃうよ……周りを囲まれない様に後についてあげるから、祐一君と一緒にアーシェさんの方に行くといいんじゃないかな？」

「まあ、呼ばれたしな」

壱与が剣を手に突進する祐一の背中を指さすと、ミオはそう答えて蛇矛を片手に祐一に続いた。

広がった黄巾軍の真ん中を祐一率いる先鋒は、遂に突破しつつあった。

第19話に続く

第19話「敵中再編成」

1

「どうやら中央突破がなりそうですね、いやいやどうして鳳公子殿の先鋒は打撃力がありますな」

後方の本陣、田豊が顎に手を当て笑う。

「そのようね」

真里亜が頷くと、

「中央突破がなったからって、鳳公子が勝った事にはならないわ、その後の対応が不味ければ上手くはいかないでしょ？」

董子は腕を組みながら余裕の表情で、戦場を見つめている。

「鳳殿は戦上手のようです、これからの対応が心配なのは黄巾の方ではないですか？　すでに崩れは始めている集団もあります」

あくまでも強気の董子に、戦場を指を差す真里亜。

鳳公子率いる六千の部隊に黄巾軍三万は突撃をしていた筈が、逆に中央突破を許し、隊列は乱れ、指揮系統は混乱をきたし始めている。

「少なくとも鳳公子なら、この状態からこの兵力差でも負ける事は

無い、そう言いたいんでしょ？」

「違いますか？」

口元に笑みを浮かべる董子に目を細める真里亜。

本質的に合わない、志道董子という女との相性がどうしようもないレベルにあるのかもしれないが、真里亜は最低限の礼は失しない、それが彼女の性格だ。

しかし、そんな真里亜の気遣いを董子はまるで無視をするように、

「バツカねえ〜！ イヤイヤイヤ、失礼失礼！ 名門の方になんて無礼を……あっはっは、ああいう馬鹿相手に真面目にやったら損をするのよ、アハハハハ」

と、爆笑してみせたのである。

「な……！？」

流石に真里亜も董子を睨み付けた、彼女の言った言葉の意図が解りかねるが、自分が馬鹿にされたのは間違いない。

「イヤイヤイヤ……アハハハハ、向こうを見て見りゃ解るって！

黄巾の連中なんかとまともに戦なんか出来るもんですか！」

大爆笑しながら董子が指を差したのは、鳳軍と黄巾軍先鋒が戦っている後方、すなわち黄巾軍の主力部隊、張宝陣取る敵の本陣であった。

「……なっ！？」

その様子を見て、思わず声を上げる真里亜。

なんと後方に下がっていた張宝率いる黄巾軍本隊約五万が、無秩序な機動で先鋒部隊を加勢に動き始めていたのだ。

それはまるで津波の様にも真里亜の眼には映る。

「なっ、なぜ!？」

理解不能な唐突な黄巾軍の行動に呻くように呟く真里亜の横で、董子は腹を抱えんばかりに笑った。

「アハハハハ、アハハハハ……バカッ、バカッだわ、あいつら! 先鋒が少し苦戦してるくらいで五万の本隊があんなに無様に加勢に現れたわよ、戦術もない、秩序もない、そしてもはや目的も見失った馬鹿でも数分の一の鳳公子くらいは乱れに乱れながらも叩き殺せるでしょうよ、そこに漢帝国の正規軍が鉄槌を降してやるから! アハハハハッ、愉快過ぎるわ」

「……!」

狂った様に笑う董子に真里亜は絶句し、

「まさか……鳳公子殿一人に戦わせるつもりではないでしょうね? 八万に六千で……」

思わず問い質す。

だが董子は少しも悪びれる事無く、

「あらあ!？ 私、言ったわよね? 捨て駒って」と、笑顔のまま肩をすくめた。

「敵の主力が動いた！？　こんなタイミングで？」

祐一、アーシェ、ミオの三兄妹の奮闘で先鋒の黄巾軍が中央突破を許して、算を乱し始めたのだから援軍をよこしてきたのは理解できるが、壺与としてはその無秩序さと規模が予想外れであった。

「敵は乱戦にしたいの？　犠牲者がうなぎ登りに増えるだけよ！」

壺与は後方を振り返る、もちろん主君の鳳公子がどういう意見かを確かめたい気持ちからだ。

「公子様……」

命令は先鋒の祐一達を援けて敵を引き裂く刃となる事だ、そして三万対六千の劣勢を跳ね返し押しまくっていた、だが敵の主力が現れて八万対六千になれば公子の作戦にも変更があるかもしれないと判断した。

しかし、壺与がその確認に公子の本隊に帰る必要はなかった、公子の命を受けた伝令が後方から走ってくると、壺与の目の前に片膝

をついて、

「敵の主力の急の接近に対して公子様よりご連絡です、敵の援軍が到着する前に方円に陣を再編成するとの事、公子様の本隊が先鋒に合流する為、部隊の速度を落として欲しいとの旨でございます」
そう指令を伝達してきたのである。

「方円陣……了解しました、本隊に了解の旗を！」

壱与は頷き、部下に指令を受けた事を本隊に知らせる旗を振らせた。

「……宜しく願います」

伝令は立ち上がり、さらに祐一達にそれを伝える為に前線に向かい走る。

「方円陣か……攻めから一転、守りに転じて味方の正規軍の動きを待つ、私なら公子様の本隊も合流させて突撃を続行かな……でも公子様らしいといえばらしいかもしれない」

壱与は、走っていく伝令の背中を見ながら呟いたのであった。

鳳公子はこの状況の変化に対して、攻勢で得た有利を利用して守りに転じ、自らは守りつつ、志道董子率いる正規軍に外から攻勢をかけてもらう作戦に変化させてきたのである。

その直後、祐一達も数人の伝令（伝令が戦死する可能性もあるのと同じ指令に対して複数の伝令を放っている）より、突撃から一転、守備の方針変換を告げられていた。

「止めちゃうのか、俺ならこのまま行け！　って感じだぜ、敵の本隊が現れたと言っても数が多いだけで相変わらず規律がねえし、八万だろうが、奴等はその半分も役には立たない感じがするけどな」

自分より二つくらい年下の女の子の伝令にそう漏らす祐一。
しかし、傍らにいたパティーに、

「まあまあ、ここは無理をしないで味方の来援を待つのも犠牲を抑える手段の一つっす、総司令官の言う事を聞かなきゃダメっす、伝令さんに言われても相手が困るだけっす」
と、口添えされたので、

「それもそうか、ごめんな、了解したぜ」
そう伝令少女に謝り、頷いた。

指令は受けたが、祐一はまだ合戦最中に味方の兵士を操る指揮の技量などは不安があったので、パティーに助言を受けながら、味方のスピードを落として公子の部隊の到着を待つ。

黄巾軍先鋒の反撃が怖かったが、

「平気っす、奴らも中央突破されて混乱しつつあるっす、こちらが少し止まったくらいで組織的な反撃は不可能、それくらいの猶予はあるっす」

パーティーは余裕で笑う、その辺りは公子も承知しての陣形変更だろう。

「突撃は中止ですか？」

そこに最前線で戦っていたアーシェが現れる、流石の彼女も小さい身体で奮闘し、汗だくだ。

「ああ、ご苦労だったな」

祐一はアーシェにおもむろに近づくとその小さな身体を不意に抱き締める。

「あ、あ……兄上!？」

いきなりの行動に驚くアーシェの耳元で、

「アーシェ、これからの俺たちのやろうとしている世界を造る事は沢山の人を仲間にしないと到底果たせっこない、お前はさっき壺与ちゃんを余所者と呼んだけど……そんな事じゃ先が辛くなる、もちろん壺与ちゃんにかまけ過ぎたのは謝るからさ」

そう囁くと、アーシェは真っ赤になりながらも、

「わ、私も反省しております、ついカッとなりました……しかし、兄上は壺与殿が随分と気に入られたようですね？」

と、周りに聞こえないような声で聞いてきたので、

「もちろん……でも言ったら？　アーシェも負けなくらいにいい女の子で、俺のお気に入りだって」

祐一は甘い声でそう答え、汗だくのアーシェの小さな身体を強く抱き締め、彼女を更に赤面させたのであった。

第20話に続く

第20話「援軍要請」

1

「いきます、鋒矢陣から方円陣に部隊再編！ 直轄隊より高天原隊、先鋒隊の順に編成、再編開始っ！」

鳳公子が馬上で叫ぶと、旗が振られて、公子を中心に部隊が渦巻き状に陣を整えていく、最終的に公子を中心に円形になるのが方円の陣形であり、多勢による包囲攻撃の周囲三百六十度に対応する守りの陣形だ。

突撃陣形からの陣形替え、黄巾軍にとっては鳳公子軍を一気に壊滅するチャンスなのだが、黄巾軍の先鋒は鳳公子軍に中央突破を許し分断され混乱している上に、駆け付けてきた本隊はバラバラで先鋒隊に合流してしまっている。

公子にとってはこの展開は読み通り、黄巾軍の練度は想像以上に稚拙で、司令官は愚かだ。

『この反乱は何かのきっかけだとは思うけれども少なくとも長くはないわね』

公子は瞳を細めてから、近くに控える伝令の隊長を勤める者に、

「志道董子様の本隊に伝令を三人……いや、四人出してください、至急に攻勢をかけられたし、そうすれば、黄巾軍は一気に崩壊すると伝えて下さい！」

と、告げた。

喚声を上げて襲いかかる黄巾軍の兵士。

「近寄るなっ！」

アーシェは怒鳴りながら偃月刀を振り回し、あっという間に三人を斬る。

「寄るなっ！」

傍らのミオも蛇矛をまるで風車の様に回して、二人の黄巾兵を打ち倒した。

「アーシェ、ミオ！ 今は守りだ、かかってくる奴だけ倒せばいい、追いかけて陣形に穴を空けるな」

「了解している」

「おう、わかった」

祐一が注意すると、それぞれ返事をするアーシェとミオ。

公子の敷いた方円陣は見事に完成し、祐一達は一番外側の壁になっている、円の内側の仲間達からの援護を受けてはいるが、一番負担のかかる場所だ。

祐一を襲う敵兵、粗末な剣の武器慣れしていない突きを受け流し、つんのめった相手の背中に剣を突き立てる。

中年の女の敵兵は声も上げずに地面に倒れた。

「やるっすね！」

感嘆の声を上げたパーティーに、

「よそ見るなよ、敵は幾らでもいるんだからさ」

そう返事をしながらも祐一は、

『やはりこの世界の俺はなりには剣の腕が良いみたいだな、身体が素早く反応してくれる……後は経験を積んで慣れないと……』
などと考える。

もう迷いは無かった。

少しでも強くなりこの世界を強く生きていく決心が祐一にはついていた。

2

「……本隊が動かない、何をしているの！」

方円陣の中心、公子は志道董子率いる本隊を睨み付けた。

方円陣を敷いてかなりの時間が経つが、いまだに頑強な守りに支えられて、稚拙な包囲攻撃を繰り返す黄巾軍の突破は許していない、だが相手の数はこちらの十倍を超える、時間が経てば方円陣の兵も疲弊して数に押し切られる危険性が高くなるのだ。

その上、まだ分断され、味方のいきなりの合流に混乱しながらの攻勢であるが、あとしばらくもすればいかに練度の低い黄巾軍でも

落ち着きを取り戻してくるだろう。

そうなれば、かなりの出血を相手に強いる代わりに公子率いる六千の兵士の壊滅は必至だ。

『出血を強いる？』

公子は拳を握り締めて自問自答した後で、ある事に気づいて立ち尽くす。

『……私達を徹底的に捨て駒として扱って、相手を消耗させ、その後で正規軍が叩くつもり？』

顔合わせもせずに先鋒を言い渡してくる相手だ、良くは思われていないとは感じていたが、まさかこの状況に至っても参戦しない程だとは公子の常識の範疇を越えていたのである。

「公子様、新たな指示を出されますか？」

副官の問いに公子はハッと顔を上げ、

「い……いえ、もう少し様子を見ます」

と、しか返事が出来なかったのだった。

「あらあら、いくら戦術家として名を馳せる北平太守鳳公子殿でも亀になるしか、今はやりようがないみたいねえ！」

妖艶な魅力を感じさせる唇を緩める董子。

伝令からの再三の出撃要請は全て無視していた。

『あり得ない……なんて下道な奴なの』

真里亜は唇を噛む。

「さて！ 田豊とやら、賭けはどうやら私の勝ちのようね？」

振り返る董子。

「な、何を言ってるんですか、ここできちんと援軍を出せば勝利は得られます、鳳公子殿は果たすべき役割は果たしました、戦いを賭けの対象にするのは論外ですが、あなたが鳳公子殿を負けさせたような物ではないですか！」

さすがに真里亜は反論したが、

「あんたにゃ言っていないわよ、賭けには私が援軍要請に必ず答えなきゃいけないなんて取り決めをした覚えなんてないわよ、もつとも今から田豊と一緒に賭けに乗りたいというなら参加は自由よ」

と、董子は唇の左下辺りにある黒子に指を触れながらせせら笑う。

「なっ……」

言葉を失う、彼女にとって黄巾軍との戦いは何なのか？ どうでもいい遊戯とでも考えているのだろうかと思ってしまう。

しかし、傍らの田豊は違った、自分の首がかかっているにもかかわらず後ろ頭を掻き、

「いやいや……流石は涼州にその人ありと謳われた志道董子様、この田豊感服しましたぞ、まさか勝ち戦の援軍要請を蹴るとは！」
と、破顔一笑して見せたのである。

「誉められたってあんたみたいな醜男じゃ嬉しくもないわよ、さっさと死になさいよね」

醜い顔を崩す田豊。

董子は背後の華蘭將軍に目配せをするが、

「待たれよ、まだ勝負はついておりませぬよ」

と、田豊は鳳公子軍と黄巾軍が死闘を繰り広げる原野の後方を指さす。

「!?!」

董子、華蘭、真里亜は目を見張る、いつの間にか黄巾軍の本陣の敷かれていた方向から何本も黒い煙が上がっているのだ。

「焼き討ち、火計!?! いったい誰が!?!」

眉をしかめる董子。

「何者が現れて鳳公子殿を勝利に導いてもいけないなんて取り決めをしてはいませんでしたな？」

田豊はいやらしく笑い、

「いやいや……今宵は極上の夜になりそうですね」

と、自分の頭をペシッと叩いたのである。

第21話に続く

第21話「突撃行」

1

「本陣に火がかけられているぞ！」

「敵に回り込まれた」

「敵は後ろだ！」

黄巾兵は口々に喚いて、混乱を強める。

亀になった状態の鳳公子軍だけに集中している間ならば、どうか数の力と明日無き恐れを知らない戦いが期待できる信者達だが、こうなると統率がとれていないだけに乱れる。

「落ち着け！ 後ろの敵など気にするなっ！ 敵の先鋒と主力は目の前だ、後ろに回り込んだ敵など所詮は少数だ！」

下曲陽に集結した黄巾兵八万の大將であり、地公將軍として黄巾全てを掌握する三姉弟の一人である張宝は叫ぶ。

目の前の主力がなぜ先鋒を援けに来ないかは彼は解らなかったが、動いていない限りは背後に回った敵はとりあえず無視出来る勢力で、まずは少数ながらも味方の先鋒を押しまくり苦しめた敵軍の先鋒を殲滅し勢いつけて主力と決戦しようと、彼なりの計画を立てていた。

「背後に回り込んだ敵は無視していい！」

張宝は念を押して命令するが、一度動揺し、統率を乱した八万の軍勢は、鳳軍への攻撃を続ける集団、背後に方向転換を図る集団に

バラバラに別れてしまったのである。

「公子様！」

一方、鳳公子軍の壺与は、方円陣の中央で周囲を指揮する公子に振り返り、

「敵軍の圧力が弱まりました、再び陣形を組み直して再度、突撃を試みては如何でしょうか？ 敵軍の背後に回り込んだ味方に呼応して敵軍を突破できると思いますし、戦線をまた動かせば味方の本隊が動き出すかもしれません！」

と、進言したが、

「まだ……です」

公子は腕を組んだまま、首を振る。

「私は敵軍の背後に回り込む味方の作戦など聞いていませんし、その規模も判断できません、むしろ相手の圧力が減って防御に徹底していれば、崩れる危険性は減りました……もう少し状況を見ます」
「でも……今ならまた突撃陣形を組めます、そうすれば……」

更に意見具申しようとする壺与。

「何度も敵中での陣形変更は出来ません、本隊の動きにしても背後に回った部隊にしてもここは様子を観る事にします」

しかし、公子は壺与の意見を制するように手の平を向け、答えたのだった。

「反撃はしないのか？　いつまでも円くなってても始まんないぜ、一旦大胆になったんだったら躊躇なくいこうぜ！　また思いっきり突っ切ろう！」

方円陣の外側でひたすら敵を迎え撃つ中で、祐一は公子のいる陣の中心に向かって叫び振り返った。

この戦場では少数と言っている鳳公子軍であるが六千もの兵がいる、戦闘の喧騒の中で陣の中央と外側では公子に声が届く訳もないのであるが、祐一は大声を張り上げる。

「兄上、大丈夫かっ！　いきなり声をあげてっ」

偃月刀を片手にアーシェが駆け寄ってきた、敵軍の圧力が減退したので彼女は余裕ができたのだろう、近くで祐一の様子を気にしていた様子だ。

「いや、後方に煙が上がったらあからさまに敵が浮き足だったからな、チャンスだと思ったただけだ」

戦闘の極限状態の緊張感も手伝っての公子の指揮への叫び、自分でもそれを少しだけ恥ずかしがりながら祐一が答えると、

「いや、確かに……突撃再開のチャンスかもしれないな」

アーシェが首の後ろで結った美しい金髪が、いつの間にか肩に架かってしまっているのを背中後ろに弾きながら同意する、傍らにいたパティーが、

「ならば私が陣の中央に行って、祐一さんの提案として公子様に意見具申してくるっすよ、もし壺与様も同じ意見なら採用してもらえ
るかもしれねえっす」

と、公子への意見具申の使者をかって出たので、祐一はアーシェと視線を合わせて頷き合い、パティーに振り返り、

「頼むぜ、また先鋒を任されても構わない、ってやる気を伝えてくれ」

と、ウィンクした。

「あの煙は誰かが敵軍の本陣に火をかけたんだな」

陣の中央に走っていくパティーの後ろ姿を見送ると、祐一は敵軍の方向に剣を構え向き直る。

「そうですね、しかし……誰があれをやったにせよ、後方攪乱程度の数百の勢力でしょう、これ以上は期待できません、だからこそ我々が敵に突撃を再開しなければいけないのです」

アーシェは偃月刀を構えた、黄巾兵の雲霞のような攻撃は互いに会話が出来る余裕がある程、断続的に収まってきていたが、いつま

たそれが再開されるかはわからないのである。

「そうだな、それにしても本隊は何をやったんだ、地方から来た公子さんだけ戦わせやがって」

祐一が愚痴る。

「志道董子という女、きつとろくでもない人物に違いありませんね……」

アーシェはそこまで言うと、不意に目の前に現れた三人の黄巾兵に向かって、偃月刀を構え素早く飛びかかり、あっという間に血祭りに上げて、

「そんな下衆は兄上には会わせたくないな」
と、返り血を浴びながら振り返った。

2

「ダメっす！ 公子様はこのまま方円陣で様子を観るらしいっす、どうも壺与様も祐一さんと同じ意見だったらしいですが、退けられたみたいっすよ」

しばらくするとパティーがそう言って祐一に駆け寄って来た。

「壺与ちゃんも同じ意見でダメだったなら、俺じゃ望み薄だったな」

祐一は周りを見渡しながら呟く。

黄巾兵達はまだ落ち着きは取り戻せていない、相手の本陣から昇る黒煙は本数を増していて、それが黄巾兵の動揺を更に誘っているのである。

「壹与が賛同しているのなら我々の部隊だけでも、兵をまとめて突撃をすれば、壹与が、そして全軍が続くかも知なく！」

今まで敵を追いかけていていつの間にか帰ってきていたミオが呑気な口調で言ったが、

「それはダメだ」

祐一は即答し、

「あくまでも俺は公子さんに取り立て貰って兵を率いているんだ、俺が率いているのは公子さんの集めた兵達でオレ達は公子さんの部下なんだぜ、確かに異論があれば反論もするが、自分の意が通らないからと勝手な行動を起こすのは違うと思う、公子さんの言う通りにしようぜ」

そう言ってミオの頭に手を置く。

「みおー！ わかった」

少しは駄々を捏ねるかと思ったが、ミオは素直に頷いて、

「そうですね、勝手な行動は無為無冠の我々を取り立ててくれた鳳様への義理を欠く行為、流石は兄上」

アーシェも納得した様に笑いかけてくる。

「なら迎撃を継続っすね、頑張りましょう」

パティーの言葉に、

「おう！ 徹底的に迎え撃って逆に相手を退かせてやろうぜ！」

と、祐一が意気を上げた時である、大きな歓声が上がリ、黒煙を上げた黄巾軍の本陣より、蟻の大群のような黄巾軍八万に向かって突撃を敢行する一団が現れたのである。

「何だ!？」

声を上げる祐一。

「およそ五千、決して我々よりも多くはない！」

アーシェが叫ぶ。

鳳公子軍と同じ、もしくは少ない集団は、迷う事なき魚鱗の突撃陣形を組み、八万の黄巾軍に飛び込んだのだ。

突撃された箇所からまるで人の波が起こり伝達していき、黄色い布を引き裂くように謎の集団は黄巾軍を突破していく、魚鱗と鋒矢、陣形は微妙に違えど、まるで先程までの鳳公子軍を観ているようだ。しかし、鳳軍が飛び込んだ相手は三万、その集団の相手は鳳軍が

いるといっても八万である。

「抜けられんのかよ？」

「わからない」

ミオの上げた声にアーシェが唸るように答えた。

「無理そうっす、いくら戦慣れしてない黄巾軍相手だからって、やっぱりあれだけの厚みのある相手に五千程度の突撃じゃ止まりそうっす……観るっすよ、突撃した奴らの勢いがなくなり始めてるっす」

唇を噛み指を差すパティー。

その通りであった。

魚鱗の陣で、初めこそは黄色い軍団を豪快に切り裂いた謎の集団も、敵陣の中央部に行かないうちにその突入速度は目に見えて、弱まり始めたのである。

「アーシェさんやミオちゃん、そして壺与様のような豪傑がいれば八万が相手でも突破できると私も一度は思ったっすけど、そこまで甘くなかったかもしれねえっす……うちらがいつても同じようになっただかもしれないっす」

祐一やアーシェ、壺与はほぼ同数で突撃をしようとしたが、鳳公子はそう判断したからこそ突撃を止めて方円陣を敷いたのだ。

パティーも祐一の判断に使者として公子を説得に向かってくれたが、案外、本人も突撃には兵法学士としては危惧を感じていたのかも知れない、そんな言葉の言い方だった。

「あのままじゃ奴等は全滅か……」

「止まっちゃえば、魚鱗の陣なんて、まさにまな板の上の魚っす」

舌打ちするアーシエに、パティーは残念そうにうつむいた。

「いや……俺はいける気がする！」

その中でポツリと祐一は呟いた。

「……えっ!？」

祐一に振り返るアーシエ、ミオにパティー。

「俺にはあいつらがこのままやられるようには思えないんだ」

「何か気が付いたっすか？」

パティーの訊くが、祐一は腕を組んで首を振る。

「俺みたいな素人がパティーも気付かない事に気づく訳がないだろ？
でもな、奴等の止まり方は止められた感じじゃなかったんだ、俺には敵に囲まれながらも、ただ真っ直ぐ突撃するだけじゃなく、冷静に周りを伺う猟犬のような感じに思えただけなんだ」

祐一がそう答えると、まるでその答えを待っていた様に謎の集団

は魚鱗陣形のまま、黄色い敵陣のど真ん中で右に九十度旋回して再び突撃を開始したのだ。

「なっ!？」

そして、まるで一度は止まったとは思えない勢いを取り戻し、黄巾軍を蹂躪し始めたのである。

「祐一さん、なんで解ったっすか？」

驚くパティーに、

「いや……だから根拠はないって、そう感じたただけなんだよ」

と、祐一は答え、

「このまま丸くなってたら美味しい所をみんな持っていかれちゃうぜ、今度は俺が公子さんを……」

そう本隊に向かって走り出そうと踵を返すと、そこにいつの間にか壱与が立っていたのである。

「祐一君、行こう！ 行くつもりだよね？」

口を真一文字に結んだ黒髪の美少女に、

「流石は壱与ちゃん、俺の事、解ってくれてるね」

祐一は軽くウインクをしたのだった。

第22話に続く

第22話「二人の将」

1

「壱与ちゃんが突撃するなら一緒にいきたいのは山々んだけどさ」

頬を搔く祐一。

「どうしたの？」

「いや、俺は公子さんに取り立てて貰ってるんだ、さっきもミオ達に言ったんだけど、それで公子さんの命令を一方的に破る事は出来ないってさ、俺はここは突撃だとは思うけど……公子さんに義理が立たない」

罰の悪そうする祐一に、壱与は微笑んだ。

「良いと思う、こんな世の中だからこそ正義でなければいけないと思う」

「壱与ちゃん」

「……祐一君、心配いらないよ、黄巾軍の本陣を焼いて、突撃を敢行している部隊が何者かは分からないけど少なくとも敵じゃない、あの部隊と呼応しての突撃を公子様は認めてくれたよ、命令違反じゃない」

壱与は強く頷く。

八万の敵を目の前に守りに傾き、悪い言い方をすれば様子見に入った公子だったが、味方らしき部隊がはっきりした登場をしたのに様子見をする程、硬直した思考の持ち主では無かった、再び進言し

た壺与の突撃案を採用したのであろう。

結果を言ってしまうえば、様子見も今の状況を待ったと考えれば、単独の状態で突撃するよりも正解であったとも言えるのだ。

「そうか、公子さんには許可済か、それじゃあ思いっきり行こうか！
先鋒は承ったぜ！ パティー、隊列を組み直す！」

祐一は傍らにいたパティーに隊列の編成を命じ、

「よしアーシエ、ミオ！ 壺与ちゃんに負けんなよ」と、檄を飛ばす。

「もちろんだ！」

「おう！」

アーシエとミオもそれぞれの武器を振り上げ、

「いくぞっ！」

祐一が気合いを入れて剣を抜き放つ。

そして、鳳公子軍は祐一と壺与率いる部隊を先頭に、再び黄巾軍に突撃を開始したのであった。

再び突撃を開始した鳳公子軍、黄巾軍は数を活かした重厚な包囲

を敷きたかったのだが、対応が追いつかない、今回は本陣に火を放って暴れ回るもう一つの部隊がいるからだ。

「ええい、数で押し切るのだ、敵は我々の半分もないのだぞ！」

張宝が口に泡をたてるような剣幕でまくしたてる、しかし上級指揮官から下級兵士まで経験が無いのが響き、複数の部隊による突撃に全く反応できずに、大多数の兵が戦線に関与出来ない状態、いわゆる遊兵になってしまっていた。

本陣から上がる火の手に対する動揺も大きい。

その中で、黄巾軍先鋒部隊の将である高昇は周りの兵を集め、後から現れ本陣に火を放った部隊を阻止しようと試みる。

相手の数は多く見ても五千、今からでも落ち着けば、敵を殲滅するのは十分に可能と高昇は判断した。

「ええい、俺は先鋒部隊の大將の高昇だ！ 背後から本陣に火をかける等という小細工を労しおって、大將と呼べる器の者が一人でもいるのなら出てきてみたらどうなのだ！」

高昇は先鋒部隊の兵と共に槍を持ち謎の一団に立ちはだかる。

敵将との一騎討ちを始めて、敵軍の脚を一旦止めようかという高昇の考えであったのだが、その期待は呆気なく打ち碎かれる。

「その心意気や良し！ それでは、御堂玲夏が相手つかまつる！」
みどうれいか

そう叫び、敵の一団から躍り出たのは、黒髪を頭の上で結い上げ、背中に流した鋭い瞳を持った黄色系の肌の少女だった。

身長は百七十？ 近くありそうで、手には大きな戦斧を持っている。

「女が！ 俺の相手が勤まるか！」

高昇は叫び、御堂玲夏と名乗った将に槍を突き出したが、玲夏はその穂先を紙一重でかわし、高昇の懷に素早く飛び込んできたのだ。

「なっ……！？」

紙一重だが、玲夏の動きはわざとそう躲した事に高昇はやつと氣付き、思わず息を呑む。

「そなたではこの御堂玲夏の相手にならないな……ご免！」

それが黄巾軍の将、高昇がこの世で聞いた最期の言葉となった、彼は太刀で胴体を横に真っ二つに分断されて絶命した。

敵将を討ち取り、味方から歓声が上がる。

「よくやりましたね玲夏、お手柄です！」

同僚の能見晃のうみ あきらが駆け寄ってきた。

晃も玲夏と同じ年端で、まだ二十歳前。

尼僧の袈裟にも似た白い戦装束を身に纏い、戦の最中は顔にも白い布を巻き付けてその顔立ちは見えないが、普段は緑色の短髪の少女で顔立ちも性格も穏やかで身長も玲夏よりも十？は低い。

だが、それで彼女が戦場での武勇が玲夏に劣るという事ではない、手には長柄の斧を持ち振るい、白装束は所々が返り血で赤く染まっていた。

「晃か……誉めてもらう程ではない、雑兵に毛が生えた程度の将を討ち取っても自慢にはならん、止まっている場合ではない、ボサツとしていては張宝の首が他の者に挙げられてしまう」

玲夏はそう晃に答えると、手勢を率いて再び黄巾軍に突撃を開始する。

「まったく……玲夏は止まらないですね」

顔に巻いた白布の向こうの晃の瞳が微笑む。

玲夏が晃の言葉に素っ気ない反応をして、戦闘を継続したのは二人が不仲な訳ではない、むしろ普段は仲が良いのだが、玲夏は一度戦となれば何よりも戦闘を優先するのだ。

「さてと……」

顔の布を首まで下げて周囲を見渡す、依然として激しい戦闘の最中。

黄色い布を二つの突撃陣形の鋭い二本の槍が引き裂いている状況だ。

混乱し落ち着かない波を立てる黄色い集団。

晃は穏やかな瞳を細く鋭くして、それらを数秒の間観察すると、

「見つけた！ 悪いですね玲夏、張宝を討ち取らせて頂きます！ みんな、いきますよっ！」

そう高らかに声を上げ、手勢を集めてからニッコリ笑う。

「一番手柄で未来様に誉めてもらうのはこの能見晃になりそうです
ね」

第23話に続く

第23話「アーシェ・アルザードと能見晃」

1

『負けてたまるか!』

偃月刀を携えた金髪の少女は、戦場を疾風のように駆け抜ける。

小柄ながら少女の臂力は並みを外れていた、黄色い布を付けた兵士達に正面から偃月刀を大上段に構えて飛び込むと、受けようと相手の構えた槍を、剣を叩きおって、そのまま脳天から竹割りにする、烈迫の気合いの声を上げて、得物を振り回せば、たちまち数人の首が宙を舞う。

算を乱す黄巾兵。

誰でも明らかに力が上位の英傑と戦うのは嫌なのだ、ただ前進してくる金髪の少女に為す術なく、背中を見せて逃げ出す者も続出する。

『あいつに、あいつに……負けてたまるか!』

少女は再び強く想うと、偃月刀を振りかざし、黄色い海を切り裂いていく。

「アーシェ様!」

「どうした!? 倉子」

背後からついてきていた味方に名前を呼ばれて、金髪の少女は振

り返る。

アーシェよりも一つ二つ年少の少女がいる、名前は周乃倉子しゅうのくらことい
い、ショートカットの黒髪、中肉中背でアーシェのような格別の美
少女でもないが、何処か愛嬌のある娘だ。

「ハッ、どうやらこのまま進むとあの援軍の一団と同じ黄巾の集団
を攻撃する事になりそうです」

槍で倉子は目標としていた黄巾の群れに丁度、対角線から迫る集
団を差し、

「我々は突撃する味方の先頭になっていますから祐一様や壺与様、
ミオ様も続いてきますし、それはあの援軍の集団も一緒でしょう、
互いに同一目標に突撃したら、進路を邪魔しあってしまいます、そ
れで突撃の脚が鈍ってしまったら良くないのでは？」

と、アーシェに丁寧な頭を下げて告げてくる。

突撃の開始は足並みを揃えたのだが、敵と戦っているうちにアー
シェの集団が祐一や壺与、ミオ達に先んじて先頭に立っていた。
祐一と壺与率いる先鋒の部隊はいつの間にか、アーシェが先導役
になっていたのだった。

倉子のはっきりとは告げてはこないが、これはこのままではいけ
ないという種類の進言だ。

「なるほどな」

アーシェは一旦、足を止めて戦況を見渡し、素早く思案する。

このまま先導役は続けて例の援軍と進路が重ならない様に矛先を転ずるか、進軍を一旦止めて突出を抑え、祐一か壺与を待って指示を仰ぐか。

すぐに対処の方法が二つ浮かんだ、どちらも妥当な案ではあるだろう。

だが彼女は少しの間、援軍の集団を睨みつけた後、

「このままでいい！ あの黄巾の集団を殲滅する、遅れるなよ！」

と、声を上げ、再び走り出したのである。

「アーシェ様、一体どうなさいましたか？ 一つの敵の集団を慣れない味方と両方から挟めば、同士討ちの危険もあります！」

慌ててアーシェを追いかけて進言する倉子。

だが、アーシェはまったく迷いなく走りながら、

「あの黄巾の集団をみろっ、あの周りだけやけに均整がとれた動きをしながら中央部分を守っている！ 我々の目標にならないように旗を隠しているが、おそらくあの中央には大将の位にはある人物が守られているに違いない、あそこに張宝がいる、続け！ 張宝を討ち取れば多少の混乱は目をつぶっても勝利が舞い込んでくるぞ！」

と、怒鳴り返して黄巾の集団に斬り込んだのだ。

「アーシェ様！」

もちろん、アーシェが斬り込んでしまった今、倉子も反対意見が

あろうとも退くわけにいかない。

「アーシェ様に続け！」

倉子は周りの味方に檄を飛ばし、共に黄巾の集団に突入を開始したのである。

2

アーシェの読みはずばり当たっていた、飛び込んだ黄巾の集団はまさに黄巾の首魁である天公將軍ヴィクトリアの弟にして地公將軍張宝を守る一団であったのである、開戦当初はもっと重厚な布陣に護られていた彼も先鋒部隊の争いへの強引な参戦、そして二つの部隊からの強力な突撃を受けるといふ要素が重なり混乱し、孤立化していたのだ。

「左右の両方から挟まりました！」

「早く周りの味方に駆け付ける様に言えっ！」

「張宝様を隠せ！」

「先鋒部隊の高昇様に連絡をとれ！」

黄巾の中では精鋭だが、しょせんは練度の低い黄巾兵だ、すぐに慌てだす。

そして、彼等は当然、知る由も無いが挟み撃ちにしたのは、後世に名将として名を残す事になるアーシェ・アルザードと能見晃とい

う天下の英傑二人であつたのである。

「どけっ、どけっ！ 黄巾の雑兵ども！ 私の前進を邪魔する者は生命を失うだけで益はないぞ！」

そう怒鳴り付けて、黄巾兵の波を血飛沫を上げて進むアーシェの言葉は嘘ではなく、黄巾兵はアーシェの底無しの武勇の前に震え上がり逃げ出そうとする。

しかし、それも虚しく叶わない。

「怯まずに進んでください！ 必ずやこの集団に張宝がいます、能見晃がその首、頂きます！」

アーシェの反対側からは、黄色い波を引き裂く白装束で長柄の斧を振り回し、殺戮を尽くす晃がいたのであった。

「退却、退却だ！」

地公將軍と呼ばれるプライドをかなぐり捨て、旗を隠し、兵士達に混じって隠れていた張宝だったが、左右から迫るアーシェと晃にその緊張の糸が切れてしまい、一目散にその場を走って逃げ出す。
無謀極まりない行為。

「張宝さまっ！」

周りの兵士達が諫めるが、もう遅かった。

張宝の首を付け狙うアーシェと晃がそれを見逃す訳はない、走る張宝に疾風の如く駆けつけた二人が追いついたのはほぼ同時。

「うああああっ！」

屍餅をつく張宝。

偃月刀と長柄の斧が座り込む張宝に突き付けられ万事休す。

だが、張宝に得物を突き付けつつも、アーシェも晃も、その凄まじいまでの殺気の目標は互いに切り替わっていたのであった。

第24話に続く

第24話「参上!!」

1

「私の獲物だ、退いてもらおうか」

「私の獲物です、お断わりします」

アーシェと晃がかわした言葉のやり取りは単純であった。

見合う。

二人の足元の地公將軍張宝は、腰がぬけたかのようにへたり込み動けない。

『身なりはとても名のある将とは思えない……体格も小さいというのに、何という威圧感』

顔まで隠した白い装束に身を包んだ少女は、目の前に立つ輝か**ん**ばかりに美しい金髪**の**美少女を見極めんとしたが、そうする前に、その偽りの無い威圧感に驚いていた。

『勝てるか……!?!?』

自問自答。

晃自身、腕には十分な覚えがあるつもりだ。

手にしている長柄の斧は、今までに敵対してきた者を逃さず後悔させてきた。

正直に言えば、そんな相手の数も覚えていない程に脳天をかち割り、胴を引き裂いて来たのだ。

目の前の自分と年端の変わらない強い眼をした少女は、そんな相手達とは違うだろう、まだ一合も交えていないにもかかわらず、今まで闘ってきた相手を遥かに凌駕する最強の相手である予感。

だが……怯えてはいない、逃げ出すつもりも一切ない、自分は将なのだ、今は率いる兵も少数だが将来は万余の兵を率いる将帥となるのだ。

「欲しければ力づくで奪われたらどうですか？」

晃の口から出た言葉に金髪の少女はまるで待っていたように口元を緩め、

「その言葉を待っていた、援軍と思って斬りかかるのは躊躇もあったが、大将首を争っての一騎打ちならば意味もあろうよ」

と、手にしていた偃月刀を構え声を上げた。

「我が名はアーシェ・アルザード！ さあ貴公も名乗られよ！」

「あれは!？」

遙かに多勢であるにもかかわらず、四散して走り回り、逃げ回り、組織的な抵抗の体を成さない黄巾兵を蹴散らしながら進む壺与は、正面の異常に気がつき、槍を構えたまま瞳を細める。

「止まんのかよ、まごまごしてっ姉貴が黄巾の奴らを皆殺しにしちゃうぞ」

壺与の直後で、彼女に負けず劣らず派手に多数の黄巾兵を血祭りにあげていたミオが脇を通り抜けようとするが、

「待ってよ!」

と、壺与が右腕を出して制した。

「んだよ!」

「前に出たアーシェ達の部隊の様子がおかしい、援軍の部隊や黄巾兵まで集まってる」

「三つ巴で訳わかんなくなっ姉貴がどっちとも闘ってんじゃね? だとしたら面白いんだけどな」

あっけらかんとした口調のミオ。

「そんなのだったら大変なんだから！　一緒についてきてっ」

壱与が走りだす。

「結局行くんじゃないかねえかよ、兄貴の方はどうすんの！？　まだ後ろだぞ」

「祐一君！？」

ミオの言葉に壱与は少し甲高い声を上げながら、足を止めて後方を振り返ろうとしたが、

「平気、敵軍はすでに指揮が乱れているし、公子様も続いてるから……それに祐一君男の子だからきっと大丈夫」

と、再び走りだす。

「チェッ、知った口をききやがってさ……やっぱりミオは兄貴を迎えにいつてくる！」

そんな壱与にミオは舌打ちして、祐一のいる後方に振り返るのだった。

「うおおおおっ！」

烈迫の気合い、間断の無い偃月刀の連続攻撃。

「……くうっ！」

それを受け止めた晃は唇を噛んだ。

強く。

迅く。

そして……隙がない。

「しぶとく……受け止めてくれるな、良い将だ」

アーシェは笑った。

「ありがとうございます、今度はこちらが！」

受けてばかりでは身が持たない、アーシェの放つ一撃一撃は長柄の鉄斧で受けていても、腕が痺れてしまうのだ。

晃は片手で斧を振り回して、アーシェを横風ぎに攻撃する、長柄の斧をまるで松の棒切れの如く軽々と扱うのだが、それらの攻撃は躲され偃月刀に受け流されてしまう。

『斧が偃月刀に受け流されてしまう……見切られている！』

アーシェの反撃。

受け流された斧を戻す前に鋭い突きが顔面に目がけて来る、どうか顔を横に素早く逸らしたが、

「可愛い顔つきだ」

アーシェは余裕の笑みを浮かべた。

「……!!」

絶句する晃。

避け切れていなかった、顔に巻いていた白い布が裂かれ、頬を血が伝う。

『簡単に負けるつもりは無いが……このままでは自分が勝てる気がしない、ならば覚悟を決めて……』

腹を決めようと晃が息を呑んだのと、

「アーシェ！」

と、目の前の金髪の少女を呼ぶ声がしたのは同時であった。

「ちいっ！」

アーシェがあからさまな舌打ちをする。

アーシェに向かって走ってくるのは肩にかかる程の長さの黒髪の少女。

「壺与、邪魔するな！ 邪魔するならお前も無事じゃすまさんぞ！」

アーシェは左手で晃の斧の柄をつかんで、壺与に怒鳴り返す。

「なんで仲間割れしてるのよ！」

「そこにいる大将首を争っているんだ！ 勝った方が奴を討ち取…
…」

「あっ…そう…な、ん…だっ！」

壱与は、アーシエの言葉が終わらないうちに手にした槍をクルリと持ちかえ、走っている勢いのまま、槍をアーシエ達の方に投げたのである。

「なっ！」

「えっ！？」

壱与の突然の行動にアーシエも晃も一瞬、意識が空白になってしまった。

見事な孤を描き宙を舞った槍は、吸い込まれる様に二人の近くでへたり込んでいた張宝の胸を貫いた。

「ああっ！」

驚くアーシエ。

見事に槍は張宝の胸を貫き、彼は絶命していた。

3

壱与は駆け寄り、槍を張宝から引き抜くと、

「さあ、もう張宝は私が討ち取ったから、一騎打ちは終わりだよ！
これ以上、仲間同士なのに無意味な事しないで！ お互いの味方が迷っているのが見えていないの！？」

そう言つて槍をアーシェと晃に向けた。

「……」

アーシェは壺与を無視し、斧の柄を掴んで動きを封じていた晃に向き直り、

「嬉しくなる程の良い腕だ、今はとんだ邪魔が入ってしまったがまたな、今度、私を見たら白頭巾は外してくれよ、顔は覚えたから」

と、優しく笑った。

「え……」

思わず赤面する晃。

「張宝がいないのに闘うのは意味がない、それにお前程の腕ならば幾らでもこれから武勲は上げられよう……でもすまなかったな」

アーシェの表情はすでに晃への闘いの意識は無い。強き力と誇り高い意識、そして美しい姿。

「アーシェ……様」

思わず、その名を呟いてしまう晃。

「あいつの言う通りだ、我々は互いに夢中になりすぎた様だ……互いの兵達が迷っているのが目に入らなかった」

アーシェは、そう言って晃の頬を軽く触れてから踵を返し、壱与に歩み寄る。

「壱与……すまなかったな、冷静さをいささか欠いていた」

アーシェは鋭い瞳のまま壱与の横を通り過ぎていく。

「どういたしまして」

頷く壱与。

「だが……しかし、横から大将首を横取りは納得いかんっ！」

「だろうね！」

不意に、偃月刀を壱与の首筋目がけて突き付けるアーシェ、それを避ける仕草を見せずに苦笑いを浮かべる壱与。

「避けないとは……私も舐められた物だ」

「無理、アーシェさんに不意打ちやられたら諦めるしかないね、やるとは思えないけどね」

「ふん……兄上が止めるとでも？」

「違うよ、あなたが私を殺すなら、不意打ちはしないって意味」

刃を見ながら壱与は苦笑を続けた。

「晃っ！ 何をしていたんだ！？」

そんな壺与とアーシェのやり取りを見つめていた晃に玲夏が駆け寄る。

「あつ、な、何でもありませんっ……ただ張宝を」

ハッとしてから倒れる張宝を指差す晃。

「お前が!？」

驚く玲夏に晃は落ちていた白頭巾を拾って顔に巻きながら、

「違います……」

と、答えた。

「そうか、ともかく大将が討ち取られて黄巾軍の動きが混乱している、御大将がもうじき来る、敵軍を一気に殲滅しよう!」

「そうですか、勝手に隊から離れて大将を討ち取る事も叶わなかったのを謝らないといけませんね」

晃は後方から追いついてくる味方を見て呟いた。

「アーシェ、壺与ちゃん、何やってんだよ!」

聞こえてきた声に壺与とアーシェは、ピクリと反応して距離をとる。

そこにはミオを連れた祐一が立っていた。
祐一は慌てて二人に駆け寄り、

「アーシェ！ 何があったんだよ」

そう尋ねるが、

「別に……」

と、そっぽを向かれる。

「な、壺与ちゃん!？」

壺与に振り返るが、

「なんでもないよ」

ニコリ笑われてしまい、祐一も二の句が継げなくなってしまう。

「祐一様!」

アーシェの傍らで一部始終を見ていた倉子が、祐一とミオに起こった言を説明すると、

「うわー、姉貴が暴れたなら兄貴しか止められないと思ってたんだけどなあ、こうなると難しいぞ、兄貴……どうするよ?」

ミオがあちやうと言った表情を見せた。

「うーん、敵軍は既に大将や武将を失い怖くないが……相手の援軍の方には話しておかないと、後でのいざこざは参るぜ、ミオ、ついてこい」

祐一はそう答えて、周囲の黄巾軍を警戒しつつも、進撃を止めている件の援軍に向かって歩きだした。

「あれがアーシェと闘った武将だな……白装束の白頭巾かよ」

祐一は晃と玲夏を認めて駆け寄ると、

「張宝の件では妹が迷惑をかけたように済まない」

そう声をかける。

「あ……いえ……私こそ、本来は味方なのですから、アーシェ様にも宜しくお伝えください」

晃は白頭巾を外して祐一に頭を下げた。

「良かった」

祐一は笑みを見せ、

「君達のどちらかが大将かい!？」

と、尋ねると玲夏はとんでもないと言った顔をして、頭の上から結い上げ、背中までかけた黒髪を揺らしながら首を振る。

「いやいや、我々は先鋒の武将に過ぎない、御大将はすぐに来られる」

「そうかあ、あんた達の大將が敵の陣に火を放って、突撃してくれたお陰で助かったんだよ、是非とも礼を言いたくってさ」

祐一が人懐っこい笑みを浮かべると、

「そうか……じゃあ少し待つといい、御大将も喜ぶだろう」

玲夏も祐一に優しく微笑んだ。

遠くから兵士達の怒号が響いた。

「なんだ!?!」

ミオが声のした方向を見ると、

「今まで様子を見ていた正規軍の突撃でしょう、勝負が決した今更……」

白頭巾を再び付けている晃が呆れたように言った。

「まったくだ」

祐一も頷く。

黄巾軍八万、鳳公子軍と援軍の両方の強烈な突撃を受けて潰乱し

たと言っても、まだその数は六万は下らないだろう。

しかし、総大将を失い、ただでさえ指揮系統はバラバラで陣も燃えて士気も低く、大多数が戦意を失った烏合である。

決着がついた状態でやっと志道董子率いる本隊は動き出したのだ。

「あのオバサン、人を散々ダシにつかってくれたなあ、後で目に物みせてやるからね！」

「……!!」

志道董子率いる本隊を見ていた祐一は、背後から聞こえてきた声に反射的に反応して構えた。

久しぶりの感覚。

そう、学校ではこの声が聞こえると祐一は戦闘モードに突入していた。

聞き違える訳がない。

「はろ、はろ〜！」

祐一の視線の先には、身体には軽装の鎧を付けた黒髪ショートボブカットの強気そうな瞳の美少女が白い馬に跨り、軽口の挨拶をしながら手を振っていたのである。

「天草……いない訳がないよなあ、こういうの好きそうだなあ
……」

祐一がわざと聞こえる声で言いながら不敵な笑みを浮かべると、

「だぁ〜い好き！」

黒髪ショートボブカットの美少女天草未来も、祐一に負けないくらいに不敵な笑みを見せたのだった。

第25話に続く

第25話「下曲陽会戦決着」

0

天草未来。

いきなり目の前に現れた見知った顔。

「未来様！」

玲夏と晃は声を揃えて、未来に駆け寄っていく。

天草未来が謎の援軍の大將だったのだ。

「玲夏も晃もよくやったわ、勝ちも動かないけど、董子オバチャンもこっすいわねえ！」

馬上の未来は不敵な笑みから、呆れた様にため息をつき、俺を見つめてくる。

「天草……」

馬に跨り高い位置から見下ろしてくる未来に、俺は身構えて呟いた。

今は黄巾軍と戦う者同士なのだが、そんな事関係なしの一騎打ち……そんな事が起こる可能性も否定出来ない。

だが、未来の口から出て来た言葉は意外な一言であった。

「……あんたがここの先鋒の武将？ あんた私の事、知ってんの！」

「？」

「なっ!？」

あまりにも予想外の言葉に、俺は素っ頓狂な声をあげてしまったのである。

1

下曲陽の戦が終わった。

地公將軍張宝は討ち取られ、八万を数えた黄巾軍はその半数にも満たない漢帝国正規軍にまともな損害も与える事が出来ず、壊滅したのだった。

「未来！」

大会戦の終わった夜。

討伐軍本陣幕舎の外で、支永真里亜は旧友の名前を呼びながら走った。

「ああ、真里亜か」

未来は振り返る。

「よく来てくれたわ、あなたが敵の本陣を突いてくれたおかげで随分と楽になったわ!」

「フフツ……そりゃ楽になったわよねえ、最後に混乱した敵を追いかけまわしたただけだもんねえ」

呆れ顔を見せる未来。

すると、真里亜はバツの悪そうに、

「それは……わ、私は何度も出撃するように司令官に言ったのよ!でもあの司令官が……あり得ないのよ、あんな司令官」

そう答えて唇を噛む。

「まあ……あのお姉様をあんたがどうにかするのは難しいわよねえ、それにあんたの部下の田豊からの使いに戦場に着く前に敵の布陣を教えてもらったから、だから遅れた私達の軍が計った様に、戦場を迂回して敵の本陣を焼けたんだからね、まあチャラにしてあげちゃうわよ」

「で……田豊が!??」

未来が肩を竦めると、真里亜は大口をあけて声を上げた。

「そうよ、アイツ私達が戦場に着くのが遅れてるのを利用したんでしょ? 急いで行軍していたら田豊の使いがやってきてね、もう戦が始まったから……って布陣を書いた地図を渡していったのよ」

「ええっ!??」

「やけにサービスいいと思ったわ、あんたの指示じゃなかったのね」
驚く真里亜を、未来はニヤニヤしている。

「背後を突いて本陣を焼くのも田豊の指示なの!？」

茫然として訊いてくる真里亜に、

「失礼な、それは自分で考えたのよ、五千の兵力が新しく戦場についてどうすれば最大の援軍の効果が得られるか、きちんと考えさせて貰ったわよ」

未来はいやらしい笑いを浮かべて答え、

「その様子じゃ、何か田豊にそれを上手く利用されでもしたわけ？」
と、腕を組む。

「な……な、な、何でもないに決まってるでしょ!」

甲高い声で言い放ち、足早に立ち去る真里亜。
その後ろ姿に未来は、

「頭もいいし、気品もある可愛い娘なのにねえ……ずる賢くないものだから、何でも正面から正直者であれば良いってもんじゃないんだからさ……この時代」

と、小さい声で呟いたのだった。

「はふうう」

「こりゃ……たまらんな、ううっ！」

蝋燭の灯る幕舎に艶のある大人の女の声が響き、男がそれに反応するように快楽に声を上げ、行為は終わりを告げた。

「いやあ、董子殿の色っぱさや艶は我が主にはありませんぞ……満足満足、久方ぶりにこれぞいい女という方を抱きましたわい」

満足気に田豊は全裸で、幕舎のベッドに腰掛けてカカカツと笑う。
ハッキリ言って腹の出た醜い中年男だ。

「……つたく、このブ男が、この志道董子を好き勝手してくれて、あんな賭けでもしてなきややらせる訳無いけど……でもこっちも悪くはなかったわよ」

ベッドに寝たままシートに身体を包ませて、董子は荒い息を整えた。

シートに包まったその身体は、胸元豊かでグラマーな大人の妖艶な色香を醸し出している。

「しかし、今日の戦いで、黄巾の騒ぎの顛末はだいたい決まりましたな……問題はその後ですな」

田豊が呟くと、

「そうね……私もその辺りは気にしているわよ、どうやら洛陽^{らくやう}じゃ、官臣連中と何進將軍が色々とやり合っているみたいだしね、大きな事が起こる気がするわね」

そう答えて、董子はシーツをベッドに残したまま立ち上がる。
蠟燭の漂う光に照らされる完成された女の美しさ。

「あなたがあの天草のガキをどうやって利用したかなんてどうでもいいわ……」

董子は薄くはないが、左下の黒子のある色気の漂う唇を緩めて、

「どう！？ ああ堅物のお嬢様から離れて私の下で働かない？ 私はこの通り相手の容姿なんて気にはしないわよ……田豊、貴方の頭脳が欲しいの」

田豊の隣に腰を降ろす。

「そうですなあ」

田豊は先程まで、自分が味わい尽くしていた董子の身体を息を吞

むように見つめたが、

「イヤイヤ、実は私は兄と弟が支永家に仕えてましてな、もし私が趣旨替えしたら迷惑がかかります」

と、頭を掻きむしりながら答えた。

「そうなのお」

眉をしかめる董子。

「……いや、しかし今の申し出はこの田豊、嬉しく思いますわい」

田豊はいやらしい笑みを浮かべて、

「支永真里亜陣中に居ようとも私がそこにいる事、忘れずにぜひ頼りにしてくれたませ」

と、呟いて董子の身体をまたベッドに寝かせる。

「フフツ……好きねえ、まあ一晩中って言った手前、仕方ないわね……でも今の言葉は軽くないわよ」

全裸の董子はまんざらでもない笑みを浮かべ、豊かな胸元にうずまる田豊の頭を抱き締めたのだった。

「祐一くん！」

朝陽が顔を見せて、一時間程が経つ。

下曲陽会戦の翌日、祐一が自分の幕舎の外でミオと飯炊きをして
いると、壱与が高い声を上げながら歩み寄ってきた。

「壱与ちゃんおはよう、昨日の疲れはない？」

「平気、平気！ 祐一くんこそ平気？」

昨日の疲れを祐一が気遣うと、壱与は両手を腰の後ろで組みニッ
コリと祐一の方に顔を寄せ、逆に尋ねてくる。

「大丈夫、俺は男の子だからね」

そう答えながら、壱与の可愛らしい仕草に、

『ホント、壱与ちゃんは可愛いよなあ』

などと、顔が緩む。

「いーよ、何しに！？」

ミオがぼんやりとした口調で会話に割り込み、壱与を見た。

ミオは基本的にこういう口調だけに感情が読みにくい、ある意味
解りやすいアーシェとは違う。

今の会話への割り込みも素なのか、壱与へのアーシェのような対
抗心があるのか解らない。

しかし、そんな祐一の勘繰りとは裏腹に壺与はあまり気にしていない様子で、

「そうだね、ただ遊びに来たわけじゃなくてね……実は昨日の私達の働きを司令官の志道董子様が評価されて、中央から戦果報告の為に来ている軍役人と公子様に会ってくれるらしいんだ、だからね公子様が祐一君にも来てほしいって」

と、切り出してきたのであった。

「志道董子……昨日、散々とオレ達をコケにしてくれた奴かあ」

祐一はぼやいた。

ハッキリ言えば、いい感情は持っていない。

壺与もそれは同感な上、祐一の気持ちも解っている様子で、

「その辺りは公子様も一緒、でも戦果報告のお役人がいるからね……祐一君の働きも評価してくれるだろうし、公子様も会いにくいんだよ、私も行くから祐一君も来て、お願い！」

そう苦笑して手を合わせてくる。

「そうだね、壺与ちゃんも行くなら……俺なんかでよけりゃいくよ」

恩人の公子や壺与についてきてくれ、と頼まれて断る祐一ではなく、董子に対する引っ掛かりはあったが祐一は申し出を快く引き受

けながら、

『戦果報告なら……天草の奴もくるかもしれないからな』

とも、考えたのだった。

第26話に続く

第26話「天草未来と志道董子」

1

『……連れてくるんじゃないかった』

唇の左下の黒子を舐めるような舌なめずりをした志道董子に壺与は正直、後悔した。

中央からの役人と一緒に座りながら鳳公子、壺与、アーシェと一緒に並んだ祐一に、董子は明らかに好奇の視線を見せたのである。

「へえ、報告は聞いているわよ、キミがあのだ撃をしてた鳳公子殿の先鋒の武将ね」

「松平祐一です」

余裕の笑みを浮かべる董子に頭を下げる祐一。

「へえ、祐一君かあ」

董子は何か含んだような笑みを浮かべると、

「鳳殿は彼を麾下に加えられて長いのかしら？」

そう言って公子に話を振る。

「はい、古い友人の息子で是非に彼を一線の武将に育て上げてほし

い、と頼まれ預かっております」

公子は顔を上げ、にこやかに微笑む。

「……!？」

怪訝な表情を見せるのはアーシェ、だが当の祐一はそうですよ、
とでも言いたげに笑っている。

「ふうん……そうなんだ」

「はい、大切に天下に役立てる武将になれるように育てている最中
です」

「へえ……大切に……ね、立派になるといいわね」

董子はそう公子とやりとりをすると、傍らの役人に目配せする。

役人は初老の男だ。

世の中に男子の出生が少なくなりはじめたのは数十年前からなので、
一線に立つ男子は少ないが、それを退くような年齢には、まだ
男は多いのである。

「この度の戦、勝利に終わったのは皇帝陛下のご威光はもちろん……
…方面軍司令官志道董子殿との綿密な連携を成功させた北平太守鳳
公子殿の功績が大きい」

役人は口を開く。

戦役人の評定が始まるが、長々と皇帝陛下の云々とか、漢帝国の
なんたら、など祐一には訳も解らぬ前置きをした後で、やっとその

口から出たのは……

第一の功は董子。

第二の功は公子。

そして、第三の功を未来とするという言葉だったのである。

「なっ!？」

祐一とアーシェは同時に声を上げてしまう。

壱与も声までは上げなかったが、顔色を曇らせる。

「どうされた!？」

役人もわかっているのだろう、怪訝な表情を祐一とアーシェに向けてくる。

中央から派遣されてきた私に逆らうのか？ という警告が見える表情。

『祐一くん!』

壱与が目で祐一を制しようとするが、祐一はそれを無視し董子と戦役人を睨み付け口を開く。

「おか……」

「いやあ、いやあ……すいません、ごめんなさい、悪かったわね」

祐一が口を開いたのと、そんな軽い声と共に、幕舎の入り口の厚手の布が開かれたのは同時だった。

そういう時は人間は、予想外の方向を優先して向いてしまうものである、当の祐一を含めて全員の視線は幕舎の入り口の方を向く。

そこには苦笑いを浮かべつつ頭を掻きながら、

「いやあ、戦勝に乗じて部下が吞みたがる物でしてねえ……私は戦役人様のありがたい呼び出しに間に合いたかったです……この通り遅刻しました」

と、まったく悪くは思っただけのような態度で、天草未来が立っていたのである。

「あんたが天草未来！？ 義勇軍の者が遅刻なんていい度胸じゃない……」

董子が不機嫌そうな態度を見せると、

「その通り、初にお目にかかります西涼に名高い志道董子様、いや……私の軍は長駆馳せ参じ、縦横無尽の突撃を繰り返して兵が皆疲れていますので、どうか見逃してください」

未来はそう答えて、祐一の隣に並んでくる。

「ふん、一応の活躍に免じて赦してあげるわ、使者殿、もう一度功績を説明してあげて」

二人の間に陰悪になりそうな間はあったが、それは回避出来た様

だ、董子は戦役人に言った。

戦役人は再び、同じような口上で戦の戦功を説明しはじめた。

『……なんちゅう間で入って来たんだよ？』

祐一は横に並ぶ未来の横顔を見る。

戦役人の説明に何か愉しげにも見える横顔。

服装は違うが、その横顔は学校生活で嫌と言う程に見てきた、根拠不明の不敵な笑み。

「……であるからして、第一の功は総司令である志道董子殿、第二の功を鳳公子殿、第三の功を天草未来殿として皇帝陛下に私が報告する、なお私は本検分については皇帝陛下より全権を委任されている！」

再び説明を終え、役人は祐一とアーシェを見た。

前回の説明には無かった皇帝陛下の全権うんたらというのは、皇帝に逆らう意見があるなら言ってこい、という態度だ。

『この野郎、どうせ志道董子から袖の下でもタツプリもらってんだろっ！』

祐一は役人を睨む、もちろんアーシェも生命を賭けた戦に關しての不当な扱いを我慢は出来なそうだ、同様の態度で祐一を待っているのは兄に対する遠慮に違いないだろうと解釈する。

「いい加減……」

再び、口火を切ろうとした祐一だが……

「戦を舐めてんじゃないわよ、木っ端役人!!」

幕舎の幕が揺れるような大声を上げたのは、天草未来が先であった。

「な……」

祐一からではなく、未来から切られた口火に役人は一瞬、呆氣にとられるが、

「こ、困ったものですな、董子殿」

すぐに立て直し、董子の方を見る。

しかし、未来は董子が何かを口に出す前に、

「何が困ったものですなよつ、あんたみたいな木っ端役人が、ここまで多大な功績を上げられた志道董子様と同類にでもいるつもり! ? このバカ野郎!」

と、役人の顔面目がけて、見事な高さのサイドキックを命中させたのである。

「ぎゃっ！」

潰れた声を上げて、倒れた役人は完全に伸びている。

「な……な……」

驚く董子。

未来はそんな董子を見捨て、倒れた役人の胸ぐらを掴んで激しく揺する。

「おらっ、寝てんじゃないわよ！ あんたなんか木っ端役人はどうせ董子様に袖の下でも渡して、出世の便宜でもはかっているに違いないでしょう！ だせっ、袖の下だせっ！」

更に揺する未来。

すると役人の懐から巾着が落ち、中から輝く金がのぞいたのである。

「ああっ……やっぱりですよ、董子様！」

振り返る未来。

「え！？ え！？」

「この金は戦役人が持つには過分！ おそらく、こやつは偽りの功績評価で董子様に近づき、袖の下を差し出すつもりだったのです」

キョトンとする董子に、未来は早口で説明する。

「あ……いや……」

「董子様の参謀の支永真里亜をお呼びください！ 彼女の叔父は中央政府でも要職にあります、この不正を露にして、今回の戦の功績判断は総司令の董子様自らご判断ください」
「え……あう？」

矢継ぎ早の未来の提案に目を丸くする董子。

「私も賛成です、董子様の功績判断なら、この疑わしい戦役人よりも、よほど信頼できます」

公子もそう言って董子に笑った。

2

「いやあ、爽快だわ」

未来は上機嫌で、幕舎を出で歩く。

「お見事です」

公子も笑う。

「でも天草殿は、お金は役人が志道董子に渡すためではなく、志道董子が功績一番手にする為に役人に渡した物である事は承知の事なのでしょう？」

「そうかな、多分ね」

公子にあっけらかんに答える未来。

年齢は公子の方が上だが、あまり気にはしていない様子である。

「でも……あいつが肌身離さずに金を持ってなかったら大変だったのでは？ 何せ、皇帝陛下の全権を委任されている役人を蹴ったのだから」

アーシェが口を挟む。

「そんな心配はないわよぉ！ 実際、幕舎にでもしまってたのか、あいつ持ってなかったし」

未来は後ろを歩いていた祐一達に振り返り、

「実はあの巾着は私のなんだからね、アハハハッ」

と、両手を頭の後ろで組みながら笑った。

「えっ!？」

未来以外の者達の足が思わず止まるが、

「とにかく、真面目で中央政府の要職に親戚のある真里亜を引っ張りだしちゃえば、あの程度の役人どうってことないわ！ まあ、功績を志道董子が決めなおすって言っても今度は真里亜の目もあるし、あの役人と同じにするわけにはいかないんだからさ！」

当の未来はそう言いながら歩みをどんどん進め。

「あなた達は黄巾討伐はここで終わり！？ 私は首領のヴィクトリアって奴のいるとこまで行くわ！」

まだ、啞然とする一行に自信満々の顔をして、

「また会うわよ、この国の動乱は始まったばかりなんだからさ！」

と、駆け出していく。

「な、なんという……」

首をかしげ、笑みを浮かべる公子。

「大胆で、後も計算できる、なかなかの出来る人物かもしれません」

アーシェがため息をつくと、

「あいつ……この時代はまさに天草未来の為と言ってもいいかもな」

祐一は呟いた。

第27話に続く

第27話「黄巾首領ヴィクトリア」

1

「鳳公子殿の軍勢が幽州に引き揚げられる様ですね」

「あっそう、北平太守でもあられるし、向こうにもご都合があるのよね」

能見晃が北に去っていく軍勢を指差すと、未来は興味無げに答えた。

「今回の戦い、志道董子様の功績評定でも鳳公子様は第一の功になりましたし、もう無理はしないといった所ですか……」

白頭巾の少女、晃の語尾がトーンダウンすると、未来はニンマリ笑い、

「えっ!? なに? やっぱリーシェが北に去るのは辛い?」

と、晃の首に腕を回す。

「ええっ!? な……なんで? なんですかあ」

「知ってるんだよお、かわいい部下の事だもん、スミからスミまで色々!」

「や、いや、アーシェ様とは、一騎打ちして、その……あの」

吃りがちに俯く晃。

戦場では一騎当千の強者の晃も、そこを離れたらやや内気な一人の少女だ。

「まあ、私のかわいい晃を一騎打ちの間に誘惑していたなんて、あの金髪ちびっちゃん許せないわ」

ニタニタしながら未来が晃を抱き締める。

「そ、そんなんじゃないですよおお」

「晃は私の可愛い部下なんだから、絶対あげない」

「平気ですってばあ！」

晃はアワアワと手を振る、頭巾で見えないが、中の顔は真っ赤だろう。

「ううーん、うい奴、うい奴」

さらにエスカレートした未来が頬擦りをする、

「うおっほん！」

わざとらしい大きな咳を響かせて、

「晃が赤面を通り越して、倒れてしまいますぞ」

そう注意したのは、黒髪を後頭部に大きく結い上げた御堂玲夏である。

「あらら!？」 玲夏、焼きもちかね？ 平気よお、私は玲夏も大切よ」

ニンマリ笑い、今度は玲夏に抱きつく未来。

「み……未来様っ、わ、わわ、私はそんな事は申ししておりません」

だが、主君を振りほどくなど出来る訳もなく、アワアワと慌てるだけで玲夏も未来に絡まれる。

「んっ、玲夏もうい奴、うい奴」

「いや、未来様っ、私は少し聞きたいのです、真面目な話ですっ」

「私も真面目よお、恋の悩みから成長期の身体の疑問まで、全て即答してあげる！ さあ、聞いた！」

そうは言いながらも未来の顔はニタニタしている。

「しからば……」

抱きつかれながらも、コホンと軽く咳払いをしてから玲夏は訊いた。

「なぜ鳳公子殿はなぜヴィクトリアを倒す前に引き揚げてしまわれるのでしょうか？ まだ黄巾軍は健在で、引き揚げるには早過ぎるかと思えますが……」

その問いに未来は玲夏に抱きついたまま、キョトンとした顔を見せ、

「ここまででいい、って本人が思ったから」

と、答える。

「解しませぬ、ヴィクトリアは黄巾の首領、その者を倒せばこれ以上の功績は有り得ません、いよいよこれからその本拠地攻略という時に……」

「でもね、敵は本拠地、それも黄巾は元々は中央の腐敗もあるけど、ヴィクトリアの魅力が集めた様なもの、相手の気合いも違うし、練度が低い相手でも今回の様な戦を強いられたら、いくら戦上手の鳳公子でも下手したら大きな火傷を負いかねないわ……」

そこまで話すと未来は玲夏を解放し、

「あいつは地元から義勇軍を募ってきてるのよ、もちろん功績も大切だけど、地元の人間を生かして故郷に帰らせる必要も同じくらいある、そんなところでしょ」

と、引き揚げる鳳公子軍を見据える。

「あいつの戦いの様子は真里亜から詳しく聴いたわ、熟練の域も感じさせる戦術家って感じ……それに先々を見越して、ここで無理をする必要がない、って戦略的な判断力もさすがだと思うよ、でも……」

「でも？」

晃と玲夏が揃って疑問を呈すると、

「私は違いわ、この数十万にも及ぶ反乱の大元締めを見ずに、故郷に凱旋しようなんて事が出来ない困った奴なのよ、それでもいい？」

腰に手を当ててそう未来は不敵に笑う。

「もちろん！ 武将に生まれたからには、敵軍の大將を前に戦場を去るなど私には出来ませぬ」

「私も同じく！」

そんな未来に、玲夏も晃も微笑んで強く同意をしたのだった。

2

下曲陽の南東の地、広宗^{こうそう}、各地で燃え広がった黄巾の炎であったが、中央政府から正規軍が重い腰を上げ、さらに各地に義勇軍が現われると、戦場では烏合の衆に過ぎない事を露呈し、各地で敗走を繰り返す、そして教祖であるヴィクトリアを頼りに最期の決戦に臨まんと黄巾軍はこの地に集結していたのだった。

「ヴィクトリア様、地公將軍張宝様は下曲陽で戦死されました、漢軍はこの広宗めざして展開を始めています、その数は約八万」

伝令の少女の焦りがちな声の報告。

草原に幕舎もろくにない陣営を構えている黄巾の本陣、その報告に幹部達は色めきたつ。

「南では張梁様も討たれてしまった」

「何という事だ」

「数なら我々の方が勝るが、敵は正規軍だ、戦慣れしているし装備もいい」

口々に幹部達が不安にかられ話し出すと、その様子を周りを囲み見ていた信者達も騒めきだした。

「こんな事は分かり切っていた事だよ」

騒ぎの中でポツリと呟く女。

それがただの一幹部ならば、誰も耳も貸さないし気にもしなかっただろう。

「ヴィクトリア様……」

皆がその女の言葉に耳を貸し、その女の姿を瞳に映す。

それは幹部だけでなく周りの信徒も同じだ。

太股まで届こうかという黒い長髪は真っ直ぐで艶があり、細面の顔は整い、切れ長の瞳は知性の高さすら想像させる。

年齢は三十を少しばかり越えたが、その美貌は若い張りはなくとも、女盛りの若い蕾には出せない魅力があった。

今回の大乱を起こした張本人であり、黄巾党の首領ヴィクトリア、

その人である。

「弟たちは心を失っていた、強い力に虐げられる辛さを知っていたにもかかわらず、自らがその力を手に入れると腐敗した、強き力で自らの欲を叶えようとしたのだ……だから死んだ」

その声は冷淡だった。

「そして、弟たちや信者達の腐敗や暴徒化を止められなかった私の罪はもっとも重い」

ヴィクトリアは周りの信者達を見回し、

「今から何を後悔しても遅い、出来る事なら私の首を代償に、せめて残るお前達の罪を無くしてはもらえないかと交渉したいがそれも叶うまい」

と、瞳を細める。

「そんな必要はありません、私達はヴィクトリア様と死にます」

「誰もあなたを攻める者はいません、ここに集結した二十万の信徒、あなたに見捨てられる事だけが死よりも恐ろしいのです」
「そうです！」

周りの信者達は叫び、ヴィクトリアをまるで母親を見る様な瞳で見た。

「……馬鹿だよ」

ヴィクトリアは苦笑してから立ち上がり、そして草原に広がる信者達を再び見渡して叫ぶ。

「わかった、このヴィクトリアの命はみんなに預ける！ 中央の政府の奴らに最期の眼にも物を見せてやろう！ 皆で死のう！」
「オオオオオッ！」

大地が鳴動する。

装備は半数にも行き渡らず、食糧も無い、到底、勝ちには辿り着ける訳もないが、ここには二十万の信徒がいる。

腐敗し黄巾の炎を上げさせる原因を造った奴等後悔させる位の生命の最期の華を咲かせるには充分。

『この者達と死ねるとはあまりにも果報者だな』

そう心の底から思い瞳を閉じた時だった。

「馬鹿すぎる、あんまりにも馬鹿でみてらんないわ」

勝ち気な少女の声が、広宗の草原に響いたのである。

第28話に続く

第28話「ヴィクトリア退場」

1

「何者だっ！」

にわかに殺気立つ、黄色い頭巾の信徒達。

そこに立つのは、薄笑いを浮かべたショートボブカットの少女だ。

「何者かと問われたら、天草未来以外に答えられないわよ」

手に黄色い頭巾を持った少女は、不敵な表情を崩さないで答える。

「天草未来！？聞いた名前ではないな」

目を細めるヴィクトリア、周りには未来の行動を警戒して、黄色い頭巾の少女達が何人も飛び出し、ヴィクトリアを護る態勢になる。

「あらあら、こんなたった一人の来訪に、そんなに大袈裟に」

未来は年端の変わらぬ護衛の少女達に肩を竦め、呆れ顔を見せた。

「だまれっ！」

「漢軍の密偵だ」

「殺してしまえ！」

護衛の少女達をまわりにいる信徒が囃す。

「ヴィクトリア様」

ヴィクトリアに振り返る護衛の少女達のリーダー格の少女。
目の前の不埒ものを成敗してかまわないか、という確認だ。
しかし、その許可は下りなかった。

「……何か話があるのなら手短に話すがよい、くだらん事を言えば
無事では帰れないぞ」

数秒間見つめて、ヴィクトリアが呟くと、護衛の少女は明らかな
困惑の表情をみせ、対称的とも言える自信満々の笑みを浮かべ、未
来は言った。

「手短に終わるかどうかはそちら次第よ」

「ならば話せ」

ヴィクトリアは周りの信徒や幹部をそのままにして未来を促す。

「ええ……」

そんな事は気にしない様子で頷き、未来は周りを取り囲んだ黄巾
の信徒達を見渡して、

「このまま三日もすれば正規軍が来て皆殺しは確実、かと言って降伏しても大半は処刑ね」

と、鼻で笑ったのだ。

今、この場にいる自分以外の者に対する言葉。
しん、とした一瞬の後で沸き起こる怒号。

「その女を殺せ！」

「我々が負けるか！」

護衛の少女は再び視線を送るが、ヴィクトリアは静かに首を振って、

「元より生命欲しさの戦いなどしておらぬよ」

慇懃無礼な未来に激する事もなく、冷静に言葉を返した。

「そうだっ！」

「腐敗した国を変えるための戦いだっ」

周りも同調する。

「天公將軍ヴィクトリア様が臆病者のように生命を欲しがるかっ！
脅すなら相手を選べ！」

再び浴びせられる罵声。

しかし、未来は得意げな笑みを崩さずに両手を腰に当てている。

「何を言っただが、ここにいるのは命が惜しくて、しょうがない連中じゃないのよ」

「なにっ!？」

周りの黄巾兵士達は声を上げ、ヴィクトリアは無言のまま目を細める。

「あんたらは生きられなくなったから、戦までをして漢帝国に逆らったんしょうが？ 命が惜しくないなら戦争までして反旗なんか翻す必要ないわよ、つまりあんたらは他人を殺しても自分が生きたいのよ」

「それは……!」

反論をしようとする信徒だが、未来はそれを制した。

「それは酷い搾取をされて、中央の腐敗を見せられたからでしょ？ 細かい理由はあっても大体そんなところでしょ？」

返す言葉がない。

もちろん未来が言った様に様々な理由がそれぞれの信徒達にはあるのだが、大半の者はその理由で括れてしまう。

「だから、他人を殺しても戦争をする……」

未来はそう言うってから少し間を置いて、ヴィクトリアと信徒達に告げた。

「私は自分の存在を賭けて戦うのは生物として生まれたのなら当然だと思わよ、それを否定されても良いなんて奴がいたら、生まれてくる意味がないわと思うわね」

「……」

信徒達は未来の言葉に息を呑んだ。

未来を漢軍の降伏勧告の使いだと思っていたのだが、予想と違う事に気づいたからである。

「だから私は貴方達が戦う事に文句はないし、それを言える立場じゃない、でも見過ごせない点もあるからわざわざ黄色い頭巾をかぶってここまで来たわけ、わかる？」

数万を前に一人の少女はそう言って腕を組む。

「自分を護るために戦うのは当たり前だ、どんな小動物だって獅子に襲われたからといって素直に食べられはしない、微力といえども全力で生き抜こうとする筈だ、それに誰が文句がいえようか！」

ヴィクトリアが口調を強くすると、

「その通りだ」

「そうだ！」

「我々は諦めない」

大合唱を始める信徒達。　しかし未来は全く動じる事無く、

「まさに正しいわ、と言うより当然、たとえ兎が獅子相手に遁走する事だって、兎からすれば、なりふりを構わない存在を賭けた戦いなよ、そう思うでしょ？」

と、ヴィクトリアに問いかける。

「勿論だ、戦いには当事者によって様々な戦いがある、兎が獅子相手に無謀な戦いを挑まずに遁走する行為を笑える奴などいない、それがまさに兎の戦いなのだから」

「でしょ？」

ヴィクトリアの答えに未来は肩を竦めた。

「そこまで言って我々の何が気に入らないのだ？　各地での狼藉か？」

ヴィクトリアが今度は未来に問う。

「それもあるけど、究極的には因果応報、そんなろくでもない事をした奴にはなりの報いがあるだろうし私に被害が及ぶなら後悔させてやるまで、問いに対する答えとしてはハズレ」

未来はニツコリ笑った。

「はつきり申せ、まさか漢皇帝に逆らった事自体が許せんとでも？」
「そんな答えならワザワザあんたらに囲まれてまで、言いに来ないわよ」

舌をベーツと出して未来はため息をついて、クルリと周りを見渡し怒鳴る。

「まったくバカ過ぎて話になんないわ！」

押し黙ってしまうヴィクトリア以下黄巾の信徒達、だが次の瞬間には三度怒号を上げようとするが、未来はまるでタイミングを見計らった様に草原に響き渡る声を上げたのである。

「存在を賭けた戦いを他人を殺してもするって覚悟を決めたくせに、負け戦を承知でやるあんたらが気に入らない、って言ってんのよ！死にたくないのに死んでもいいなんて戦をやる奴をバカよわばりして何が悪いっていうのよっ！人間のくせに兎以下の戦いをするつもりの奴らをバカって呼ばないで、何て名前で呼べばいいのよ！？」

目の前の一人の少女から発せられたとは思えない程の叫び。
ヴィクトリア以下黄巾の信徒達はまた言葉を失ってしまった。
間。

沈黙。

風の音が聞こえ、未来のショートボブカットの黒髪を揺らす。
そして、少女は自らが造り出した沈黙をまるで楽しむ様な顔を浮かべてこう言ったのである。

「逃げなさい、私が近いうちにあんたらを率いれる位力をもって勝ち戦ばかりに連れて行ってあげるから、今は樹の影、地の底に身を隠してでも生きていれば、この私、天草未来がいい夢見せてあげから」

2

「な……」

報告は受けてはいた。

しかし、そんな報告を信じる気には到底、なれなかった。

だが、目の前に広がるのは現実。

下曲陽方面で勝利を収め、黄巾軍の本拠地、広宗攻略に先鋒を命じられた志道董子は口元を震わせて原野を見つめた。

数日前までは二十万にも及ぶ黄巾軍がいよいよ最終決戦を挑もうと、布陣していた筈のその地には誰もいなかったのだ。

素人造りの拙い陣が残され、所々には黄色い頭巾も落ちている。

「なんなの……」

「話によればヴィクトリアは病死し、蜘蛛の子を散らすように信徒達は居なくなつたそうです」

呟く董子に参謀の真里亜は答える。

「んなの信じられる訳があるかつ！」

「そうですね……一応、彼女を埋葬したらしい後がありました、とても信用は出来ません、しかしもうこれで終わったのではないでしょうか」

真里亜の言葉に董子はため息をついてから、両腕を腰に当て、閑散とした草原を見渡した。

「そうね、でも色々な事は始まつたばかり……何進將軍にも都に早く帰ってこい、って催促も来てるし黄色い頭巾の連中を追い掛け回すのはお終いだわ」

「何進將軍が宦官達をいよいよ成敗するのですね」

それを聞いて真里亜の声が明るくなる。

宦官とは個人名ではなく役職である。

男性のシンボルを切り落とし、皇帝の身の回りの世話をするのが役目だ。

権限は何も持たないのだが、皇帝の寵愛を受ける事により、それを後ろ盾に権力を握る者が歴史には度々登場し、現在の漢帝国も十

人の宦官が強い権力を持ち、国政を操っている。

もちろん、宦官にも正しい判断のできる者もあり、権力を握る事が必ずしも弊害となる訳ではないが、今の漢帝国の惨状を観れば、じゅうじようじ十常侍と呼ばれる彼等は帝国に巣食った病巣であった。

これに軍人畑から対抗しているのが、大將軍の地位にいる何進である。

彼は元は肉屋の平民だが、妹が後宮に召しだされた事により、異例の出世を遂げた男だ。

董子にしても真里亜にしても大將軍である何進の部下に当たり、国政にやたら口出しする宦官に良い感情等は微塵も持っていない。それが現れた成敗するという真里亜の言葉。

『私を配下の涼州軍ごと呼ぶんだから……肉屋も本気で宦官を誅殺して、この帝国を乗っ取るつもりか、そうは簡単には問屋が卸さないわよ肉屋さん』

董子は勇む真里亜に冷たい視線を送り、口元に笑みを浮かべたのだった。

「あんたにいなくなれ、なんて言った覚えは無いんだけどな」

「私がいたら色々面倒になる、こいつらもどうしてもと離れない、離れるなら自害するなど物騒な事を言うから、仕方がなく連れていくのだ」

不服そうに腕組みをする未来に数人の少女を連れただけのヴィクトリアは苦笑した。

「……行く当てがある訳でもない癖に」

ため息をつく未来。

「当てはないな」

ヴィクトリアはそうスッパリと答えて、

「しかし、この世は広い……当てなんて無くとも、私の居場所はいくらでもある、気に入った場所を居場所にして暮らすさ、愉しげではあるだろ？」

と、青空を見上げた。

「それもそうね」

做って空を見つめる未来にヴィクトリアはゆっくり歩み寄り、

「私はそれでいい、生きてさえいればいいが、私が居場所を与えて

やれなかった他の者達の事……」

と、まで言い掛けたが、

「わかってるわよ、今は無理だけどすぐに立派な居場所を私がつくるわ」

そう空を見上げたまま未来はそれを遮る。

「そんなのは私がやれば、いい事で問題ないんだけどさぁ……」

空を見続ける未来。

「どうした？」

ヴィクトリアは優しく首を傾げる。

「あんたもせいぜい幸せになんのよ、みんなに私がきちんと居場所を造ってあげたら、たまには顔を出してみんなを喜ばせるのよ？ あんたは何かが足りなくて、居場所を造れなかったけど、誰もそれを恨んだりなんてしてなかったんだから」

未来はそう呟く。

「未来……」

「弟達や信徒を暴走させたのはあんたの力量不足だけだよ……あんたはそんなに間違ってたよ、失敗しただけで、概ね良い事でしょうとしていたのは私が認めてあげる」

「……んっ」

その言葉にヴィクトリアは思わず唇を噛み、眼から溢れる涙を止められなかった。

「ありがとう……事態が進む度にこんな筈じゃなかった、と悔やむ日々の全てが報われた」

「誰だってあるわ、私だってこれから先に何度でもこんな筈じゃなかった、ときっと悔やむ……でも」

未来は上げていた顔をヴィクトリアに向けニッコリ笑ってから、

「時間は巻き戻せやしないしね、それにしぶとく生きてりゃ、死ぬよりマシ、お互いにせいぜい頑張りましょ……じゃ」

と、ヴィクトリアに手を振って踵を返して歩き出す。

「天草未来……凄い人ですね」

その後ろ姿にヴィクトリアについてくる事を熱願した少女はため息をついた。

「ああ……私の出番は終わった、これからは彼女らの時代がこの国に訪れる、それを見続けるのもまた一興だろうな」

ヴィクトリアは眼に何度か手を当ててながら答えると、未来の歩き去る背中に一礼して、逆の方向に歩きだしたのだった。

こうして、後漢王朝を揺るがし、歴史の転回点を作った、と言っても過言ではない黄巾の乱は終結を見たのである。

第29話に続く

第29話「支永姉妹と董子の野望」

1

漢王朝首都洛陽。

黄巾の乱の傷は深く、各地を挟ったが首都である洛陽は戦火は及ばず、いまだにその華やかさを保つ。

だが、宮中ではその華やかさとは対極の、どす黒い企てと騙し合いが、着々と進行しつつあったのである。

「どうだ!？」

「やはり志道董子殿から寄せられた情報は誠のようだ、何進の奴め……我々を誅殺するつもりらしい、并州攷ていげんの丁原や支永姉妹の奴らを洛陽に呼び寄せているぞ」

「まずい、丁原の義理の娘は並ぶ者なき、と畏怖される武将だと聞くぞ」

十人の宦官、十常侍と呼ばれる彼らは慌てて、謀議する。

彼らは政治への影響力を持つてはいるが、即応的な軍事に関しては指揮権も指揮能力も皆無だ。

宮中の権力争いは得意でも、実はなりふり構わぬ軍事力を背景とした強引策には、彼ら是对する術がなかったのである。

「どうするのだ!？」

「まあ待て……志道董子殿からはもし事が起これば、天子様を連れて洛陽の西、夕陽亭まで来られれば安全に保護できる、とも言われているのだ」

「ならば……すぐにでも天子様を連れて、董子殿の保護を受け、何進には反逆の罪でも着せればいい」

「そうだな」

うなずき合った宦官達、しかし、董子の名前を出した宦官が制する。

「待て、待て！ 董子殿としても、大將軍の何進と事を構える準備は出来ていない、火急な場合は何進をどうにかして欲しいそうだ」

「それならば……」

「騙し討ちしかないな」

十常侍達はそう言い合い、目配せしあう。

彼等にはすでに自らの保身のみが全てに優先していた、だがそれを見過ぎるあまり、宦官達は自分達をも呑み込もうとする謀略の大蛇の口が、すぐ後ろで開かれたのに気付いてはいなかった。

2

支永真里亜には腹違い妹がいる、ノイアという。

共に大將軍何進から目をかけられた部下であり、黄巾討伐を終えた姉が志道董子の元を離れて、何進からの呼び出しに応じるのに、ノイアも洛陽の郊外で合流する手筈になっていた。

彼女自身は中央政府の軍高級官僚で、兵の指揮権を直接は掌握していないが、名門の財力で三百程の私兵を集めている。

ノイアは首筋を隠すくらい銀髪、あどけなさを残す、可愛らしいどんぐり眼に形の整った鼻筋の姉とはタイプの違う美少女だ。

「姜子令きょうしれいや、近うよれっ！」

甲高い声を上げて、子飼いの武将の名前を呼ぶ。

「ハイ、ハイ！ 只今、ノイア様」

何か別の事をしていたのだろう、慌てた様子の一人の軽装鎧に身を包んだ少女が、パタパタとノイアの元に走り寄り、

「姜子令これに！」

と、ひざまづくが、

「遅いわっ、我が呼んだら何を差し置いても参上せぬか、バカ者！」

ヒステリックな叫びと同時にパシッと叩かれ、

「あううっ」

情けない声を上げ、姜子令は脳天を両手で抑えた。

姜子令。きょうしれい

彼女はノイアに仕える武将であり、漢帝国に仕える軍人ではない。いわゆる支永家の客将という表現が正しい。

前髪を短めに切った緑かがったショートカット。

顔立ちは主君ほど整ってはいないが、パツチリとした瞳の素直で純朴そうな印象を、初対面でも与える少女である。

「まあ、よいわ……それにしても姉上や丁原殿は何をしているのだ、何進將軍からの号令がありしだい、宦官どもを宮中より叩きだして、首を刎ねてやるのに」

右手で左手の甲を叩くノイア。

「そうですよね、遅いですよね……」

姜子令も同意するが、

「そう思うなら、洛陽の様子を探るなり何かしら行動を起こさんか、バカ者！」

再びノイアに叩かれ、

「いたあ！ 密偵なら、ちゃんと宮中の近衛兵に裏金をいれて忍ばせてますう」

と、弱々しい抗議をしながら叩かれた頭を抑えたのだった。

和やかにも映る姜子令とノイアのやり取りだが、そこに血なまぐさい報告が忍び込ませた密偵から報される。

大將軍何進、十常侍の罫により命を落とすとの報告であった。

「な……騙し討ち？」

「はい、妹に当たる太后から呼び出しと偽られて、宮中に参台しました何進將軍を、宦官が手なずけた一部の近衛兵を使って討ち取ったらしいのです」

ノイアは密偵に確認して姜子令に振り返る。

「宦官討伐が……ばれていた？」

眉をひそめる姜子令。

洛陽郊外に展開するノイアの兵は、自身が軍高級官僚である事を利用して、新兵訓練と偽っているし、丁原、志道董子に姉の真里亜の率いる兵の集合も、なりの偽装理由がつけられている。

そこから、恐れ多くも宮中にまで踏み入り、宦官討伐に結びつけるのは難しいだろう。

「大將軍の何進様を討てば、いくら十常侍といえども知らぬ顔は出来ない、よほど討伐が確実の情報を得ていなければ、ここまで大胆な事は……」

姜子令は顎に手を当てて、推測を続けようとするが、彼女の主君はそれを制して、こう叫んだのである。

「好都合だ、向こうから誅殺の絶好の理由を提供してくれたぞ、自

殺行為とはまさにこれぞ！」

3

その同じ頃、妹ノイアとの合流寸前であつた姉の支永真里亜にも、大將軍何進討たれるの報は届いていた。

「……何進將軍がっ？」

真里亜は絶句して、しばし天を仰ぐと、唇を噛み締めて、

「おのれ宦官達、この漢帝国に巢食うだけ巢食っておいて、大將軍すら騙し討ちをするとは許せん！」

と、声を上げ、部下達に、

「こうなれば何進將軍の遺志を実行あるのみ！ 宮中に突撃を敢行して宦官どもを全て誅殺するだけ！」

そう告げて、腰の剣を抜き放つたのである。

真里亜、ノイアの支永姉妹がそれぞれ率いる兵は、瞬く間に宮中に迫る。

ノイアの方が行動は早かったが、宮中を護る近衛兵に手間取って

いる間に真里亜率いる部隊がそれに追いついた。

「姉上……！」

「ノイア、私の到着を待てば良かったものを！　いらね抵抗を受けてっ」

「姉上の様に私は悠長に出来てませぬ！」

近衛兵との乱戦の姉妹。

だが、駆けつけた姉も、駆けつけられた妹も互いを鋭い瞳で見合
う。

「ふんっ！」

ノイアは視線を切り、

「姜子令！　多少の損害は構わぬ、近衛兵は多くはない、突撃だっ
！」

と、命令を下した。

『妾の娘のクセに、名門支永家の跡取り顔をしてっ、支永家の真の
当主は私だっ、負けてなるかっ！』

ノイアは物心ついた時から、何度も何度も悔しがり、苦虫を潰し、
舌打ちをした思いを反芻したのだった。

必死の抵抗も完全に奇襲だったのに加え、数も少なかった為に近衛兵達は崩れ、支永姉妹の率いる兵は宮中になだれ込み、宦官を見つければ、有無を言わずに切り殺す虐殺劇を開始したのである。

4

「宮中は地獄に違いありませんぞ」

「どうにか逃げられましたな」

馬車に乗った二人の宦官が互いに安堵の息をつく。

宮中に何進を呼び出し、暗殺した後、二人の宦官は他の宦官を見捨て、志道董子の涼州軍の布陣する夕陽亭を目指していた。

二人の宦官と一緒に馬車に乗るのは宮女と一緒に座る幼い娘。

年齢は八歳、キチツとそろえて切った前髪に腰までの黒髪の白い肌の柔和な顔立ち、その娘こそ漢帝国の皇帝、静帝^{せいてい}である。

「そろそろ夕陽亭ですな、追跡の手は来ていないし、逃げ切りましたな……」

「まあ、何かしら残りの奴等が行動を起こしていても、こちらが陛下を擁した時点で手出しは出来まい」

追跡の危険がほぼ無くなり、安心した二人の宦官は笑いながら頷

き合った。

そして、洛陽を脱出した一行は志道董子率いる涼州軍に保護されたのである。

「これはこれは！ 遠路ご苦労様です」

静帝を乗せた馬車を、夕陽亭で迎えた志道董子は二人の宦官に頭を下げた。

「こちらこそ、志道董子殿、都では礼儀知らずの支永姉妹が宮中に乗り込んでいるそうだ、直ちに涼州軍を率いて討伐してくれ」

「そう、こちらは陛下を擁している、奴等も手も足も出まい」

興奮気味に董子に要請する二人の宦官に董子は笑顔で、

「わかっております、陛下がいればどうにでも」

と、答え、馬車の窓から事態を把握できずに不安げに見つめてくる静帝に深々と頭を下げる。

「頼むぞ」

「目の前の袋の中身を取り出す程に簡単な事だが、成功すれば志道董子殿の昇進は思いのままぞ」

そう言って踵を返して馬車に戻ろうとする宦官達、だがその前に一人の鎧に身を包んだ短髪の女武将が立ちはだかった。

董子麾下の武将の華蘭である。

「……どうされた？」

振り返る宦官に、董子はまるで汚物を見るような目線を向け、冷笑しながら言った。

「サッサと死んで、私は付いてもない男に興味はないのよ」

次の瞬間、宦官二人の首はほぼ同時に胴体から離れ、宙を舞っていた。

第30話に続く

第30話「上には上がいる」

1

「見たか、奸賊どもが！」

ノイアは荒い息を整えながら、剣に付いた血を振り払う。

支永姉妹が宮中に討ち入ってから、既に半日が経過しようとしていた。

辺りは累々の屍。

漢王室に仕える宦官はおよそ数百人を数える、真里亜とノイアの兵達は容赦なく、その全てを抹殺するつもりなのだ。

中には宮中に仕える男子というだけで混同され、殺された者もいた。

「ノイア！」

そこに歩いてきたのは姉の真里亜だ。

数人の兵に護られた彼女の軽装鎧は返り血で赤く染まっている。

「姉上、どうされた？」

「それが十常侍どもの中でも首領格の二人が見当たらない上に、陛下のお姿が見えないのよ」

真里亜はそう言って端整な唇を結ぶ。

「陛下を連れて逃げられたか！」

齒を食い縛るノイア。

そうなるのかなり面倒な事になってしまう。

支永姉妹の考えでは、宦官達を抹殺し、皇帝陛下に宦官達の腐敗を訴え、事後承諾を半ば強引に取り付けるつもりであったのだ。

「もし、陛下のご裁可が受けられなければ……」

かなりの落ち込みを見せる真里亜。

だが、妹は姉のような感情は持ち合わせていなかった、落ち込む姉に冷たい瞳で一瞥し、

『バカな女』

と、瞳を細める。

ノイアには真里亜の生真面目さが愚かにしか映らなかった、皇帝など、ただの道具だ。

もはや漢帝国は落日の王朝だ、落ちはじめた太陽を戻せる者などいないのだ。だが現時点では何か対処しなければいけない。

「姉上、至急搜索して陛下を我々の手に！」

ノイアは叫び、続けざまに、

「姜子令！ 四方に手を尽くして、陛下を連れて逃げた宦官どもを捕らえよ、私もいくぞっ！」

と、命令を下した。

2

「走れっ！ 走るのだ」

ノイアは馬に何度も鞭を打つ。

追撃の手を出したのが夜半、宮中の厩舎から馬車が西に走り去ったという情報を得て、支永姉妹は二百ばかりの騎兵を集め、皇帝を乗せた馬車を急追していた。

「ノイア！ そろそろ馬を休ませなくては！」

そう真里亜から注意されるが、

「姉上、ここが正念場！ 馬など何頭潰れても構わないけど、この機会が潰れるのは堪りませぬ！」

ノイアは言い返して、更に馬を奔らせる。

『この機会に皇帝を手の内に出来れば……支永家の跡取りの座など要らぬ、家など関係なくこのノイアが至高の座に登る踏み台にしてやる、生真面目だけが取り柄の姉上とは違う』

手綱を扱きながら支永ノイアは齒を食い縛る、だがそんなノイアの隠された野望には更に上手が存在していたのである。

夜が明けはじめた頃、支永姉妹率いる騎兵隊の行く手を阻む様に約一万五千を数える軍勢が現れたのだ、それは志道董子率いる涼州軍であった。

「志道董子殿」

軍旗を見て呟く真里亜。

董子も何進の命で宦官を抹殺するべく、洛陽郊外に控えていた筈である。

「軍勢だけ一丁前に、今さら出てきおって！」

ノイアは言い放ち、その先頭に向かって馬を走らせ、

「志道董子殿、ノイア支永にございます！ 都に急ありて駆けております、軍を停まりなされよ！」

と、叫んだ。

すると目の前の軍勢が停止する。

「……よし」

ノイアは自らの言葉で一万を越える軍勢に停止をかけた事に、密かでくだらない満足感を得て頷くが、

「ノイアさまっ！」

と、馬を飛ばした姜子令に怒鳴られ、自分の乗馬から引っ張られて無理矢理に地面に落とされてしまったのである。

「な……!？」

部下の突然の行為に驚くノイアだが、それを上回り、その行為を納得させる事態が起こり息を呑む。

なんと数秒前まで自分が跨っていた馬に数本の矢が突き刺さり、馬が絶命のいななき声を上げていたのであった。

「どういう事だ!？」

「解りませんが、相手はノイア様と知って、弓を射ってきています」

事態の把握できない主君を自分の後ろに乗るように引き上げ、姜子令は志道董子率いる涼州軍を睨む。

涼州軍の隊列が開く。

現れる高貴に彩られた二頭引きの馬車。

そして、そこには静帝と一緒に馬車に乗った董子が支永姉妹を嘲笑っていたのである。

「これはこれは、ノイア殿……この軍列をどなたの軍列と心得るか？ 皇帝陛下の軍を停めるなど不敬の極み、気をつけられよ！」

その言葉に呆気にとられてしまうノイアと姜子令の主従に、真里亜が呟く。

「どうやら志道董子殿の方があなたよりも役者が上手のようよ……
ここは大人しく頭を下げて同行させてもらった方が賢明だわ」

「……なになっ!？」

その言葉の意味する所を解したノイアは馬鹿にしていた姉に意図が筒抜けになっていた事、そして志道董子には、それを見事に先んじられてしまった事を悟り、絶句するしか出来る行為が無かったのだった。

3

幽州北平郡。

黄巾の乱平定の前に軍勢を引き揚げてきた鳳公子の元に、松平祐一は妹達と世話になっていた。

義勇軍が解散となった時、北平太守の公子が義勇軍は解散となったけれども、警備軍の一部隊の隊長として祐一に留まって欲しい、と頼まれ、それを請け負っていたからである。

任務はいわゆる百人程を率いて、北平の治安を護る警察みたいな物だ、しかし起こるのは北平の市民が起こす騒動よりも、北からの異民族とのかなり血なまぐさい衝突が主だった。

北平の城。

祐一達は、今日も北からの異民族うがん烏丸族の集団と小競り合いをして帰ってきていた。

『異民族といっても、アーシエにしてもミオにしても、同一民族には見えないからなあ、単純にこの国では漢帝国にハッキリ属していない民族を異民族としていて、人種の事じゃないんだな』

と、祐一は自分なりに理解していた。

烏丸族との小競り合いは、アーシエやミオの個人的な武勇がいかなく発揮されて、更に兵器や軍の練度や統率力にも開きがあり、舐められないが、祐一はパティーの助けも借りながら理想的とも言える戦闘指揮訓練を重ねられている。

「この国には昔から異民族や山賊、湖賊などの討伐のエキスパートから名のある武将になった人間が多いっすよ」

と、パティーに言われていたが、数ヶ月、それに従事しただけでもなるほどと思えてしまう。

「兄上、今日もご苦勞様でした……今日などは怪我人も軽い者が数名が出ただけで、村で狼藉を働いていた烏丸族の兵を蹴散らせました、お見事です」

そう笑顔でミオと一緒に歩いてきたアーシエに祐一は笑う。

「よせやい、俺の指揮じゃなくアーシエやミオの力だろ？ 最近

あいつらに顔が知れて、お前達を見るだけで相手が浮き足だつて
ぜ、それに……」

「それに……!？」

「アーシェにそんなに簡単に誉められたら、調子が狂っちゃうよ」

「なっ、まるで私が人を褒めない手厳しい女子の様では無いですか
!？」

ムツとするアーシェ。

「あらら……違うのか？　なあ、ミオ」

祐一がミオに振ると、

「違う、姉貴は手厳しい女子だ」

ミオはそう言って、祐一に顔を寄せアーシェに頷く。

「な……たまに誉めたら、すぐに調子に乗るっ、二人とも直れっ、
そこに今すぐ直れっ！」

真っ赤になり、怒鳴り散らすアーシェから逃げる祐一とミオ。

「楽しい兄妹で良いっすねえ」

それを苦笑しながらパティーは眺めていた。

しかし、数日後に歴史の動きは祐一達を再び激しい争いに投じさ
せる。

これまでも何度か祐一を訪ねてきていた壺与が、不安げな表情を隠さずにやってきたのだ。

「どうしたの？ 壺与ちゃん」

アーシェが用意した茶にも手を付けずに俯く、肩に架かるくらい
の黒髪の美しい少女。

祐一が優しく声をかけると、壺与は唇を少し噛んでから顔を上げて、

「実は都で大変な事があったようなの……至急に参台せよと全国の
諸將に招集がかかったんだ、公子様も呼び出されて、それで私と祐
一君達に随伴してほしいって……」

と、切り出してきたのである。

「構わない事ではないか、都に参台せよとの事であろうに、何をそ
んなに不安になる事がある？」

傍らにいたアーシェが、怪訝な表情と口調を壺与に向けた。

「もちろん、壺与ちゃんがそんな様子になるのならただ事じゃない
からだろ？」

その返事を待たずに祐一が肩を疎めてみせると壺与はアーシェや
ミオ、そして祐一を見渡して頷いた。

「そうなんだ、どうやら都ではあの志道董子が皇帝陛下を後ろ盾に実権を握ったって……今回の召集は彼女の指示らしいんだ」

「志道董子!?!」

久方ぶりに聞く名前、それも良い感情では聞けない名前に、祐一とアーシェは思わず声を揃えていたのだった。

第31話に続く

第31話「美しき少女の老人への誓い」

1

并州刺史、ていげん丁原。

年齢は五十半ばを越えた、老将といっても差し支えない男だ。

頭髮も胸元近くまで伸びた髭も、殆どが白くなっているが、まだ将としての意地や氣力には、白髪は生えていなかった。

大將軍何進からの秘密の要請に答え、一万の兵力を率いて、洛陽に向かっている途中で何進の暗殺、支永姉妹の宦官殺戮、そして志道董子が皇帝を擁して洛陽に入城した事を知り、董子に対しての怒りを強く抱いていたのである。

「あの女狐め、陛下を擁し、各地の武将を集めてどうするつもりであろう!？」

進む馬上で目を細め、洛陽の方向を睨む。

志道董子率いる涼州軍は警戒する程の大軍ではない、せいぜい二万か三万だろう。

しかし、皇帝を擁して何進の率いていた兵を取り込めば、それは軽く十万は越える兵力になり、一万の丁原軍の少なく見積もっても十倍になってしまうのだが、彼の中にはもし戦になっても勝算があったのである。

「父上！」

背後から呼ばれて振り返る丁原。

そこには、馬上でニッコリと無邪気な笑顔を浮かべる少女がいた。見事な金色のショートカットに、伸ばした両方の揉み上げ。

丸い形の眼鏡をかけたあどけない瞳。

身長は百七十？を少し越えるが、体付きは少女らしい丸みをほどこよく帯びている可愛らしい娘だ。

だが、その姿に似合わずその娘は、鎧に身を包み左手で手綱を握り、右手には方天画戟という戟を手に使っていた。

「アルテナか、どうかしたのかい？」

破顔する丁原。

「い、いえっ……もう洛陽は近いですし、アルテナは少しでも、父上の近くでお待ちしております」

「そうか、そうか……でも中軍の守りも戦には重要なんだぞ」

笑顔のまま告げる丁原にアルテナは、

「はい……そうなんですが、まだ後ろには遼りょうもいてくれるから」

と、甘える様な瞳を見せてくる。

「まったく……お前はすぐ遼に嫌な事を押しつけるのだからな、後で謝っておくのだぞ」

「はいっ！」

丁原の言葉にアルテナは嬉しそうに頷いた。

丁原軍は洛陽の郊外に陣取る。

「父上、宮中にはアルテナが付き添います！」

いかに董子に疑いを持とうとも、まさか軍隊を首都に入れる訳にはいかず、数名の護衛を連れて行こうとする丁原にアルテナが駆け寄る。

「それは嬉しいが、ここにいる一万の兵を率いる者がいなくなるな」
難しい顔をする丁原にアルテナは、

「遼ちゃんが見てくれますよ、それに何よりも父上です！」

と、進み出て心配そうな表情で嘆願する。

アルテナは、子供のいない丁原が北方で引き取った義理の娘だ。
しかし、彼はそのような事は気にせず、本物の娘の様に可愛がっている。

そのアルテナが身を護りたいと懇願してくると、嬉しく断りづらいのが親という物だ。

「わかった……遼にはワシから言っておく、仕方のない娘だ、でも今回の用事では都見物はできんぞ!？」

「はい、わかってます! うれしいですう！」

丁原が参ったといった風に笑顔を見せると、アルテナは喜び、養父に抱きつくのであった。

「アルテナを連れていく事にした、諸将が洛陽にいる間は志道董子も手出しはしてこんだろうがくれぐれも警戒を怠るでないぞ」

「わかりました」

丁原の言葉に少女は頷いた。
きりょう
如月遼。

丁原の配下の武将で、まだ十六歳の若さだ。

アルテナと同じく金髪だが、遼の方が明るくはつきりしたブロンド。

後ろ頭から、それをツインテールに伸ばしている。

年齢の割に落ち着いたクールな印象を与える細長の碧い瞳、高い鼻筋から薄い唇まで綺麗に通った顔立ち、身長は百六十?程で細めながらも、胸元はかなり豊かという美少女である。

「アルテナ様がついていれば、もしもの時の襲撃などは安心は出来ますが……都で悪い癖が出ませんでしょうか!? 私が殿についていき、アルテナ様がここで待機されては如何ですか? 幾ら少ないとはいえ、都ではかなりの人数の男子もおりましたようから……」

言いにくそうに端正な顔を俯かせる遼。

「うゝむ」

丁原は白くなった自らの顎髭を撫でて唸ったが、

「いや、今回の用は宮中であるし、心配あるまい、最近は大人しくなっておるし、それにワシは親だからな、信用せねば」

と、遼に告げる。

「……そうですね、不粹な心配をしました」

微笑む遼。

「それよりもじゃ……」

丁原は遼を優しい瞳で見つめる。

「ワシもいい歳だし、この通り皇帝を擁しておる志道童子に一言いわなんだら、納得できずにここまで万の兵を率いてきてしまうバカ者だからな、先も長くないかもしれん」

「殿、不吉な！ 武人が敵に臨むという時に！」

突然の主君の言葉に、遼は戒めの声を上げる。

「いやいや、ワシは十分に生きたし、この時代に刺史などという身

分にもなれて悔いはない、しかし……まだ見届けたい事がある」

「見届けたい事!？」

唇を結ぶ遼に、丁原は、

「そう……娘が立派な武将に育ち、大將軍にも届く名声を得て、この乱れはじめた天下を纏める事だ、あの娘にはそれが出来るだけの強さがある」

と、強く頷き、

「しかし……あの娘には、まだ決断力や精神的に足らぬ所が多いのも事実、それを遼に援けて欲しい、そなたは、きっと近い将来に類い稀なる名将になる、アルテナを支えて欲しいのだ」

そう言って突然、遼の手を両手で握るとその場に片膝をついて伏したのだ。

「と……殿っ!？」 私は殿の臣下にてございます、命令されれば、どのような事も成し遂げる迄、死力を尽くします! だから、何卒……何卒、そのような」

「命令ではないのだ」

丁原はそのままの姿勢で声を出す。

「命令ではないのだ、これはワシの望み、ワシのような先のない凡将がそなたのような前途ある将にすがっての懇願なんじゃ! どうか至らぬ部分が多く見えるだろうが、アルテナをアルテナをこの先

も支えてもらいたいのだ」

顔を上げて、遼を見上げてくる丁原は泣いていた。

丁原という男はそういう男である。

特別に戦が上手い訳でも政治に長けている訳でもなかったが、優しく情の解る男だった。

「殿……あなたは死ぬ心積もりですか？」

ポツリと呟く遼に、

「そうではない、そうではないのだが」

と、丁原は首を振り、

「今回の騒動は並々ならぬ、油断も隙もない争いに、この老人が首を突っ込もうと意を決したのだ、覚悟をするのは当然であろう、しかし心残りがあっては逃げ腰になる、捨て身になれぬ、そなたがアルテナについてくれるならば、この老骨を惜しみなく娘の為に散らせるのだ！」

と、答えたのである。

「……」

遼は唇を噛み締める。

涙が溢れてきた。

その整った輪郭を涙が伝っていく。

アルテナに対しての情、そして武将として己が主君に認められた事、それらが合わさっての涙だ。

「丁原様……」

伏せる丁原に、遼も両方の膝を地面に付け、主君に顔を合わせて誓う。

「この如月遼、生命を賭してアルテナ様に従います、どうか殿は精一杯、悔いが遺らぬ様に覚悟を決めた戦いをして下さいませ！」
「おお……すまぬ、すまぬ、任せたぞ！」

丁原は懇願の涙から嬉し涙にくれる。

主従を越える誓い。

しかし、この美しい少女と老人の誓いが想像を遥かに越える辛さで、この名将を縛り付ける鎖になるのはそう遠くない未来の事だったのである。

第32話「宮中騒乱」

1

帝都洛陽。

宮中の大広間に集められたのは、各地を治める牧や刺史、太守、この場を取り仕切る者が選んだ者達。

三百は軽く数えるであろう、その者達を一段高い玉座に座る少女の横に立ち、見下げているのが帝を擁した志道董子。

その瞳は鋭く、冷徹な何かを感じさせる。

『……さて、まずはここで色々とハッキリさせておかなきゃね』

董子は居並ぶ者達を見渡してから、舌なめずりをするのだった。

296

「諸將お集まり頂き御苦勞である！」

董子が告げる。

それを鳳公子、壺与に続き並び、松平祐一は眺めていた。

『広い広間だな、それで相手が一段高い場所なんてまるで体育館でやる朝礼を思い出すな』

そんな事を考えてから、董子の横の玉座に座る漢王朝の皇帝、静帝が幼い女子なのに、

『あんなに小さいのに早くもこんなあからさまな政治闘争に巻き込まれてるんだからな、大変だな』

と、同情する。

祐一に同情を寄せられているなど知る由もない皇帝の横で、董子は声を張り上げて告げた。

「この度、黄巾の乱、そして宦官による横暴な政治で世は乱れた…：それを憂慮された皇帝陛下より私は相国しやうこくとしての地位につく事をご要請頂き、慎んでそれを受ける事になった次第である！」

その言葉が終わるか終わらないうちに、居並んだ者達が騒めき出す。

「アーシェ!？」

董子が皇帝の要請で相国という何かの地位に就いたのは理解できるのだが、その意味は解らない、祐一は周りが騒めくので、アーシェに振り返る。

すると、彼女も祐一に説明をする必要があると気付いた様子で、

「相国というのは漢王朝の始祖である初代皇帝に統一以前から仕え、大変な功績のあった方が就かれた皇帝に次ぐ役職でございますが、それ以来は誰も就いていないのです…：そのような地位にあの女が」

と、唇を噛みながら説明してくる。

『なるほど……言ってしまったえばプロ野球の永久欠番、ミスター長嶋の3番みたいなものか……』

そう解釈するのが、自分には解りやすいと考えてから、祐一はアーシェに頷く。

もちろん、あの玉座に座る少女の意向ではない事くらいは祐一にも判断がつく、志道董子のいわゆる自作自演だろう。

「皇帝陛下に失礼であろうが！　いつまでも騒いでるんじゃないわよ！」

董子は怒鳴った。

場が静まる、皇帝の名前が出て騒ぎ続ける者はいない。

董子は更に告げる。

「そして陛下は私を後見人としても指定している、従って私は陛下が立派に政治を主導される手助けをする事に相成った！　本日はそれを諸将に伝える為に集まって頂いた次第、さらには一両日中には改革の為の新人事をするので、諸将は洛陽を下知あるまで離れぬように、以上である！」

この上ない役職に就き、幼い皇帝の後見人を自ら名乗る。

これをして何と言うであらうか。

全国から集まった諸将で答えを知らぬ者はいなかったが、それを
広言出来る人間はそうは居なかった。

それをすれば皇帝をも否定する、と見なされて逆賊扱いは確実だ
からである。

しかし、皆無では無かったのである。

「算奪である！ 何が相国か、何が後見人か！」

老境の男が猛る。

丁原であった。

老人は続ける。

「大した功もなく陛下をかどわかし、相国とはいいい加減にせぬか！
貴様こそ逆賊だ！」

そう言って、董子を指差す丁原。

だが、董子は激昂する訳でもなく、

「并州刺史丁原殿、その言葉は相国である私を愚弄し、陛下を愚弄
する物、只では済まされない」

と、促し、大広間には多数の武装した兵士が待っていたかの様に
現われたのである。

跳ね返り者が出るのは予想していて、出れば直ちに皇帝の眼前、
いや諸将の目の前で処罰し、逆らった罰を見せ付ける準備が出来て

いたのだ。

「いざとなれば強硬手段か、器量の狭さが解ろうものぞ志道董子！
これだけの諸将がおり、皇帝陛下の前で武装した兵士を繰り出して
くるとは！ 上等だ、アルテナ！」

「ハイッ！」

丁原が叫ぶと、すぐ後ろに控えていた眼鏡に金髪の少女アルテナ
が、数名の手勢と共に義父を護るように立つ。

「ははははっ、馬鹿よ、馬鹿めっ！ 武装した近衛兵五十に素手の
数名で何を逆らうつもりか、叩き斬れッ、陛下に逆らう逆臣を叩き
斬れ！」

董子は笑い声まじりの大声で命ずる。

「覚悟！」

近衛兵の一人がアルテナに向かって鋭く槍を突き出す。
たが、槍はピタリと止められてしまう。

「借りますね」

穂先を見切り、柄を右手で握ったアルテナはニッコリ笑う。

「えいっ！」

アルテナの軽い気合いをいれた掛け声。

槍を突き出した兵士は、槍を両手で持ったままアルテナを軸に宙で半円を描き、床に頭から叩きつけられ絶命して槍を離す。

「はい、槍をもらいましたあ、さあて」

眼鏡の少女はそう言って、軽快に槍を回すとビシッと構えた。

「……なんという臂力」

アルテナを睨み、アーシェは息を呑む。

それは広間にいた全員が思った事だ、壇上でさっきまで薄ら笑いを浮かべていた董子もたった一人を倒しただけのアルテナに茫然としてしまう。

「かかれっ！」

部下達を叱咤し、近衛兵の隊長が先んじてアルテナに槍を突き出す、がアルテナはそれを奪った槍で軽く弾き飛ばした。

「なっ……」

近衛隊長の槍は弾かれただけで折れている。

「ダメですね、近衛兵さんがそんな下手くそな突き方じゃ……私が教えてあげますっ」

言葉の終わるか、終わらないうちに近衛隊長の胸を槍が貫き、彼もあえなく絶命する。

「み、見えなかった」

周りの諸将から感嘆の声が上がった。

「じゃあ……やりましょうかあ！」

アルテナは眼鏡の向こうの可愛らしいドングリ眼を妖しく光らせ、槍を構えた。

「えいやあああああ！」

アルテナが風車の如く槍を振るい、近衛兵の集団に駆け出した。状況から観て、常識的には逃げる方である筈のアルテナの突進。だが、その根拠はハッキリと解る。

養父丁原を逃がす為の時間稼ぎでもなく、玉碎的でもない、単純に勝てると踏んでの突進であった。

叩かれ、頭を潰される。

突かれ、身体を宙に舞い上げられる。

アルテナの暴風を止めることは出来ず、近衛兵の兵士達は蹴散らされていく。

「アルテナッ！　そのまま逆臣志道董子を討ち取ってしまうのだっ！」

「ハイッ！」

丁原の声にアルテナは元気な声で答え、壇上の董子を見据え言った。

「今、殺しにいきます」

「……くっ！」

その瞳に董子は背筋が凍ってしまう。

『あれがアルテナ……強い、強すぎる』

丁原が北の地で拾ったアルテナという名前の少女を育て、彼女が天性とも言える強さを持っているのは董子も聞き齧っていたが、想像を遥かに越えている。

『このままでは殺すつもりが逆に殺されてしまう……しかしっ』

頬を伝う汗。

だが、脚が踵を返しそうになるのを我慢して、

「どうにかなさい、あいつらを討ち取るのよっ」

董子はヒステリックに叫んだ。

「うふふっ……我慢しちゃって、すぐにあなたを殺しますんで」

そんな董子にアルテナはそう言いながら、右手に持った槍で一人の兵士の腹を刺し、左手でもう一人の兵士の首を握り潰し、不敵に笑ったのであった。

2

「バツカねえ、あの娘」

アルテナの強さに沸く中、天草未来はつまらなそうに眉をひそめた。

「どうしたのよ!？」

それに声をかけたのは支永真里亜だ。

「あのアルテナって娘が馬鹿だ、って言ったのよ」

「なぜ!？ あの武力は噂以上だと思うけど」

真里亜の返答に未来は肩をすくめた。

「ああ……そう、今は志道董子を追いかけるよりもあの娘は丁原殿を護って宮中を脱しなくてはね、近衛兵は他にもいるのよ、騒ぎが起こればここに集まるに決まってるじゃない、近衛兵が集結したらアルテナが董子を討ち取っても、近衛兵はその隙に丁原を捕えるで

しょうよ、そうなりや元も子も無いでしょ」

「でも志道董子を逃げられないうちに討ち取ってしまえば……」

「ばーか」

「なっ……」

馬鹿にする態度を包み隠さない未来に言葉が出ない真里亜。

「志道董子はそんなタマじゃないわ、今なんで逃げないのか……それは新手の近衛兵が集まってくるまで自分が留まる事によってアルテナを引き付け、アルテナ無しでは脱出出来ない丁原をも足止めする……そして増援の近衛兵が来たら後は任せて逃げるなり、ふんぞり返るなりすれば良いんだからね」

「まさか……そんな志道董子がそこま……」

「そこまで考えてるわよ、あのお姉様はとんでもなく強欲だけど、それを成し遂げる知恵もあんのよ」

怪訝な顔をする真里亜の言葉を未来は遮った。

「……じゃあ、このままじゃ丁原殿は……どうすればいいのよ!？」

焦りを見せる真里亜。

集められている諸将の殆どがそうだが、真里亜としても董子のやり方に賛同などとても出来ない、心中は丁原と同じであるのだ。

「どうすりゃいい、って……そりゃ修羅場に自分の意見を影響させなきゃね……こうするしか……」

未来はアルテナに倒された近衛兵の骸に歩み寄り槍と剣を取り、

「ほい」

と、真里亜に剣を放り投げる。

「へ……!?!」

意味が解らず、剣を受け取った真里亜に不敵に笑みを浮かべて横に並び、未来は槍をかざし、こう大声で叫んだのである。

「丁原殿！ この天草未来と支永真里亜、あなたに助太刀いたします！ 共に逆臣に天誅を加えましょう、さあ、いくぞ！」

アルテナの台風がまるで目に入った様に止み、皆の注目が剣を持つ真里亜と槍を振りかざす未来に向けられる。

「な……な、な」

いきなり傍観者から事件の中心に放り込まれた状況、支永真里亜は横の未来を引きつった顔で見つめるしかできなかった。

第33話に続く

第33話「未来、逃走す！」

1

「あんた達は多分、あたしの事を嫌いだと思っていたわよ……本音が出たわね！」

「そりゃ勘の良い事、大当たりよっ！」

壇上から見下ろした董子に、未来が槍の穂先を向けて笑うと、アルテナを囲んでいた近衛兵のうち数人が未来と真里亜に駆け寄ってくる。

「み、未来っ……どうすんのよ!? 戦いには始めるタイミングがあるでしょうに、なんで今、相手の懷で宣戦布告する必要があったのよ!? それも人を巻き込んで！」

文句を言い、剣を慌てて構える真里亜。

「まあまあ……後でわかるわよ、絶対に損はさせませんって、それよりも今はここを抜けないと！」

未来は槍を構え、ニイツと歯を見せ笑いながら答えた後で、

「玲夏っ、あのメガネっ娘に負けないくらいに暴れてちょうだい！」

と、振り返った。

未来に護衛として従っていたのは御堂玲夏である、頭の上で結い上げた黒髪を長く背中に流した長身の女武將。

「未来様、了解しました、あのアルテナという者の武勇を見せられ、こちらもいっお声がかかるのかと多少焦れていた所です」

鋭い瞳に端正な顔つきを上げて、玲夏は走ってくる近衛兵と未来の間に立つ。

「槍、使う!？」

「無用です」

未来の申し出に首を振ると、玲夏は近衛兵に素手で逆に走りだす。

「な……!？」

まさか素手の相手が、武装した自分に走りよってくる事は予想していなかった先頭の兵が脚を止め、周りの数人も反射的にそれに倣ってしまう。

「馬鹿めっ!」

玲夏はスピードは全く落とさず、先頭の兵の間合いに入るとそのままの勢いで脚を高く上げ、顔面に強烈な前蹴りを命中させたのである。

「オゴッ」

嫌な音と共に、兵の首はあらぬ角度に曲がった。

そこにきて、ようやく目の前の素手の女子の危険さに気付いた者

達は槍を構えるが、遅かった、玲夏は首の曲がった兵士から槍を取り上げて、大上段から振り下ろす、一人目は反応も出来ずに頭を割られ、二人目は槍で受けたが受けた槍が折れ、そのまま頭を碎かれる。

三人目は槍を玲夏に繰り出すが、完全に見切られて柄を左手で捉まれてしまう、そして逆に槍を引っ込めかれ、それをクルリと左手で回転させ投擲されると、避ける間もなく、胸を貫かれて絶命した。精鋭を特別に集めた近衛兵四人を片付けるのに、玲夏がかけたのは数秒の間だ。

「アイツも強い！」

「化け物だっ」

アルテナに続く玲夏の登場に、仲間の来援を待たずとも、いまだに圧倒的な数の優勢に立つ筈の近衛兵達も浮き足立つ。

「あんたも結構な部下がいるのね、うちの二姫将にきしょうがいたら勝負させろって意気巻くわ」

玲夏の強さに満足気な未来の横で真里亜が呟く。

二姫将というのは支永真里亜の子飼いの二人の女武将で、それぞれの武勇は有名である。

「いつかあの玲夏と勝負させてみる！？　ウチには他にも強いいるわよ、って二姫将を国元に置いてきちゃってるなんて、あんたも呑気ね」

「し……しょうがないでしょ！？　あの二人は血の気も多いから、宮中で粗相なんて困るし、こんな事態まで誰が予想つくのよ！」

突っ込まれると、真里亜は顔を真っ赤にして怒鳴るが、未来は肩を竦めて、

「だからさ……事態は自分が起こす物、予想するんじゃない、自分が予定すりゃいいのよ」

と、悪びれる様子もなく笑ったのだった。

2

「かたじけのうござる、お二人方！」

丁原が数人の部下を率いて、未来と真里亜に駆け寄ってくる。

「いえいえ……老將軍、なかなかあそこまであの女には言えないって」

「丁原殿に正義はあります、ご安心を」

未来はニンマリと笑い、真里亜はペコリと丁寧に頭を下げる。

未来に巻き込まれた形だが元々、董子の所業が彼女には許せない所もあり、腹を決めた様子だ。

「で、悠長に挨拶をしている場合でもないか、あの二人がいても近衛兵が集結しては元も子もない、あの娘、アルテナちゃんを呼び戻して、ここを突破しましょう」

周りを見渡して未来が丁原に告げるが、

「いや、しかしアルテナに志道董子を討ち取らせればこの場も……」

丁原は近衛兵を蹴散らすアルテナに目をやる。

アルテナの暴風は止んでいない、その力は勢いを増すばかりで徐々に董子のいる壇上に迫っている。

それだけに丁原はここで彼女を退かせるのが惜しいのだろう、しかし未来が彼に向かって、

「ムリムリムリ！ 早く宮中を出ないと！ そっちが出ないなら、玲夏を退かせて私達だけで脱出させてもらうわ、あと少しもすれば三桁の兵が来るわよ」

そう急かしたので、緊急の事態も差し迫っていた丁原は名残惜しそう表情であったが、

「アルテナ！ 脱出するぞっ」

と、彼女を呼んだのであった。

「父上、了解しましたあ」

アルテナは振り返り、周りの近衛兵を牽制しながら丁原の近くに退いてくる、それを追う者は皆無だ、もちろん壇上の董子と皇帝を護るのが、任務と言えば聞こえは良いが、早い話がアルテナのあまりにも凄まじい武勇に圧倒されていたので追えない。

「よし玲夏っ、一気に突破するわよっ」

「承知！」

未来が走り出すと玲夏も続き、丁原、アルテナ、真里亜とそれぞれの引きつれた数名の部下の集団は大広間を出ようとする。

鮮やかな逃走劇の成功……かと思われたがタイミングの悪い事に、そこにちょうど騒ぎを聞きつけた数十の新たな近衛兵とはち合わせてしまったのである。

「あっちゃー、こりやまずいかな？」

舌打ちをした未来。

逃がした、と苦い顔をしていた董子の表情は一変し、大広間に響くような声で、ヒステリックに叫んだのである。

「そいつらは謀反人よ、全員捕えて処刑するのよ！ 私に逆らう奴なんて誰もこの世に存在なんて出来ない、殺せッ、殺せッ！」

第34話に続く

第34話「不器用ながらも王道を征く」

1

「まったく……董子をこの場で討ち取ろうなんて欲出して早く逃げないからっ」

「す、すまない、アルテナならばと……」

舌打ちする未来に沈痛の表情で、丁原は謝った。

「大丈夫ですっ、私が蹴散らして父上を遼がいる陣まで送って差し上げます!」

父の失点を挽回せんと、アルテナが槍をふるい、新手の近衛兵に立ち向かう。

今までに数十の相手をしていれば、当然疲れが出るのは仕方のない事なのだが、金髪に眼鏡をした少女の臂力には一向に衰えはなかった、ひと突きひと風ぎで、近衛兵の肉を斬り、骨を砕く攻撃はあつという間に彼らを震え上がらせる。

「つ……強すぎない?」

「ご自慢の二姫将は!?!」

見る者全てを震わせるアルテナの武勇に、息を呑み呟く真里亜に未来が苦笑しつつ尋ねた。

「あれまでじゃない」

「だろうね」

強気な真里亜に似合わず、素直な返事にさすがの未来も相槌を打ちつつ、

「玲夏っ、あんたとあいつで正面突破よ……いけちゃうかも!」

と、傍らの玲夏に命令を下したのである。

「承知!」

命令を聞くか、聞かないかのうちに飛び出す玲夏。

武勇に対しての対抗心に火が点いている状態で、奪った槍を振りかざし、アルテナに並び近衛兵を蹴散らしていく。

「ば……化け物だっ」

「今だっ、二人を先頭にたてて一気に抜けるわよ」

算を乱す近衛兵に未来は口元を緩めて廊下を指差して走りだし、丁原や真里亜もそれに続いた。

抜群の武勇の武將を先頭にたてての正面突破が、今度こそは完璧になされようとしていた……一行を挟み撃ちするはずの大広間にいる近衛兵も、すでに一度圧倒的な力を見せ付けられており、アルテナと玲夏に近寄る者はいない筈であった。

だが、一名だけ例外の勇者が居たのである。

董子の麾下の猛将華蘭。

彼女はアルテナと玲夏とは直接刃を交えず、壇上の董子の前に主君を護る番犬の如く立っていたのだ、敵が立ち去る事を選んでいる中、董子への危険は激減し、しかも敵は主君を一番後ろにして背を

向けて逃げつつある。
彼女は太刀を構え、風のように董子の前から逃亡者達の背後に走った。

『誰を斬るか!?!』

迷わなかった、将として誰を斬れば主君の志道董子に益となるか!?!

『天草未来!?!』

志道董子麾下一番の将は瞬時に判断していた。

その背中が近づく。

丁原や彼女の部下達もいるが、目もくれずに彼女はその間を割って走った。

相手は正面に逃げるのに精一杯だ、振り向かずにより目散に逃げるのは、これだけ数に開きがあるのだから仕方がない。

「天草未来殿、お覚悟!」

太刀を振りかざした時に未来は明らかにしまった、といった表情を見せる。

華蘭は勢いそのままに、太刀を振り返った未来の顔目がけて力強く降ろした。

金属と金属のぶつかる高い反響音。

「……なっ!？」

華蘭も未来も予想していなかった音響。

「あんた……スゲェ力だ、それにこんな状況で冷静に速く静かに動くななんてタダ者じゃねえや」

華蘭の奇襲の一撃は、未来の顔面数十センチ前で、それを剣によって阻まれていたのである。

「天草……らしくねえな、後ろの敵は既に戦意喪失と決め付けやがって、まあ気にしてたら逃げ切れねえから賭けなんだけどな、どうやらハズレてたな!？」

太刀を払いのけ華蘭と距離をとった祐一が笑う。

それに罰の悪い表情をしていた未来、しかし次の瞬間にはニンマリと歯を見せて笑った。

「賭けは当たってたわ、だってあなたが私を援けに来たでしょうに？ 結局は私は斬られなかった」

「な、ななっ」

「でも、借りとして覚えておくわ、後の処理が大変よ、頑張っ
てね！」

意外な答えに唇を噛む祐一に、未来はウインクをして走り出す。

「じゃあね！」

玲夏とアルテナが血の道を拓いた、未来一行は一気に近衛兵を突破していく。

「後の処理か……なるほどなあ、まったく言っていない程に考えなかった」

乱入者である自分にターゲットを仕方なく切り替え、牽制する華蘭を見て祐一は衝動的な自分の行動に肩を竦めた。

「でも……ここで未来がやられるのは違うんだよね、公子さんや壱与ちゃんには悪いけどさ」

華蘭と見合う。

相手は強い。

はつきりと解る。

公子や壱与、アーシェにも迷惑がかかるだろう。

だが……動いた身体を止められなかった。

「さあ、やろうか！？ あんたをどうにかしなきゃ逃げるのも出来ねえ」

剣を構えた動きを止めた瞬間に、華蘭は間合いを一気に詰めてくる。

「……ちっ」

横風ぎに胴を狙った一撃を祐一は剣で受けた。
重い。

現代社会にいた時に喧嘩になった不良の金属バットを鉄パイプで防いだ事があったがその比ではない。

「……チッ、このヤロ」

受けていてはやられる。

相手は大振りの太刀、こちらはそれよりは細めの剣だ、威力はともかくスピードはイケるかも！ と、攻撃に移ろうとした時であった、

「うおりややややや！」

烈迫の気合いと共に、金髪の美少女が青龍偃月刀を大上段に振りかざし、華蘭目がけて宙を舞ってきたのである。

「チッ！」

舌打ちすると華蘭は素早く、バックステップを踏んで祐一から離れる、アーシエは祐一と華蘭の間に着地して素早く華蘭に構えた。

「兄上、軽率だ！ 一突きで死ぬ所だ！」

アーシエは華蘭に向かって構えたまま怒鳴る。

「相手の攻撃を受けて反撃するトコだったんだぜ」

「バカッ、あんなの誘いだ、横風ぎは本気ではない、兄上は速さな

らばと思ったのだろうが、速さも相手の方がまだまだ上、攻撃を仕掛けた所に入れ違いの一突きで胸板を貫かれていた」

反論するがアーシェに言い返されてしまう。

「マジかよ!?!」

「そうでなければあんなに派手に私が乱入なんてしない、ああでもしなければ兄上を斬らせずに相手を下がらせられない」

大声を上げて宙を舞い飛んできた事だ、アーシェは祐一が不用意な反撃を試みて、それを華蘭が待っていた事を見切ったの派手な乱入だったと言うのだ。

最近は剣の扱いにも慣れてきたと思ったが、アーシェはまだを七回くらい重ねないといけない位にかなわない、そのアーシェが言うのなら真実味がある。

「悪い、ありがとな」

「いえ……私こそ未熟で兄上を尊敬します」

素直に謝るとアーシェは少しだけ笑った。

「何が!?!」

「あの喧騒の中で天草未来殿を救われた、私はあなたより剣に慣れている筈なのに、その場を見過ぎてしまった、成り行きを観ていた、兄上や天草未来殿のような人物はそういう時に迷いなく大事を決める動きを堂々となさる、それは個々の武勇などを遥かに越えた力ではないかと思う」

「そう!?! これで公子さんのトコには戻れなくなっちゃったけど!?! 周りは敵だらけだし……」

アーシェに誉められたが祐一は眉をしかめる。

華蘭の行動の邪魔をするという事は、すなわち志道董子との敵対だ。

公子に世話になっている身だと言うのに……その上、周りは未来達を逃がしてしまい、今度は逃がさんとする近衛兵がいる。

「これがアーシェとかの武勇を越えた力の結果とは思えないけどな……」

迫りくる近衛兵を見据える祐一。

「いや、ここで死ぬ兄上ではない、絶対に私が死なせない！ 兄上の不器用なまでの正義がこの世には必要なのだ！ この乱世にこそあなたがっ、あなたの王道に私はついていく！」

弱気になる祐一に喝を入れる様に、鋭い瞳で叫び偃月刀を構えるアーシェ。

「ありがとよ、不器用でも俺の王道か、いいセリフだぜ、これから決め台詞にさせてもらおうからな！」

祐一は瞳を輝かせた。

この世……

乱世。

強者が全てを得て笑い、弱者が全てを失い泣く。

このような世の中だからこそ、不器用でも正義を見つけて生きる。不利を被るだろう。

都合が悪くなるだろう。 やりにくいだろう。

しかし、全ての人間が力を……すなわち覇を競ってはいけない。力を誇る霸道ではない、正義を行く王道。

『祐一君にはそれがある』

公子の傍らでいた高天原壺与は顔を上げた。

「公子さん、ゴメンツ……私は……」

そう呟き、走りだそうとした時であった。

祐一達を囲む近衛兵が背後から風ぎ払われ、数人が一度に吹き飛ばぶ。

「なっ……」

「お前はっ！」

アーシェと祐一はそろって声を上げ、近衛兵は再び恐慌を甦らせる。

そこに立つのは金髪の揉み上げを伸ばしたショートカットに眼鏡の少女。

アルテナ。

手には彼女の得物であろう方天画戟がしっかりと握られている。

「祐一さんみたいな男の子が味方になってくれたのに見逃し……もとい、見殺しには出来ません」

そう言ってアルテナは方天画戟を構えて、

「さあ、誰から三途の川を渡りたいですか！？ 今なら渡し賃はこのアルテナが払って上げます」

と、舌なめずりしながら、不敵な笑みを浮かべたのである。

第35話に続く

第35話「祐一とアルテナ」

1

「き、君は……」

「アルテナといいます」

まさか一旦、逃げた彼女が帰ってくるとは思わず、呆然とした祐一にアルテナは微笑んでから傍らに走りより、方天画戟をビシッと構えた。

彼女の強さは、すでにこの広間にいる人間の全ての知るところだった。たった一人の援軍に祐一とアーシェを逃がすまいとしていた近衛兵達が再び狩られる側の弱気な表情に変わるのを祐一は見逃さなかった。

「突破だっ」

アーシェとアルテナに叫ぶと、廊下に走り出す。

「どけっ！ 斬りたいのかよっ！」

凄んで剣を振ると数人の近衛兵は一步引く、アルテナが来る前ではこうはならなかっただろう、そこにアーシェとアルテナが続く。

「アルテナ殿、感謝する！ 私はアーシェ、前を走る松平祐一の妹だ、兄上に続けっ！」

アーシェはアルテナに挨拶を素早く済ませ、偃月刀を手に近衛兵三人をあつという間に斬る。

「はいはいっ、頑張りましょう！　アーシェさん」

アルテナも方天画戟が振り回し、二人を切り裂くと更に近衛兵は慌てふためく、アルテナだけでなくアーシェの並外れた力も認識したからである。

「やりますね」

「そなたもな……さあ、行こう」

アルテナの言葉にアーシェは頷き笑うと、二人の金髪の強者は祐一に続いて広間を走り去って行く、それを本気で阻む者は誰もいなかった。

「祐一君……」

壺与は立ちつくす。

アルテナの乱入で祐一は危機を脱してしまい、彼女は彼を救ける理由を失ってしまったていた。

周りは混乱していて、自分が祐一について走りだそうとした事はただ一人を除いては知らないだろう。

聞こえていなかった訳がない、はっきりと告げた筈だ。

しかし、自らの主君鳳公子はまるで何も無かったかのように、少しきつめの眼差して混乱を収拾している近衛兵を見つめている。

今からでも遅くないかもしれない、しかし壺与の脚は祐一の絶体絶命が去った今は動かなかった。

「鳳殿！ あの男は確かあなたが後見人をしていた筈と記憶しているけれどもどういふ事かしら！？」

混乱する近衛兵を叱咤した後、壇上の志道董子は公子を指差す。

「公子様……」

振り返る壺与。

出ようによっては壺与も公子を護りながらアルテナやアーシェの様に近衛兵を蹴散らして、彼女とともに祐一達に続く覚悟を改めて決める。

見合う公子と董子。

近衛兵達も再び強行脱出劇が起こるのか、と緊張し壺与はそれらの動きを睨み付けて追う。

だが、公子の口からでた言葉は意外な物だった。

「相国閣下、私はそのような事を閣下に告げた事がありましたようか！？ 私には覚えがありません」

「……！？」

主君からのあまりにも信じられない言葉。

壺与は息を呑み、それを言われた董子に振り向く。

董子と公子は互いにまったく目を切らない。

再びの沈黙の後で、董子は黒子のある口元をニツと緩めて、

「悪い、私の思い違いだったわ……あれは丁原の手の者だったのね」

と、手をパタパタと振ってから、

「逃げた奴らを洛陽から生かして出すなっ、郊外に控えた軍を動員しても構わないわ、洛陽市街に袋のネズミにして捕らえるのよ」

そう大声で命令したのだった。

2

「おお、アルテナ！」

アルテナを見た途端、丁原は声を上げる。

宮中を突破し、市街に出た所で祐一、アーシェ、アルテナの三人は丁原と真里亜、未来、玲夏とそれぞれの数人の部下達の集団に合流する事に成功した。

「でも油断はまったく出来ないな、おそらく郊外に陣取る志道董子の軍勢が我々を捜すに違いない」

「ああ……そうなると脱出は難しいな」

周りを警戒しながら呟く玲夏にアーシェは頷く。

「まだ連絡は行き届いてない筈、何処の門からでも構わないから、とにかく洛陽城内から外に出ないと袋のネズミだわ、早く出ちゃいましょう！」

「警戒が薄そうな門を突破するしかないわね」

落ち着かない様子で周りをキョロキョロする真里亜、未来は強行策を言いながら右手の平を左こぶしでパシッと叩く。

「俺もそれで構わないと思うぜ、そうと決まれば真里亜さんの言う通り、連絡が伝わらないうちに突破して外に出よう、幸いこっちはアーシェやアルテナちゃん、それに玲夏さんと揃ってるんだ」

祐一も頷く。

時間の経過が自分達の有利になるとはまったく思えない、早く城塞都市である洛陽から出ないと、董子に捕らえられるのは目に見えているからだ。

「任せて下さい！」

祐一にアルテナが人懐っこい笑みを浮かべてくる。金髪に眼鏡のショートカットの娘は祐一と同じ歳か少し下っぽい。

「ああ……それとアルテナちゃん、ありがとうな、さっきは戻ってきてくれなかったら危なかったぜ、誰かさんは助けた恩を忘れて走り去ってからな」

祐一はアルテナに笑いかけてから、未来に対して横目を向けたが、

「自分が逃げる算段もあるから助けに来たんだと思ってたわ」

と、彼女は肩をすくめて軽く皮肉をいなす。

「ハイ、祐一さんみたいな人を死なせられないですよ、女の恥です」

アルテナはトンと自分の胸元を叩く。

今の世は若い男は、同じ歳の女性に対して二割程とも聞いているから貴重なのは解るが、護られるのも気が引け、祐一は苦笑するが実際、アルテナの武勇は男女関係なく無双と呼べる。

「いや、ホントに助かったよ……今度何かお礼をさせてもらうからさ」

「本当ですか!？」

祐一の言葉に予想外にアルテナは可愛らしい丸目を輝かせる。

『いやに喜ぶな……』

そうは思いながらも命の恩人である彼女に、

「ああ……でもお礼といっても勢いで仕えていた人の所を出てきた文無しだし、出来る事なんて無いと思うけどさ」

頬を掻きながら申し訳なさそう答える。

「じゃあ、祐一様にアルテナはお願いがあります」

するとアルテナはそう声をうわずらせて方天画戟を持ったままでききなりギュッと祐一の胸に飛び込んできたのだ。

「なっ……」

驚愕するアーシェ。

その度合いは違うが周りの者も同じような反応だ。

「お、お願い！？ だから言ったら、俺には今君にお礼できる物なんて無いんだからさ！」

「大丈夫です、充分に出来ます」

焦る祐一にアルテナは赤らめた顔を上げてはつきりと言ったのである。

「もし……無事に帰れたら祐一様にアルテナを一晩、抱いて頂きたいのです」

期待を込めた表情で祐一を見上げる金髪の可愛い少女。

しかし、祐一は視界の隅に映るもう一人の金髪の少女の顔を見る勇気がとてもわかなかったのだった。

第36話に続く

第36話「私はあなたが欲しくなった」

1

「き、貴様ーっ！！ 兄上に何と言ったあ！？」

まさに烈迫の気合いを込めた怒気を放つアーシェ。

一緒に逃げてくるまでは、親近感すら持った様子が一変するが、
当のアルテナは幸四郎に抱きついたまま、

「はい、祐一さんに抱かれましたと申しました、アーシェさんは妹君さんなんですよね！？ 兄君のそういう事まで、目くじらを立てるのはどうかと……今は男子が少ないんですから、これくらい当たり前です、アーシェさんも綺麗なんですから、素敵な男性を早く見つけて女の幸せをしらないと」

そう言い返し、まったく意に介さない。

「ぐっ……なっ」

赤面するアーシェ。

睨む矛先がアルテナから黙って抱きつかれる祐一に変わる。

「あ……いや、アルテナちゃん……」
「アルテナでいいです」

眼鏡の向こうの可愛らしい瞳を輝かすアルテナ。

「そう!?　じゃあさ、アルテナ……その事はまたの事にしてさ、とりあえずはさあ……」

「アルテナ!　今は戦場だぞ、将としてかまえんかッ、ワシはお前に戦場でそんな事を教えたかつ!」

アーシェとアルテナの板挟みになり、しどろもどろになりかける祐一、だがアルテナに対して老人の一喝が浴びせられる。

丁原である。

「父上っ……」

アルテナはビクッと背筋を震わせた。

「いつまでもその御方に抱きついている場合かつ、お前は向こうを見張っていないさい!」

「す、すみませんっ!」

顎髭まで白くなった老将に怒鳴られて、アルテナはペコペコと頭を下げると、隠れている住居の影から少し離れた別の住居の裏手に走り去っていく。

「いや……すまんね、無茶に付き合ってくれた君に私の娘が粗相をして」

怒られ離れた民家の裏から周りを警戒しつつも、時折こちらを気にするアルテナを見てから、丁原は祐一に歩み寄ってくる。

「いえいえ平気です、俺は松平祐一、こっちが妹のアーシェです、鳳公子様の軍に加えさせて頂いていたのですが……」

「可愛い未来ちゃんを助けたくて、堪らなくって身体が勝手に動いたのよね？」

祐一の言葉の途中に未来がニンマリと茶々を入れてくる。

「うるせえ！」

「凶星のくせにい」

祐一が怒鳴り未来が舌を出すと、

「ハッハッハ、まあどにしろ助かった、礼を言わせてもらいますぞ」

丁原は丁寧な頭を下げてくる。

「あ、本当にやりたい事をしただけですから……それよりも、洛陽城外に出ないといけませんね」

「うむ……我々だけでは董子の軍勢を突破する事はかなわんだろう、あの娘の将としての勘に頼りたいのだが……」

はるか年上の丁原に頭を下げられた祐一が、話を現在の状況を打破する方法に換えると、丁原は腕を組んで息をつく。

「あの娘！？ アルテナの事かしら？」

「いや……そうではなくて郊外の私の手勢を率いている娘なのだが」

遠くにいるアルテナに視線をチラリと送る未来に、首を振る丁原。

「でも、洛陽城外には志道董子のかかなりの数の軍勢がいるんですね!？」

「うむ、我が手勢は僅かに一万、それにこの事態に気付かなければそれまでであるし……しかし、あの娘ならばあるいは……」

祐一の指摘にそう答えて丁原が口を結ぶ。

「志道董子の軍勢はおそらく洛陽城外だけでも五万は下らない筈だわ、かなり難しい話になるわね」

そう苦笑混じりに肩を竦めて言う未来だが、

「しっ……黙って!」

傍らにいたアーシェが指を立て、会話を中断させると、わずかに笑みを見せ呟く。

「丁原様、貴方の麾下はどうやら……アルテナだけではなく、その娘とやらもさぞかし優秀な様だ」

2

洛陽城外に陣取る志道董子軍約五万は彼女の直轄軍であるのだが、現在は董子が宮中にいる為に李確りかくという武将が率いていた、五十代半ばの少し肥満がかった男だ。

彼は洛陽から少し離れた郊外にいる一万の丁原軍には気付いてい

たが、それが陣も張らずに駐留しているだけなのを知り、

「今回の一件で董子様に出し抜かれたジジイが、精一杯の脅しがてらに連れてきただけさ」

と、嘲笑し、警戒は解かなかったが、それは緩い物であった。

さらに丁原が洛陽に到着後には、その軍勢が更に洛陽から離れたと聞くと、

「我々が二、三万から何進將軍の軍勢を加えて増大したのに驚き、刺激を与えぬ様にしたに違いないな、まったく可愛いものだ」

と、顎髭を撫でながら部下に語り、丁原軍を舐めきっていた。

だが、その時すでに李確は丁原軍一万を率いる如月遼の術中に見事にはまっていたのである。

遼は洛陽に何名もの密偵をすでに送り込み、宮中の変事に対する情報収集を敏感にして、わずかに五百名の手勢を率いて洛陽のすぐ近くに志道董子軍の旗を掲げて布陣していたのだ。

普段ならば不審な偽の軍勢も、彼女には気付かれない公算があった。

李確の言うとおり、はじめ西涼軍だけであつた志道董子軍は短期間に何進將軍の軍勢、さらには洛陽周辺では近衛軍も吸収した形になり、十万を遥かに越えた大軍に膨らんだ反面、各部隊の指揮管理、いきなり味方になった者同士の互いの情報伝達等がまだ整理出来ず、複雑になっていたので、五百という小部隊に類する部隊は何処かの部隊の配置移動の途中だろう程度に扱ってしまっていたのだ。

遼の狙いは的中する。

遠くに離れていった五分の一の仮想敵をせせら笑う李確に洛陽城の目の前まで近づいているとはいえ、擬装までした百分の一の軍勢を警戒する殊勝な心構えなどあろう筈も無い。

彼女は主君のただならぬ覚悟を知っており、変事の確率が高し、と密偵との連絡を密に取り、息を潜めて宮中を睨み続け、そして変事は起きた。

「宮中内にて并州刺史丁原以下十数名が謀反遁走、至急に洛陽城内を搜索し捕縛すべし」

この指令が発せられたのを遼は李確よりも先に知り、即決果断に五百の手勢を率いて洛陽城内に入ったのである。

すでにこうなれば、董子が李確に対して郊外の丁原軍を攻撃させる危険性も出てくるし、洛陽市街を逃げる主君から自分を見つけてもらう為、隠密行動を敢えて解き、手勢で派手に暴れる選択肢を選ぶ。

「軍官舎に火を放てッ、素早く移動し蹴散らせ！」

遼は得物である長い柄の鎌を持ち、馬に跨り先頭に立ち、市街で出会う董子軍の丁原搜索の追っ手の小集団を幾つも駆逐する。

彼らにしてみれば十数名の相手を追っていたら数百の部隊に急襲されてしまうなんて夢にも思わず、逆に捕まってしまう。

「丁原様を追っているのだろう!? 知っている事を教えるんだっ！」

追っ手の隊長の首もとに鎌の刃を当てる遼。

時間との戦いだ。

何も言わなければ本気で首を落とすつもりでいた。

「詳しい事はわからない、ただ化け物みたいに強い奴が何人もいるから気をつけろという話だ！」

怯えた声を上げる中年の隊長。

「何人も!？」

アルテナの顔がすぐに浮かぶが、そこに違和感を覚えて遼は端整な眉を潜める。

しかし、追っ手に詳しい場所を知られずに逃げているのなら上手く助けられる可能性は更に高い。

「よし! 街中を駆け回って丁原様やアルテナを捜すんだっ」

長いツインテールにした金髪を掻き上げ、遼は馬上で部下たちに鎌を大きく掲げた。

3

「おおっ! 遼だ、あれは遼だ!」

兵を率いて通りを駆け抜けてくる騎馬武者に丁原は興奮気味の声

を上げて、

「遼、遼！　よくぞ、ここまで来てくれた！」

と、手を振る。

「丁原様ッ、良かった」

「遼、ありがとうございますっ！」

それに気づき喜びの声を上げ馬を止めた遼にアルテナも駆け寄ってくる。

「よく父上を護ったねアルテナ……さあ、まだ城下は混乱しております、今のうちなら敵勢を突破も可能です、行きましょう！」

遼はアルテナを労ってから自分の乗っていた馬を降り、丁原に譲る。

「あんた、よくこんな短時間でここに來れたわね」

馬から降りた遼に興味津々と言った表情で話しかける未来。

「あなたは!？」

少し馴々しくもある未来に遼は戸惑いを見せたが、

「ああ、そちらは天草未来殿だ、黄巾討伐に大功を挙げ、宮中で志道童子に噛み付いた私に同意してくれた方だ、未来殿とその部下の方のお陰で宮中内から出られたのだ」

馬上から丁原に説明をうけると、

「それはそれは、私は丁原様に仕える如月遼です」

遼は未来に丁寧な頭を下げる。

「ええ宜しく、だからなんでこんなに短時間でここに來れたのか教えて」

「はあ、それは……」

挨拶なんてどうでもいい、と言った態度の未来に遼は再び戸惑いを感じた様子だが、丁原を救ってくれたならば無下には扱えないと遼は手短かに未来に自分の行った策を説明した。

「へえ」

聞き終えた未来は嬉しそうにニツコリと笑い、アルテナを従え馬で走りだす丁原を見てから、

「アルテナっていう娘は強いけれど、私はあなたみたいなのが好き、手早く言えば私はあなたが絶対に欲しくなった」

と、遼に耳打ちをしてきたのだ。

「……あなたは何を言ってるんですかっ!？」

「今は無理でもいつかは必ずそうする」

赤面する遼に未来は舌を出したのだった。

第37話に続く

第37話「祐一とアルテナの夜」

1

「丁原に逃げられた！？ 一体何やってんのよ」

宮中で一旦、諸将を下がらせ、報告を待っていた董子は声を荒ら上げた。

幼い皇帝も侍女達と共に自室に戻り、周りには麾下の武将達のための謁見の間で董子は本来、皇帝が座るべき玉座に座っている。

「申し訳ありません、奴らの軍勢が洛陽城内にどこからともなく現れて丁原達と合流、不意をついて我々の囲みを突破した様です、本当に申し訳ありません」

李確は恐縮しきり、土下座して董子に詫びる。

「あゝ、もういいわ、なるべく静かに進めたいけど、どうやら戦をするしかないみたいね……相手はたかが一万、あのアルテナは戦場で危険そうだから心配だけど、数でもみくちゃんにしちゃえばいいわ、私が直接に指揮を取るわ」

董子は土下座などという大仰な事をした李確に手をパタパタ振る、下がっていいという合図。

「ハッ！ それではすぐにでも出陣の準備を！」

李確は土下座のままもう一度、深々と頭を下げると早足で退出す

る。

「相国、自らご出陣なさいますか!？」

「当たり前じゃん」

傍らに控えていた華蘭に董子は頷く。

「諸将が洛陽に来て私を見てんのよ、皇帝を擁した私が丁原程度に躪くようじゃ、奴等に舐められる、ここは負けらんないのよ」

「私も出陣します、アルテナに膂力のみが戦でない事を教えましょう」

「頼むわ、あと……」

「何でしょう」

「その相国ってのむず痒いから、あんたくらいは止めて、私がないで、こんな大昔の名誉あると言われる身がない職についたのかはあんたは解るでしょ？」

「……漢王室の破滅を印象づける為、そして歴史と伝統を重んじる政権内の者がどれくらいあなたについてくるかを見る為」

「当たり前」

華蘭の返事に董子は満足げに笑いながら肘をかけて頬杖をつく。

「相国への就任、皇帝への後見人……こんだけやっても私に逆らわない奴は、もう私が何をして逆らう訳がないわ」

「……たとえば、それ以上の地位に就かれても!？」

「そういう事、従う者、逆らう者ははっきりさせたいわ、そしてね……」

董子は勢い良く、玉座から立ち上がり、

「逆らう者は皆殺しにしてやんのよ！ 私が至高の位に就くまでね！」

そう言って声を上げて笑う。

「はい、董子様」

華蘭も口元を緩めながら頭を下げた。

2

「明日にも志道董子軍は攻め立ててくるだろう」

老将丁原が幕舎で呟く。

如月遼の率いる部隊の登場によってどうにか虎口を逃れた一行は、一万を擁する丁原の陣にたどり着き息をつくが、いまだに危機の状況は続いていた。

敵対関係が明らかとなった今、十万を越える志道董子軍と開戦が必至となったからである。

「これは丁原殿の戦い、私達に出来る事は少ない、観させてもらうわね」

「任せてもらおう」

未来の言葉に頷く丁原。

「協力しないのかよ、らしくないな」

祐一が未来に怪訝な顔をみせる、てっきり丁原軍に加わり一緒に董子軍と戦うと思ったのである。

「やりたければどうぞ」

「天草……」

見合う未来と祐一。

「まあまあ、祐一殿も我が軍の戦いを見守ってください……さあ、今日はもう遅い、おやすみなされ」

そこを笑顔の丁原にとりなされ、

「ええ、何か手が必要な時は言ってください」

と、祐一は彼に笑みを返したのだった。

「では兄上、お休みなさい、丁原殿も十分に警戒しておりますし、志道董子も多勢をもって寡兵の我々を夜襲するとは思えませんが、お気をつけて」

「ああ……アーシェもゆっくり休んでくれよ、今日はがんばってくれたからな」

篝火が灯る小さな幕舎の前で、アーシェに見送られた祐一は彼女の肩に優しく手を置いた。

「はい……」

色白の頬をわずかに染めて頷くアーシェ。

「おやすみアーシェ」

祐一はそんな彼女に微笑むと幕舎の中に入っていく。

「フウーツ」

蝋燭の灯りが灯る中、祐一はベッドに寝転がる。

脱出行で身体も疲れていたが、精神は明日に予想される戦いに昂ぶっていた。

戦いに加わる予定では無いが、状況的には少なくとも数倍の敵と戦うのだ、アルテナや遼と丁原麾下には優秀な武将がいるが不利は否めない。

「アルテナか……」

宮中内での彼女の強さを思い出す。

まさに無双だ。

アーシェやミオよりも強い者など見る事は無いだろうと思ってい

だが、少なくともアルテナはそれと互角に思える。

金髪のショートカットに可愛らしい丸い瞳に丸眼鏡の少女。

「身体つきなんかもふくよかで柔らかくって……なんだか普通の女の子だよな」

抱いてくれ、と言われて抱きつかれた時の感触を思い出す祐一。そんな事を考えているうちに微睡みが意識を支配しはじめた。

「祐一さんっ！」

「え……!?!」

眠りに落ちていた意識が戻る。

仰向けの身体に覚えのある心地よい柔らかな感触がのしかかっている。

「……ア、アルテナ!?!」

「ハイッ」

揺らめく蝋燭の灯りに照らされる金髪に眼鏡の童顔の少女が悪戯が成功した子供の様に笑っていた。

「一体、ど……どうしたんだよ」

自らの胸の高鳴りを意識して吃る祐一。

「言ったでしょ……抱いてくださいって!」

「だ、抱いてって……ん、ングッ」

抗議の声は物理的に塞がれた。
重なる唇と唇。

「ん、んぐっ……ア、アルテナ……んぷっ」

ビックリして唇を離す祐一、だがアルテナは再び強引に祐一の唇を奪ってから離し、

「祐一さん、好きにしてください」

と、可愛らしく微笑んできたのである。

重なるアルテナは既に薄手の着物一枚だ。

「アルテナ……」

アルテナの程よい膨らみの胸の感触を自分の胸板に感じ唾を呑む。
欲求は昂ぶる。

「男の子……ですよね？」

少女の笑い。

「アルテナっ！」

祐一はもう一度唾を呑み込み、アルテナを抱き締め、唇を自分から重ねた。

第38話に続く

第38話「洛陽北方会戦」

1

「ゆ、祐一さまあ！」

「アルテナっ！」

程よい膨らみの胸元に抱き締められ、名前を呼ばれ、祐一も相手の名前を叫んだ。

裸で抱き合いながら互いの身体を動かす。

「ううつ、アルテナ……俺……もうっ！」

「はうつ、祐一さま」

祐一が齒を食い縛るとアルテナは悦楽にうち震え、唇を激しく重ねながら互いに果てた。

「ふう……はあはあ」

祐一は仰向けのアルテナの横にうつ伏せに倒れこみ、肩で息をきる。

「はあはあはあ……祐一さまあ、素敵でした」

赤く上気した顔を向けてくるアルテナ。

「あ……うん、でもなんか勢いでゴメン」

「そんな事ないです、祐一様はカッコ良いし、私のタイプの人ですから、嬉しかったです、それに誘ったのはこっちです……優しいのに案外に強引だったのが、何だか素敵でした」

誘われたとはいえ、我慢できずに彼女を欲求のままにしてしまった事を謝ると、アルテナはペロツと舌を出しながら首を振り、

「それに三回も愛してくれて……私、祐一様のトリコになるかも」

と、微笑んだ。

「わ、わるいっ！？ 俺、ホントに勢いづいちゃって、あんまりその女の子となくて……その、アルテナが可愛くて……」

しどろもどろになってしまいう祐一に、

「謝られたら困りますよ、それだけ求められたら逆に嬉しかったくらいなんですからあ」

アルテナはそう言いながら息を整えてベッドから起き上がり薄手の着物を肩から羽織った。

「明日が戦じゃなければ祐一を頑張らせて……もう少ししちゃうんだけどなあ」

「か、勘弁して、だから俺もあんまり経験……」

祐一が苦笑すると、

「祐一さんみたいな男の子の初めて……ご馳走様でした、お休みな

さいです、戦は祐一様の分まで暴れますから観ててください」

祐一の言葉を遮り、丸い眼鏡の向こうの瞳を流しながら、舌なめずりしてアルテナは幕舎を出ていく。

「そ……そりゃばれてるよな、アルテナはあんな童顔眼鏡のくせに経験豊富そうだな」

祐一は裸のまま赤面して、頭を掻いたのだった。

2

怒号が洛陽よりわずかに北に出た平原に響く。

陽が上がってすぐに洛陽より出撃した志道董子軍は約五万を数え、一万の丁原軍に堂々と正面から押し寄せている。

「小細工なんて面倒くさい、相手が多少、小細工をしてもやられる訳がない兵力差じゃないのよ」

相国の地位ながら、その軍を自ら率いる董子は自信に満ち溢れている。

五倍の兵力を悪くても同等かそれ以上の兵士の質で揃えたのだ、彼女でなくても自信満々になるだろう。

両軍は正面から対峙していた。

董子が部下達を制して白い馬に跨り、最前線まで出て来て叫ぶ。

「皇帝陛下に弓をひく逆臣どもめ、陛下の後見人たる相国の私が直々に成敗して上げるわ!」

すると、丁原も一騎で突出して、

「黙れ、陛下を利用する寄生虫めが、虫けらならば虫けらしくしておれ!」

と、怒鳴り返す。

会戦前の総大将同士の口上の後で睨み合い、それぞれに指令を出す。

「突撃! 正面から叩け、逆賊を蟻のように踏み潰すのよ!」

「西涼から出て来た田舎女の勘違いを糾してやるのだ、皇帝陛下を佞臣から取り戻せ!」

その檄に声を上げ合い、両軍は正面から激突したのである。

「我が名は李^{りしゅく}肅、董子様に仇なす逆賊め、そろって成敗してくれようぞ!」

志道董子軍の先鋒で黒鹿毛の馬に跨るのは李肅という体格隆々の男、槍を振り回して、丁原軍に斬り込んでくる。

「なかなかの男だな」

そうは言いながらも丁原は不敵な笑みを浮かべ、

「アルテナ！」

と、娘の名前を呼ぶ。

「はい……」

栗毛の馬に跨り丁原の前に出てくるアルテナ。

手に方天画戟を持つ金髪の少女の眼鏡の奥の瞳は冷たく鋭い。

『アルテナ……』

丁原軍の後方から戦況を見守る祐一は、ほんの数時間前まで激しく肌を重ねていた少女を見つめる。

「どうかしましたか!？」

「い、いや……なんでもない、アルテナの腕前拝見といった所だ」

アーシェに声をかけられて、祐一は口元に拳を当てて首を振った。
アルテナとの事でアーシェに対して後ろめたい気持ちがあるが、
彼女はそれを察知してはいない様子だ。

「負けないでしょうね」

アーシェが呟いた時、アルテナと董子軍の先鋒の武将が馬上で交差した。

兜をかぶった李肅の首が宙に舞う。

一撃。

歓声も上がらず両軍ともに沈黙する。

「な、なんという……誰かおらぬかつ!？」

董子は絶句し、麾下の武将達に振り返った。

「ならば私、カーサにお任せを！」

アルテナよりも遥かに体格に勝る肌色の筋肉質の身体の女武将が大斧を構えて走りだす。

「カーサ、頼むわ! あいつを討ち取れば官位を与えてあげる!」
「ありがとうございます」

董子の言葉に笑みを浮かべて、カーサは馬を翔ばしてアルテナに迫る。

「アルテナとやら、私はカーサ! 董子様の陣営一の剛力の持ち主だ!」

身長は二十? 近く高い百八十?、筋肉も女子とは思えない発達した肌色の肌のカーサがアルテナを真っ直ぐに目指す。

「剛力……ですか」

カーサの突進にアルテナは嘲笑にも見える表情すら見せた。

「舐めるな小娘！」

カーサは大斧を振り下ろす……だがそれはアルテナに止められた。それも方天画戟ではなく左手で。

「……左手でっ!？」

カーサの顔が青ざめる。

「ひっぱりっこ！」

ニツコリ笑うアルテナ。

「この……う……う、動かないっ」

利き腕の右手に持った斧が力を入れても寸分とも動かない、カーサは歯を食い縛る。

「このっ、このっ！」

遂には両手で斧を引くが、それは同じだった。

「終わりです！ ひっぱりっこも貴女の命も！」

「きゃああああっ！」

両手で持っていた筈の大斧をアルテナに左手一本で取り上げられ

て、カーサは女の悲鳴を上げる。

「返します、はいっ！」

アルテナから投げられた大斧は回転しながらカーサの顔面に突き刺さり、彼女は馬上から崩れ落ちた。

「カーサが左手だけで！？ アルテナ……異常、あの強さは異常だわ！」

昨日宮中で見たよりもその強さは解放されている、董子は身体中の震えを禁じ得ない。

そして、それは志道董子軍全てに伝達している。

「突撃します！ 目指すは志道董子の首のみ！」

アルテナは普段は穏やかな丸い瞳を細く鋭くして董子を睨む。そのの董子に与える恐怖は昨日とは段違いだ。

「いやあああつ！ 誰かつ、あいつを討ちとれつ、誰でもいいっ！」

昨日とは違い、董子はそのに留まる事が出来ずに思わず馬を後方に向けて奔らせていたのである。

第39話「アルテナの脅威」

1

「逃げるんですか！？ 志道董子ッ」

アルテナは董子が馬を翻して、後退するのを見逃さなかった。
自らの栗毛の馬に鞭をくれると、それを追う。

「董子様に近付けな！」

部下達に檄をくれて、アルテナの前にまた一人の女武将が立ちはだかる。

「アルテナ、私と勝負しろっ！ 私の名は……」

「興味ありませんっ！」

馬上から全力で通り過ぎざま、方天画戟一閃。
女武将は名乗りも上げられず、横風ぎに胴体と下半身に分別されてしまう。

「おのれ、アルテナ！」

今度は木製の大金槌を持った太った中年男武将。

「俺の金槌で馬ごとぶつつぶしてやるぜ！」

一気に駆け寄り、馬上から金槌を両手で振りかぶるがそれが振り下ろせない。

「あら!？」

振り上げた木製の金槌に方天画戟の刃が刺さっていたのだ。

「ふ、振り降ろせんっ」

「お名前を……」

必死に金槌を振り下ろそうとするが、一寸も動かせない中年肥満男、方天画戟を左手一本で持ってアルテナは距離を詰め、口元を緩めた。

「お、俺はが……」

「やっぱいいです、全然タイプじゃないです」

素っ気なく、答えて残った右手での平手打ち。

肥満男の首はあらぬ方向に曲がり、馬上から彼は崩れ落ちた。

「っ、強すぎる」

「逃げろっ!」

「さすがはアルテナ様」

「この国一の豪傑だ」

アルテナの強さは開戦すぐに董子軍を震わせ、丁原軍を奮い立たせる。

「さすがはアルテナだ、さあ総大将は逃げ腰で兵士も及び腰だ、数

の差などもうないぞ！」

意気揚々に丁原が命令を下すと、丁原軍は董子軍を一気に圧しめる。

「不味いな……全軍落ち着け、数はこちらが上なのだ、アルテナとて万の兵士を討ち取れる訳ではない、落ち着くんだ！」

華蘭が必死に崩れだした味方を督戦し、踵を返してアルテナから逃げる董子に代わって部隊に指示を出す、一度落ちた士気を再び高めるのは余程の名将にも難しい事で、ましてやアルテナに付け狙われて董子は逃げているのだから、それは不可能に近かった。

『だが、突出したあの女の戦況に惑わされずに周りの部隊から上手く立て直していければ……』

華蘭は周辺の部隊長達に伝令を飛ばす。

味方は五万、敵は一万。

非常に大雑把な言い方をすれば、二万の味方が機能してくれれば、残りの三万が逃げようが、遊ぼうが、圧倒的に有利なのだ。

董子が指揮が出来ないのならば、華蘭が指揮を取り、独自の判断で伝令を発して各部隊を動かす。

二人の間には、それが可能な信頼関係がすでに存在していたのである。

バタバタとアルテナから逃げ回る董子。

味方を駆け回りながらも、華蘭が控える右翼にはまるで寄ってこないし、アルテナとの距離も縮まり広がるを繰り返している。

「無様ですがよくやってます、董子様」

それを見て華蘭は強く頷いたのだった。

2

「強いわ、戦況を変えてしまう強さだわ」

「そうだな」

唸る支永真里亜に祐一が素直に同意すると、彼女は呆れ顔をして、

「それにしても有り得ないのが志道董子、総大将があんなに逃げ回って権威も何もないわ、まったく有り得ないわ、有り得ない」

と、かつての上司を蔑んで怒りを露にする。

「まったく、あれじゃ周りの兵士も逃げたくなる、報われないぜ」

祐一も同じような意見を素直に胸に抱いて眉をしかめたが、傍らの未来はそうでは無かった。

「あのババア、あんなにしぶといとは……本当にやりにくいわね」

そう呟くと腕を組んで不敵な笑みを見せたのである。

「天草……志道董子はしぶとく逃げ回ってるけど、アルテナにはま
ったくかなってないぜ」

「ばーか」

未来の短い返答は何も解ってないのね、と言わんばかりの容赦の
ない口調。

「なっ……」

祐一は絶句してしまう。

「あいつはいきなりアルテナに武將を何人も討ち取られて、手痛い
打撃は受けたけど、まだ会戦の勝利は全然諦めてないの、いわゆる
勝つ為の行動を追い詰められながらもしぶとく続けているのよ」

「勝つ為の行動！？ 総大将が逃げ回って味方をめちゃくちゃにし
てか？」

祐一は未来を怪訝な顔で見たが、腕を組んだ未来の表情には志道
董子の行動を嘲笑する感情は一切感じられず、むしろ何か手強い相
手に会った時にそれを嬉しがる様な笑みが見えたのである。

「でも……天草殿、どうやら人物は丁原の軍にもいるようですよ」

祐一の傍らにいたアーシェが未来に話しかけて、丁原軍の一角を
指差す。

未来は腕を組んだまま、アーシェの指を差した方向をしばし見つ
め、再びアーシェに振り返り、

「本当……あんたも解ってたのね、あいつも欲しいけどアーシェちゃん、私はあんたも欲しくなっちゃったんだけど、どう？ 私の妹にならない？」

と、いきなり笑顔で切り出したのだった。

「こちらに斬り込んできた奴がいる！？ あと少して右翼の動揺は収められたというのにつ！」

華蘭は沈痛の面持ちで舌打ちをした。

華蘭率いる右翼部隊の収まり始めていた混乱と動揺を再び突いたのは、如月遼率いる三千の兵であった、遼が自ら先頭に立ってのそれは錐の様に華蘭部隊に突き刺さる。

その突撃は鋭く、そして闇雲ではなかった、正確に右翼部隊の司令官華蘭のいる場所を目指していたのである。

「チッ……華蘭が持ち直せる寸前につ、誰よ、余計な事をして！」

アルテナからの追撃を味方のおびただしい犠牲を盾に器用に逃げ回りながら、華蘭部隊の復活を待ち望んでいた董子は馬上で舌打ちをした。

アルテナの武勇は確かに恐ろしい、それも喻えようもない力だ。

しかし単純、犠牲をかえりみなければ自らを囚にして操れる。

董子はそれに気付き半ば本気で、無様な逃走をして華蘭率いる右翼部隊へのアルテナの脅威を遠ざける為に中央、左翼部隊を逃げ回ったのだ。

もちろん、これは前もっての打ち合せではない、アルテナの予想を越えたあまりにも強力な武力に即応した董子と華蘭の見事な呼吸による犠牲覚悟の対応策。

実りつつあった。

だが、それが強力な突撃力を発揮する部隊のせいで開花を前に潰されようとしているのだ。

「ここは……退くしかないわね、諸将の前で負けるのは痛いけど、数に余裕がある内に退かせてもらう」

董子はそう呟くと、

「全軍退却、洛陽に引き揚げるわよっ！」

そう叫んで手を大きく挙げたのだった。

第40話に続く

第40話「欲しがる二人」(前書き)

改題しました。

第40話「欲しがる二人」

1

「敵が退却を始めたぞ！」

丁原軍の兵士達は戦場を離脱していく志道董子軍を指差し、沸き返った。

「敵の兵を減らしておいて損はない！ 追撃だ、徹底的に叩けっ」
「わかりました父上、二度と立ち向かう気力が無くなるくらい、徹底的に追い駆け回してやります！」

馬上の丁原が命令すると、志道董子を追い回し続け立ちふさがる敵を倒し続けたアルテナが、汗だくの顔で振り返った。

鎧に何人分か判らない返り血を浴びて、得物の方天画戟も血塗られている。

だが、少女の顔は汗にまみれているが、満足げでまったく疲労感を感じさせなかったのである。

「よし、いけっ！ 五千の兵を預ける、脅える志道董子の心胆を更に凍り付かせてやれ！」

「はいっ！」

養父に命じられて、アルテナは元気に返事をする馬に跨り、弓から放たれた矢のように走りだした。

「アルテナが追い駆けていったのか……」

退却していく志道董子軍を急いで追跡するアルテナ率いる味方の軍勢を如月遼は見つめた。

細く長いツインテールにロングヘアーの金髪が馬上で風になびく。

「遼様、我々もアルテナ様と一緒に敵軍を追跡しましょう、敵は算を乱しています、いくらでも手柄の上げ放題ですぞ！」

「そうは思わない」

青年副将の提案に遼は首を振る。

「敵は今の戦いで見た目は総崩れで敗れたとはいえ、実際に死傷したのは万までは達していない、いまだに我々の数倍である事に変わりはないから」

「しかし……このままではアルテナ様に勝利の全ての手柄が……」

俯き未練がましい態度を取る青年副将。

それに対して遼は、

「情報によれば志道董子軍はまだ洛陽周辺に万単位の兵力がある、それらが後詰めに残されていたら追撃は逆に危ない」

そう説明してから、

「だから一緒には追跡しない方がいい、もしもの時に備えて、アルテナ部隊を支援が出来る様に少し距離を置いた後ろを進む……それに味方のアルテナと手柄争いなんて興味がないから」

と、美しい碧眼を細めて命令を下したのである。

「偉い！ スゴくいいわ……如月遼ちゃん」

拍手と遼を誉め讃える少女の声。

「あなたは！？」

拍手と共に聞こえてきた言葉に振り返り遼は声を上げた。
傍らに玲夏を連れた未来が笑顔で立っていたのである。

「天草様、あなたは後方から観戦されていたのではなかったのですか？」

「いやあ……あなたの見事な戦いに見惚れてやってきたのよ！ いやあ流石は私の惚れた遼ちゃん」

未来は腰に手を当てて笑う。

「アルテナを観てなかったんですか？ 董子軍を打ち払ったのはアルテナのお陰ですよ」

「そうは思わない」

未来は即答する。

「確かに相手を押しまくったのは、アルテナかしんないけど、勝ちを決定づけたのは遼ちゃん、それ自分でも解ってるわよね」

「……」

遼は返答しない、それを自ら肯定するのをしたくなかったからだ。

「あんたが態勢を立て直しかけてた敵の右翼に突っ込まなかったら、下手したら逆転されてた可能性もあったからね、あのオバサン……ああ志道董子ね、あいつは途中からアルテナを引き付けた、まったくオバサンはしたたかで油断ならないわ」

未来は笑顔を浮かべて肩を竦める。

「褒めてもらえたのはうれしいです、けれど私はこれからアルテナの後につかないといけないから……これ以上の長話は付き合えません」

得物の長柄の鎌を持ち馬を走らせようとする遼。

「いってらっしゃい、勝ち戦にも油断しない冷静さがあるトコも好き！ ホントにぜーったいに私の物にするからね！」

そう言ってニンマリ笑いながら手を振り、更にウィンクする未来。

「知りませんっ！」

背を向けて馬を進める遼だが、対応をどうしていいか判らずに迷い赤面してたのだった。

結局、アルテナの追撃は志道董子軍に更に損害は与えたが、大きい物ではなかった、原因は洛陽城近辺に董子軍の二万の援軍が姿を現し、退却支援に駆け付けたので、遼がアルテナを止めたからである。

結局、丁原軍も一万の兵で十万以上の兵力を擁する洛陽城の攻略などは当然できず、兵を引き洛陽の北で陣地を構築すると、両軍睨み合いの態勢で夜を迎えていた。

祐一は幕舎のベッドに身体を潜り込んでいる。

「しかし……志道董子と丁原さん、もちろん丁原さんに勝ってもらいたいけど、志道董子もしぶとそうだな、兵の数も多いし、いくらアルテナが頑張っても簡単にはいかないだろうな」

この時代の戦いは率いる武将の強さが物をいうが、やはり数は大切だ。

今日は勝ったがアーシェの話によれば、志道董子軍にとっては諸将の目の前での敗北は痛いには痛いだが、兵力的には致命的な敗北にはほど遠いとの事だ。

まだまだ志道董子には余裕があるのである。

「アルテナか……」

ポツリと呟く。

昨夜の記憶が鮮明に甦ってきてしまう。

「可愛かった……な」

正直にそう口に出して一人赤面する。

「ホントですか!？　ありがとうございます!」

「なななっ!？」

一人呟いたつもりが、嬉しそうな返事に祐一はベッドから飛び起きる。

「えへへへ……また来ちゃいました祐一様、驚かれました!？」

そこにはほんの数時間前まで方天画戟を振るい、血みどろになり万の兵士達を震えさせた少女が金髪の後ろ頭を掻きながらペロツと舌を出していた。

「あ、あ……アルテナ、人のテントに入ってくる時は声をかけ……てだな」

「いいんですか?」

ベッドに上半身を起こした祐一にアルテナはズイツと顔を近づけて微笑む。

「え……!？」

「そんなコトしたらアーシェさんに見つかるかも」

「ア……アーシェ!？」

「私は別にいいんですけどね」

吃る祐一にアルテナはグツとのしかかる。

「アルテナ!？」

「ああいう戦をしちゃうとホントに……もう、我慢できなくなっちゃうんです、アーシェさんに見つかるうが、今は祐一様欲しくて欲しくて堪ないんです」

そしてアルテナは妖しく舌なめずりすると、祐一の顔をグツと掴み強引に唇を重ねてきたのである。

第41話に続く

第41話「逃げる女」

1

「夜の見張りですか？ 御苦労様ですね」

陣中にあり、武装を解かず、夜間警戒の見回りをしていた如月遼は少女に声をかけられる。

美しい少女だ。

首の後ろで束ねて、背中に流した金髪。

丸みがある綺麗な碧眼の瞳、鼻は少しだけ高くスツと通り、唇は薄い。

美しさへの成長過程に、まだ十分な可愛らしさを残した整った顔立ち。

体格は小さい。

遼の身長も百五十八？と高くはないが、彼女は更に低そうだし、体格も幼児体型で腰にぶら下げた偃月刀がアンバランスに見える。

「どうかされましたか？」

何者か分かりかねた遼が、少し訝しげに訊ねると、

「いえ……私は丁原様に賛同し、宮中と一緒に脱出した松平祐一の妹のアーシェ・アルザートといいます」

美しい娘、アーシェは丁寧に頭を下げる。

「そうですか、松平様の妹君ですか」

主君と共に志道董子に立ち向かう者の妹と知り、遼は少し硬めの表情を崩した。

「ええ……あなたの本日の戦い、洛陽の城内まで主人を救けにこられた際の見事さに一目お会いしたいと思ったのです、そして勝ち戦の夜もまったく油断されていないご様子、まことに感服しました」

笑顔を見せるアーシェ。

「いえいえ……そこまで言われると照れます」

好感の持てる態度に、遼はニツコリ笑い、

「アーシェ様、私はこれから食事なのですが、まだ済ませていないのならば一緒にどうですか？」

と、自らの幕舎を指差したのだった。

志道董子軍との対峙の途中である、生真面目な金髪の美少女二人の食事は酒は入らなかったが、兵法や武術、現在の政治状況にまで及び話が弾む。

初対面とは思えない程に互いの知識、意見を言い合える。相性がいいのだろう。

片方の意見に迎合する訳でもなく、反論のみを繰り返す訳でもない。

普段、そういう語り合いの出来るだけの相手が近くにいないのか

もしれない、アーシェの場合はミオ、遼の場合はアルテナだが、政治状況やその倫理観、そして様々な識見を動員しての語り合いの相手にはそれぞれ荷が重すぎたのだ。

「いやいや……遼殿と語り合うのは楽しいです」

「私事です、アーシェ様の知識に良い勉強をさせて頂いています」

互いに笑い合い、語り過ぎて渴いた喉を茶で潤す。

「ところで遼殿、丁原様の養子のアルテナ殿ですが、豪勇にして無双の力を見せて頂いたのですが、どのような方ですか？」

アーシェの問いに、

「アルテナはとても優しい娘です、戦場を離れば、朗らかで人思いです」

遼は頷く。

「そうか……それは人物だな、丁原様も麾下のあなたといい、アルテナ殿といい、鼻が高いだろうに」

「ただ……」

アーシェの言葉に遼はポツリと呟いてしまう。

「ただ!?!」

アーシェは遼を覗き込み、聞き返す。

「難儀している事が……いや……いいです」

「難儀している事！？ 私でよければ相談に乗りましょうか？」

話す事に躊躇のある様子の遼にアーシェは顔を近づけた。

実は無理に詮索するような事でもないとは思うのだが、自分が意識してしまう程の勇を誇るアルテナの何かしら弱点のような物が聞けるかもしれないという心が働いたのは否定できなかった。

「アーシェ様は平気だと思いますが、ご他言は……」

遼は俯き、しばし考えてから前置きし、

「あの……アーシェ様は男女の事柄にもお詳しいのでしょうか!？」

そう言いにくそうに切り出してきたのである。

2

「あの大人しそうな眼鏡の女子がそんな一面があろうとはな……」

すっかり意気投合し見送られ遼の幕舎を出て陣中を歩くアーシェは星空を見上げて呟く。

遼からの相談はアルテナが見せる美男子への強い欲求。

遼が言うには相当な美男子にしかそうはならないが、一度夢中になった男子には何を捨て置いて、かなり強引にでも欲求を果たそうとするらしく、前には一人の美しい少年を欲しがり、強引に奪い、その少年の恋人の少女と殺し合いに発展しかけて、遼と丁原で必死に止めた事があるらしい。

その件の後にも夢中にまではならないが、男なしではというアルテナには、ほとほと困っているというのだ、それも普段は大人しめの普通の少女であるから何か起きるまでは、まったく気付きにくい、と遼は言った。

「英雄色をなんとやらというが……聞くんじゃなかった、遼殿に変な気を使わせてしまったな」

結局、アーシェはロクな答えが出せず無理に話を訊いた事を謝り、遼に気を使わせてしまったのだ。

所々に篝火が灯る陣中を歩きながら、無双のアルテナの何かしらの弱点を知ろうとした自分の軽率さを反省して星空を見る。

「アルテナか……」

洛陽からの脱出行。

アルテナが祐一にとった態度を思い出す。

「まさかな、会ってからまだ数日だぞ」

苦笑して自らの幕舎に向けて歩みを進めるが、脚が止まり、

「顔ぐらい見せておくか」

と、踵を返して祐一の幕舎の方向にアーシェは歩きだしていた。

揺らめく蝋燭の灯りに照らされた二人は、激しく求め合っていた。
裸で抱き合い、唇を強く重ね合う。

「ゆ、祐一さまあ」

金髪の眼鏡の少女は、甘い声を上げ、

「ア……アルテナっ！」

祐一は快楽に耐えるように少女の名前を呼ぶ。
激しく交わる二人。

「ゆ、祐一さまあ……わたし、わたし……祐一様の虜になりますう」
「お……俺もっ、アルテナッ、アルテナッ」

二人は互いの名前を何度も呼び、最後に唇を吸い合いながら絶頂
を迎えて一緒に果てた……

『嘘だ、嘘だ、嘘だ！』

『何故！？ 何故！？ 兄上とあの女がっ！』

『斬ってやるっ！』

『兄上も！？』

『仕方がないだろう、誘われたら兄上も男、アルテナに強引な所がある
と聞いたばかりだろうが！』

『嫉妬かっ！？』

『斬れ、兄上を汚したあの女を斬ってしまえっ！』

『兄上もあの女に夢中になつてゐるように見えたぞ!』

『しょうがないだろう、男の性とも言ふだろう?』

『見なかった事にしろ』

『私も……』

『やめろつ、あの女と同じだろうが!』

『夢だ、覚めろ!』

『さめろさめろさめろ!』

自制できない。

僅かに開いた幕舎の入り口に立つアーシェは今、まるで下半身が自分の物でない様な感覚に捉われる。

激しく求め合い、果て、余韻をまだ抱き合い感じ合う目の前の男女二人を見て脚が震えている。

そして……ようやく出来た事がその場を音を立てず、逃げ出す事だけだった。

第42話に続く

第42話「白状と抱擁」

「いきなりだな」

「別に……」

翌日、兵達がまだ朝食の準備に取りかかっている頃の祐一の幕舎。目を丸くした祐一に、アーシェはそう答えてから唇を噛む。

「いつまでも丁原様の陣営に留まる理由はまったくありません、それに対していきなり何もありません」

アーシェの口調に刺はないが、視線は細く鋭い。

「そりゃそうだけど事態は緊迫してるんだ、こんな時にここを離れて何処に行くんだよ!？」

『緊迫している時に、あの女と兄上は何をしていたというのだ……』

祐一の言葉に、そう言い返したくなる感情をグッと抑えて、

「我々は鳳公子様の元を意に背き出ている状況です、今は鳳様も洛陽で状況を見守っているでしょう、その前に我々が先に北平に帰ってミオを連れて出なければ……ミオや倉子、そしてパーティーにまで迷惑がかかるかもしれません」

アーシェは、なるべく落ち着いた声で告げる。

昨晚、考えた丁原の元から立ち去る口実だ。

鳳公子の元を離れたのなら、彼女の本拠地にいるミオ達を迎えにいかねばならない。

その後の事は今はどうでも良い、義勇軍を独自に立ち上げるのもよし、落ち着いて趨勢を見守るもよし、一度遙か北方、幽州北平に行ってしまうば、簡単に洛陽へは帰れないのだ。

とにかくここを離れてしまいたい。

これが今の望みだ。

「ミオ達か……」

祐一は腕を組み何かを考え始めてから、

「でもさ、公子さんの元を出たと言っても、公子さん自身が俺達の行動をどう見てるかで、後の俺達の行動を変えないといけないんじゃないか？」

そうアーシェを見つめてくるが、

「意味が判らん」

乱暴な一言でそれを返し、アーシェは祐一の視線を睨み返す。

理屈はない。

とにかく、ここを離れるのに邪魔になる意見は聞きたくなかった、努めて冷静な感情でいたかったが、早くも崩れ去る。

「どうしたんだよ!？」

「なんか変だぞ!？」

祐一はアーシェの態度に眉をしかめつつも、

「だからさ……今、洛陽にいる各地から集められた諸公のかなりの割合の者は、きっと皇帝を盾にして威張り腐る志道董子に良い感情を持っている訳がないんだ、公子さんもそうだとしたら俺達の行動に志道董子の前では取り繕うだろうが、心の奥ではそうは悪くは思っていないかも知れないだろ!? もしそうだったら、このまま本当に公子さんの前から立ち去るのはどうかなとは思うんだ」

と、両手を広げて説明する。

「実際に立ち去っているのだし、確認のしようもない、おそらく公子様に迷惑はかかっているのだから下手な未練は残さないほうがいいに決まってる」

アーシェは目をつぶる、自分でも反論の為にした反論だと思う愚かしい言葉だと思ってしまう。

だが止められなかった。

何を理由にしてもここから離れたい、いやアルテナから祐一を引き離したい、感情の歯車はどの方向かは自分でも判らないが、回り始めているのだ。

「アーシェ!? お前らしくないぞ」

「いつもの私だ!」

心配げな祐一に噛み付いてしまう。

「おいアーシェ……聞けて、公子さんの一番頼りにしている壺与ちゃんが、志道董子に黙ってられると思うか!？」

「なせ壺与が出てくるっ」

アーシェは怒鳴った。

「アーシェ!？」

祐一はビクリしているが、もう表立っては抑えていた感情も止まらない。

「壺与だ、アルテナだ、と向こうから寄ってくるからと兄上はかまけ過ぎだ! だいたい……」

「いったい俺がいつ壺与ちゃんとか、アルテナにかまけたんだよっ!？」

元々が温厚な男子ではない、祐一は我慢できずに怒鳴り返した。

「……………」

沈黙。

アーシェは熱くなり、言い返す事はしなかった。
眼で語ってしまった。

明らかな男の嘘への女の全て見透した侮蔑の眼。

美しい金髪の美少女は、その瞳のままで黒髪的美少年を無言で見つめた。

「アーシェ!？」

祐一の問いかけにも何も答えない。

今、アーシェが欲しいのは問いではない、答え。
すなわち白状。

問いかけへの無視が雄弁にそれを語る。

数秒の静寂のあと。

「昨日はアーシェ、寝る前に顔を出さなかったな……たまたま用事でもあったのかと思ってたけど」

そう呟き、アーシェからの視線を外してから、

「ごめん……昨日の晩、俺は……アルテナに夢中になってた」

祐一は白状した。

「見ました」

「そうなのか」

ようやく返事をしたアーシェに祐一は顔を上げる。

「アルテナ……たいそう気に入られている様で」

再び冷静を装うが、それは失敗している、アーシェは唇を噛み視線には怒りが宿っている。

「うん、可愛かったし……惹かれた……気付いたら夢中になってアルテナを抱いていた」

「……っくっ！」

踵を返す。

自ら白状させたというのに耐えられなかった。

聞きたくない！

そんな言葉すら出ず、その場を走り去ろうとする。

「アーシェ！」

だが、祐一はアーシェの腕を捉まえて、こう言ったのである。

「待ってくれ！ でも……でも俺はアルテナとお前を選べ、というなら迷いなく、お前を選ぶ！」

「兄上……」

予想外の言葉に茫然として振り返ってしまう。

「本当に悪かった……だから、行かないでくれアーシェ！」

そう絞りだす様な声をだして祐一はアーシェの左手を握ったまま頭を下げたのである。

再びの沈黙。

自分の左手をすぎるようにして強く握り、頭を下げる祐一。その身体は何かの感情に圧されて震えている。

「兄上……もういいです、わかりました」

アーシェは下げられたままの祐一の顔を優しく上げさせて、頭をかかえる様に抱き締める。

「アーシェ……」

「収まりましたが、私は兄上にここにいてもらいたくはない、もう理由などどうでもいい」

素直な感情をアーシェが吐露すると、

「わかった、すぐにでも丁原様に挨拶して、ここを立ち去ろう……」

祐一は、アーシェに抱かれながら、答えたのであった。

第43話に続く

第43話「矛盾と思います」

1

「なるほど北平にもう一人の妹君がいるのか……志道董子との戦いが続く中で、頼りになる味方にはもう少しでも我が陣営にいてほしかったが……」

「申し訳ありません、元はといえば、鳳公子様に従っていたので……我儘をお許しく下さい」

アーシェを連れて、将を集め作戦会議をしていた丁原の惟幕を訪れた祐一は、北平に向かう事を告げ、彼に残念がられると、丁寧な頭を下げた。

「いつ発たれる!？」

「今日にでも」

丁原の問いに祐一が即答しながらも一瞬、会議に出席していたアルテナに目線をくれたのをアーシェは見逃さなかった、だが敢えて、それを見なかった事にする。

彼の不器用さだ。

悪くは思われていないだろう惹かれた娘の元を去るのに、相手を見無視できる様な祐一では無い事をアーシェはわかっている、それを理解できるかは別として。

「祐一様、それはいきなりではないですか!」

アルテナが感情を隠さない悲しげな声を上げた。

「あ……」

「妹を待たせている」

何かを答えようとした祐一の返事を無理矢理制する形で、アーシエはアルテナに冷たい横目をくれる。

「……!？」

瞳だけで言いたい事は伝わっただろう、アーシエの軽蔑にも見えるアルテナへの視線。

彼女は丸い眼鏡ごしの丸めの瞳をグッと鋭く変えた。

無言。

数秒の金髪の少女同士の睨み合い。

互いに視線は外さない。

アーシエの侮蔑。

アルテナの憤懣。

互いのそれは周囲に隠すつもりが無い感情だ。

たったの数秒間、それも視線のみであるが激しくぶつかった二人の金髪の少女を分けたのは、その場のもう一人の金髪の少女、如月遼であった。

「ならば丁原様、陣中につき、派手にはおこなえないでしょうが、

今日の昼にでも見送りの昼食会でも如何でしょうか？」

「お、おう、そうだな……世話になった松平殿をなんの宴もなく送り出したら、丁原の男がすたるよ、それくらい良いだろう？」

遼の提案に丁原は頷き、祐一とアーシェに笑みを浮かべてくる。

「ありがとうございます、是非とも……では、また後でお伺いします」

祐一はそう答えて頭を下げ、

「ほら、もう会議の邪魔になる、いくぞ」

と、踵を返してアーシェを促したのだった。

2

遼も言ったが、いつ志道董子軍が出撃してくるかわからない状況である、祐一を送り出す昼食会はささやかな物である。

出席者も丁原と遼と麾下の武将数名、祐一と同じくして洛陽を脱出した、天草未来と支永真里亜、そして祐一とアーシェであった。

昼食会の場所である幕舎の中にアルテナの姿は見えないし、席も用意はされていなかった。

「どうやらアルテナは少し気分がすぐれないらしい、合戦の疲れが出たのかもしれないな……」

訊いてもいないうちに、丁原はそう言って祐一に愛想笑いを見せる。

「そうですか……宜しくお伝えください」

「ああ……ささっ、座りたまえよ、大したもてなしはできません」

頷いた祐一にそれを誤魔化すように丁原は愛想よく席を勧めた。

朝のアルテナの態度、そしてアーシェとの視察戦から祐一とアルテナの間に何があり、それがここを引き払う原因になっていると薄々、感づいているのかもしれない。

『もしかしたら丁原様がアーシェとの事を考えてアルテナがここに来るのを止めさせているのかもしれない……それともアルテナがシヨックを受けているのか？ どっちにせよこれは俺のせいだ』

そう考え、祐一は自分の責任を感じてしまうと同時に、胸が苦しくなる感覚を覚えるが、

『アーシェをも傷つけたのに……俺がアルテナに恨まれようとも、その事で胸を痛めようとも自業自得だ、それはいい……でも』

馳走の並んだ席で祐一は顔を伏せた。

決断はした、確かにしたのだが、アルテナがどうしても気になるのだ。

「兄上……」

「な、なんでもない、大丈夫だ」

横の席のアーシェに声をかけられると、祐一は首をブンブンと振る。

「私はまだ何も言っていないのだが……」

目を細めるアーシェ。

「そ、そうだよな……で、どうしたんだよ!？」

動揺を悟られまいとする祐一。

しかし、アーシェは祐一の耳元に口を当て、

「実は兄上、私は如月遼殿と話が合うので、この陣を立ち去る前に少しだけ話がしたい、この後に時間をいただきます」

そう予想外な事を切り出して来たのである。

「……アーシェ!？ 急いでここをでるんじゃないのかよ？」

ふと浮かんだ思いを封殺して、祐一は驚く。

「出たいです、出たいですが……兄上はそれで良いのですか？」

「どういう事だよ？」

「しらばっくれますか？ 仮にも身体を重ねた相手の事を!？」

「アーシェ!？」

祐一は引きつり赤面してしまう。

「私が今、時間をいただきますと切り出した時に思った素直な事を

実行なさってください……」

「え……!?!」

アーシェの言葉が祐一の封殺した思いの封印をあっさり破る。

アルテナともう一度話をしたい……

意識の地の底からはい上がる思い。

意味が判らない、なぜアーシェがこの意識に対して蜘蛛の糸を垂らすのか？

「アーシェ、俺は……アルテナには会えない……会えば……」

「だがそれでも、相手が苦しんでいるのなら会ってしまうのあなたではないでしょうか!?!」

「アーシェ……」

見つめ合う二人。

昼食会の席だが、未来をはじめとする他の武将達は主賓を放って酒も入れてないのに、かなり騒いでいる。

しかし、瞳を交差させ続ける二人の世界は無音。

「会ってくる……会って、ちゃんと話をしてくる」

祐一は立ち上がり、丁原に少し用があります、と断り幕舎を出ていく。

立ち去る祐一の背中。

「……無理だ、あなたはそこまで器用じゃない」

アーシェは呟く。

矛盾した行動。

引き離しておいて戻す。

戻したくせに引き離す。

それは自分でも重々に解っている。

『だが、あなたは見捨てられない、選んで選ばなかった方を捨て去れない』

そんな祐一でいてほしいと……思ったから背中を押したのか？

あと少しであの女から祐一を引き離せたのに……

祐一に選んでもらえたのに……

アルテナに情が移ったのか？ 違う。

それとも……

イツカ、エラバレナクテモ……ステラレナイヨウニシタンジャナ
イノカ？

「ッ！」

声にならない声でアーシェは唸った。

「アーシェ様、どうされました!？」

いつの間にか席を立った遼が、アーシェの席に歩み寄り見つめていた。

その瞳には何かを察する憂い。

「遼殿……」

アーシェはギュツと口元を結んだ後、それをフツと解いて言った。

「ほんの少し……ほんの少しでいいから……酒をくれないだろうか？」

第44話に続く

第44話「策謀」

1

「アルテナ……ッ！」

アルテナの幕舎に走っていき、名前を呼びながら、入り口の重い天幕を開ける。

彼女は将。

兵士や小隊長とは違い、専用の幕舎で一人だ。

「ゆ……祐一さまあ」

少女が泣き崩れている。

金髪にショートカットに丸い眼鏡。

アルテナ。

ずっと泣いていたに違いない、その泣き崩れた顔を見て色々と考えてきた事が、いきなりすべて吹き飛んでしまう。

「アルテナ……！」

うずくまるアルテナに駆け寄る。

「祐一さまあ……アルテナはご、ご迷惑だったんでしょか？」

涙をためてグシャグシャにした顔で祐一を見上げてくる。

まるで子供だ。

「迷惑だなんて……俺は、俺はアルテナを……」

「行かれてしまうなら……アルテナはもう引き留めません、本当は
いてほしいけれど……行ってしまうならせめて……」

目をつぶるアルテナ。

息を呑み、アルテナの肩を掴む祐一。

「俺は行かないといけない、それを使えに来たのに……でもっ、凄
くアルテナを抱きたいっ!」

そう言い放つと祐一はアルテナの唇を奪い、ベッドに乱暴に押し
倒したのであった。

陽が西に落ちかける丘に一人の少女。

落陽の陽が、首の後ろで束ね背中に流した金色の髪を透き通る様
に煌めかせる。

風が草原を駆け抜け、辺りの草花が揺れた。

偃月刀を地面に付け、アーシェは彼方を見ていた。

表情は穏やか、というよりは静かな決心。

自らの気持ちを揺らがせ続けた事への決めごと。

もう決めたのだ。

はるか前に決めていた筈なのに……それは完全ではなかった。

『不器用すぎる』

『見捨てられない』

『理屈よりも身体が動いてしまう』

『不利を承知して、進む道を茨の道にしてしまう』

これでは天下に理想の地を創るのは困難。
だが……

『誰が見捨てても……いい、私だけは兄上が……松平祐一がどうなつてもついていく、生命を賭けて』

それで良いじゃないか、アーシェ・アルザードという女の人生は松平祐一という男に悩まされ、嘆き、怒りながらも彼を支えて生きていく。

それでいい。

「アーシェ……」

名前を呼びながら走ってくる祐一。
時間が経ちすぎている。

申し訳なさげな表情を浮かべている彼をアーシェは目をつぶり、息を少し漏らすように笑い、告げる。

「兄上も仕方がない人だ、しかし夕方になったが、もう発つから丁原様に丁重に挨拶を済ませてこられよ」

「アーシェ……」

「兄上が良いと思われたから、そうされたのだろう、私は何があったとしても兄上の元を離れないと告げた筈だ！」

思わず語気を強めてしまうと、

「わかった、じゃ、丁原様にもう一度挨拶に行く」

祐一は頷き、草原を走り去っていく。

「私はズルい女だ、アルテナの方がよっぽど素直に兄上に向き合っている、素直じゃないから少しの事で心を乱して怒鳴るのだ」

アーシェは遠い背中にポツリと呟いた。

2

「お酒が旨くないわ」

志道董子は不機嫌さを隠さず、杯を置いた。

配下の将を招いての宴の席である、当然招かれた将達には、皇帝を擁し政治の主導を握るまでになった主君の不機嫌さの原因は当たりがついている。

丁原軍である。

睨み合って既に十日が経つが、十倍以上の兵を持つ志道董子軍は相手を洛陽郊外から追い出せない。

それどころか、ここ数日は出撃させただけ負け続けている。

原因は解っている。

一つは丁原の義理の娘、アルテナの化け物じみた強さであり、ここ数日で志道董子軍の将と呼ばれる立場の者を五人も討ち取っているのだ。

もう一つは認識している者は華蘭とそれを彼女に指摘された董子ぐらいだが、如月遼の巧みな用兵にある。

そして、丁原自身も二人に信頼を置き、総大将として戦いを自由にさせている所も大きい。

「まあ、次の酒宴は丁原軍をキッチリ打ち破って祝宴にしたいわね、さあ自由にやってちょうだい！」

あまり自分が不機嫌では、慰労の意味が無い、と董子が手を叩くと萎縮していた武將たちもワイワイと酒と旨い料理を楽しみ始めたのである。

宴は続く。

董子にはそれぞれの武將が挨拶にやってきて、一言二言話を交わして、酌を受けているのだがそれも終わってしまうと上座にあまり近づいてくる者はいない。

やはり戦況に対する自分の不機嫌さに腫れ物をさわる様な態度になっているのである。

『こりゃ……明日、仕掛けても同じだわね……どうしたもんだか』

そう思いながら、酒を一人であおっていると、

「董子様……」

そう華蘭が酒瓶を手にもって来て董子に酌をしてきた。

「華蘭……」

「悩んでおいでですね」

「わかるう!？」

「董子様の事は一番気にしているつもりで……」

「んゝ、可愛い奴!」

董子は上機嫌になり、華蘭を抱き締めた。

「董子様……」

少し困った顔を見せたが、華蘭はまんざらでもない様子、周りの武将もそれを見て、

「お気に入りの華蘭將軍が行かれて董子様の機嫌も直った様だ」

と、ホッとした空気が流れている。

「見てみ!？」 この馬鹿者ども……毎日毎日十代の小娘に良いようにされておいて、まだ私の顔色伺ってさ、機嫌を直しゃホッと一息……まったく使えないわ」

笑顔を浮かべながら華蘭に抱きつき、董子は彼女の耳元で小声で囁く。

「明日からの合戦は、私か徐栄將軍じょえいが先鋒で出ましようか？」

「ダメダメ……あんたや徐栄までが負けたら、ますます部下は動揺するし、洛陽に留めてある諸将にも董子も万策尽きた、って妙な動きをするかも知れない」

董子は首を振る。

徐栄將軍というのは、董子麾下の猛将で現在は洛陽の南に位置した陣で後詰めをしている為、ここの席には来ていない。

華蘭と共に董子が頼りにしている武将だ。

「だからさ……もう数を頼みとした戦いはしない、絡め手でやりたいわ、良い策はないかしら？」

「絡め手ですか……」

抱きついている董子を抱き止めながら、華蘭は少し考えると何か思い当たった様に董子を見つめた。

「董子様、そういえば、密偵や間者から幾つか気になる報告がありました、それが使えるかもしれません……明日にでも検討致しますようか？」

「バカね……」

「え!？」

意外な返事に驚く華蘭、董子は笑う。

「今からよ」

そう答えると董子は、

「みんな適当にやっていて頂戴ね……私は華蘭とお楽しみがあるから！」

と、将達に機嫌良く告げたのであった。

第45話に続く

第45話「接触」

1

「はい……それはかなりの惚れ様でして、彼が丁原の陣を離れてからは毎日、出陣の時以外は塞ぎ込んでいる様子らしいと報告を受けています、あと彼女は生来からそちらが好きとみえて、噂も耐えません……しかし、塞ぎ込んでいる割には戦場での働きには一切の衰えが見えなく不思議ですが……」

董子の部屋。

華蘭は、ベッドに座る董子に首を傾げる。

酒席には華蘭とのお楽しみと告げたが、二人にはそういう関係は一切ない。

男子の少ない時代、女色も広まり、女子同士の婚姻も認められているのだが、董子はその氣に興味は無かった、純粹な作戦……いや、陰謀の相談だ。

「そんなもんよ、アルテナは男も戦で敵を討ち取るのも大好きなんでしょうよ、男を失って仕事にバカみたいに打ち込むのは良くある事……まあ、そういう状態のガキは隙だらけなんだけどね」

董子は腕を組んで、ニヤリと笑い、

「他にアルテナについて情報はない!？」

と、華蘭に訊く。

「他には、騎馬部隊の指揮を得意としていて馬にこだわりがあるとか……」

「へえ……騎馬部隊の？ 私と同じね」

董子は肩をすくめる。

事実である、馬の産地である西涼出身の董子は、騎兵の指揮のスペシャリストで自身も騎乗しながら弓を放つ騎射の技術は西涼でも名に聞こえ、異民族討伐で活躍したのだ。

「馬の方はあれを出すしかないわね、どうせ私には慣れてないしさ……あとは男の子か……」

そう呟きベッドから立ち上がる董子。

「どちらへ!？」

「松平祐一なら顔を覚えてるわ、あんたも剣を持って対峙したならわかるでしょ？ 宮廷に入れてある美男子を徹底的に洗って、似た男の子を探すわよ」

「なるほど……董子様はそういう所で出し惜しみないですね」

振り返る董子に華蘭はニヤリと笑った。

厩舎を歩く二人。

「これは董子様、夜分にどうされましたか？」

馬の世話係が董子と華蘭に駆け寄ってくる。

「あいつを見せてちょうだい」

「え！？ 出すんですか？ 危ないですよ」

驚く世話係。

「構わないわよ」

董子が答えると、

「……わかりました、こちらです」

と、二人を厩舎の奥に案内する。

他の馬とは、数頭分離した場所にその馬はいた。

「赤い……董子様がこの馬を持っていられるのは知ってましたが……雄大な馬体ですね」

赤く燃えるように見える、たて髪に他の馬とはまるで迫力の違う馬体。

「こいつは赤兎馬^{せうま}、駆ければ追いつく馬はいないし、いつまでも走り続けられる真正正銘の名馬よ……ただし……」

「ただし……！？」

「乗り役を選ぶ、武勇に優れた者しか背中を跨がせないのよ」

笑みを浮かべる董子を赤兎馬はギロリと見る。

「董子様は……！？」

「一応、跨がせてはくれるみたいよ」

華蘭の問いに董子は答え、

「でも、本気じゃ走ってくれなかった……それでも選りすぐりの軍馬よりも遥かに速いけどね」

と、付け足す。

「なるほど……ひとかどの武将ならば、例え騎兵出身でなくとも、この馬に興味のない者はおりますまいね、私も一度でいいから、振り落とされなくば、騎乗してみたいです」

普段は大人しい華蘭も赤兎馬の姿を見て、珍しく感嘆して声を上げると、

「まあ、私よりは本気になって走ってくれるんじゃないかしら？」

董子は踵を返しながら、

「さて、馬の次は男よ、松平祐一似のかわいい男の子を宮廷に入れた選りすぐりの美少年から探しちゃいましょう？ あんまり可愛かったら、まずは私が味見するけどね」

と、妖しく舌なめずりをしたのだった。

「……アルテナ様、アルテナ様」

丁原軍と志道董子軍が対峙して、早くも三週間が経過しようとしていた夜。

幕舎で寝ようとベッドに入ったアルテナを呼ぶ声が聞こえてくる。

「!? 誰です?」

志道董子軍が刺客を差し向けてきた恐れもあり、アルテナはベッドの脇にある剣をとり、注意深く周りを警戒しながら返事をした。

「怪しまないで下さい、相国閣下が、実はアルテナ様にどうしても話したい事があるというのです」

「相国!? 志道董子ですかっ! 私が話す事なんてありません!」
「お願いです、どうか話だけでも聞いてください、話を聞いてもらえなければ、僕は……話を聞いてくれるなら何でもしますから」

相国と聞いて、アルテナは幕越しに語気を強めたが、少年らしい相手の声は必死である。

「両手を上げて……こっちに入ってきて下さい」

密偵には違いないが、ただ帰すよりも話を訊いてから逆に利用できないか?

そんな考えからアルテナは幕舎の外にいる相手にそう告げた。
相手がたとえ刺客だとしても、剣を抜いた状態の自分が不覚を取る相手などそうはいない、という自信も彼を招き入れる一因にはなっている。

「ありがとうございますアルテナ様……」

感謝の言葉を述べながら幕舎に入ってくる少年、奇襲すら警戒していたアルテナは別の意味で驚き、口元に手を当ててしまう。

「あ……あなたは!？」

「!？」 僕は志道董子様の元で連絡係をさせてもらってます、桐生きりゆうといいます」

桐生と名乗った少年は自分の驚かれように多少、不思議がりながらも丁寧に頭を下げた。

『祐様に……似てる』

突然、高鳴る心臓。

瓜二つでは無いが、桐生は祐一に雰囲気や顔立ちがよく似ていたのである。

「アルテナ様……ボクの話聞いてください、相国董子様はあなたを高く評価されています、これは貴女の為なんです」

必死に桐生は哀願する。

「勝手に喋らないでください!」

動揺を押さえるようにアルテナが剣先を向けると、

「ごめんなさい、ごめんなさい！ アルテナ様、どうかどうか話を聞いてください、何でもしますから」

泣きそうな声を上げ、その場に伏して謝る桐生。

アルテナはそれを数秒見下ろし、

「……さっきもあなたは何でもします、って言いましたよね、何か困った事があるといつもそう頼んでるんですか!？」

そう言いながらも、上唇をゆっくり舐めた。

第46話に続く

第46話「発端」

1

「アルテナが!？」

「そうなんじゃ……」

遼が訝しげな声を上げると、

「ここ何日も自分の幕舎にこもりっきりになっておる、滞陣中とはいえ、まったく顔も出さなくなってしまうたのだ、遼なら何かを知っておるか……」

丁原は頷き、遼に訊ねてくる。

「松平祐一様が陣を離れられた数日間はかなり落ち込んでましたが……」

「うん、それはあったな……もしかしたら、その事をまだ引き摺っておるのかもしれないな」

フウーツ、とため息をつき、椅子に深く座り込む丁原の顔は総大将というよりは父親だ。

接触が途切れがちの年頃の娘の様子が解らず、マゴマゴしている老将。

「志道董子軍も仕掛けてくる様子もありません、本日中にでもアルテナの幕舎を訪ねますよ」

そんな丁原に遼は優しく微笑んだのだった。

陣中内での部下への命令、訓練、見回り、遼の仕事は戦が無くて
も多忙だ。

アルテナが実戦以外の軍務を嫌い、まるでこなせない皺寄せが確
実に遼の仕事を増やしている。

一万の兵士が生活する陣中は小さな街だ、対陣中の緊張感もあり、
毎日大なり小なりのトラブルが起きて続いていた。

今日もアルテナ隊の兵と遼の部隊の兵士が集団で喧嘩をするとい
う事件が起き、遼が自ら制止に乗り出している。

「やめなさい！ 一体何が原因ですか!？」

両部隊の女性兵同士の集団喧嘩、かなりエキサイトしているが、
流石に将官が叫び出て来ると、皆が大人しくなる。

「何があったか、詳しく話なさい！」

仲間同士のいざこざが戦の足しになる事はない、遼は理由如何に
よっては厳罰に処する心積もりで珍しく部下を怒鳴るが、

「いや……その」

口が重い兵士達。

「話さないのならば、全員を処罰します！ 全員一等の降格です、素直に話せば嚴重注意で許します」

更に口調を厳しくすると、遼の部隊の兵士が渋々、口を開く。

「初めは、アルテナ様と遼様のこの戦の武勲について話していたのですが、あまりにも向こうがアルテナ様の武勲を鼻に掛ける物です……普段の軍務は遼様にばかりにやらせて！」

「向き不向きがあるのは仕方ないでしょう！？」

直属の部下に言われっぱなしでは、たまらないと、アルテナ部隊の兵士が反論すると、睨み合い、再び互いの罵倒を再開してしまう。

「なによ、アルテナ様なんて、幕舎に男の子を住まわせて、一緒に洛陽の街に行ったりして行くせに！」

「戦での働きには影響ないわ！ 志道董子軍が最近、戦を仕掛けてこないのも、アルテナ様を怖れているからに違いないんだから！」

「もう止めなさいっ！」

遼が怒鳴る。

その怒鳴り方は冷静ではなかった、たちまち兵士達は鎮まる。

「……とにかく、あなた方は嚴重注意に処します！ それぞれの兵

舎に帰って反省していなさい！　これ以上、軍紀を乱すようならば、私の部隊もアルテナの部隊も関係なく、私の鎌が斬り捨てますよ！」

自分の部下も、アルテナの部下も関係なく厳しく接する。

平等な遼らしい裁定に周りからは見えただかも知れないが、実は当人はそれどころでは無くなり、ただ、兵士達の騒ぎを手早く収束させただけに過ぎなかったのである。

平伏して遼に謝罪してから、それぞれに別れて立ち去る兵士達。

遼はそれを見送ると、唇を噛んで走りだす。

「アルテナ……男の子を陣中の幕舎に入れて、あまつさえ敵地である洛陽に行っている！？　そんなバカな事……」

自分の部下がアルテナのその話をした瞬間から、その喧嘩の裁定など、遼の頭の中から飛んでいた。

単なる誹謗中傷の類であって欲しい、それを確かめなければ……
遼は真っすぐに、アルテナの幕舎に向かっていった。

2

「アルテナ様はお休みでございます、如月様のご来訪は伝えておきます、またのお越しを……」

幕舎の前に立った体格の良い女衛兵は、頭を下げて、儀礼的に遼

に告げた。

「まだ夕方だし、寝るには早い……それに私が起こしても、アルテナが怒るとは思わない」

遼が引き下らずに、瞳を細めると、

「と、とにかく、今日は体調が悪く、誰とも会わないとの事です、如何に如月様でも通せば、私が罰を受けます」

と、かなり困った様子で首を振る衛兵。

その態度に遼の疑念は更に深まる。

「あなたに迷惑はかけない、体調が悪いなら尚更、会わないといけない、アルテナがあなたを罰するなら、頑として護る」

遼は強引にアルテナの幕舎に向かい、早足で歩み寄る。

「遼様、困ります！」

衛兵が大仰な声を上げて、遼に追いつがる。

「……触るなっ！」

今の大仰な声は、もちろん遼への制止が目的ではない、幕舎の中にいるアルテナへの警報だ。

遼は普段にない厳しさを衛兵を怒鳴りつけ、幕舎の正面でなく、後ろに廻るように走った。

「……お前かっ！」

遼は叫ぶ。

そこには、ちょうど今から身を屈めて、幕舎の幕を上げ、外に逃げ出そうとする少年がいたのだ。

「待てッ！」

「ひいいっ」

衣服を急いで持っただけの自分やアルテナと同じ年端の少年は、遼の制止の声に悲鳴を上げて走る。

あたふた慌てて、もつれる足取りの彼に難なく追いつき、思いっきり背中を押す。

「アワワワワッ」

逆に勢いがついてしまい、情けない声を上げ少年は衣服を放り出し、全裸で地面に叩きつけられる。

「動くな、狼藉者！」

「うううっ……」

腰の剣を抜き放ち、転んだ体勢のまま、脅えながら振り返る少年に突きつける。

だが、その顔を見た遼は自分の目を疑った。

『松平……祐一！？ いや……ち、違うッ！？ だが似ているっ』

動揺からの、一瞬の意識の隙。

「遼、剣を動かしたら、あなたを刺しますッ！」

そこに聞き慣れた親友の怒鳴り声と共に、背後から遼の頬のすぐ横に、見慣れた戟の穂先が突き出されたのであった。

続く

第47話「恋感情偽計」

1

「うむむむ……」

丁原は唸る。

それは報告した本人にも、十分に予想がついていた事である。

「大人しそうな少年で、顔立ちが松平祐一様に、とても良く似てられます、アルテナが入れ込んだのも、そこが大きいのではないかと思います」

そう推測してから、遼は両手を後ろに組んで、目の前に座った主君の反応を待つ。

「あの娘は！ 平時ならば、いざ知らず……戦時に、それも陣中で男を幕舎に住まわせ、あまつさえ洛陽に出入りするとは！」

丁原は激する。

「……」

遼は特に反応しない。

報告は正確に行った、アルテナをかばい立てするつもりは、一切なかった。

方天画戟を頬に突き付けられ追い返されたのだ、実の事を言えば、得物の大鎌を持ち、少年を陣地侵入の罪で斬り伏せ、説教しようと

も考えたのだが、おそらくは尋常ではない争いになる事だけは避けなければと思い止まり、帰ってきたのである。

この際、主君でもあり、養父の丁原にきっちりと灸を据えてもらおう。

その結論に達し、遼は敢えて親友をかばい立てせず、全てを伝えたのだ。

『普段はアルテナには滅法甘い丁原様にも、たまにはしっかりと叱ってもらわないと』

至極、正論であろう。

遼は父親であり、主君でもある丁原にアルテナの素行を糾してもらおう、とただけだ。

しかし、この判断が後に痛恨の大事件に発展するとは、賢明な彼女もこの時は予想だに出来なかったのである。

翌日、アルテナは丁原の幕舎に呼び出される。

それを伝えるにやってきた者に始めは、体調が優れないから、と断りをいれたアルテナだが、ならば丁原自らが見舞いに参る、と突っ込まれて、仕方なく自分から出向いたのだ。

その姑息な手段が更に丁原を怒らせる。

武勲があるから、といったの軍紀違反はいくら養女といえども、いや、そういう立場だからこそ見逃せないと、丁原は武将達の前で彼女を叱咤し、強く怒鳴り付けたのである。

平謝りを繰り返すアルテナ。

たが……他の武将への示しもある、簡単に許す訳にはいかない、アルテナには自らの手で、責任を処理させなければ……

そう考え、丁原はこうアルテナに告げる。

「陣中である幕舎に囲っていた男を、明日の朝までに自らの手で引っ立ててくるのだ！　もし出来なければ、こちらから捕らえにくぞっ！」

いつも甘やかしてくれた優しい養父の怒り、アルテナは逃げるように走り、自らの幕舎に駆け込んだ。

武将達が持ち場に戻っていき、丁原の幕舎には立っている遼と、椅子に座る丁原が残る。

「わしも甘い……」

「宜しいでしょう」

ため息をつく丁原に、遼は微笑んだ。

「明日の朝までに、と言え……あの娘は男を遠くに、逃がすだろうて」

「逃がせばいいでしょう、戦時に陣中に囲い、洛陽に遊びに行くような事が問題なのです……平時に呼び寄せて、二人で洛陽見物に行くのは、誰も止められませんからね、あくまでも戦場だったからの問題」

そう理解を示して、遼は頷くが、

「……そうだのう、まあ、二度と無いよう、肝は冷やしてほしいな……しかし、甘やかしてしまう」

椅子に頬杖をつき、苦笑する丁原。

厳しく怒ってみせたのも親子の情からだ。

それが十分過ぎる程に解る遼は、

「平気ですよ」

娘の対応に困る老将に、再び優しく笑う。

「苦勞をかけるな」

「私の事は心配なく」

「……アルテナの事は、くれぐれも頼む、どうか見捨てないでやってくれ、遼がいてくれたならアルテナの未来も安泰」

「はい、見捨てません……大切な親友です」

主君の老将の哀願に、遼はそう答えたのだった。

2

「桐生くんっ！ 逃げてっ、すぐに逃げてっ」

自分の幕舎に駆け込むなり、叫ぶアルテナ。

「アルテナ……やっぱり、ボクは出ていかないとダメなの!？」

困われた少年、桐生は悲しげな表情を見せる。

「うん……明日の朝までに捕まえろって」

「嫌だっ、離れたくない、アルテナというっ!」

桐生は涙を浮かべ、アルテナを抱き締め、唇を重ねる。

「私だって……でも、でもっ、お父様も遼も、認めてはくれない!」

アルテナも涙を流す。

「ボク達はこんなに好きあっているのに、一緒にいられないの?」

「……」

桐生の問いに、アルテナは何も答えられない。

「アルテナ、愛してる」

「私も……だけど、だけど……誰も私達を認めてくれない」

抱き合う二人。

「大丈夫だよ……」

桐生は耳元で囁く。

「え!？」

「洛陽に行こう」

「無理ッ、今、洛陽に行ったら……お父様に、」

「洛陽には……ボク達を認めてくれる人がいる、二人で暮らせるんだ」

桐生の声は小さい。

「それは……」

「志道董子様……」

「えっ!？」

思わずアルテナは目を見開いた。

深夜。

洛陽の街の場末の倉庫。

「来てくれたわね」

蠟燭の灯りに照らされた志道董子は、アルテナに好意的な笑顔を浮かべる。

「志道董子……」

桐生と並んだアルテナは、目の前の董子と華蘭を見て呟く。

戦っていた敵軍の総大将である、宮中大広間での一件もあり、見間違える筈がない。

「どうやら、丁原の下で不自由な様ね……貴方くらいなら、大將軍の地位もあるというのに」

董子はそう言って、アルテナと桐生に歩み寄る。

「……桐生くんはあなたの部下なんですか？」

「そうよ」

平然と答える董子。

「だまし……」

眼鏡の奥の瞳をアルテナは細めるが、

「そうよ、でも……桐生君たら、本気であなたに惚れちゃって、私の命令違えるんだもん！」

董子が両手を振って、ため息をつく。

「えっ!？」

「隙を見て暗殺しろ、と言ったのに……桐生くんったらアルテナちゃんに惚れちゃってね、どうしても味方に引き入れるからって聞かなくてね!」

「……桐生くん」

アルテナは驚いて、桐生に振り返る。

「どうする！？ お断わりして帰るなら止めない……でも、桐生は置いていってね、勝手に作戦変えて失敗った奴を許すほど、私は甘くないの！」

「……桐生君」

董子の言葉に、息を呑むアルテナ。

「ボクはアルテナを殺すなんて出来ないっ、それ位なら……ボクが死ぬッ」

桐生は絶叫する。

その声の響きを最後に、薄暗い倉庫が十秒近く、沈黙に包まれる。

「わかりました」

ポツリ、とアルテナは言った。

「私は……あなたの部下になります……」

「証拠がないっ」

返す董子。

「どうすればっ!？」

「丁原の首を持ってこい、そうすれば大將軍も、桐生もあげる」

即答。

「アルテナ……いいんだ、ボクを残して、帰って」
「平気……」

見つめてくる桐生に微笑むと、アルテナは董子を見据えた。

「わかりました！」

「良い返事よ、桐生は預かるから……これに乗って行きなさい！」

董子が華蘭を促すと、曳かれてきたのは一頭の馬だった。

赤い……燃えるような赤い縦髪の馬。

「この……馬、凄い」

一目見て、アルテナは息を呑む。

良馬を産する北方出身のアルテナでも、見たこともないオーラをその馬は放っている。

「そう、凄いお馬さんよ、赤兎馬って言うの」

「赤兎……」

華蘭から手綱を受け取るアルテナ。

「さあっ、行ってらっしゃいっ！ 行って丁原の首を取ってきなさいっ」

「……はいっ！」

アルテナが跨ると、赤兎は高いな鳴いた。

「お見事……」

赤兎が走り去った後、華蘭は頭を下げる。

「あんな色ガキ余裕よ」

董子は呟く。

「これで明日の朝には、丁原の首が届きます」

「果報はなんとやら」

華蘭に董子は肩を竦めてから、傍らにいた桐生に歩み寄る。

「董子様……」

先程までの敵蓋心すら感じさせる様子はどこへやら、一転して目を輝かせる桐生。

「あんたも良くやったわ、さて……ご褒美上げるけど、何が良い！？」

妖艶な董子の笑み。

「董子様っ、ボクは……董子様とすぐに……したいですっ!」

桐生は我慢できない、と董子の豊満な胸元に飛び込んでくる。

「おう、カワイイ……カワイイ……ゴメンねえ、任務とはいえ、あんな色ガキに貴方をむさばらせて……今夜は好きナだけ……私を抱かせて上げる」

「わぁいっ!」

董子に頭を撫でられ、胸に顔を埋めた少年は歓喜の声を上げるのだった。

48話に続く

第48話「萌芽」

1

「遼様ッ、遼様ッ！」

後輩の武将である高矢順たかや じゅんが、遼の幕舎に駆け込んでくる。
茶色のセミロングの見かけ地味な少女。
顔面蒼白だ。

「どうしたの？ 董子軍の夜襲！？」

仮眠していたベッドから起き、遼は傍らに立て架けた得物の大鎌
を手に取って聞く。

「それがっ……それがっ」

順は冷静で遼も一目置く武将なのだが、そんな彼女が酷く取り乱
していた。

明らかにおかしい。

「ハッキリ言いなさい！」

遼が強く言うと、順はゆっくり顔を上げた。

「アルテナ様にご乱心ですっ、方天画戟で丁原様を不意に刺し貫き、
何処かへ立ち去りました」

「……！？」

目を見開く遼。

見開いた筈なのに、視界は真っ暗になる。

「丁原様は!？」

遼は走りだしていた。

丁原の幕舎に駆け込む遼と順。

床に敷かれた敷物は真っ赤に染まり、血だらけの丁原は寝かされて、呼ばれた医者が看ている。

「丁原様っ!？」

遼は膝を付き、丁原の名前を呼んだ。

「お……お……」

血だらけの老人は震えながら遼を見る。

「アルテナがつ!？ アルテナがこのような事をしたのですかっ!？」

大鎌を持つ手がブルブルと震えだす。

「り、遼よ……」

しかし、老人はその手を抑える様に、皺だらけの右手を重ねてく

る。

「確かにアルテナだ、しかし……しかし、私は草葉の陰からお前とアルテナが争うのだけはみとうない……のだっ」

小さく、絞りだすような丁原の声。

「しかしっ……」

「あの娘には……あの娘の言い分が……あ、あるのだろうて、わたしなど既に、棺桶から首だけが辛うじて出とる様なもんじゃ……」

「でもっ！」

涙が溢れだす。

丁原は助からない。

苦しんでいる。

しかし、彼は娘のアルテナに恨み辛みを何も言わずにいるのだ。

「わ、私が……アルテナの沙汰を丁原様に押し付けたばかりにっ！」

遼は齒を食い縛る。

「それは違うよ、遼はよくアルテナを見てくれた、これからも……
ごっ」

丁原は口から血を吐き出しながら、遼の手を強く掴みこう言ったのである。

「わしの……わしの、む、娘を……た……のむ」

「丁原さまっ、丁原さまっ、丁原さまーっ！」

遼の叫びが虚しく、幕舎に響き渡った。

こうして……并州刺史丁原は義理の娘の手にかかり、アッサリと乱世から退場する。

その直後、アルテナを先頭に、志道董子の約三万の軍勢が押し寄せると、如月遼以下、旧丁原軍は抵抗する事もなく降伏し、遼以下の武将も志道董子に降ったのである。

2

「まったく……養子とはいえ、アルテナが裏切るとは誤算です」

丁原の死を知ると脱兎の如くその軍を離れて、商人に変装し街道を早足で先を急ぐ一行。

先頭を歩く御堂玲夏は周囲を警戒して呟く。

後頭部に大きくアップにした黒髪が、左右を警戒する度に揺れる。

「不義理よ！」

一行に混じった支永真里亜も怒鳴り散らすが、天草未来だけは両手を頭の後ろに組み、途中で拾った茎の長めの葉っぱを口に咥えて遊んでいる。

「未来ッ！」

真里亜が嗜めるが、

「あんたらこそ、そんな怒り任せで歩いたら変装の意味が無いじゃん……商人なんだからね、商人」

と、未来は呆れ顔だ。

「それはそうだけど……」

真里亜は罰の悪い顔をして、街道の周りに特に人影が無いのを確認してから、

「丁原殿の一万の兵に、アルテナが……あのアルテナが志道董子に加わっちゃったのよ！ 更に天子すら擁している志道董子に誰が逆らえるのよっ！？」

と、未来に顔を近づけて睨む。

「アルテナが？ 私はむしろ、遼ちゃんが惜しいのだけどねえ……」

そう未来は、ため息をついてから、

「誰が逆らうか！？ そんなの決まってんじゃない」

と、不敵に微笑みを真里亜に返す。

「あなた！？」

「そうしたいけど、私よりも家柄よく、漢帝国に三公を輩出した名門支永家の長女がお似合い！」

「私いい？ あの志道董子にいい！？」

「うまくいくって！ とにかく、今は私の故郷に逃げて、作戦練りましょ！」

驚く真里亜の背中を未来はバンバン叩いた。

丁原軍を下し、勇将アルテナを傘下に加えた志道董子は一層、権力を増す。

朝廷内を重職を独占した志道一族が闊歩し、それを讒言する者は職を追われ、中には暗殺される者まで出ると、いよいよ誰も董子には逆らえなくなり、志道董子の権力は頂点に達しようしていたのである。

しかし、志道董子の思い通りにいかない者達も存在した、黄巾の乱で活躍し洛陽に集められた将達だ。

ミネア・ヴァルナログ、鳳公子、支永ノイアなどの群雄は丁原が倒されたのを知るやいなや、クモの子を散らす様に、それぞれの本拠地に勝手に逃げ出していたのである。

北平に向けて、ひた走る馬上の鳳公子。

高天原壺与も、それに従っている。

「公子様、少し急ぎ過ぎの感がありませんか？」

董子の許可を取って、洛陽を離れた訳ではないから急ぐのは解るが、馬を潰す勢いの公子に壺与が注意するが、

「祐一君達がミオちゃんを連れて、北平を出る前に引き留めない！」

公子は馬に鞭をくれる。

だが、馬は疲れ切り、スピードを上げない。

「引き留める？」

「そうよ、この事態になるのならば……私もあの時につ……しくじったわっ」

公子は疲れ切った馬を一旦、止めて壱与の方を向き直り唇を噛む。

「どういう事ですか？」

「諸将の目の前で、反志道董子の意志を堂々と表明した者が、反志道董子連合の中心になるのに相応しい、そう思わない？」

「……天草未来様と支永真里亜様……そして」

大広間で董子を相手に名乗り、董子に宣戦を布告した二人。

丁原は既に敗死しているので、残るはそれと祐一だけである。

「そう、祐一君よ」

公子は頷く。

「でも彼はあくまでも私の部下、ならば私も志道董子に対して、始めから戦う意志があった証明になり、必ず起こる反志道董子連合の旗手となる資格が残されているのよ、祐一君達が丁原が敗れるまで、

その陣にいたのならば、先に北平に着けるかも知れない」

興奮気味にそう語り、口元に手を当てる公子。

『この人は……それで祐一君を……』

冷静で頭脳明晰。

一流の戦術家。

先も見透せる。

しかし、壺与は鳳公子という人物に対して、すでに萌芽し始めていた感情が、急激に成長するのを、意識せざるえなくなっていたのであった。

続く

第49話「北平への帰還」

1

「兄貴、姉貴っ！ おかえりっ！」

「祐一様、おかえりなさいっす！」

「ただいま、ミオとパティーも元気でやってたか？」

公子の本拠地である幽州北平の城で、祐一とアーシェは末妹のミオと兵法学士のパティーと再会し、互いに笑顔を交わす。

「再会を喜んだところで……早速なんだけど」

城の兵士や公子の配下武将が周りにいない事を確認すると、祐一はミオとパティーに顔を近づけて、四人で部屋に入る。

「えっ？ では、祐一様は丁原軍にいたっすか？」

「ああ……志道童子に逆らって、洛陽から出た、恥ずかしいが衝動でな、もちろん公子さんには断ってなんかない」

祐一は頷く。

「丁原軍にいたのも、そんなに長くなかった、途中で丁原殿が敗れたという事だけは、聞いたのだが……」

アーシェが腕を組む。

大きな合戦の結果等は、主要な都市には早馬などですぐに伝えられる。

祐一とアーシェはミオ達の事もあり、道中を急いだのせいで、合戦の結果は途中に立ち寄った村で噂話程度にきいたのだが、詳しい経過までは知らなかったのだである。

「話によると、丁原はアルテナという義理の娘に裏切られ、討ち取られたそうなんっす」

パティーは眼鏡をクイツと上げながら言った。

「……アルテナが丁原殿を裏切った!？」

祐一は思わず声を上げてしまい、

「なんすか? なんすか? 知り合いになってたとかすか?」

その過剰な反応にパティーは驚く。

「あ……いや……」

「滅法強い奴らしいな、ミオも手合わせして」

誤魔化す祐一、それにあっけらかんに、答えたミオだったが、

「悪いな……」

アーシェが手を上げて、それを制した。

「姉貴？」

「あの女は私が……かならず殺す」

その碧い瞳は鋭く、声は低かった。

「アーシェ……」

祐一は何とも言えない視線を送るが、アーシェはそれを無視して、

「かならずだ」

と、言い放つ。

「あの……で？　ここに四人だけになったのは、理由があるんすか？」

アーシェの様子を伺いながら、尋ねるパティー。

「そうだったな……だからさ、オレ達は公子さんの元を出ちゃった形だから、ここにはいれないんだ、公子さんも帰ってくるだろうから、それよりも早く、おいとまをするのが良いんじゃないか、と思っただけ」

「なるほど、勝手に志道董子に逆らったんだから義理が立たない」と

祐一が説明に、ミオはコクコクと相槌をうつ。

「ま、そういう事だ、でもパティーは公子さんの客将なんだから気にしなくてもいいと思うぜ」

祐一はパティーを見るが、

「ひどいっす！　もう私は祐一様の部下のつもりだったのに！　あくまでも客将っす、ミソツカス扱いはひどいっす！」

と、パティーは祐一に身を預ける様に抱き付いてきたのである。

「おいおいっ！」

パティーの案外、ふつくらした胸元が当たり、祐一は声を上げる。

「ついて行きますっ、わかったっすか？　もうパティーは祐一様の物っす」

「物って……」

「わかったっすか？」

パティーは祐一に、顔を近づけてくる。

栗色のショートカットの髪、ドングリ眼の童顔、そして……眼鏡。

「おい、おい、パティー……あんな」

「やめんかっ！」

アーシェが怒鳴った。

尋常ではない声。

「すみませんっす」

パティーがパツと、祐一から離れると、

「い、いやっ……こちらこそ、怒鳴ってすまない、立ち去るなら、こんな事をしている場合ではないのではないか？」

アーシェは罰の悪そうに咳払いして、パティーに謝る。

「そうだな、パティーにミオ、持てるものだけ持って、後で裏門で会おう！」

「わかったっす」

「おっけー」

祐一が告げると、ミオとパティーは頷き、それぞれ部屋を出ていく。

アーシェと祐一が部屋に残った。

「パティーを相手に取り乱して、申し訳ない」

「髪の色は違うけれど、なんとなく似てるからな、二人とも童顔だし、眼鏡してるしさ」

「……パティーは何も悪くはない」

謝ったアーシェは祐一の返答にうつむく。

「そうだな、ともかくオレ達も準備しようぜ」

「私はアルテナを斬る」

部屋を出ようとした祐一に、アーシェは言った。

「なら、俺はアーシェを援けるよ……」

振り返り、ポツリと答えると部屋を出ていく祐一。

一人になる。

沈黙の中で、アーシェは呟いた。

「あなたはきっと、私を援けつつも、アルテナを救けようとする」

続く

第50話「祐一の判断」

1

夜陰の落ちた頃、祐一とアーシェ、ミオの三兄妹とパティーの四人は、身の回りの物と武具と僅かな荷物を馬に載せて、北平城の西門近くに集まった。

「お待たせ〜」

「行楽じゃないぞ、見つければ、手荒に扱いたくは無いが、強行突破もあるんだからな！」

軽いのんびりした挨拶のミオをアーシェが睨む。

「あいあい」

「ミオッ！」

「まあまあ……ミオさんはノンビリ大物さんっす、良いじゃありませんか」

適当な返事をしたミオに怒鳴るアーシェ、それをパティーがたしなめる。

「どの門も警備はいる、おそらく、この旅荷物ではスナリとはいかない、アーシェとミオに任せるけど、公子さんの部下だ、アーシェの言う通り、手荒には扱わないでくれよ」

祐一が篝火の焚かれた城門の方向を伺うと、

「もちろん、おそらく五、六人は出で来るが、私とミオならば、そ

れ位なら手加減しながら闘える」

アーシェは祐一の横に並び、偃月刀の柄に手をかけて、

「私が先に行く」

と、ツカツカと城門に向かって、堂々と歩み始めたのである。

「とまれっ、何者か？」

近づいてくるアーシェに気がつき、手に持った戟を彼女に向ける
門番。

中年の男二人だ。

「実は外に出たい、他の者に知らせずに通してもらえないだろうか
？」

「なにっ!？」

アーシェの言葉に面食らい、男二人は戟を改めて構えなおすが、

「やめと……けっ!」

一閃。

気がつくのと、アーシェは偃月刀を抜き放っており、男二人の戟は
半分から先が脱落した。

「……ななっ」

「この戟の先が、お前達の頭にならない保証はまったく無いぞ」

驚愕する門番達に向けて、アーシェは碧い瞳を鋭く細める。

「門を開けてもらおう、誰にも迷惑をかけない旅立ちにしたい」

目の前の男達はもうアーシェには逆らえないだろう、それに危惧していた他の門番達が、タイミングの良さなのか出て来ない。

「わかりました……開けます、開けますから」

男の一人が怯えた声を上げて、城門の脇にある小さな通用門の門を開けようとしたので、隠れていた祐一達もアーシェの後ろに続く。

「出番なしなあゝ」

つまらなそうな声をミオが上げる。

「いいじゃねえっすか……門番相手にアーシェさんとミオちゃんが暴れるのはやり過ぎっす……公子様の軍で、二人に太刀打ちできるのは、せめてえ……」

傍らのパティーは笑いながらそう話すが、その声は見開いた眼と共に尻切れになってしまう。

そこには、パティーがこれから名を挙げようとした少女が槍を持ち、立っていたのである。

「い、壱与ちゃん？」

「何の用だ!？」

目の前の少女に、歩み寄ろうとした祐一の行く手を遮るように、アーシェは偃月刀を構えながら、少女を睨み付ける。

肩に毛先がかかるくらいの黒髪。

綺麗な黒の丸みを帯びた瞳。

バランスの取れた四肢に豊かな胸元。

手に持った槍。

間違いなく、高天原壱与がそこには立っていた。

「祐一くん……」

壱与の視線はアーシェを飛ばし、祐一に向けられる、151?の小柄なアーシェでは物理的には、それを阻めない。

「行くの？」

壱与の問いに、

「ああ……公子さんに無断で随分、勝手しちゃったからな」

苦笑する祐一。

「邪魔をするなら、再び相手になるぞ」

アーシェが壺与に詰め寄るが、

「やらないよ、槍は大切な物だから、持ってきたただけだからね」

壺与は祐一への視線を切らずに、アーシェに答えてから、

「祐一くん……どこかに行くのなら、私も連れて行って！」

と、切り出してきたのであった。

「壺与ちゃん!？」

驚く祐一。

前にいたアーシェも、予想外の言葉に、構えは解いていないものの、哑然としている。

「公子さんと何かあったんすか？」

「私とはない……でも、合わない部分が出て来たのは確かかな……」

パティーの問いに答えた壺与は、

「話してくれないかな？」

との祐一の言葉に、

「うん……」

と、素直に頷いたのだった。

「……そうかあ、公子さんがそんな事を」

「そう、祐一くんを利用して、公子様は、志道董子と戦う連合軍のリーダーになるうとしているの！ このまま、北平軍にいても利用されてしまう」

説明を受けた祐一が顎に手を当てると、壱与は真顔で祐一を見つめる。

「利用かあ……」

考え込む祐一。

「それは、それで立ち去れば問題ないっす、更に壱与様が味方に加わってくれたら、どこの太守にだって、重く用いてもらえるに違いないっすから！」

パーティーも促し、

「そうだぜ」

ミオも賛成するが、当の祐一は今度は腕を組み、目をつぶって、暫く何かを思案すると、

「壱与ちゃんがついてきてくれるって、言ってくれたのは本当に惜

しいけどなあ……」

そう呟いてから、

「北平を出て行くのは止めだつ、公子さんを待つて勝手をした詫びを入れて、再び傘下に収まるぞ」

と、城下街に引き返し始めてしまったのである。

「なっ、なんでっ!？」

目を見開き、驚きを隠さない壺与。

ミオもパティーも同様の様子の中で、ただアーシェだけは、

「ま……兄上ならば、そうなるだろうな」

と、呟き、歩いていく祐一に駆け寄っていくのであった。

続く

第51話「急使」

1

「祐一君!？」

壱与は驚く。

何故、ここで公子を待ち、一度は離脱を決意した公子の傘下に収まろうというのか？

自らの行動の戒めで離脱したのではないのか。

自らに利用価値が生じれば、公子に重用されるとの打算か？
頭の中を整理できず、結局は祐一本人の前に走りだす壱与。

「ねえ……どうして？ なぜ戻るの、公子様がお許しになるから？
今の今まで城を出ようとしていた人がなんで……」

449

早口で問いをぶつけ、答えを待つ。

すると、祐一はその性急さを嫌うように、一呼吸置いて、

「俺は公子さんには世話になったんだ、だからさ、今更一回や二回、都合よく利用されたって怒る気はしないな……むしろさ、公子さんの下で身勝手に行動した俺を公子さんが利用したいなら、逃げ出すのは違うよな、って思っただけ」

と、答えたのである。

「……祐一くん」

目の前の男は、打算的に利用されるのを承知で、ここに残ると言うのである。

「まあね、俺にもさ……」

言いにくそうに、祐一は自らの頬を掻き、

「俺にも……目指してる世界があつてさ、いつまでも公子さんと一緒にやってはいけないけど……公子さんに恩返しするチャンスがあるなら、すこしは役に立ってから巣立たないと……もし、その時に壺与ちゃんがついてきてくれたら……俺は本当に嬉しい」

と、告げたのである。

そうだ……

壺与は思い出した。

目の前の男は、打算に対しても自分の信じた義理、正義で動く男なのだ。

不器用で、きつとこの先で、それが原因で苦闘するだろう。

でも……それでも、押し通るに違いないのだ。

壺与は一度、下を向いてから、再び顔を上げて微笑み、

「わかった」

と、だけ答え、頷く。

余計な言葉は要らなかった。

数日の後に、北平に太守である鳳公子が帰還する。

祐一は壺与を通して面会を申し込み、宮中大広間での勝手な行動を詫びた、それに対して公子は、

「いえ、陛下を傀儡とする志道董子に許せないのは、私も同じ、私はこれから志道董子に対抗する勢力と連絡を密にし、協力して志道董子に当たるつもりです、気にしないように」

と、処分も無し、更に黄巾軍との戦いに多大な功績があったとして、今までの五百から、兵力二千の部隊を率いる将への昇進を告げたのである。

2

「長沙のミネア・ヴァルナログ……北平の鳳公子、宛の支永ノイア、南皮の支永真里亜なんびといったところが主だった面々かと……」

「問題ないわよ」

名前を上げた華蘭に対して、ベッドの上で、全裸で薄手のシーツに包まった董子は笑いながら、横でスヤスヤと眠っている桐生の髪を透く。

「それは少し樂觀しているのでは？ 確かに我々は中央政權を押さえ、すでに二十万近い兵力を擁していますが、今挙げた者達が連合すれば……」

「無理だって」

董子は言葉を遮り、

「幾ら名立たる将達が集おうとも、誰かがリーダーの名の下、集わなければいけない」

と、視線を全裸の美少年から、華蘭に向けた。

「アイツらだって、私を目の敵にするなら、みんなが私の立場を羨んでるのよ、そんな連中をどうやって誰が、大連合に仕立て上げるのやら……そんな手があるなら聞きたいわ」

そう言って、董子はベッドから立ち上がり、

「まあ……でも何も備えをしないのも良くないし、もしもの備えはしておくわよ、ちようあん長安に例の作業を急ぐように、人夫を増員させるのよ」

と、命令を下した。

3

「難しいか……」

荊州・長沙。

太守ミネア・ヴァルナログは、赤茶色の髪を弄りながら呟いた。

「おそらくは、誰が盟主になるかも難しいかと」

ミネアに頭を下げるのは、黒い長髪の美少女、神宮寺瑜貴である。

「誰が反志道董子連合軍を呼び掛けようとも、天子様が志道董子に押さえられているからには、逆賊の汚名を免れない……」

瑜貴と並んで立つ、ミネアの長女、サライ・ヴァルナログ。

うなじを隠す位の銀髪に落ち着いた感を人に与える、瑜貴に勝るとも劣らない大変な美少女だ。

「つたく……」

ミネアは頬杖をつき、

「志道董子の奴、気に入らない、こうなりや私達だけで北上してやろうか」

と、唇を噛む。

もちろん、現実的な案ではなく、怒りを紛らわせる冗談なのだが、

「ついでに、劉表も倒してしましましょう」

瑜貴がフツと微笑み、肩を竦めると、

「いいよな、それ！ やっちまおう、気に入らない奴が一気に居なくなる！」

そうミネアも膝を叩き、

「お母様、瑜貴！」

と、生真面目なサライに注意される始末であった。

荊州北部を押さえる劉表とミネアは、戦闘こそはないが、犬猿である。

前の黄巾の乱では、荊州の宛を占領した黄巾軍討伐に立ち上がった、ミネアの軍勢が劉表支配地域を通行した際も、劉表は隣接している地域での乱を平定しようというミネアに対して、兵も兵糧も出さず、表面上は笑顔で取り繕い、ミネアを間接的に無き者にしようと、黄巾軍にミネア軍の情報を流した様子さえあったのである、それはあくまでも瑜貴の推測であったが、宛の黄巾軍を打ち破り、幹部を捕えた際の尋問で推測は真実となっていた。

劉表は自領域への黄巾軍の不可侵を条件に、長沙からのミネア軍の動向を逐一、宛の黄巾軍に伝えていたのである。

それを知り、黙っているミネアではない。

長沙への帰り道、劉表領内通過中で、瑜貴は一計を案じる。

宛で蹴散らした黄巾軍の残党を装い、劉表支配地域の兵糧貯蔵庫を襲って、物資を強奪した挙げ句、それらを自作自演で討伐した事にして、表面上は笑顔で劉表に討伐の代価を要求したのである。

もちろん、劉表もそれには気付いていたが、宛の黄巾軍を討伐したミネアの評価は、中央政府からも好評で、そのミネアに黄巾軍に情報を洩らしていたなどと触れ回られては困る、と泣く泣く自作自

演の討伐劇に代価を払ったのである、もちろん強奪された物資は討伐のドタバタで、逃げた奴等が持ち去った、とミネアは劉表に告げ、半分も返さなかったのである。

この一件で、劉表とミネアの関係は完全に冷えきった、いわゆる冷戦状態なのだ。

「しかし、劉表はまだ後で良いとして、問題は志道董子だな……」
「はい、劉表は自ら動いて動乱を巻き起こす度胸はありません」

腕を組むミネアに、サライが頷く。

「今は裏から、密かに連合を募るか、時間はかかるかもしれないが……」

ミネアがそう呟き、サライと瑜貴に、その準備を下命しようとした時である。

「急使でございます！ 火急、最重要要件に関する使いの模様です！」

と、慌てた様子の門兵から報せが入り、ミネア、サライ、瑜貴の三人は揃って瞳を細めたのだった。

続く

第52話「ヴァルナログ家の決断」

0

私、和川真奈美と大瀬秋夜は、夜中にも関わらず城への呼び出しを受け、城下町を松明を持った迎えの兵士について歩いていた。

「火急の用事とは一体、どんなんでしょうか？」
「わからないな……」

秋夜の疑問に私は首を傾げる。
普段からどこか冷めた態度の秋夜も、この呼び出しには訝しげな態度。

私にしても、特に思い当たるフシはない。

「まさか、真奈美が兵糧の横流しを……話すなら、今のうちなのですよ？」

「してないよっ!？」

秋夜の横目に、慌てて否定する私。

秋夜の冗談はたまに笑えない、本気か、少し毒の効いたブラックジョークか、私には判断が付きかねる事があるからだ。

城内に着くと、謁見の間にミネア様とサライ様、瑜貴様、そしてアイシャが顔を揃えていた。

「夜中に悪いな」

「それには及びません、ですが私達に如何なご用でしょうか？」

一人、椅子に座るミネア様の言葉。

私達は頭を下げ、秋夜は早速、事の次第を尋ねる。

「実はな……」

答えを切り出してきたのは、軍師の瑜貴様。

「志道董子は知っているだろう？ 洛陽に乗り込み、好き放題を始めた礼儀知らずだが……」

「はい」

私と秋夜は揃って頷く。

後方支援を担当する文官といえども、政治は文官の役割で、時事の移り変りを把握しないでは勤まらない、首都で政権を取る志道董子の事は当然、秋夜と調べている。

「その志道董子を諸将による連合を募り、打ち破る勢力を募る激文が先ほど届いたんだ」

「激文……」

瑜貴様の説明に、私は口を結ぶ。

激文という事は穏やかではない。

戦いの予感だ。

戦場を思い出して、背中が震える。

しかし、瑜貴様の説明の続きに、私は背中だけでなく全身を震わせる事となるのである。

「激文の送り主は洛陽で志道董子に対して、敵対を明確にした名門

支永家の長女、真里亜……そして、黄巾の乱で義勇兵を挙げて活躍した天草未来という者だ」

天草未来。

久しぶりの衝撃的な名前が、私の脳裏に復活した。

1

「天草……未来」

「真奈美？」

「な、なんでもない」

未来の名前に明らかに動揺を見せる真奈美だが、秋夜の名前を呼ばれて我に帰る。

そうですか、とだけ頷き、秋夜は真奈美から視線をミネアに戻し、

「でも、いかに名門の支永家の長女が激文をしたためたからといっても、天下の諸将が、簡単に動くとも思えないのですが……」

と、意見を述べた。

「普通ならな……」

ふうー、と息を吐き、腕を組むミネア。

「じ、じゃあ……そ、その激文は普通ではないのですか？」

未来の名前による動揺をまだ、押さえ切れていない真奈美の声は

震えている。

普通ではない。

天草未来の形容詞の代表格みたいな単語だ。

「落ち着け、真奈美」

瑜貴が眉をひそめる。

「お前達の判断力や観察力には非凡な物がある、だから我々武官の意見だけではなく、文官の有望な若手に話を聞きたいのだ、冷静な判断を聞きたい」

「すみません」

真奈美が素直に謝ると、サライが、

「実はその激文には、支永真里亜と天草未来に皇帝陛下から、密書が届いて志道董子を打ち滅ぼすようにと命を受けたとあるのだよ」

と、告げた。

「詔勅……」

皇帝の命。

漢王朝では最も重く、何よりも優先されるべき命令。それが、天草未来と支永真里亜に下ったというのだ。

「そんな馬鹿な！」

珍しく声を上げる秋夜に、

「当然だ、しかし……その激文には、董子が宮中大広間で諸将を前に、宣誓した相国就任を諫めて董子の十重二十重の包囲を突破した二人こそ忠臣である、と皇帝は申しているとある、確かに皇帝陛下はそこにいらしたし、支永真里亜と天草未来が、故人となった丁原、その他の協力者と共に董子の包囲を突破したのは事実なんだ」

ミネアは唇を噛む。

その様子は明らかに自分もそうすべきだった、という後悔を隠さない。

「宮中騒乱の件は聞きましたが……」

真奈美は呟く。

その件については聞いてはいたが、出てくる名前に天草未来は今までは無かった。

支永真里亜と丁原、そして後に彼を裏切ることとなる、アルテナ以下数十名と聞いていたのである。

『まさか、天草さんがいたなんて……だと、したら……』

そこから、別の思考に移ろうとするが、

「そこでだ……我々には、我々の意見があるのだが、明日の朝議を前にお前達の意見を聞きたく、呼び出したのだ」

と、瑜貴が意見を求めてきたので、真奈美は浮かびつつあった思考を一旦は封じ、そちらに集中する。

「……偽物」

真奈美は呟く。

「激文自体が？」

瞳を細める瑜貴。

「いいえ、激文は本物です、偽物は一部分、皇帝陛下の詔勅という点です」

「根拠は？」

「今の時期、志道董子が敵味方を見極める目的で、偽の激文を撒くのは、燃え広がる油が撒かれているかもしれない草原に、自ら試しに火を放つくらい危険ですし、他の諸将ならば、名前を利用された支永真里亜と天草未来が参加しないかもしれない……よって、この二人が本当に作成した激文だと思います」

「よし……ならば、詔勅が偽物とするのは？」

瑜貴は腕を組む。

問答で試されている、と感じながらも、

「志道董子の籠の中、天草未来と支永真里亜にそれを出すの不可能に近く、よしんば出せたとしても、それは皇帝にとっては、自殺行

為なのではないかと」

と、返事をする。

「なるほど、皇帝陛下の名前と詔勅を、支永真里亜と天草未来が勝手に利用したと？」

瑜貴は真奈美に歩み寄ってくる。

「えっと……はい、詔勅ならば、各地の諸将も逆臣の汚名を被らず、堂々と志道董子と敵対出来ますから、それに支永真里亜と天草未来は、皇帝陛下を擁する志道董子に追われているなら、詔勅や皇帝陛下の名前を利用するのに、躊躇などしている場合ではないかと」

真奈美も、歩いてくる視瑜貴に視線を定める。

「堂々と敵対と言っても……偽物だろう？」

直立した真奈美の真横に立ち、端正な顔を近づけてくる瑜貴。

「それを偽物と取るか、本物と取るかは、受け取る側の勝手だと思います……おそらく、天草未来はそんなの気にしません、彼女の興味は受けた側がどう動くかというだけです」

「……天草未来の企てとみるのか？」

「支永真里亜は漢王朝の名門、そこまで皇帝陛下の名前を利用するなんて考えもしないかと……」

「なるほどな……」

瑜貴は何やら、思考し始める。

長い問答。

真奈美は天草未来の名前が出た事で、気持ちの昂った事を自覚していた。

『喋りすぎたかな』

質問されたからとはいえ、傍らに立つ、同格の秋夜はともかく、ミネア、サライ、アイシャを差し置いて意見を述べるなど……

そんな事を考えていると、瑜貴は顎に手を当て、俯いていた顔を上げ、

「この事態に真奈美は我々がどうしたらいい、と考える？ 遠慮はいらぬ、別に意見として聞くだけで、それで真奈美に責任が及ぶ事などないから」

と、何かを見透かした様に、聞いてきたのである。

数秒の間。

そして、真奈美は口を開いて、言った。

「……詔勅を本物と取り、我々が動けば、おそらく各地の勢力が志道童子討伐に動くでしょう、私達はすぐにでも軍をまとめ、洛陽目指し北上すべきだと、私は考えます、討伐軍の先駆けはヴァルナログ家と、天下に知らしめるのです」

真奈美の返答に、ミネア、サライ、アイシャの三人は顔を合わせ
て頷く。

まさに意を得たり、といった様子であった。

続く

第53話「単独使者」

1

「では母上、お先に……」 馬上の銀髪の美少女、サライ・ヴァルナログが優しい笑みを浮かべると、

「ああ……すぐ後に続くからな」

「姉上、長沙の事はお任せ下さい」

母のミネア、妹のアイシャはそれに力強く答えて、送り出す。

支永真里亜、天草未来の激文が届いて、わずか一週間、ヴァルナログ家は先鋒に長女サライ・ヴァルナログを司令官とし、軍師に神宮寺瑜貴を据え、約八千の志道董子討伐の兵を挙げたのである。

ミネア率いる一万の本隊が、数日の後に続く手筈であり、留守には、次女アイシャが長沙城を二千の兵と共に守る。

ちなみに真奈美は、サライの先鋒部隊の兵糧担当官として従軍し、秋夜はアイシャと留守になった。

サライに率いられた先鋒部隊が目指すのは、まずは董子のいる洛陽の南にある宛。

かつては黄巾軍に占領されていた宛だが、現在は激文の主、支永真里亜の妹である支永ノイアが本拠地に定めている。

長沙からのルートは黄巾軍の討伐時と同じく、劉表領の南郡の襄陽を通過するのが、数千の軍には不可避であった。

だが、劉表とヴァルナログ家とは、今やかりそめの友好すらも存在しない。

そして、劉表領通過の方法と対処について、ミネアからサライに

指示などは一切、無かったのである。

江陵。（こうりょう）

劉表の本拠地襄陽の南にある都市で、長沙から隣接する劉表領。北荊州と南荊州の中継地点であり、水路では東の江東へ繋がり、陸路では西の益州（えきしゅう）へ至る交通、戦略の要衝であり、重要地点である。

「さて……サライ、もう少しで江陵だ、おそらく出陣を察知した劉表軍が警戒を強めているに違いない、どう通過するつもりだ？」

轡を並べ、サライと瑜貴の騎馬は進む。

瑜貴の問いに銀髪のショートカットの美少女は、

「後のお母様達の本隊に迷惑をかけない形で進まないといけないね」

と、微笑み、

「使者を向けて、丁重に御通しをお願いする……きちんと意志を伝えて、速やかに通過したいからね」

そう答え、自ら馬上から降りた。

「お、おい？　サライ、まさか……お前」

「もちろん、私が使者になるわ、こういう事は自分で考えたら、自分でやらなきゃいけないね」

馬上からの慌てた声を上げてしまった瑜貴を、サライは自信あり

げな顔で見上げた。

2

江陵の守備に就いているのは、劉表の息子の劉琦^{りゅうき}、彼は長男であるが、劉表は次男の劉宗^{りゅうそう}を可愛がり、劉琦は劉表の本拠地、襄陽ではなく、重要地点ではあるが江陵に駐屯していたのでだった。

ヴァルナログ軍の出撃を察知した彼は、兵一万を率いて陣を張り、サライ達を待ち構えていた。

「劉琦様、ヴァルナログ軍が国境を侵しつつあります、野戦を仕掛けて奴等をおいかえしましょう！」

劉琦に意気揚々に進言したのは、成晏^{せいあん}という麾下の女武将。素早い槍さばきに定評があり、槍術の指南役も務めている。

「待て……成晏、ヴァルナログ家はおそらく、志道董子討つべしとの激文に応えての出撃だ、ならば父上の態度が決まっていないにしても、それを阻むのは出来ない、警戒はこの通り陣を張り、させてもらうが通すつもりだ」

劉琦は答える。

彼は数少ない若い男だが、細身で見かけからして、剛健とは言い難く、実際に身体は病弱で、陣内でも鎧を纏っていない。

「しかし、ヴァルナログ家は信用なりません……奴らは前、宛に遠

征の歸りに我々の物資を略奪した野盜集團、ここ江陵は交通の要地で、物資の蓄えも豊富、奴等が見逃すはずが無い」

成晏の強氣な反論。

次期当主の一番手の候補である彼だが、劉表に近い武將達は劉表が彼より、次男の劉宗を気に入っている事や彼自身の病弱さもあり、彼を見下していた。

「だがな……」

そこまで言いかけて、劉掎は二、三回、咳き込んでから、

「黄巾の乱は、我々の隣の宛での事なのに、我々は兵も兵糧も出さずにいたのだ、確かにヴァルナログ家が物資を略奪した疑いが高いのは確かだが、その一因は我々が作ったのだ、それに父上や蔡瑁さいぼうは黄巾を利用したフシすらあるのだ、怨まれる原因は我々から作ってしまった」

劉掎は書生が子供に説くように優しい口調で言ったが、

「何を言われます！ そんな弱気では、ヴァルナログ家にますます付け込まれるだけ！ 私は劉表様からすでに出されている、江陵にはヴァルナログ軍を一切入れるなという指令を徹底します！」

成晏は怒鳴り付ける様に答え、踵を返し幕舎を出ていくのだった。

「困ったものだ」

劉掎はため息をつく。

元々、身体の弱さからもあるが、争いを好まない優しい性格である。

しかし、その性格と体質ゆえ、彼は父や謀臣の蔡瑁などに邪魔者扱いされているのには気付いているし、彼らに近い武将が自分を見下すのも解っていた。

幕舎に集まっていた他の武将達も、無言でゾロゾロと引き上げていく、それらの多くも自分を父の後継者だとは思ってはいないだろう。

劉猗はそう思い、孤独を感じていた。

「劉猗様……」

皆が去ったと思われた幕舎に一人の少女が残っていた。

緑がかった髪を後頭部左右から長く垂らしたツインテール。

強気そうな青い瞳に、締まってはいるが、女の子らしいふくよかさを感じさせる可愛らしい少女だ。

「沙羅^{しらく}か……どうしたのだ？」

劉猗が問うと、

「劉猗様……我々は黄巾の乱の折、隣地にも駆け付けず、今また国家の火急の危機にも駆け付けられないのですか？」

沙羅と呼ばれて少女は唇を噛む。

「……真っすぐでいい」

「えっ？」

ポツリと答えた劉綺、少女は悔しさの顔から、意外さに驚く顔に変わる。

「沙羅、君は身体も丈夫だし、武勇にも優れている、そして……義侠心にも厚い女の子だ」

劉綺は座っていた椅子から立ち上がり、沙羅の肩に手を置く。

「劉綺様……」

「君の思う通り、父上や多くの者は、自らの権益や領域を護る事しか考えていない、それはそれで仕方のない部分はある……だが、君の様な娘が、いつまでもそこに縛られていてはいけない……決断しなければ何もしていないのと、何が変わるのかな？」

「それは……」

沙羅が答えを迷い、言い淀むと、幕舎の入り口が開かれ、沙羅と変わらない年端の少女の伝令が駆け込んでくる。

「劉綺様……ヴァルナログ家の長女サライ・ヴァルナログが一人で、使者として陣前に現れましたっ！」

「一人!？」

「そうか……わかった、ご苦労」

決して友好的でない、一万の陣の前に一人。
沙羅は驚愕を隠さなかったが、劉綺は別段、驚く様子もなく伝令を歸し、

「サライ・ヴァルナログか、ヴァルナログ家の後継ぎ……きっと私と違い、強くまぶしいのだろうな」

と、だけ呟いたのであった。

続く

第54話「吠える剛剣」

1

首筋を隠す程の銀髪が風になびく。

白い肌。

細い眉、わずかに切れ長の緑の瞳。

整った輪郭に、真一文字に結ばれた薄い唇。

同性も惹かれるような美少女が一人、決して友好的でない一万の兵を擁する陣の前に堂々、立っていたのである。

「綺麗だわ……」

「ヴァルナログの長女って、あんなに可愛いのか？」

「身体つきもいい」

「ついていきたい」

劉椅麾下の兵達は陣前の異変につき、幕舎を出ていたがサライを見て、口々に勝手に話し始める。

相手は一人だ。

これが五百でも兵を率いていれば、もしもの緊張感も出ようが、一人では緊張感を好奇心が遥かに上回っている。

「聞かれよっ！」

凜と高く、堂々とした声が追い風に乗る。

「我は長沙太守ミネア・ヴァルナログの長女サライ・ヴァルナログ

である、この度……皇帝陛下を盾と取り、自らの一族の好き勝手に国政を取り仕切る悪党、志道董子討伐の命が下った事は劉猗殿も知っておられよう！ この陣の意味を漢帝国復興の先駆けたる我に答えよ！」

「……むう」

幕舎から出て、部下達とそれを見つめた劉猗は思わず唸る。

一万の軍勢を目の前に全く物怖じない心。

目を惹く美しさ。

自らを強く信じる強さ。 サライ・ヴァルナログからは、その全てが十二分に感じ取れたのだ。

「役者が違う、私は始めから通すつもりだが、例え戦ったとしても、どうにかなる相手か……皇帝陛下の勅命で動いたのなら、丁重に迎えねばな」

自嘲気味に笑い、沙羅達に振り返る。

「……劉猗様、しかし襄陽の劉表様は今回の激文については態度を決めておられません」

沙羅は複雑な表情になってしまう。

「いいんだ、どうせいつもの様子見だ、確かに父上は激怒するだろう、しかし私は戦をしても、かなうとは思えぬし、死者を出した上に、我々は連合軍からは孤立してしまうだろう」

劉掎は首を振った。

「バカなっ！」

反論したのはサライの来訪を聞きつけ、劉掎の元にやってきた成晏だ。

「国境に大軍あれば、防ぐのが当然の事！ あんな激文など文面だけの偽物に諸将が立ち上がる訳もない、襄陽の劉表様が激文を無視したのならば、目の前の者はただの侵入者に過ぎない扱いが妥当！」

彼女は劉掎を怒鳴り付ける、そこには劉掎への礼などはない。

『このっ！』

沙羅は成晏を睨む。

彼女が劉表の謀臣、蔡瑁に近い武将である事は軍内では誰もが知っている。

蔡瑁は劉掎の異母弟の劉宗の母の兄に当たり、甥を劉表の後継者にする為、劉掎を政争の相手として敵対視し、監視役として劉掎の元に成晏が送られているのだ。

蔡瑁の手の者である成晏が劉掎に上官の礼を持たないのも当然であつた。

「ならばどうする？ 相手は一人だ、まさか軍を動かせとでも？」

成晏の態度に怒る訳でもなく、劉掎は妙に落ち着いた視線を彼女に向ける。

「当然、斬り捨て、首を返事に送るのみ！」

「宜しい、ならば貴公があゝの使者の首を取れ」

自信満々に答えた成晏に劉綺は薄い笑みを浮かべ、即答した。

「承知！」

成晏は槍を手にして、馬に跨り、陣を飛び出していくのだった。

「劉綺様、あのような勝手をさせていいのですか？ あゝの者は蔡瑁の手先です、劉綺様の事など微塵も考えていないです、むしろ……むしろ、劉綺様を……」

走り去る成晏に対し、憤慨を隠さぬ沙羅、たが劉綺はあくまで落ち着いた様子で頷き、

「分かっているよ、私も未熟者だが、そこまで馬鹿じゃない」

そう沙羅を優しい瞳で見つめ、

「あゝの者……サライ・ヴァルナログの輝きを見よ、成晏などという武刃者が彼女を討ち取るなどあり得ない事だ、本当に私にはまぶしすぎる」

と、呟くのだった。

「サライ・ヴァルナログかっ？ 我が名は成晏、ヴァルナログ家の軍が劉表様の治める領地に踏み入るなど許さないっ！」

一人立つサライに騎馬で近づく成晏。

「そういう返事か、すんなり行くとも思わなかったけどね」

サライは腰の剣を抜く。

「貴様の首を母親に届けてやるっ、そりゃあっ、そりゃあっ、そりゃあっ」

成晏は気合いを込め、馬上から突きの連打を放つ。
その突きは穂先が見えぬ程に速く、鋭い。

「……チッ」

舌打ちして、後ろに飛び退くサライ。

「どうだっ？ 私は荊州軍槍術師範を務めているのだ、そんな剣に付け入る隙などやらんぞ！」

成晏は笑い、馬から飛び降りる。

馬上からでは、槍を繰り出せる範囲も決まってしまう、片手で手綱を操る手間も生まれ、徒歩で細かく逃げ回られると、案外に捕捉

しにくいのだ。

「覚悟っ」

サライに駆け足で間合いを詰め、再び槍の連打を繰り出す成晏。
だが、待っていたのは驚愕であった。

「降りてきた……それで槍術の師範なんだ？」

金属と金属がぶつかり合う高い音が連続する。

「なっ……!？」

眼を見開く成晏。

全ての突きが、穂先から剣に捌かれていた。

「こっちの間合い」

サライは嘲笑う。

「あっ……」

唐竹割り。

真一文字の剛剣を受け、成晏は絶命した。

「……勇者だ」

劉椅はポツリと言ってから、傍らの沙羅の頭にポンと手を置き、

「君のような若く強い武将は、道を切り開き前を進む主君に仕えなさい、きっと後悔しないだろうからね」
そう言って、優しく微笑むのだった。

続く

第55話「南方迎撃軍司令官」

1

「……ヴァルナログ!？」

政権の支配者と言っても良い立場にある志道董子は、その一族の名前に唇を噛んだ。

「ハッ、長女サライ・ヴァルナログを先鋒に、劉表領を通り、ここ洛陽を目指している模様」

青年報告官が深々と頭を下げる。

「劉表はどう動いた？」

「黙認のようですが、江陵で少数の軍勢が先鋒に加わった様です」

「あのジジイ、やっぱりどっちつかずか……」

董子は報告官の聞くと、その答えに呟いて、玉座に深々と座る。

志道董子陣営も支永真里亜、天草未来の連合結成の激文に呑気に構えていた訳ではない。

様々な勢力に対して、いわゆる政権を押さえている利を生かし、味方に引き込もうと調略を仕掛けていたのである。

その中でも気を使っていたのは、北荊州の劉表、南荊州のヴァルナログ家であり、少なくとも、どちらかは味方に引き入れようとしていたが、それは実らなかった。

ヴァルナログ家は激文を受けて、洛陽目指し北進を始め、ヴァル

ナログ家との関係から、それを阻む可能性も期待できた劉表も結局は黙認だ。

少数の軍勢を先鋒に加えた意図は、とりあえずは連合にも義理を果たしておくくらいの物だろう。

「しかし、ヴァルナログ家が動くとは面倒ですね、他の諸将も勢いく、何とかしなければ……」

「その通りね、どこかで阻まなければいけないわ」

武将達の先頭に居並ぶ華蘭の言葉に、董子は素直に同意して考える。

華蘭の横にはアルテナが控えていたが、彼女は戦略については、華蘭に遠く及ばない。

本人もそれを語るのをあまり好まぬ様子で、決定事項を待っているようだ。

『アルテナを使って……ヴァルナログを止めるか？ あれなら勇壮の名前を響かせるミネア、サライ親子を討ち取れるかも』

華蘭を派遣する手段もあるが、ヴァルナログ参戦で連合結成が上手に進めば、敵は南からだけでなく、東から押し寄せてくる。

名門の支永真里亜。

戦巧者の鳳公子。

何かと五月蠅くなってきた天草未来。

他にも、集まれば油断ならない。

董子の右腕としての政治戦略、前線司令官として、オールマイティな手腕を持つ華蘭をなるべくなら早い段階で南に派遣したくはなかった。

『アルテナ……か』

董子は視線をアルテナに送る。

金髪のもみ上げを伸ばしたショートカットに丸い眼鏡の少女は一見、退屈そうにも見え、董子の視線に反応はない。

その視線に反応したのは信頼できる右腕、華蘭であった。

董子が瞳でそれを伺うと、華蘭はわずかに首を振ったのである。

「華蘭……あなた、何か提案はある？」

「私めの意見で良ければですが……」

董子の指名に、華蘭は恭しく頭を下げ、口を開く。

「北上するヴァルナログ軍には……臨機応変な戦術を得意とする、如月遼殿を私は指名します」

『そいつがいたかあ！』

董子は口元に笑みを浮かべて、華蘭を見返した。

丁原配下での活躍の派手さはアルテナに譲るが、董子と華蘭の間では評価が高かったのである。

「良いわね……私も良いと思うわ、どうかしらね、遼ちゃん？」

董子は居並ぶ武将達の中で、末席近くの金髪に長細いツインテールの美少女を見据えた。

彼女は微妙な影も感じる瞳をゆっくりと上げる。

アルテナに付いて、董子の部下になってはいるが、彼女は前の主

君の丁原を失い、そのショックが大きいと聞いていた。

「……どう？　あなたがやれないなら、別の人間に命じるけど」

「……」

董子の言葉に、遼は数秒の間を置き、

「わかりました……やります、引き受けます」

と、僅かに顔を上げたのだった。

数日後。

如月遼を大将、副将として高矢順を据えた迎撃軍が洛陽を発つ。

これが後、三代から不倶戴天の敵として仇とされ、数々の激闘を繰り広げる事となる如月遼とヴァルナログ一族の始まりであったのである。

続く

第56話「心理誘導戦」

1

洛陽を南下した如月遼率いる南方迎撃軍は、洛陽の南に位置する都市である宛の北の郊外に陣を張る。

かつては黄巾軍に占領もされていたこの都市を現在、抑えているのは、ノイア支永。

彼女も帝を奪われ、洛陽の志道董子に騙された口だ。

その上、姉の支永真里亜が激文の発行者ならば、普段の姉妹仲はどうあれ、連合軍に参加する可能性は非常に高い、と志道董子陣営は観ていた。

ならば、洛陽の近い宛のノイア軍に強敵であるヴァルナロク軍が到着し、合流される前に各個撃破を企画するのが常道である。

宛の城に駐屯するノイア軍は約二万。

遼の率いる南方迎撃軍は約二万七千。

数では有利であるが、ヴァルナロク軍が到着すれば、それは逆転し、少なくとも倍の数の差が開くと思われる。

時間の経過は如月遼に不利になるかと思われる戦場だが、彼女は
何故か、陣の守りを堅めて動かなかったのである。

「遼様、このままではヴァルナロク軍がここに到着してしまいます、
幾らノイア軍が連合軍への参加を表明していないとはいえ、放置する
のは考えものです、いかに陣の守りを固めても敵が倍になれば主
導権は自ずと相手の物となってしまうでしょう」

「そうだね……」

対陣数日、遼の幕舎で、副将の高矢順が意見具申にやってくると、遼は落ち着いた様子でそれに答える。

「でも、相手もそれは解ってる、こちらからかかっていっても、城の門を閉ざすだけだし、損害もかなりの物になるだろうからね、陣を張る前から商人や旅人に変装した間者を宛の城下町に忍び込ませているから……それに、少し仕掛けも仕掛けてあるんだ、順には後で詳しく話すよ」

「そうですか、元気がなくなっていたから……要らぬ心配でしたね、それでは後で食事の時にでも、それをお聞かせください」

遼が頷くと、順は笑顔を見せるとペコリと頭を下げて退出していく。

「元気が無い……か」

遼は誰も居なくなった幕舎で呟くのだった。

2

「ヴァルナロク軍が再び来たる！」

宛の住民達は沸き返っていた、黄巾軍に占領された際に助けられた事を彼等は忘れていなかった。

街は小さな子供から、老人までがミネア、サライのヴァルナロク親子を待ち焦がれる。

敵軍迫る街とは思えぬ程に活気づく宛の住民だが、実はそれに腹を立てて、機嫌を崩す者がいた。

現在、宛を治めている太守、支永ノイア本人だ。

「面白くないっ！」

彼女は食事中の杯を床に投げ捨てる。

「ノイア様！」

腹心の姜子令きょうしれいが困った様に諫めるが聞かない。

「ここの住民達は何なんだ、街の様子を報告させれば、ミネアだ、サライだ、と浮かれよって！ 誰がこの地の太守だと思っておるんだっ！？」

ノイアは怒鳴り散らす。 街の住民達の様子を報せる報告が入る度、ノイアは怒っていた。

住民達はヴァルナロク親子を待ち望み、歓迎の準備をする者や兵士としてヴァルナロク軍に仕えようと用意しているとも聞く。

更にはノイアではなく、ミネアが長沙太守ならば、サライに宛を治めてもらいたいと公言する者までいるという。

全てがつまらなかった、見かけショートカットの美少女ではあるが、今のノイアは苦々しさに唇を噛みしめ、眉を釣り上げた癩癪娘であった。

「ノイア様、落ち着いて下さい、ヴァルナロク親子が現れたら、大いに彼女達に働いて頂きましょう、それで良いではありませんか」

「バカ者！ そんな所を指をくわえて観ていたら、今度は私とお前が宛の街から叩き出されて、路頭にまよってしまおうっ！」

主君を必死に宥めようとする姜子令をノイアは睨み付ける。

「貴様は戦況を吟味しておらんのかっ！？ 内通者からの報告によると、敵将は二流で、兵も訓練不足の新兵だ」

「町の情報と違い、確証が有りませぬ」

「うるさいっ！ ヴアルナロク親子の到着に震え、訓練もロクに進まずとの情報も得ておるわ、如月遼とやらもアルテナのオマケではないか！」

姜子令は反論するが、それを無視して、ノイアは立ち上がる。

「出撃だ！ ヴアルナロク親子が着いた頃には敵軍を追い出してやる！」

「危険ですっ」

「うるさいっ！ これ以上、ヴァルナロクにばかり名を上げさせてたまるかっ」

姜子令は讒言するが、もうノイアは絶対に止まらなかった。

実は宛の住民の過剰なヴァルナロク歓待は、遼の放った密偵の工

作だったのである。

もちろん、感謝の気持ちは住民にはあるのだが、それを過剰に焚き付け、ノイアを不安に陥れるまでにしたのは、遼の仕業だ。

彼女は丁原配下時代からノイアを知っており、彼女が自分を無視される事に長く我慢できる性格でないのを利用し、宛の城から、出での野戦に引きずり込むのに、自らの軍の弱体の偽情報も効果的に流し、ノイアに仕向けていたのである。

翌日。

ノイアは姜子令を引き連れ、一万八千の兵力を引き連れて、南方迎撃軍に向けて出撃する。

しかし、ここまで行動を操られてしまい、いまだに気付いていないノイアの前途が明るい筈も無かった。

続く

第57話「サライ到着」

1

宛の郊外にさしかかった所で、ヴァルナログ軍先鋒部隊は支永ノ
イア部隊からの使者を迎えていた。

使者は軽装鎧も傷つき、自身も腕から血を流した少女である。

「宛城の北方でノイア様の部隊と敵将、如月遼の部隊が大乱戦に突
入しております、至急……至急、宛城まで急行ください！」

彼女は先鋒部隊の大將であるサライ・ヴァルナログに切に訴えた。

「わかりました、至急駆け付けると、ノイア様に伝えて下さい」

「お願いします、一押しあれば、一気に敵軍を粉碎出来るでしょう、
早く主君に伝えてきます！」

サライが使者に頷くと、使者の少女は表情を明るくし、頭を下げ
て止めた馬に跨り走り去る。

「どう思う？」

走り去る少女を見ながら瑜貴はサライに聞く。

「七分、三分かな？」

「八分、二分だな」

「疑り深いなあ」

「お前もだろう？」

「……だね」

銀髪のショートカット、黒髪のロングヘア、対称的な二人の美少女は、口元を緩め合うのだった。

「ヴァルナログ軍の先鋒部隊は行軍速度を特に速めてはいませんが、偵察部隊をしきりに放っています」

「掛からないか」

偵察兵の報告に高矢順は舌打ちした。

彼女は宛城とヴァルナログ軍の現在地の中間に位置する森に、二千の兵でもって伏兵していたのである。

「あの報告を聞いたと言うのに、真っ先に戦場へ駆け付けれると思いましたが、私が見破られたのでは……」

順の傍らに立つ傷ついた鎧を着た少女が痛恨の面持ちで唇を噛む。ノイア支永軍の使者を演じた少女。

演じたと言っても、彼女はこの為に、仲間に腕を斬らせ、それらしい傷すら負ったのである。

「そうじゃない」

順は顎に拳を当てて、

「見破られたのは、勝利を撒き餌に急かして、偵察をおろそかにさ

せようとした私の意図……さすがにヴァルナログは私の罠には掛からないか」

と、逆に感心した様に息をつき告げる。

「退却する、遼様の判断に委ねる」

「まだ、敵に発見されてません、伏兵としての役割は果たせるのでは？」

少女は進言したが、順は首を振り、

「いい、見破られたからにはこちらの兵は少数、素早く離脱する……でも、観察すれば判るように、樹の影などに旗をさり気なく隠しておくんだ」

と、指示を出して、撤退を決めたのだった。

2

「上手いな」

「ええ……そうね」

瑜貴に素直に同意するサライ。

緊急の援軍の申し出にも容易に乗らず、偵察を増やしたのが幸いし、行く先の森に伏兵らしき集団あり、と察知出来たのだが、近づいてみると、もぬけの殻だったのである。

偵察を増やした時点で敵の伏兵は退却してしまった様子だ、それ

だけならまだしも、旗などを残していき上手くカモフラージュされたので、サライ率いる先鋒隊はまだ伏兵が察知されたのを知らずに森に潜んでいると警戒し進軍し、余計な時間をかけてしまったのである。

「敵の伏兵は見破れたが、誤魔化された形、あいこといった所だな」
「まあね……油断できない相手になるかな」

サライは北の方向を見る、宛城の方向だ。

「ここまで南に進出をされているとなると……支永ノイア、負けるな」

ため息をつく瑜貴に、サライは頷いた。

「多分ね、すでに完全に撃破されたか、宛城に籠もって包囲されているか」

「完全に撃破されて宛城まで失っていたら、かなり不利だな、一旦止まって母上を待つか？」

瑜貴は聞く。

数日の間隔を空けて、後ろに続くサライの母親ミネアの本隊の事だ。

「まさか……如月遼がどれくらいか、先鋒の私が当たってみなきゃ、それに支永軍が負けてるなら援けないといけないし」

「それもそうだな」

「偵察は更に進めて慎重に行こう、こんな風に騙されない程度に！」

サライは命令を下すと、残されたカモフラージュ用の軍旗を剣で

横に風ぎ斬ったのだった。

サライと瑜貴の悪い予想は的中していた。

宛城から誘い出された支永ノイア軍は、如月遼の構築した巧みな堅陣に攻撃を見事に受けられ、それを見計らって近くに伏せられていた順の部隊に斬り込まれて潰乱し、退却したが、陣を出撃した遼と順に強烈な追撃を受け、多大な被害を出して宛城に命からがら逃げ延び、門を固く閉ざして閉じこもるばかりで、周辺地域の支配権をすっかり失っていたのである。

続く

第58話「手をつなぐ二人」

「いやじゃ、いやじゃ……あの金髪ツインテール、許すまじぞ!」

「落ち着いて下さいノイア様、すぐにヴァルナログの援軍が来て、敵の包囲も解けます、今はご自重をお願いします!」

「いやじゃ、あやつに眼にも物を見せてくれんと気が済まん!」

「今は無理です、味方の損害が大き過ぎます」

宛城内。

姜子令に宥められるノイアだが、収まらず幼児のように騒いでいる。

現在、宛城内に逃げ込めた兵は七千程度。

残りは、遼の追撃で城に逃げ込めず、何処かに遁走したか、討ち取られたか、降伏するかだ。

こっぴどく叩かれ、逃げ込めた兵士も士気は下がり、多数は負傷もしている。

城の周りはすっかり包囲されて、外の様子も分からない。

そして、主将であるが、普段から堪え性のないノイアは怒り散らし、忠臣を困らせているだけだった。

「もうここはいいんだ……」

宛城を二万五千以上の兵で包囲する南方迎撃軍。

その幕舎で、ヴァルナログ軍に伏兵を見破られた、と順から聞いた遼はそう答えた。

「目の前の城が落城寸前なのに、私がヴァルナログ軍を足止め出来なかった所為で……」

「大丈夫、ここの兵士はもう戦えない、援軍が来る前に支永軍を叩いておくという基本作戦は成功したんだ……これ以上は欲張りだよ」
申し訳無さそうに頭を下げる順に、優しく微笑んでから、

「ヴァルナログが来る前にここは退くよ、もっと北の魯陽ろやうでヴァルナログ軍と戦う」

遼は命令を下した。

「疾い……判断も行動も疾いな」

宛城に着いたヴァルナログ軍の先頭で瑜貴が呟いた、伏兵をちらつかされ足止めを受けた影響はあるが、完全に包囲していた城をあとという間に諦め、敵は見事な撤退を見せている。

「鮮やかで速く、備えも怠らぬ撤退でした……追撃しなかったのですが、負傷兵も多く……」

宛城からの使者として、訪れた姜子令は俯く。

「構いません、ではご主君にご挨拶したいのですが」

サライが申し出ると、

「では……城にご案内いたします、ノイア様もお待ちでしょうから」

姜子令は笑顔で頷き、サライと瑜貴を先導して歩き出すのだった。

城内は援軍に沸いているが、兵達はかなりの確率で傷ついている。

『かなり、こっぴどく打ち破られたな……』

瑜貴は中庭や廊下で治療を受ける兵士を観察しながら、姜子令とサライに続いて歩く。

「こちらです」

姜子令に紹介された広間の奥の座に、支永ノイアはまるで玉座の様な椅子に堂々と座っていた。

銀髪のショートカットは長さも色の質も、瑜貴の義姉妹、サライ・ヴァルナログと同じだ。

背はサライよりも低そうで、雰囲気もわずかに幼いが、十二分な可愛い娘である。

だが長身、黒髪長髪の麗人瑜貴は、彼女の表情を観るなり、その思いに猛烈に反省したのだ。

支永ノイアは満足気な笑みを浮かべていたのだ。

『味方が大負けをしたというのに、主従でもないのに偉そうに座り、ヘラヘラして、コイツ……気に入らない』

敗軍の将が窮地から助かった表情ではない。

どんな態度が出てきても驚かない覚悟を決めて、彼女を銀髪というだけで、最も愛する人と比較してしまった自分に恥じた。

「お初にお目にかかります、長沙太守ミネア・ヴァルナログの娘、

サライです……こちらは私の義姉妹の瑜貴です」

サライが挨拶をしたので、瑜貴も仕方なく会釈したが、ノイアは瑜貴には目もくれずに、

「そなたがサライ・ヴァルナログか……可愛いな、気に入ったぞ、今夜は援軍の来られた宴を催そう、そなたの母ミネアが来るまで城でゆっくりするが良いぞ……ミネア・ヴァルナログが来しだい合力して、あの小生意気な如月遼の小汚い金髪を、一緒に丸坊主にしてくれようぞ！」

と、高笑いをする。

『こいつ……!!』

ノイアの言葉に、瑜貴の身体は怒りに震える。

構えていた筈なのだが、その覚悟を簡単に怒りが上回った。

『城内を敗残兵でいっぱいにして、何が宴だ！ サライを気に入ったとっ！？ 貴様のような下衆にサライを触れさせるかっ！ それに母上を失礼に呼びおって、貴様のような軍と誇り高きヴァルナログ軍が合流など出来ぬわっ！』

瑜貴は鋭い切れ長の瞳を更に険しくして、ノイアを睨むが、彼女は気付いていないのだろう、上機嫌で姜子令を呼び寄せる。

「姜子令……宴の用意じゃ、気に入ったぞ、サライ殿とはよくよく

親しく……」

「結構です！」

「……えっ!？」

大広間に響く声は瑜貴が発するよりも早く、彼女の横に並んだ銀髪のアートの美少女から発せられていたのである。

「な……っ？」

「サ……サライ殿？」

ノイアは驚き、姜子令は慌てふためくが、サライはニツコリ笑い、
「折角ですがお断りいたします、その余裕を良く戦って城を守った兵士達にお分けてください……それにノイア様の兵は傷ついてますので、今回の戦はヴァルナログ家だけで戦わせて頂きます」

と、踵を返して歩き出してしまったのである。

「サライ……」

一見、大人しげのサライのいきなりの態度。

啞然とするノイア、姜子令主従を無視して、瑜貴は銀髪のアートの愛しい人に駆け寄った。

彼女は瑜貴に向かって、何も言わずに可愛らしい笑顔を見せてくる。

「……私が言ってやろうと思ったのに」

そう愚痴りながら、瑜貴がサライに並ぶと、二人はどちらからでもなく、いつの間にか手を握り合い歩いていた。

続く

第59話「英雄の一人」

1

首都洛陽。

文武百官の集う広間に本日、何度目か数えるのが面倒になる位の早馬による使者が続々とやってくる。

「支永真里亜、天草未来の激文に呼応し、北平太守鳳公子が約二万の軍勢を率いて南進を開始」

「北海太守孔融、河内太守王匡、上党太守張揚なども反乱軍に加わっております、刺史、太守合わせて十数名……その総兵力数は四千万にも達します！」

「支永真里亜を統率に選び大軍は集合後には洛陽を目指してくる模様」

志道董子はそれを玉座に座り、頬杖をついて聞いていた。

文武百官といっても、董子に意見できる者はすでに処刑されるか、追放されている。

この場を取り仕切り、会議を進めるのは彼女の腹心の華蘭だ。

「つまらないバカどもが、下らない連合軍を組んできたじゃないのよ」

「はい……」

不機嫌そうに切り出した董子に、華蘭は頭を深々と下げる。

「ミネア・ヴァルナログがいち早く呼応したのが影響を与えていま

す」

「だろうね……でももうヴァルナログをブツ叩いたくらいじゃ収まらないわね」

無然とする董子。

「しかし……反乱軍は動き出したばかり、それも報告によるとその動きも鈍いものです」

「はっ……とりあえずヴァルナログ軍の戦況を観てから、って腹ね……敵ながら阿呆だわ」

「その通り」

董子の言葉に華蘭は頭を下げて同意する。

「南陽の支永ノイアを叩いた遼にヴァルナログとの戦いで援軍もこちらから差し向けやすい状況です」

「……そうね」

華蘭の言葉に董子は頬杖を外し、腕を組む。

華北の反乱軍が直接対決を躊躇しているうちに、魯陽で戦う遼に援軍を出し、ヴァルナログを数で圧倒する戦略が有効なのは、解るがそれを素直に実行するには躊躇があった。

「魯陽は遠くは無いけど、大軍を洛陽から離れたら……せっかく怖気づいて集まりの悪い連合軍が今こそ洛陽攻略のチャンスなんて気を取り直したら困っちゃうわね」

「それは……」

心配を素直に口にする董子に口づくむ華蘭。

董子は他の武将達に視線を向けるが、特に名案は無さそうにして

いる。

支永ノイアをあつという間に敗退させた如月遼が二万八千の軍勢を率いている現在、おそらくヴァルナログ軍を上回り、緊急に援軍の要請も必要も生じていないが、洛陽から東の連合軍の本隊が行動が鈍いというチャンスに南からのヴァルナログ軍を撃退しておきたいのだ。

「なんとか……南に援軍を送りたいけど」

唇を噛む董子。

董子軍は洛陽に約二十万近くの強力な兵力を持つが十数名の刺史、太守からなる連合軍は三十万を越えているのだ、むやみやたらに洛陽を守る兵力を南に動かせない。

『……やっぱり南はこのまま遼に任せるしかないかしら』

戦略の分岐点だ。

決して決断力のないリーダーではない董子も予想以上の連合軍の勢力に即決とはいかなかった。

頼りの華蘭も迷っている様子であるし、アルテナを始めとする将達もどちらかといえば、戦場では強いが戦略的な駆け引きを苦手とする将軍達が多い。

文武官達を前に董子が考え込んでいると、

「相国様、朝の会議はもちろん重要ですが、ここに集まっているそれぞれの部署の長がいないと官僚達の仕事が始まりまらない者もおります、それらの者に退出を認めては貰えないでしょうか？」

年老いた文官の一人がそう申し出てきた。

『……なら、あんたらもいい作戦を考えなさいよ』

正直に口にしそうになったが、軍の作戦に武官ではない文官が意見を言うのは嫌われる風潮にあるので、

「それもそうね、特に仕事のある者は退出して構わないわ」

と、パタパタと手を振りながら答える董子。

何割かの者が頭を丁寧に下げて退出していく、多くは文官達だが、何人かも武官も混じっている。

本場に作戦会議を中座してまでやる仕事があるのか怪しい者だが、そんな者はいてもいなくても変わらないし、それを咎めている程暇でもない。

董子は気にせずに思案を続ける。

その間にも二、三は意見が出た。

二十万のうちの半数を南に援軍に出すとか、援軍を見送るなどであるが、問題は援軍を出した場合に洛陽が手薄になり、東からの反乱の連合が早まる事でそれを解決する手段が出なくては意味が無かった。

2

「少し外すわ……顔洗ってくる」

董子は席を立つ。

他意はない、ただ冷水で顔を洗い鬱積した気分を変えたかったのである。

廊下をまだ幼い女官を連れて歩き、中庭の井戸から水を小さな瓶に汲んでこさせる。

「ぷはっ」

両手に冷水を満たして顔を洗う。

『……案外に合掌連合が早いじゃないのよ、もう少し内輪でワーワーやると思ったけど、私という敵を得てひとまず、ってところかしら……』

支永真里亜と天草未来の偽の皇帝の激文という予想外の手段とヴァルナログの決起。

それに乗って立ち上がった群雄。

偽の激文に騙された者はいないだろう、皆が騙されたフリをして洛陽に君臨した自分を追い出して、あわよくば成り代わりたいたいに違いない。

反抗勢力の台頭を予想しない程に志道董子は甘くは無かったが、激文とヴァルナログ軍の動きによって、その速度と規模は見誤った物となった。

『でも、まだまだ……ヴァルナログのババアにも、支永姉妹や天草未来みたいな小便臭いガキにも負けてらんないわ』

冷水で繰り返して顔を打つ。

『例の準備には今少しの時間があるわ……まだ洛陽では戦えない』

そして、厚手の布を受け取り顔を拭く。

「……ん？」

ふと……よく手入れの行き届いた中庭の梅の木に雀が二匹、やってきているのが、目に留まる。

「仲が良さそうです、親子でしょうか？」

「つがいよ」

幼い女官の問いに董子は答えたが、実際はどちらかは解らなかった。

なんとなく年長者の立場で答えてしまった。

「可愛らしいわね、少し落ち着くわ」

董子は中庭への石の階段の途中に座り、梅の木に止まった二匹の雀を眺める事にした。

すぐに帰った所で名案が待っている訳でもあるまい、偶然目に留めた雀を眺めるくらいは良い気晴らしになるだろう。

少し気が滅入ってもいるし、気負ってもいたが、まだ彼女にはそんなある意味の余裕があった。

だが、意外にもそれが董子に現在の状況を打破させるきっかけになる。

偶然も自らの味方にしてしまう。

善し悪しは別として、志道董子という女は紛れもなく、この世界の英雄の一人に違いなかった。

続く

第60話「最強戦術」

1

魯陽。

洛陽のすぐ南、平地の多い地帯。

支永ノイアを撃破した如月遼率いる南方迎撃軍はここに陣を敷いた。

兵力は約二万七千。

サライ・ヴァルナログ率いるヴァルナログ軍先鋒部隊は宛城を出たが、七千の兵力で遼の敷く陣を打ち破るのは難があると判断したサライと瑜貴は距離を置いて、布陣し本隊の到着を待つ事にしたのである。

「遼様……」

南方迎撃軍陣営の遼の幕舎に副将の高矢順が訪ねてくる。

丁原に仕えていた頃からの同僚で、一緒に志道董子に降った遼にとっては気の許せる相手。

ショートカットで黄色系の肌を持ち、少し地味な印象を与える事が多いが、仕事は堅実にこなし、武芸にも長け、遼も一目置いている少女だ。

「どうかしたの？」

司令官としての庶務を終え、休みを兼ねての食事を一人でしていた如月遼は顔を上げた。

「実は申し上げたい意見がありまして……食事中にすいません」
「いいよ、遠慮なく言ってみて、少し距離が離れていても対陣中にそんな事は言ってもらえないから」

来訪が意見具申だったのを言いにくそうに告げた順に笑顔で答える遼。

現に庶務を終え食事中にもかかわらず彼女は平服ではなく、軽装の鎧を身に付けていたのである。

「では……なぜ遼様は守りを固められて、敵の一万にも満たない先鋒部隊を殲滅なさらないのですか？ 時間が経てば敵の本隊が到着して兵力の有利さが活かせなくなります……」

「……そうだね」

「やはり……それくらいは気が付いてましたか、私から注意する必要があるかどうか迷ったのですが、それではなぜ？」

意見具申に解っていた様に頷いた遼。

さらに順が尋ねると遼は答える。

「簡単にはいかないよ、およそこちらの兵力は四倍、負けはしないだろうけれど、相手はミネア・ヴァルナログの後継ぎで武勇に優れた勇将と名の高いサライ・ヴァルナログだからね、まともには戦ってはこないだろうし、こちらが攻勢で相手がしっかり守れば、四倍は必勝とはならない……電撃的に倒せばいいけど、下手に乱戦した後に本隊が駆け付けてきたら、敗北しかねないから」

「なるほど……相手が相手だけに油断は出来ませんね、ならば決着は相手の本隊が着いてからになりそうですね？」

「それはわからないかもしれない、洛陽が上手く動いたなら、ヴァルナログが相手でも楽に勝てるよ」

「それは？」

ヴァルナログの先鋒に手間取れば、本隊への警戒が疎かになるという遼の答えには納得した順、だが彼女のが続けた言葉の意味は解らなかった。

「都合が良すぎるかも知れないけれど……激文やヴァルナログ軍の決起にも、東で結成されつつある反乱軍の動きは案外、のんびりしているから……」

そこまで話してから、遼は食事と一緒に出されていた湯を少し飲んで、

「洛陽が上手く動いてくれたなら、あらゆる戦術の中で文句なしに一番最強の戦術が使えるかもしれないんだよ……それならばヴァルナログ軍でもどうにもできないんだ」

と、笑うのだった。

2

梅の木にとまっていた雀を暫し眺めた董子が広間に戻ると、議論をしていたのか雑談になっていたのかは判らないが、騒いでいた将や文官達は静まる。

「いい考えは浮かんだ？」

「いまだに意見は割れております、南のヴァルナログ軍はこのまま遼に任せておけばいい、という意見もあれば、洛陽にいる軍の幾らかを南に送る案など」

玉座に座りながら、尋ねた董子に華蘭が答えるが、そんな議論は董子が出ていく前にもしていた事だ。

ため息をついて、出席者をあまり機嫌の良くなさそうな眼差しで一瞥した董子は、ある事に気がついて声を上げる。

「あら？ 文官連中は朝の仕事にいらなくなったんじゃないっけ？」

先ほど、あまり会議が長引くと朝からの仕事に差し支えるからと、中座した文官達がいつの間にか戻ってきていたので、一旦はガラリと空いた部屋の一角がまた文官達で埋まっていたのである。

「いえ董子様、あれは先程中座した者達ではありません、文官達の各長は朝の仕事があり、仕方なく中座したのですが、こちらの会議も重要です、董子様の指示もあらうと伝達係を彼等が寄越してきたのです」

「ああ……そういう事か、なるほどね」

華蘭の注釈に納得する董子。

広い広間の隅に居たから一目では判らなかったが、よく観れば、代わりにいる者達は皆が若い。

「パツと見じゃ、判んなかったわよ、あれらなんて普段から気にしなくてもいいし、一山で見てっから」

「……そうですね、よく判りませんね」

踏み出てきた華蘭にだけ聞こえる様に悪態をつき、再び頬杖した董子に華蘭も同意する。

「そうよ、まったく……あっ!？」

董子は頬杖から顔を上げて、何か白けた表情を引き締めて華蘭を見た。

「董子様!？」

不思議そうな華蘭。

「そうね、こんな近くでも間違えるんだもんね……これならイケるかも! あいつらをもう少しの間、脅えさせつつ、南に大軍を送れるかもしれないわ! そうすれば、あのヴァルナログのババアも叩き殺せるかもしれないっ!」

そんな華蘭に董子は興奮気味に告げたのである。

続く

第61話「長い戦いの始まり」

「母上！」

「相手はどうだい？」

赤茶色の髪に羽飾りを付けた母親の到着にサライ・ヴァルナログは安心した声を上げ、彼女に駆け寄る。

「様子はどうだい？ ノイア嬢ちゃんは負けて、宛城に閉じこもってるみたいだけどさ」

「こちらは相手は陣を固めて動いてません……」

「そうかぁ……私が着くまで数の少ない先鋒隊に仕掛けなかったのかぁ」

サライに戦況を尋ね、返事を聞いたミネアは意外そうに遠くの敵陣を見る。

「敵将は誰だい？」

「如月遼という者で元は丁原の配下らしいです」

「そっかぁ……ノイア嬢を軽く撃破してるから戦が下手じゃないんだろうけど、ノイア嬢もノイア嬢だからなぁ」

「油断は出来ませんね、警戒は瑜貴が怠らないようにしています」

「わかった……こっちも着いたばかりだ、とりあえずは一息入れ、明日から仕掛けてみよう」

「はい」

ミネア・サライ親子はそんな会話を交わし、陣中の幕舎に揃って

歩く。

ミネアが率いてきた本隊は途中で徴募等を集って、約二万の軍勢に勢力を増していた、先鋒隊が七千であるからヴァルナログ軍の合計は二万七千。

これで数の上で、如月遼率いる南方迎撃軍と互角となった。少なくともヴァルナログ軍はそう判断していたのだった。

その日の夜はミネア、サライ、瑜貴の三人で幕舎で食事を取る事になった。

「お久しぶりです、母上……明日からは母上の暴れっぷり、たっぷりと拝ませて頂きます」

「任せておきな、ノイア嬢は負けちゃったけど、考えてみりゃ小うるさいガキにいられても迷惑さ、明日から暴れてやるよ、食べるのは構わんけど酒は初めだけにするよ」

久方ぶりに会ったミネアに瑜貴が挨拶をしながら酒を注ぐと、彼女はそれに応じながらも明日の戦に備えて酒は初めの一杯のみで自重する。

「はい……承知しました、私達も控えます」

瑜貴は笑った。

普段はかなりの量の酒を飲むミネアも戦が近いとほとんど飲まない。

酒は戦場での判断力を鈍らせるからだ。

「それよりもだ……洛陽の敵の主力が汜水関に続々と入っているらしいな」

「ええ……ほとんど毎日、洛陽からの援軍が入城し、約十万の兵が洛陽の東の関門である汜水関、五万の兵が汜水関より更に洛陽に近い虎牢関に入っている模様です」

ミネアが注がれた酒を飲み干し訊くと、サライが頷く。
放っている密偵からの情報だ。

汜水関というのは洛陽の東の街道を塞ぐように建設された要衝で、洛陽を東より万単位の大軍で攻める際は必ず通過しなければいけない場所であり、虎牢関は汜水関より更に洛陽に近い場所にある汜水関と同じ様な要衝である。

つまり、東で集合しつつある反志道董子連合軍三十数万に対し、董子は手持ちの兵力二十万のうち、十五万を汜水関と虎牢関に配置して対抗している事になるのだ。

「洛陽にも少なくとも一万は守備隊を置かなければいけませんから」
「敵に援軍はないか」

瑜貴の説明にミネアはそう答えてから、目の前の食事に箸をつける。

「おそろくは……ひよつとすれば、一万程度の援軍が来るかもしれませんが、その可能性はそうは高くないでしょう」

「なるほどな」

「私も瑜貴の意見に同意します、我々と洛陽の間にはあの如月遼の陣が立ちはだかるのみかと……」

更に続ける瑜貴にミネアが頷き、それにサライが同意する。

「東の奴らは？　まだ尻込みしてんのかい？」

「相変わらずです、汜水関と虎牢関に兵が入ったとなると、更に立ち上がった方がいいが、集合は遅れているらしいです」

瑜貴が冷笑しながら答えると、

「馬鹿な奴等だ、それなら良いじゃないか……連合軍三十数万が尻込みするなら、ヴァルナログ家が洛陽に一番乗りしてやるよ！」

ミネアは機嫌良く豪快に笑い、サライと瑜貴も笑顔で顔を合わせる。

だが、三人は目の前の敵将がヴァルナログ家三代の仇敵となり、これから幾度も天下をめぐる戦いを続ける事になるとは思いもしていなかったのだった。

続く

第62話「董子の計略」

「右翼、徐栄將軍より配置に着いたとの事！」

「左翼、華蘭將軍の部隊も所定位置に到着したと連絡がありました！」

夜明け前。

まだ深く降りた闇。

篝火の焚かれた陣に連続して入ってきた伝令の報告に、鎧に身を包んだ如月遼は腕を組み静かに頷く。

「我々が鶴翼に広がっているのはヴァルナログにも察知されてますね、何も警戒してない訳ないから」

横に立った高矢順が遼に告げるが、

「もう、こうなったら何がばれても関係ないよ」

対する遼の返答は何か覚めていた。

「夜明けと同時に攻勢を開始するよ、作戦は全面攻勢、私が指示するまで攻勢を継続する」

続けて、彼女は命令を下してから、

「ヴァルナログだろうが……なんだろうが、古今東西の戦術においてこれ以上の物はないから」

と、ポツリと呟く。
少しずつ東の空が明るくなり始めた。

「な、なんだありゃ？」

ミネアは咄然とした声を上げ、サライと瑜貴の2人もそれに返答する言葉を発する事が出来なかった。

目の前の敵についての動向は可能な限り、調べていた筈だった。如月遼という敵将が昨夜の内に陣を鶴翼に開いている事も掴んでいたし、その隠蔽性の無さから、おそらく夜襲ではなく、朝一番で離れていた距離を詰めて来るのは読めていた。

実際、その通りだった。魯陽の平原を敵軍は予想通り中央、右翼、左翼に分かれて小細工無しに進軍してくる。

だが、ミネア達の予想を敵軍は一つだけ大きく違えていた。昨日まで同数であった筈の敵軍は少なく見ても十万を遥かに越えていたのである。

「嘘だ……志道董子軍の主力は汜水関と虎牢関に十五万近くいる筈、なんでここにこれだけの軍勢が存在できるんだ!？」

瑜貴は目を見開く。

何度見ても、堂々とそして秩序良く進んでくる敵軍は十万から十五万はいる様に見えたのだ。

「お母様……」

「狼狽えるんじゃない……大将はどんな時も迷いを見せないんだよ」

振り返るサライ。

その声の迷いを母親であるミネアは叱咤すると、唇を噛んで、

「あの色ガキ董子、尻込みする東の奴等とあたし達を見事に引っ掛けてくれやがったか」

と、迫りくる大軍を睨み付けた。

2

その色ガキ志道董子はその頃、洛陽で落ち着いていた訳では無かった。

汜水関。

東から迫る反志道董子連合軍をせき止める関門の砦に洛陽を出撃し、自ら入っていたのだ。

率いるは勇将アルテナとたった二万の軍勢。

だが、東で集合しつつある連合軍も、南で大軍を眼にしたヴァルナログ軍でさえ、ここに志道董子軍二十万の主力が配備されていると信じていた。

何故か？

簡単である。

南からのヴァルナログ軍侮り難しと見た董子が知恵を絞り、洛陽より東のこの汜水関に軍勢を集めていると見せかける詐術を成功させたからである。

その詐術とは、会議中に董子の見た光景。

一度、会議を抜けた文官の場所に董子が中庭で一息ついた間に、彼等の差し向けた部下達が陣取り、董子が彼等が帰ってきたと錯覚

した事がヒントになっている。

いない筈の者をいる様にみせかける詐術。

董子はまず汜水関に二万の軍勢を送り込んだ。

到着後、その軍勢の内の一万は夜間、周囲の偵察を厳重にし、密偵など人目を隠れながら洛陽方面に戻り、翌日の朝に、また汜水関に引き返すのである。

汜水関は街道を塞ぐ関であり、一般人の住む街が一緒になった城ではない。　純粹な軍事拠点だ。

敵の密偵はそれだけに潜入が難しく、情報を得にくく、これを見た者はどう思うだろうか？

二万の軍勢の入った汜水関に一万の援軍が駆け付けたと見るだろう。

後はこれを繰り返すだけである。

十日続ければ、実際には二万から一切、増援されていないにもかかわらず、十万の援軍が洛陽から汜水関に入った様に見えるのだ。

そして、董子はその詐術を更に完璧とする為、最後は自ら将旗を掲げ、汜水関に入ったのである。

最高権力者が自ら出陣した汜水関を十万を越える主力が護る。

多少の不自然さを蹴散らす説得力がそこには存在し、東の連合軍の集合のさらなる躊躇を呼んだのだ。

こうなれば、しめた物である。

居もしない汜水関十万の軍勢に東の反董子連合軍が躊躇している隙に、洛陽に残る主力を華蘭、徐栄という信頼できる将に任せ、南の如月遼の元に急行させたのである。

その際も華蘭と董子は氣を使った。

如月遼に援軍も含めた十数万の指揮を一任したのである。

普段ならば、降将の遼よりも華蘭や徐栄の方が上位であるのだが、一度南方迎撃軍を任命した事を重視し、指揮系統をはっきりさせる事で混乱を防ぎ、早期のヴァルナログ軍の撃破を図ったのである。

簡単に言えば、大規模な各個撃破作戦であるが、その為の準備、謀略、人選とを志道董子と華蘭のコンビはこなし、連合軍を見事に騙し、精強を誇るヴァルナログ軍を開戦当初に叩くという戦略的目的を果たしつつあったのである。

続く

第63話「進撃」

1

「左翼、敵右翼を押さえ切れません、数に任せて突撃してきます！」
「クソッ！ サライにあと少し持ちこたえさせろっ、敵軍は右翼をから陣形を回転させて、完全に包囲するつもりだ！」

伝令の報告にミネアは怒鳴る。

ヴァルナログ軍の右翼を担うのはサライと瑜貴の率いる八千。

ミネアの娘である勇将サライと頭脳明晰な瑜貴が率いる一軍は非常に有効な戦力に違いないのだが、相対するは猛将ぞろいの志道董子軍でも有数の将、徐栄將軍率いる五万の大軍であったのである。

その差は五倍以上。

それはミネアと如月遼が相対する中央、新たに加わった沙羅率いるヴァルナログ軍右翼と華蘭率いる董子軍左翼でも、ほぼ変わらない。

圧倒的戦力で遼はまず右翼軍を突進させる、全体一斉攻撃では自分も戦っている為、敵が大軍でも気にしようがないが、味方の左翼が圧されていき、自らの側面が敵軍に埋まっていくのを視ている中央軍の兵士達は士気が大きく揺らぐ。

「あっ……敵の左翼も動きました！」

「だろうな……」

指を差す部下にミネアはポツリと答えた。

董子軍の中央は動いては来ない。

数で両翼で圧しまくり、V字型にヴァルナログ軍を包囲していく作戦。

オーソドックスだ。

対処出来ない訳は無いのだが、ただ一つの要素がそれを不可能に近いものになっている。

圧倒的な数の差。

包囲作戦云々ではない。最強の戦術。

それは……敵を圧倒できる戦力を揃え、正面から撃破する事だ。長い歴史上、それが最も多い戦いの勝利の要因であり、それだからこそ……たまたまの幸運が重なり、少数が多数を撃破した事がまるで偉業のように後世に語られるのだ。

少数が圧倒的多数を撃破するなど、まさに奇跡だからこそ……

「くそっ……相手を舐めすぎた、如月遼とかいってたね、もうどうしようもないよ!」

ミネアは奮戦しながらもジワジワと圧されていく両翼を唇を噛みながら、睨んで、

「全軍退却、とにかく逃げるんだよ!」

そう叫び、この戦場での敗北宣言を告げた。

2

「……なっ!? ヴァルナログが負けた? 相手が十万以上って!」

汜水関の東。

陳留の郊外に張った陣でその報せを聞いた支永真里亜は座つていた椅子から立ち上がった。

「汜水関に敵の主力がいるんじゃないの？」

真里亜は傍らに腕を組んで立っていた未来に向かい怒鳴る。

「うっさいわね……こっちが汜水関にいると思つたら、魯陽にいらんだから騙されたんでしょ？」

未来は不機嫌そうに答える。

「すぐにでも汜水関に向かうのよ、今なら……」

「無理よ、敵の主力はおそらく今頃は魯陽から洛陽にとって返して、汜水関に向かつてるわよ……それにビビり共の集まりが悪いのは相変わらずだし、集まった諸将にも相談しないとまずくない？」

「……くっ」

自分の提案を鼻で笑う未来に、真里亜は唇を噛み締めた。

反志道董子連合軍は十数名の刺史、太守の名を連ねてはいたが、いまだに有名無実に近かった。

集合地点である陳留の平原に集まったのは数人にも満たない諸将である。

兵力はおよそ八万。

三十数万を数える兵で東から洛陽に迫る計画も絵に書いた餅だ。

「あと……確実に来そうなのは北平からの距離の関係で到着の遅れている鳳公子殿と、涼州から兵を差し向けてくるというアルファンス家くらいか」

「それで……十万を少し越えるくらいか、あとはおそらく日和見って奴等に違いないわね」

真里亜の言葉に未来は肩を竦める。

「困るわね……どうしたらいい？」

「あら、素直ね」

「当たり前でしょ？　これが危機でなくて何？」

名門一族、支永家の長女の真里亜の問い。

未来が少し笑みを浮かべたので、真里亜は声を荒らげるが、それに全く意に介さない様に未来はこう答えたのである。

「この辺でドカンとやって勝ち色見せるっきゃ無いんじゃない？」

汜水関に全軍突撃よ」

続く

第64話「シリアとエリーゼ」

1

「勝ったあ！？ 遼達がヴァルナログのババアの軍に勝ったのね？」

汜水関。

片膝をつく伝令からの報告に董子は椅子から立ち上がり、歓喜の声を隠さなかった。

「で、ババアどもの首はとったの？」

「いえ……ヴァルナログ軍は打ち負かされ、散々になった様ですが、ミネア・ヴァルナログを討ち取ったとの報せはありません」

「そう、でもまあ、今は手痛く叩ければそれでいいか……ざまあみろババア」

ミネアなりサライなりを討ち取ったなら、まず報告がある筈で、それがないのはおそらく取り逃がしたという事だが、洛陽に南から迫る忌々しいヴァルナログ軍を蹴散らせたのならば上々だ。

董子はそう自分を納得させた。

「そして、華蘭様率いる七万の部隊はここ汜水関に、徐栄將軍率いる五万の部隊は虎牢関に急行されています、遼様は引き続き魯陽に陣中にあります」

「よしよし……」

董子は頷く。

予定通りである。

ヴァルナログ軍を蹴散らし、南からの驚異は減ったが、宛には敗

れたとはいえ支永ノイアが健在であるし、更に南には連合軍に名を連ねてはいないが劉表もいるのだ、その為に如月遼を魯陽に残している。

『でも……支永ノイアなんて小便臭いガキなんてヴァルナログから比べたら敵じゃない、後は東からくる足並みの揃わない数頼みの意気地なただけだ、多少は出来る鳳公子や何をするか解らない天草未来がいるのが不気味だけど……こっちにはアルテナもいるし、華蘭も来る……勝てる、十分に勝てる戦だわ』

董子は確信して下唇を舐める。

そこに別の若い女の伝令が駆け込んできて、董子の前で膝をつく。

「董子様、陳留近くに集合した反乱軍に鳳公子と涼州からアルファンス軍が合流し、この汜水関に向けて進発を開始する模様！」

緊急の報を伝えようと汜水関に着いてからも、関内を走ったのだろう。

彼女は息も絶え絶えであった。

「アルファンス……こりゃまた厄介者がしゃしゃり出て来たけど、この汜水関をは落とせる訳がないわ」

鳳公子と共に報告された名に董子は顔を曇らせたが、それは一瞬だけであり、再び自信満々に笑顔を見せたのであった。

「これは圧巻だね！」

少し高い丘に轡を並べ、二騎が平原を見下ろす。

栗毛の馬に跨り、驚きの声を上げたのは、亜麻色の髪を短めのツインテールにした妹だった。

名をエリーゼ・アルファンス16歳。

パツチリした二重の碧い瞳、わずかに丸みを帯びた少女の輪郭、鼻は高めで唇は薄くも厚くも無い。

身長は150?半ばで身体つきは胸元はかなりふくよかに女性らしく成長している。

「いちいち騒がない、落ち着かないんだから……」

そんな妹にため息をついたのは姉のシリア・アルファンス17歳。亜麻色の妹とはうって変わつての赤茶色の髪を首を隠すくらいのミディアムヘアだ。

瞳は妹と同じ二重の碧い瞳、輪郭も程よい丸みを帯び、高めの鼻も厚くも薄くもない唇も特徴を共有していた。

母親が違い、髪の色は違うが顔立ちはよく似た姉妹のシリアとエリーゼ。

だが、二人は身体つきは似ていない。

150?半ばのふくよかなエリーゼに対して、シリアは160?を越えた良く締まった体つきだ。

「これは十万は越えているね」

「でも……志道董子も十万近い戦力を汜水関に集めているからね、攻め手なだけに不利だよ」

陳留郊外の平原を埋め尽くす兵士。

だが状況は不利。

シリアは神妙に唇を真一文字に結ぶ。

「お姉ちゃんがいるから平気だよ、西涼でお姉ちゃんに勝てる人なんていなかったんだから、中央にもお姉ちゃんに勝てる人なんているわきゃない」

「だと良いけど」

樂觀的な妹エリーゼに眉をしかめるシリア。

一族の多いアルファンスの姉妹の中で一番気が合う妹なのだが、こういう性格はシリアにはない。

「平気、平気！ お姉ちゃんなら平気だよ、めっちゃ強いクセに自分には自信持たないんだから……そんな事じゃ、お父様の代理は勤まんじゃないよ、ほら鳳公子様の軍も着いたみたいだから、一緒に挨拶に行こうよ、味方にも結構な強者がいるかもよ、暇潰しに手合せしちゃおう」

「……もう」

エリーゼに促され、シリアは呆れ声で答え、その後ろに続きながらも、

『強者かぁ……いるかなあ、多分いるだろうなあ……スゴく怖いけど、スゴく闘ってみたい』

なぜかそれを少しだけ愉しみに思ってしまったている自分に気付くのであった。

続く

第65話「心底」

1

夜の帳が降り始め、夜衛の兵士達が篝火に火を灯す時間。

反志道董子連合軍の諸将の約半数が支永真里亜の幕舎に集っていた。

「参加を表明しながらも集まったのは半数、後は近くまでは出陣してるが日和見を決め込んでいるわ」

真里亜は苦々しそうに重い口を開く。

「合計で十三万、前線兵力としては申し分ありませんが、およそ同数の敵が護る汜水関を抜くには足りないですね」

鳳公子の言葉にふうと出席者からはため息が漏れてしまう。

軍事的に考えれば、攻め手は単純に考えても守り手の三倍は最低でも必要とされ、ほぼ同数では話にならない。

「志道董子自らの出陣ならば敵兵士の士気や練度は高いだろう」

「相手はあのアルテナも出て来ている、あの娘にかてるのか」

「その上、虎牢関にも兵を配置しているらしい」

「日和見を決め込んでいる奴等が集まれば三十万にはなるのに」

口々に諸将達は董子軍について語り出すが、その中身は相手の備えの磐石さへの不安か、集まらない味方への不満だ。

「とにかくさあ……」

口を開いたのは真里亜と並んで座っていた未来。

支永真里亜と共に激文を出した未来には皆が気を止めている様で、鳳公子、真里亜、病気の父の代理で出席するシリア・アルフランス以外は、少なくとも中年程度年齢のいった男子である諸将もその言葉を聞こうと場が静まる。

「今はツラツラと恨みつらみを言う場合でも無いと思わない？ 十何万が一日一日無駄飯を食らって野営しても意味が無いのよ、動かない奴には後のご馳走もお預けすりゃいいし、時間が経っていい事なんて無いんだから、さっさと正式に総大将を決めて汜水関に攻め込むのが良いんじゃないかしら？」

「賛成です」

未来の意見に対しての場の雰囲気は精製される前にそう言ったのは鳳公子であった。

一見は温和そうな顔立ちだが、真の強そうな締まった唇、薄い栗色の前髪を真ん中で分け、後ろ髪は首の後ろで縛って長細く背中に伸ばした美人。

身体つきは凹凸がハッキリしながらも細身。

年齢が十代の未来、真里亜、シリアとは違い、二十代半ばだけに女子勢では落ち着いて見える。

「賛成です……」

もう一度、言ってから彼女は周囲を一回視線で一瞥した。

「確かに汜水関の守りが堅いのは事実でしょう、しかし天草さんが言われた様に兵糧をここで浪費し続けていても益はありませんでしょうし、動きを止めた意気地なしが動くとも思えません……私は今、

汜水関に進まないのならば、軍を北平に帰させて頂きます」

公子の最後の言葉に騒つく諸将達。

約二万を集め、遠く北平からやってきたばかりの公子が進撃しなければ軍を帰すと言うのである。

元々、志道董子と正面を切って戦うつもりで集まった者達、進撃には前向きであつたので、

「私も賛成だ、兵糧を食い潰すのは無駄だ」

「ここにも仕方があるまい」

「やって旗色が良ければ、様子見の連中も駆け付けてくるだろう」

そうスッキリしないながらも賛成の声が上がり、進軍の方針でようやく話が進み始めたのであつた。

「進軍するのならば、総大将だけ……」

「それは悩む必要ありませんよ、皇帝陛下からの勅を受け激文を発せられたお二人のどちらかがそれに付くのが普通では？」

未来が総大将についての話を切り出すと、またもや公子が素早く意見する。

『おやあ？ このお姉様は総大将やりたがっている気がするんだけど……ああ、なるほど、なるほど』

未来は一瞬の自問自答を無言で終えると、公子の意見に概ね賛成の意を示す者達を見据えた。

『この連合軍の総大将は拾うには熱過ぎる栗になりつつあるからね、やっぱり止めたという所なのかしらねえ』

連合軍の心底にある物を推測し、頬杖をつき口元を緩める未来。

「天草様、それではどうでしょう？」

そこに向けられた公子の笑顔に対し、数秒考えた振りをしてから、

「いやいや……ここは名門支永真里亜さんにやってもらうのが筋でしょう？」

未来はそう言って、肩を竦めたのだった。

その二日後。

支永真里亜を総大将に据え、先鋒に北平太守鳳公子を配した反志道董子連合軍の十二万五千の軍勢は、洛陽への東の第一関門、汜水関への遅すぎる進軍を開始したのである。

続く

第66話「霧雨の灯火」

0

「ん……」

頬を伝う湿った感覚に私は薄目を開けた。
闇夜だ。

うつ伏せに倒れた全身が冷たい。
私の倒れている地面は濡れている。

『死んでない……』

四肢を少しずつ動かす。 幸い、痛みは感じない。 立ち上がる。
霧雨が降っていた。
闇夜でも少しずつ目が慣れてきて、私は周囲の様子を感じ取る。

「……こんなこと、慣れないよ」

そうは呟きながらも、私は死屍累々の味方を見渡して、火矢が突き刺さり燃える食糧運搬の台車を見つけると、腰の松明を手にとり火を付けた。

照らしだされる味方は誰も動かない。

「負けたんだな……」

私達、ヴァルナログ軍は志道董子軍の突然、現れた数倍の大軍に敗北を喫し退却した。
静かだ。

もう戦いは終わったみたいだ。

「そこにいるのは誰？　ヴァルナログ軍の生き残り、死体漁り？」
「えっ……えっ？」

ふと、後ろから声をかけられて私は背筋を震わせて、松明を向ける。

そこには緑がかった髪を後頭部から長く細いツインテールにした少女が立っていたのだ。

沙羅さんだ。

江陵から私達の仲間になった元劉表軍の武将で、細く締まった身体で広刃の大剣を両手で扱う凄く強い女の子。

まだ、親しく話してはいないがサライ様の率いる先鋒軍と一緒にいたので顔見知りではある。

「真奈美ちゃん、よく無事でいたね」

「沙羅さん、みんなは？　サライ様やミネア様はどうなったんですか？」

「わからない、もう暗いし……私の部隊も散々にやられて、ここに五十人しかいなくてさ、これからどうすればいいか」

私の問いに沙羅さんは暗い表情で首を振る。

彼女自身も彼女の後ろに従う生き残りの皆もその表情は疲れ切っている、霧雨の中を敵に脅えながら仲間を探していたのだろう。

私は周囲を見渡した。

先程、火の付いた食糧運搬車の他にも周りにはそれらが大量に倒れている。

所属は補給部隊だ、それは当然なのだが、私はある事に気づくと

沙羅さんに振り返る。

「沙羅さん！ この霧雨の中、暗闇を歩いてもみんなは見つからないと思います、私に考えがあるから協力して欲しいんです」

「真奈美ちゃん？ うん、何かいい考えがあればそりゃ、もちろんだけど」

私の申し出に沙羅さんは頷いてくれた。

少し危険な賭けかも知れないけれど、早く生き残りの仲間を集合させなくてはいけない、私は覚悟を決めていた。

1

「三百か……」

闇夜の森。

神宮寺瑜貴は敗残の兵でどうにか自分で取り纏められた者達を見つめた。

負傷者も多い。

まさかの大軍の来襲に有効な手段を打てぬまま、敗北を喫した自分への苛立ちがあるが、今は味方を探さなければならぬ。

しかし、それは危険を伴う物だ。

敵軍の掃討作戦に出会えば負傷者だらけの部隊はひとたまりもない。

「……サライや母上はどうしているだろう？ まだ周辺にいるのか、それとも引き返したのか」

黒い長髪の美少女は軽く爪を噛む。

いつまでも森に隠れていても埒が開かない、だが周りの状況が全く把握できない今は将としての知恵と勘だけが頼りだった。

「志道董子軍の主力がここにいる事が知れば、東の汜水関方面の連合軍も動き出す、敵の主力はおそらく汜水関方面に急行している筈だ、我々には一撃痛打を与えれば、といつまでもこの周辺にはおるまい」

そう考える。

ならば松明を付け周りを搜索したいが、上手く行くだろうか？
敵軍の主力はいなくても如月遼の部隊まで居なくなるとは思えない、一度の勝利でまだ態度の判らない劉表のいる南に無防備になる程に志道董子は甘くない。如月遼の部隊は引き続き魯陽に残っている可能性が高く、更に遼が敗残兵を掃討する作戦を実行してあるかも知れないのだ。

「ここは迂闊には動けないのか？ 一時でも早く散り散りになった味方を集合させたいのに……」

そう瑜貴が唇を噛み締めた時である、前方の平原の丘の麓地点がボウツと明るくなり、聞き慣れた太鼓がその辺りから聞こえ始めたのだ。

「この太鼓は……我が軍の飯の合図だ！」

「そうだっ」

「飯かっ？」

「ご飯なの？」

一人の兵が叫ぶと、弱り切って無口になっていた筈の者達も口々

に歓喜の声をあげる。

「確かに我がヴァルナログ軍の食事の集合の合図がああ灯りの場所から聞こえてくる！ 一体……いや、真奈美だっ」

瑜貴は確信し、周囲の部下達に告げた。

「集合の合図だ！ 全員、立ち上がれ……雨で冷えた身体を暖め、空腹を満たすんだ！ あそこに味方がいるぞっ」

2

「瑜貴さんっ！」

瑜貴を先頭に三百の兵が姿を現すと、真奈美は声を弾ませて駆け寄る。

周囲にはいくつもカマドが作られて、食糧が炊き出されていた。

「随分、集まってきたているな……二、三千はいる」

「はい、薪を付け、ご飯の用意をしてから、いつもの食事の用意完了の太鼓を鳴らしたら、散々になっていた味方が集まってきて、瑜貴さんも来てくれて助かりました」

「うん……北を背にした丘の麓でなら、多少明かりを灯しても北の魯陽の敵には見えまい、だが敵の掃討作戦が行なわれていたらどうするつもりだった？」

「はい、この状況だから少しは賭けかも知れないとは思いましたが……」

真奈美はそう前置きをしてから、説明を始める。

「今、炊き出しをしている様に私達の兵糧など、補給物資がほとんど無事だったんです、敵が掃討作戦をしていたならば兵糧などは真っ先に略奪されていたと思います、それらが放置されていたという事は……」

「敵の掃討作戦が実施されていない、という判断になった訳か」

「はい……その通りです、明かりは言われた通り、北からは見えないうようにしました、方向を見失ってなければ味方はまず敵陣のある北には逃げませんから」

瑜貴が口を挟むと、答えに頷く真奈美。

「ふふっ……お前は本当に兵糧担当官にはしておけないな」

瑜貴が笑う。

そこに響く馬蹄の音。

「あれは!?!」

数千の集団だ。

敵襲の恐れもあると、真奈美と瑜貴は緊張したが、そこには、

「真奈美と瑜貴か、面目ない！ 奴等に一杯喰わされたな、でも次はそうはいかんからな！」

そう吠える主君ミネア・ヴァルナログに娘のサライが約八千の味方敗残兵を纏め上げてやってきたのである。

「母上っ、よくご無事で……サライ！怪我はしなかったか？ 良かった」

瑜貴は安堵の表情を見せて、サライに歩み寄ると、彼女は瑜貴の手を取って笑顔を見せる。

「大丈夫……途中で母上と会えて、兵を集めながら敵の掃討作戦に備えていたのだけど、軍の食事の太鼓が鳴ったから……もしま、と思っ」

「そうか、本当によかった、心配した」

頷き、握られた手を更に握り返す瑜貴。

「さて……これは真奈美が用意したのか、ご苦勞様だよ」

義姉妹の再会に笑みを浮かべて、ミネアは傍らの真奈美を労う。

「いう……大したことはしてないです」

「いやいや、たいしたもんだ、これなら朝までにはかなり集まってくるな」

「かなりの損害ですが、今で一万はいますから、一万四、五千にはなるのではないでしょうか？」

「そうだな、相手が急ぎの一撃で引き揚げてくれたお陰で全滅は免れた」

ミネアは神妙な顔で周りを見渡した。

初期の段階でのミネアの退却の決断、敵の引き上げも早く全滅は免れた。

しかし、現時点での推測でも、二万七千を数えた味方の半数を失い、かなりの負傷者もいるのは壊滅と言って差し支えない。

「母上……これでは魯陽の如月遼は相手できません、長沙に退くべきかと」

瑜貴がサライの手を握ったまま、進言する。

「敗れましたが、連合軍の先駆けには働けたかと思えます」

「負傷者も多く、早く治療できる場所に送らなければいけません」

そう付け加える瑜貴にサライも頷き同意をしたが、

「駄目だ……まだまだ戦は終わってない」

ミネアは腕を組み首を振って呟く。

「お母様！」

「母上！」

「ミネア様！」

意外な返事だった。

これ以上は無理だ。

三人は主君をそれぞれに諫める様に声を上げたが、ミネアは、

「……ヴァルナログ家の代々の御先祖様は負けたままじゃ、墓には入れてはくれんのさ、私に当てがある、まだまだ志道董子に噛み付くチャンスはある……伊達に年食っちゃいないよ、粘りが違う、粘りが！」

と、不敵な笑みを浮かべ退却を断固拒否したのであった。

続く

第67話「汜水関大戦？」

1

「董子様、そろそろ敵軍の先鋒が見えてまいりましょう」

「そうね……明日には華蘭も来るんだし、今日の所は適当に相手をして差し上げなさいよ」

アルテナと二万の軍勢を従え、志道董子自ら守る汜水関によく連合軍の先鋒が迫るとの報を董子は軽く手を振り、流す

「督戦されませんか？」

「必要なしよ、相手だって長い遠征をしてきてるのだし、何かあったら櫓に上がるわよ……アルテナが守備の指揮をとって」

督戦を促されるが、必要無しと断ずると董子は傍らのアルテナに命令する。

「ハイ、久しぶりに腕が鳴ります」

「頼むわよ、でも今日は守るだけよ、外に出て戦うのは華蘭が来て兵力に不安がなくなってからね」

笑みを浮かべる董子。

「はい、では今日は守城の戦を見せます」

アルテナも特に不平や不満を言わず、董子に笑顔を返すのであった。

作戦会議を終えて、アルテナは指揮所の櫓に、武官達はそれぞれの配置場所に散っていく。

董子を大きな背もたれに肘掛けのある豪華な座に据えた広間は彼女の護衛と細かな打ち合せをしあう者だけになっていた。

「ふう」

一息つく董子。

『これで負けはない』

大きな背もたれに深く身体を沈め、董子はそう確信していた。

迫る連合軍十数万に汜水関に籠もる味方は二万。

本来ならば、汜水関の力を借りても危険な兵力差ではあるが、如月遼に援軍に出した華蘭と徐栄將軍率いる十万近い軍が味方に駆け付けてきており、到着は明日となったのである。

十日や一ヶ月と言われれば危機感も増そうが、たったの一日守れば、頼れる増援が駆けつけ、汜水関を擁して守る董子軍が兵力にして互角という、揺るぎない優位な立場に立てるのだ。

「勝負は明日からよ」

遠征をしてきた敵軍先鋒が、到着後すぐに汜水関に挑みかかる可能性も低く、本格的な勝負は明日からだろう。

そんな事を考えながらも董子はいつの間にかウトウトと眠りについていたのだった。

「董子様っ！」

「ん……」

自分と呼ぶ声に董子は薄目を開けた。

「董子様、敵軍の先鋒が関の正面に現れました……しかし……」

報告をしてきた青年の伝令の声が震えている。

「しかし……なに？」

「アルテナ將軍が、董子様ご自身でお確かめ欲しいとの事です」

「……どういう事？ まあ、来たというなら観てみてもいいし、アルテナがそういうのなら行くけど」

董子は目を擦りながら、面倒くさそうに立ち上がると歩き出し、城壁の櫓に登る。

「董子さまあゝ」

方天画戟を持ち、守備の指揮を取っていたであろうアルテナが董子を見るなり、何かに迷ったような情けない声を上げてくる。

「何なの？ あんたがそんな顔をしてたら、部下達も動揺するでしょ、敵が現れただけで……」

アルテナを叱咤してから視線を襲来した連合軍に向ける董子。

「敵が……」

言葉が止まる……

視線も身体も固まった。

「な、なんで？」

曖昧な疑問符には、誰からも返事はない。

だが、防壁の櫓にいた誰もが何に対して董子が迷いを見せたのかは分かっていた。

防壁の縁に手をかけ、身を乗り出して董子は固まっていた身体を震わせた。

「な、なんで……なんで、あんたらがここにいるのよぉー!？」

汜水関に相対する約一万五千程の集団。

その連合軍の先鋒に翻る旗は鳳公子の物でも、アルファンス家の物でもなかった。

それはヴァルナログ一族の物だったのである。

「おお……動揺してる、動揺してる、敵はまるで我々を地獄からの使者を見るような目で見ておるわ」

ミネア・ヴァルナログは街道を塞ぐように築かれた防壁を見上げて、不敵に笑った。

「母上……軍は着いたばかりです、ひとまず汜水関に距離を置いて陣を築き、我々は明日にでも到着する連合軍に合流しては？」

瑜貴が進言するが、ミネアは首を振る。

「ダメだ」

「しかし……味方は敗戦の中で再編成し、魯陽からこの汜水関まで強行軍をしてきております、再び無理をしてまた多大な損害を出せば……」

「瑜貴……」

ミネアは黒髪の美少女に振り返る。

「お前は頭がいい、あたしよりも切れるし、正直あんまり教えられる事はない……でもこれだけはあたしはあんたに教えられる」

「母上……」

「戦は気合いだ、志道童子は魯陽で負けたあたし達が再編成して、汜水関に現われるなんて夢にも思ってたみたいだ、見ろ、みんな防壁の上で棒立ちに見てやがるさ……あたし達は負けはしたが復讐戦の意気は十分、ここで仕掛けなきや何の為に汜水関に来たのかわからないよ」

ミネアは瑜貴にそう言うってから、手をスッと上げると麾下の軍に命令を下したのだった。

「全軍突撃！ 志道董子を汜水関から叩き出せ！」

こうして、汜水関から虎牢関にまで渡る志道董子軍と反志道董子連合軍の大会戦は幕を上げたのである。

続く

第68話「汜水関大戦？」

1

「撃てっ！ 矢を浴びせろっ、壁に登らせるんじゃないわよ、あんな戦力でこの汜水関が落とせるわけがないっ」

汜水関に迫るヴァルナログ軍を指差し、董子が喚き散らすと、無数の矢が空中を舞う。

それが黒山の人集りに吸い込まれていき、確実に多数の命を奪っていく。

だが、汜水関に殺到するヴァルナログ軍の勢いは衰えない、それどころか増してさえいる。

「近付けるなっ、近付けるなっ！ あのババア、なんで大人しくしてないのよっ！ 早く死ねっ」

守る志道董子二万。

攻めるミネア・ヴァルナログ一万五千。

有利さは十二分に解っている。

理解できている筈だと言うのに、目の前の死をも怖れぬ敵の迫力に董子自身はおろか、軍全体が吞まれているのを察し、彼女は思わず声を張り上げてしまったのだった。

激しい攻防は続く。

矢の応酬。

城壁の上から階下の兵に浴びせられる熱湯。

門に打ち付けられる破城槌。

ヴァルナログの勇猛果敢なる兵達は汜水関の城壁に杭を打ち、梯子を渡し攀じ登る。

「一番乗りは私たちなんだからね！ 新入りは根性見せてナンボなんだから」

矢の嵐、石の霰、熱湯の雨が降り注ぐ最前線に立つのは荊州で劉表軍に見切りをつけてヴァルナログ軍に馳せ参じた沙羅。

両手で持つ大剣を武器にするが、流石にそれを持って城壁を登る事は臂力尋常でない彼女にも無理で、大剣は背負い、手には槍を持っている。

「絶対に汜水関攻略の一番手は私なんだから、弓隊はしっかり援護しなさいよ、他の者は続けっ、石なんて一つや二つ、頭に落ちたって死なないし、お湯なんて風呂と同じよっ！」

沙羅はそう部下達に檄を飛ばして、城壁に架かった梯子を登り出すが、それに気づいた城壁の上の董子軍の兵士が子供の頭くらいの石を彼女に放り投げてきたのである。

「危ない沙羅様っ！」

「!？」

石は正確な狙いで沙羅の頭上に落ちてきた。

部下達が叫び、沙羅もそれを見上げるが、時すでに遅し、石は沙羅の脳天に当たり、飛び散る鮮血が彼女の後に続き梯子を登る部下達に降り注ぐ。

だが……

「うおおおおっ！」

緑がかった細長いツインテールの髪を赤く染め上げながら、沙羅は烈迫の気合いの声を上げ、梯子から落ちるところか、凄いスピードで登り始めたのである。

「なんだアイツは！」

守備兵は仰天し、更に石を落とそうと城壁に立つがその前に沙羅を援護していたヴァルナログ軍の弓兵に射られ絶命し、前のめりに壁から落ちる。

「やった……ああっ」

主将の危機を救った弓兵達は意気あがるが、それはすぐに悲鳴に変わった、城壁から落ちた敵兵が沙羅の上に降ってきたのだ。

「うぐつつ」

梯子に登った状態から降ってきたのだ中年兵士が沙羅の肩にのしかかる、背中に背負った大剣に引っ掛かり落ちないのだ、しかし、なんと彼女は梯子を離さずに持ちこたえたのである。

「さすがは沙羅様！」

「早くそやつを下に放り投げて下さい！」

後に続く部下達は沙羅に叫ぶが、当の沙羅は口元に滴る自らの脳天から血をペロリと舐めると、

「コイツ背負ったままの方が盾代わりになっていいじゃん！」

そう興奮気味に怒鳴り散らし、そのまま梯子を一人の時と変わらぬスピードで登り始めてしまったのだ。

「ば……化け物だ、ヴァルナログ軍の武将はやはり化け物だっ！」

狼狽える守備兵達。

「今だっ！」

沙羅は弓隊の援護を受けて、遂に城壁に登りきってしまったのだ。

「き、きたあゝ！」

「化け物よ」

慌てる董子軍の兵士達。

「その通り、あんたらをぶち殺しに來た地獄の化け物、沙羅の登場よ」

血まみれの沙羅は叫び、担いだ死体を振り落とし背中から大剣を抜き放つ。

「かかれっ！ 怯むな、かかれっ」

「アンタが一番、及び越しよっ」

守備隊長が叫ぶが、沙羅が大剣を振るうと、守備隊長の胴が横に裂けて下半身と別れを告げる。

梯子に登りきり、更に沙羅に続く者達。

「沙羅さん！」

その中には真奈美も混じっていた。

本来ならば兵糧担当官の彼女が前線に出る事はないが、兵力不足を補う為に補給部隊も兵糧を管理する一部の者を残して、前線に投入されたのである。

「やったね、真奈美……ここから堤防に穴が開くように味方が中に殺到するよ、勝てるよ」

「ああ……うん、沙羅さんのお陰だよ、後は他に任せて、とりあえずは頭の血を止めようね」

ニツと歯をみせての笑顔で振り返る沙羅に真奈美が駆け寄る。

沙羅の言う通り、彼女の拓いた血路を一気に数十の兵が通り、氾水関の守備兵は一気に怯む。

「じゃ……頼もうかな」

一番乗りの役割は果たした、もう平気だろう、と言いたげなため息をつき、沙羅は周辺に味方しかいない事を確認すると、沙羅は中腰になる。

「じゃあ……まずは消毒、消毒液はないからお酒だけど、アルコールの度数が高いといいのかな？」

「なに？」

「何でもないよ」

自分の眩きに問いかける沙羅に真奈美は首を振りながら、酒を含ませた布で傷を拭き、包帯を巻く。

「ありがと……侵入しちゃえば後は押しまくるだけだけど、もう少し頑張らなくちゃ」

「無理しないでね」

笑顔を向け合う二人だが遠くから悲鳴が響き、通り過ぎていった筈の味方の兵士達がまるで逆戻しの様に返ってきたのである。

「ど、どうしたの？」

一人の若い男性兵士を呼び止めると、彼は恐怖に引き吊った表情で叫ぶ。

「沙羅様……む、向こうにバケモノがっ!？」

「……!？」

その言葉に沙羅と真奈美が顔を見合わせた瞬間、新たな悲鳴と鋭い斬撃音が聞こえてきたのである。

続く

第69話「汜水関大戦？」

0

「何!？」

大剣を構え、味方の悲鳴が上がった方向を見据えた沙羅さん。
私に治療を受けていた時の笑顔はなく、鋭い瞳で睨み付ける。

「危ないから真奈美は少し下がっていて、ここに志道董子が居るのなら……おそらく、噂のアイツも出てくる可能性があるとは思っていたからね」

そう呟く沙羅さんの横顔には少しの笑みと強い緊張が同居しています。

「はい……」

沙羅さんが誰の名前を挙げたかは解るつもり。
強者ぞろいの志道董子陣営でも、抜群に武勇が優れると聞く……
アルテナと呼ばれる彼女に違いありません。

「来た……」

低く構える沙羅さん。

私は用意した短剣を右手に持つが、言われた通り後ろに下がる、おそらく出来る事は少ないだろう。

「真奈美様……」

「アイツの強さは尋常じゃありません」

退いてきた兵士達が怯え切った声を出している。

私と同じ年位の少女や中年の男性達。

もう後ろは梯子の架かった城壁。

簡単には退けないし、前に進まなければ後続の味方は詰まり、氾水関を陥落させる事も出来ない。

勇躍、一番乗りで乗り込んだ筈の私達は、沙羅さんだけを頼りに追い詰められてしまったのだ。

「ギャアアアッ！」

痛々しい悲鳴が響き、私は目をつぶりそうになってしまう。

方天画戟という戟で、胴を刺し抜かれ吊り上げられた味方の兵士の亡骸が宙を舞い、構えた沙羅さんの足元に落ちる。

「随分な馬鹿力ね」

構えを崩さずに言った沙羅さんの目の前に現れた少女は笑う。

「こういうのはパフォーマンスですね」

金髪に両方の揉み上げを伸ばしたショートカット。

丸目に眼鏡の可愛い童顔。

身長は170?くらいで高いが、体付きは女の子らしい丸みがあるのが、軽装鎧の上からでも判る。

「アンタがアルテナ？」

「そうです、良く登ってきたとは思いますが、帰ってもらいます」
「そうはいかない」

「嬉しいです……あなたは少しは楽しませてくれそうですね」

アルテナは沙羅さんと言葉を交わして、方天画戟を構えた。

向かい合う二人。

アルテナの後方にも志道董子軍の兵士が現れ、一騎打ちに注目する。

だが、私は沙羅さんが右手を武器から離し、アルテナから見えないように動かしているのに気付く。

沙羅さんは下げた右手を素早く振っていた。

これは……

答えを導くのかかったのは数瞬。

私達に退け、と合図を出しているのだ。

あの強気な沙羅さんが戦う前から……アルテナには勝てないと踏んでいる。

緊張が高まり、注目が沙羅さんとアルテナに集まる中で、私は近くの兵士隊長に耳打ちした。

「みんな大声で沙羅さんの応援をして下さい、そして一人ずつゆっくり梯子を降りて下さい」

「え……!?!」

「命令です」

意外そうな顔をした兵士隊長に私は瞳を細めた。

「うおりゃあああっ！」

烈迫の気合いと共に振り降ろした大剣をアルテナは方天画戟の穂先を当て軌道をずらす。

「すごいです！　よくもそんな無駄に大きい剣をそのスピードで振れますね」

言葉は驚いてみせるアルテナだが、表情は涼しい顔で沙羅の攻撃を受け流したのである。

「この、バカに……してんじゃないわよっ！」

怒りを露にして大剣を振り回す。

眼にも止まらないスピード。

普通の兵士が相手ならば一度に何人も絶命に追い込む攻撃。だがアルテナは不敵な笑みを絶やさない。

「すごいです、すごいです、すごいですっ！」

流し、避ける、受ける。

「貴女の攻撃……強くて、速くて……意志があって、素敵です」

沙羅の必死の攻撃。

汗をかいてはいるが、アルテナは闘いの中で明らかに恍惚の表情を浮かべ全てを見事に捌く。

「な、な……な」

全身に浮き出る冷や汗。

苦戦必至の相手である事は覚悟していたのだが、まさか楽しまれてしまうとは想像していなかった。

「久しぶりの強い相手にもう……我慢できません」

アルテナは舌舐めずりすると、方天画戟の穂先を沙羅に定める。

「来るっ！」

素早く反応し、大剣の剣幅を利用しての受けに回る沙羅。次に瞬間に襲いかかって来たのは重く速過ぎる衝撃だ。

『何よっ！？ これは……どういう突きなの？』

沙羅は歯を食い縛る。

受けたお陰でダメージは無いが強い痺れが全身を伝わっていく。

「良く受けてくれました、上手です、上手です！」

昂揚を隠さない眼鏡の少女に沙羅は生まれて初めて背筋が真から凍りつく感覚を覚えた。

「もっと……もっと、もっと楽しませて下さい！」

玉の汗をかきながらも笑顔は崩れない。

そして繰り出される突きの連打。

「ぐうううっ」

下がる沙羅。

何とか防いでいるだけで全く反撃の隙は無い。

「沙羅様でもまったくかなわない、ば……化け物だぁー！」

真奈美の背後にいた兵士が算を乱して逃げ出す。

「……あっ……！」

止めようとするがもう遅い、あまりにも強力なアルテナの武勇の前に、真奈美の立てた気付かれずに少しずつ退却する手を守らず、沙羅の部下は折角這い登った何本かの梯子に殺到していく。

もちろん、それを見逃すアルテナの部下ではない。

「追いかけるっ、奴等から入ってきたんだ、今更逃げるなんて許すなっ！」

たちまちアルテナの部下もそれを追いかけて、大乱戦の様相になる。

「くそっ……こうなったらもう何もない、退却、退却、退却！」

沙羅はそう叫び、大乱戦に紛れ一騎討ちを打ち切り、後方に走りですが、

「フフッ……こう不粹な状態になるなんて、また楽しませて下さい」

逃げる沙羅をアルテナは追いもせず、微笑むのであった。

「ダメです、沙羅様の隊が一度は侵入を果たしましたが撃退されました、依然として他は一進一退です」

「ご苦労」

城攻めの戦況を伝える伝令を瑜貴は労い、腕を組む総大将に振り返る。

「攻め手はかなり頑張ってますね、どうされます？ 城攻めを続けますか？」

「……ん」

瑜貴に訊かれたミネアは汜水関を睨み付け、数秒考えてから答えた。

「ヤメだっ、そろそろ後ろからくる奴らに合流してやろう、それにもう十分に志道董子に私達がやれる所は見せたさ」

「……ですね」

ミネアの判断に瑜貴は同意する。

魯陽からの戦いで疲弊していた兵士とは思えない戦いたが、消耗がやはり大きくこれ以上の無理はもうできない。

一見、猪武者にも思えるミネアの采配もきちんと退く所はあるのだ。

『まあ、その退くべきが他者より一段、遅い気が親子共々あるのが

気になるのだが……』

そうは思うが、そこがまた粘りがあるという長所にもなるのだから、と口には出さず、瑜貴は後ろに控える数人の伝令に振り返り指示を出した。

「全軍退却だ、汜水関との距離を取る、敵の追撃があれば私の部隊が引き受けるから退けと伝えよ」

「はっ！」

片膝を付いた数名の少女達は立ち上がり、前線に駆けていく。それを見送り、

「さあて……志道董子、アンタにこのオバサンほどの粘りはあるかい?」

ミネアはそう腕を組み、呟くのであった。

続く

第70話「汜水関大戦？―董子と華蘭―」

「どうやら敵軍は退くようです！」

「そうですね……」

汜水関の櫓。

攻撃を中止して引き上げるヴァルナログ軍を指差す部下に董子は答える。

一部の部隊の侵入は許したが、アルテナを差し向けたお陰でどうにか撃退できた。

「追撃を命じますか？」

「いいわよ……明日になれば華蘭も来るし、今日は敵襲はないだろうから私は少し休むわ」

部下に追撃の確認をされるが疲れたように董子は首を振ると、櫓から降りていくのだった。

勝利。

汜水関に攻め寄せたヴァルナログ軍を見事に撃退した。

なのに董子の心底には魯陽で見事に叩いた筈のヴァルナログ軍が不死鳥の様に甦り、目の前に現れ自分を追い詰めたという不気味な恐怖感がジワジワと浸透していたのである。

「ヴァルナログ軍……あいつらはヤバいわね、一番怖いのはああいう気合いで来る奴等よ……いくら汜水関が堅いとはいえ、最終的な目標でいる私が奴等の前に居続けるのは手負いでも狼の前に餌を出

しておくのと一緒にだわ、下手打てば今日だってたった一万そこらの戦力でこの汜水関を落とされるピンチだったとも言えるし……」

董子は櫓を降り、自らの部屋に戻っていく。

疲れているのだが、寝床についても落ち着かない。

普段ならば可愛い小姓でも呼びつけ満足するまで欲求を満たすと、良い眠りに就けたりするのだがどうにも気分は乗らない。

薄い絹の寝間着で寝台に横になるが、頭に浮かぶのは不気味なヴァルナログ軍の事ばかりだ。

「あのババア……煩わしくてしょうがない、でもあの鋭鋒は長くは続かないにちがいないわ、鋭いうちを躲せば良いのよ」

董子はポツリと呟く。

いわゆる空かし。

敵軍のやる気を空回りさせれば、気合いが勢いと言っても良いヴァルナログ軍は今までの疲れと傷を思い出して、ドツと崩れるに違いないのだ。

わざわざ勢いのある相手と戦う必要も義理も、そしてそんな信条なんて者は志道董子は持っていない。

必要とあれば退く。

不器用な相手と戦うには器用に立ち回るのが一番。

「これは思いつく様で思いつかないわ、きっとあのババア驚くわよ……」

思いついた策に思わず、一人ニヤついてから立ち上がる。

「桐生？ 桐生はいる？ いらっしゃい」

何かに安心した途端、沸き上がってきた欲求を満たす為、お気に入りの小姓を呼ぶが、

「申し訳ありません、董子様……桐生はアルテナ様に呼ばれて……その、幕舎にいかれました」

そうお付きの若い女官に答えられてしまい、

「あのガキ、少し働いたくらいで、あたしの桐生を好きにしやがって！」

董子は舌打ちしながら寝台を蹴るのだった。

2

翌日。

華蘭率いる約十万の援軍が汜水関に到着する。

「董子様」

「よく来たわね、華蘭」

久方ぶりに会った主君に駆け寄る華蘭。

董子も晴れ晴れとした表情だ。

「昨日、ヴァルナログ軍の攻撃があつたと聞いて驚いています」

「ええ……魯陽で負けたクセに勝った貴方達よりも早くここに来たわ、まったくしぶといわよ」

董子は唇を噛む。

もちろん、華蘭も魯陽から急行したのだが、両軍の規模には数倍の開きがある、ヴァルナログ軍は二万にも満たず、華蘭軍は十万近いのだ、要因を規模だけに絞れば、行軍のスピードが違ってしまうのは仕方のない事なのだ。

「ご無事安心しています、明日からはこの華蘭が董子様をお守りします、ヴァルナログ軍など再び蹴散らしてくれます」

華蘭はそう言って笑顔を見せたが、

「ごめん、ちょっと待った、いい策があんのよ」

董子は人差し指を立て、

「実はここはアンタに任せたいのよ、あたしはアルテナ連れて虎牢関に下がるからさ」

そう華蘭の耳元に口を寄せ言った。

「えっ!？」

驚く華蘭。

敵味方ともに兵力が出揃う明日からが汜水関の戦いの本番だ。

言わば今までのヴァルナログ軍との戦いは重要だが、あくまでも前哨戦。

互いに十万以上の主力が戦い雌雄を決する前に一方の総司令官が後方に下がれば、不利が生じない訳がないと彼女は考え、

「董子様……理由があるのならお教え下さい、決戦を前に後方に下

がるのならそれなりに理由が無ければ兵が納得しません」

そう理由を問う。

「……」

対しての董子は少し間を置き華蘭を見る。

あたしの作戦に反対なの？ 珍しいわね。
そう言いたげな表情。

「敵がいくら増えても、一番怖いのはヴァルナログの奴等よ、あいつらの目標は私、目標の私がうまく躲せば奴等は必ず崩れるに違いないわ」

「しかし……敵はヴァルナログだけでは」

「他は雑魚よ、意志統一がないわ」

キッパリ言い放つ董子。

「……意志統一ですか」

ポツリと呟き、黙り込む華蘭。

ならば自らと董子の意志統一はどうなんだろう、と疑問を抱いてしまうが、彼女はそれを強く振り払う様に首を振る。

『ダメだ、董子様を信じなければ……それに下がるといっても汜水関と虎牢関はそうは距離がない、上手くいけば相互支援は十分に可能な距離』

「華蘭？」

「何でもありません」

その様子に少し心配そうな顔を見せる董子に華蘭は顔を上げて、

「董子様が良かれと思われた作戦ならば、華蘭はそれを実行するま
で、汜水関は生命に代えても守り切ってみせます」

そう笑顔で答えるのであった。

続く

第71話「汜水関大戦？―未来の笑み―」

「いやあ、あんたらがあんまり遅いもんだから、先に志道董子と喧嘩を始めさせてもらったよ、という訳で明日からの先鋒も必然的に私達、ヴァルナログが務めさせてもらおうよ！」

汜水関に相對する様に作られた総勢二十万を軽く越える陣。

居並ぶ連合軍諸將は笑うミネアに反論は出ない。

彼女の笑みはいつまでも着陣せず、志道董子に対し戦線を開かなかった者達に向けての挑発まじりの嘲笑であった。

「ミネア殿、魯陽では妹をお助け頂きありがとうございます、もちろん先陣については文句はありません、志道董子が震え逃げ出したヴァルナログ一門の戦いを再びお見せ下さい」

そんなミネアに不快な顔をする者もいる中、支永真里亜は丁寧に頭を下げ、妹を危機から救った事を感謝し、それを認める。

黒髪のセミロング、柳眉に切れ長の瞳が目立つ細身の美少女。

彼女がこの連合軍を率いる総大将である。

「アンタが支永真里亜、可愛くて若いねえ……うらやましいよ、ともかくあの董子をブツ叩く気概が若い娘にあるのはこの国もまだ捨てたモンじゃないって事だよね」

ミネアは先程までの嘲笑ではなく、豪気に嬉しそうな表情を浮かべる。

もちろん着陣の遅さには腹を立ててはいたが、志道董子を倒そうと反志道董子連合軍結成の先駆けの行動を起こした点は評価しているし、今の態度も好意的に受け取ったのだ。

「まあ、妹さんを助けたと言っても、魯陽で負けた後で随分と妹さんには手間をかけさせたんだけどね」

ミネアは頬を掻く。

魯陽での敗北の後ですぐさま部隊を再編成し、この汜水関に急行できた理由はもちろんミネアやサライ、瑜貴が敗残兵を素早く収容し、真奈美の対処が適切であった点があるのだが、集合した部隊をミネアが宛まで一度下げて、宛城に閉じこもっていた支永ノイアを引っ張り出して、負傷兵を城内で治療させて、彼女の手元にあった、まだ戦闘可能な兵力およそ五千をかなりの量の軍需物資もろともノイアごと引っ張りこんだ為である。

早い話が補充兵、物資をノイア軍で埋め、ミネア軍はノイア軍との混合軍になっていたのだ。

もちろん事を進められたノイアは当初、拒否の姿勢を示したが、宛城に乗り込んだ使者の瑜貴の説得に態度を一変させる。

ノイアの姉へのコンプレックス、プライドの高さを読み取った瑜貴に、

「志道董子との戦いの緒戦、ノイア様が一地方の守備武将に過ぎない如月遼などに敗れ、早々に脱落では総大将の姉上も立つ瀬が無くなるのでは？」

そう半ば挑発されると、止める腹心姜子令の言葉にも耳を貸さず、

「当り前だ、私は名門支永家のノイアだぞ、これきしで退場など有り得ぬわ」

と、ヴァルナログの敗残兵を受け入れ、姜子令を宛城に残し、自ら兵を率いて合流したのである。

そして、先日の汜水関攻めでも汚名返上に燃え、ノイアは巧拙は兎も角、闘志は十分で、ヴァルナログと合同し、一角を攻めかけていたのである。

「そう……ノイアも頑張っていたのね」

ミネアの説明を受け、罰の悪そうにミネアと並んでいた妹が汚名返上に奮戦したと聞くと、真里亜は優しげな瞳を向けたが、ノイアは、

「名門支永家の恥にならぬ様にするだけ、それだけの事っ」

と、その視線を拒むように横を向くのだった。

「まあ……顔合わせも終わって、これからはやっと作戦会議になるのだけど、ワタシに手があんのよ」

真里亜の横に座っていた少女が切り出す。
天草未来。

ショートボブカットの髪に可愛らしいが強気さが抜けない表情が印象的だ。

「攻めるのなら先陣はミネア様に頼んだばかり、一体何があるというの？ ミネア様に失礼になるわ」

「相手は華蘭、ヴァルナログ一門でも簡単にいく訳がないわよ」

隣にいる真里亜の言葉に悪怯れず答える未来。

「志道董子もミネア様を畏れて虎牢関に退いたのだぞ？ もう汜水関は五万程の兵と華蘭が残るのみ、何を畏れようか？」

居並ぶ諸将の一人が未来に怒鳴るが、未来はまったく話にならないという風に首を振る。

「いえ……華蘭は実戦の指揮に関して考えようによってはアルテナよりも強敵、あれに本気で守りに徹せられたら、私達はおそらく兵糧が尽きるまでには汜水関は落とせないわ」

「何を勝手に！」

「そうだ！」

「華蘭など我々に比べれば敵ではない！ 我々には三十万の大軍があるのだ、象の前の蟻だ」

未来の言葉に対し、すぐま諸将からの幕舎に響き渡る非難の声。

その理由は単純である、まずは天草未来という少女の遠慮のない態度と彼女の微妙な立場にある。

集まった諸将はいずれも刺史、太守なのに対し渤海太守で名門の真里亜はともかく、もう一人の劇文の連盟人天草未来は黄巾の乱の功績があるにせよ無為無冠に違いなく、その意見は軽く見られがちなのだ。

しかし、そんな周りの態度に退くような未来ではなかった。
彼女は腕を組み、挑戦的な笑みを浮かべ、こう言ったのである。

「文句があるなら、この中に一兵の犠牲も出さずに華蘭を汜水関から引っ張り出せるヤツがいる？」

騒然とする諸将。

再び沸き上がる喧々囂々の避難。

「未来？ あんた！？」

隣に座る真里亜は仰天して未来を見つめる、だが未来は瞳をギラギラさせ、自分の引き起こした騒ぎをまるで愉しむかの様であった。

続く

第72話「汜水関大戦? ―アーシェ参上す―」

「華蘭さまっ、大変です、反乱軍が遂に動き出しましたっ!」

朝焼けの汜水関。

華蘭は慌てふためいた報告兵に落ち着いた様子で頷くとゆっくりと櫓にあがっていく。

雑多な反乱軍とはいえ、各地の有将達が集い、その兵力は董子軍を上回るのである、緊張が無いと言えば嘘になるが、華蘭は務めて平静を装う。

総大将の董子が後方の虎牢関にアルテナを連れて下がってしまったのだ、汜水関に残された兵士達は士気の衰えこそはないが、動揺は見せている。

その為には、汜水関の大将である自分が自信と落ち着きを見せなければいけないのだ。

連合軍の汜水関の突破の危険性など微塵も感じさせてはいけない。

汜水関死守。

それが華蘭の唯一にして最低限の任務。

しかし……その時、彼女はもう一つの秘めた思いを胸に秘めていた。

『董子様にやはり最後に頼れるのは新参者の小娘ではなく、私という事を再認識して頂くのだ、アルテナなどと虎牢関にいるより、私と汜水関にいた方がいいと思われるだけの戦いをみせてやる』

それが忠誠か、董子への敬愛か、また別の物かは置くとして……この感情が冷静沈着な戦術家の名将華蘭をして、天草未来の仕掛けた罠に彼女を導いてしまったのである。

「どういう事だ？」

「解りませぬ、あの状態で前進も後退もしてこないようです」

櫓に登った華蘭の第一声に幕僚の一人が首を振る。

「無意味な……何の効果があるというのだ？」

目の前の光景に対して華蘭は呟く。

なんと連合軍は汜水関に対してやや距離をとった平地に大きく広く……そして、見た事のない程に分厚い、鶴翼の陣形に開いていたのである。

「いかに鶴翼に開こうと、この汜水関の前面は狭い、あのまま攻めてこられる訳が無いぞ！」

「うん……」

華蘭は幕僚の言葉に顎に手を当てながら頷く。

目の前の連合軍の鶴翼の陣形は見事であった。

総兵力およそ二十万。

十を越える諸将の軍勢は均整の取れた鶴翼を維持しているのだ。

「……しかし、よくもあれだけの軍勢を揃えたものですな」

「ヴァルナログから西涼のアルファンスまで居るのだから油断できん」

幕僚の一人が感心するともう一人が答える。

「あのまま攻めてこられる地形では無いが、一応の備えは必要では？」

「……うむ、各部署を固めさせよう」

「まさかあれ程とは」

「大軍だな、ヴァルナログを先頭に突撃をしてきたらどうする？
城外に出て野戦をするのか？ このまま閉じこもるのか？」

「がむしやらに押されたらかなわん、まずは出撃すべきだろう」

「籠城すべきだ、ここは汜水関だぞ！」

二十万の目の前の敵。

バカにしていた筈が幕僚達もそれを見ているうちに慌しくなる。

互いに相談を始める幕僚達。

二十万の軍勢が一斉にとった陣形。

始めはせせら笑っていた筈がその圧倒的な迫力にそうもいけなくなっただ。

「……騒ぐな！ 貴公等の動揺を部下は見逃さないんだぞ！」

叱咤する華蘭。

「はっ！ 申し訳ありませんでした」

首席の幕僚が頭を下げ、その他の連中も口を閉じたが……だが、それだけでは事態は収まる訳が無いのを華蘭は解っていた。

「兵士達が……みんな見てしまったな」

彼女は唇を噛む。

その夜、汜水関から約一千の兵が脱走したのであった。

まざまざと多数の兵を見せられ、華蘭軍の士気は大幅に低下したのが原因と推察された。

それでも名将華蘭が汜水関に閉じこもったのならば兵はそこまでは動揺しなかった筈だ。

だが、華蘭率いる軍は総司令官の董子に後方に下がられ、その際に半数を引き抜かれて士気の揺らぐ要因があったのである。

それでも五万の守備軍の内からすれば一千はそう多い数ではなく、問題視しない幕僚もいたが、華蘭はそうは考えなかった。

彼女は自ら三万の兵力を率いて出撃したのである。

「華蘭出撃」

その報に連合軍は一気に騒がしくなる。

汜水関の堅に頼り、出撃しないと思われた華蘭が一度軍勢を見せただけで出撃してきた、諸将は驚きながらも華蘭を十倍の兵で堂々と迎え撃つ態勢を取ったのだった。

「まさか……出てくるとは……」

華蘭の軍勢を望み驚きの声を上げる真里亜。

「董子が退き、部下が浮き足立てば……自らが先頭に立ち勝つしかない」

未来は腕を組んで不敵な笑みで呟く。

「でも……私達は奴らの十倍、夜襲ならともかく正面から来るなんて」

「来ないわよ」

「えっ!？」

「華蘭はこっちの仕掛けに対して賭けに出た」

未来が言うと同時に華蘭軍から歓声が上がり、薙刀を持った女武将が一騎、進み出てきたのである。

彼女こそ、志道董子軍の雄、華蘭。

「帝を奉る相国董子様に楯突く反乱軍！ 数のみが頼りの雑魚ども、この志道董子様の右腕華蘭に一騎討ちで立ち向かえる者がいたら出てくるがいい！」

その叫びに両軍の兵士達が沸き立つ。

守備軍の大將が自ら出撃しての一騎討ちの挑戦であった。

「なっ……」

「言ったでしょ？ 意気消沈した部下を励ますには上官は己の強さを示さないといけない、華蘭はそれが解ってるのよ」

驚く真里亜に未来は笑みを浮かべたまま言った。

「そういう事なら……ゆしやう 兪渉！ 兪渉！ アイツを討ち取りなさい」
「オオッ！」

何する物ぞ、いった勢いで怒鳴る真里亜に応じたのは大柄の中年の男。

支永真里亜軍の副将を務める兪渉。

顎まわりは黒々とした髭面である。

彼は槍を片手に馬に鞭をくれ、華蘭に一直線に疾走していく。

「わしは連合軍の総司令官支永真里亜様の副将である兪渉だ、私ならば貴様とも釣り合いが取れよう？」

「……立場土だけな」

髭面の男と対峙する華蘭は彼の言葉を笑う。

「なにおっ？ 実力ならば貴様な……」

風が切る。

兪渉の言葉の締めは自らの首が飛び発せられなかった。

「やはり釣り合わなかったな……」

馬上の華蘭は風車の様に見事に薙刀を回転させ、主人を失った馬の尻を穂先で軽く叩く。

鳴き声を上げて、兪渉の首の下からを乗せたまま連合軍の方向にダク足で帰ってくる馬。

あまりにも不気味な光景に両陣営は静まった。

そして……意思を失った身体がズリりと馬からずり落ちると、華蘭軍から大歓声が起こったのである。

「華蘭様、凄い！」

「アルテナ様よりも強いんじゃないか!？」

「あれが総大将の副官か、大したことない！」

「見たか、寄せ集めの反乱軍め！」

華蘭軍の兵士は大喜びの喝采。

「……強いっ！ 真里亜殿の麾下でも勇猛さでなる兪渉殿を一撃だ！」

「敵が活気づいたぞ、次は誰がいく？」

騒つく連合軍陣営。

「あれがアンタのご自慢の二姫將軍じゃないでしょうね？」

「バカッ、二姫將軍は女、あの二人ならあれ位の相手はどうにでも連れてきてないけど……」

未来が聞くと、副将を簡単に討たれた驚愕の表情まま真里亜は答える。

「また連れてきてないの、洛陽の時もいなかったじゃないのよ、本当は弱い女の子二人組ってオチじゃないでしょうね!？」

「違うわ、それは田豊が……って！」

「ほう、田豊の指示な訳ね……」

未来のツツコミに思わずしまった、という表情を浮かべる真里亜。

「まったく……」

未来は目を細めたが、

「アンタの軍師が何を企んでいるかは知らないけど、今の目の前の

敵をどうにかしないといけないんじゃないかしら？」

と、それ以上は追求はせずに華蘭とヤンヤの喝采を上げる敵軍を指差した。

「私がいきます！」

姿を表したのは鎖鉄球を持った女武将。

身体つきもたくましく、身長も180？近い短髪の女だ。

「あなたは？」

「私は北海太守孔融様の先鋒大将の薛永せつえいと申します」

真里亜が名を聞くと彼女は頭を下げた。

「孔融殿の？ 名士の名高い孔融殿の麾下の武将ならば期待できます、お願いします！」

真里亜が喜び頼むと、

「ははっ！ 志道董子の右腕の華蘭の最期、我が殿と見物下さい」

薛永は礼をして、鎖鉄球を持ち馬に跨り、華蘭に向かう。

「変わった武器を持っているな……」

馬上で鎖を持ち、鉄球を振り回す薛永。

華蘭はポツリと呟いて馬の腹を蹴り、正面から迎え撃つ。

「我が名は薛永！ 惡逆志道董子に仕える惡鬼め、我が正義の鉄球を受け止めてみせよっ！」

振り回した遠心力を解放し、鉄球を華蘭の顔面に目がけて飛ばす。迫る鉄球。

だが次の刹那、金属音が響き鉄球は華蘭の顔の横を通り過ぎる。軽く弾かれて軌道を逸らされたのだ。

「なっ……」

「惡鬼が貴様を地獄に連れて行ってやろう！」

振り下ろし一閃。

薛永は脳天から唐竹割りにされ馬上から転落して絶命した。

華蘭軍は更に沸き上がり、それに数倍になる兵力でありながらも連合軍は通夜の様に静まりかえる。

「……華蘭、なんて豪傑なのよ！？」

唇を噛む真里亜。

「ええ、普通じゃないわね、もう負けらん無い、しょうがないわね、晃ッ、アイツを倒して！ 予想外の敵だから気をつけて！」

舌打ちして未来が麾下の能見晃を呼ぶ。

「はいっ」

踏み出たのは顔まで覆った白装束に長柄の斧を持った少女、能見

晃。

「待って」

だが、そこに赤毛のショートカットの少女が踏み出してくる。

「……シリア・アルフランス殿！」

「総大将、ここは私に任せてくれませんか？」

赤毛の少女は真里亜に微笑む。

西涼太守の娘で、病気がちな父に代わり今回の戦に西涼軍を率いて妹エリーゼと参戦している。

背丈は160？半ば、砂漠も多い地域の出身で肌は黄色系で白くはないが、健康的な可愛さを十分に感じる笑みだ。

「行ってくれますか！」

華蘭のあまりもの強さに青ざめていた真里亜の顔に生氣が戻る。

今の当主は病気であるが、アルフランス家は代々の武勇を謳われており、娘達もそれぞれに優れた武勇を持っていると噂が高いのを真里亜も知っていた。

「任せてください」

力強く頷き、引きつれた馬にシリアが飛び乗ろうとした時だ。

「待ってもらおう！ あの将の首は私がもらうと決めている、シリア・アルフランス様には申し訳ないがここは私に一騎討ちをさせて頂けないでしょうか？」

そう金髪を首の後ろで結び、流れる様に背中に一筋に流した美少女がシリアの前に立ったのである。

「アーシェちゃん……」

「アーシェ様……」

未来と晃の主従。

一方は不敵な笑みを浮かべ、一方は彼女の突然の登場に驚く。

アーシェ・アルザードは身長151?という小さな身体つきながら異様な殺気をはらんでいた。

「普通じゃないね」

「無論です、そうでなければ西涼太守代理の貴女に一介の部隊長の更にその部下に過ぎない私が差し置ける訳が無い」

「部隊長の更にその下の者か……」

呟くシリア。

「ダメよっ、そんな身分の人間に戦場の士気を左右する重要な一騎討ちをさせられる物ですかっ！ 戦場の一騎討ちにだってしきたりがあるのよっ！ 下がれッ、下がりなさいっ」

柳眉を吊り上げ口を挟んだのは総大将の真里亜だ。

それに対してアーシェは碧い瞳で鋭く一瞥する。

「なっ……睨んでも無理な物は……」

「真里亜さん！」

「ひっ？」

怯む真里亜は突然、声をかけられて背筋を伸ばす。

祐一である。

洛陽での脱出行で未来達と一緒にいるので真里亜と祐一、アーシェはまったく知らない中ではなかった。

「ああ、松平祐一君ね、貴方の妹に言って聞かせなさい、戦いには作法という物があってね……」

「アーシェにやらせてやってくれ！」

真里亜の言葉を遮り、祐一はその場にあぐらをかき座り込む。

「ななっ……」

「真里亜さんも……シリアさんも聞いてくれ！ 確かにアーシェの立場では無作法なのかもしれない、でもアーシェも武士だ！」

「兄上……」

祐一の言葉に真里亜は驚き、アーシェはそれを見つめる。

「もちろん、アーシェの行動に責任は取る！ もしアーシェが敗れるか華蘭を討ち取らなければ……シリアさん、このままオレを斬ってくれ」

「えっ!？」

座り込んだまま、祐一に見上げられ、何故かシリアは赤面してしまふ。

決心した男の顔立ち。

「みお〜！」

そこにミオが鳴き声を上げて祐一の膝の上に乗っかってくる。

「ミオ？　そうか……そうだな、アーシェが負ければお前もか」

「そう！　同年同月同日だからな〜」

ミオと笑い合う祐一。

「あなた達は……」

呟く真里亜。

「言っておくが、俺は覚悟はしてるがアーシェが負けるとは思っていない、アーシェは絶対に勝つ！」

「みお〜！」

「二人とも……」

座り込む兄と妹にアーシェは片膝を付き、顔を近づける。

「アーシェ、お前の強さをみんなに見せてやれ」

ミオを膝の上に座らせて苦笑する祐一。

「兄上……」

微笑むアーシェ。

ミオは彼女に更に顔を近づける。

「アルテナを引きずりだしてやれ」

「……ミオ!？」

ミオの言葉に祐一は声を上げたが、アーシェは微笑みを一度、真顔に戻し、それを少しずつ不敵な笑みに変えていく。

「任せろ!」

ミオに伝えて、立ち上がり金髪の少女は堂々、真里亜に振り返り告げる。

「文句はありませんな」

鋭い視線。

「ううっ……」

「やらせてあげなよ、負けたら兄妹で責任取るとまで言ってるんだからさ」

たじろく真里亜の肩に未来が肘をかける。

「でも……」

シリアに真里亜は視線を送る。

「えっ!？」

赤面していたシリア。

最終的な判断が判断が下された事を感じた彼女は祐一に向けてい

た視線を首をプルプル振って切り、

「わかりました……」

と、だけ頷いたのであった。

「次はないのか？ 意気地なしどもが！」

華蘭が薙刀を振り上げると、部下の兵士達も大声を上げて連合軍の陣に罵り声を上げた。
士気は上がっている。

『もう一人片付けたら、十分だな』

兵士達に振り返り口元を緩める華蘭。
元より本格会戦は望んでいない、相手の士気を挫き、味方のそれを上げるために来たのだ。

「これが最期だ、華蘭」

落ち着いた少女の声。

連合軍から進み出た一騎は金髪の美しい少女。

「貴公……」

「我が名はアーシェ・アルザード……貴女の命を貰い受ける」

目を細める華蘭。

黒鹿毛の馬に跨ったアーシェは青龍偃月刀を鞘から抜いた。

「ぬかせっ、チビッ！」

華蘭は馬を疾走させ、アーシェに迫る。

そして、繰り出す連撃。

だがアーシェはそれをことごとく躲す。

上がる歓声。

「くっ……」

「愉しげだな？」

舌打ちした華蘭にアーシェは冷笑を浴びせた。

「コイツ！」

斬り、薙き、突き、振り下ろす。

だが、アーシェはその全てを偃月刀で躲し、捌き切ったのである。

「アーシェ……どうして躲し続ける？」

自ら攻撃を繰り出さず躲し続けるアーシェ。
祐一がそう口にすると、膝の上に乗ったままのミオが呟く。

「一撃で片付けるつもりだ……」

「出来るのかよ!? 華蘭も相当強いぞ!」

「難しい、元々それ程に余裕が出来る相手じゃない、言われる通り
華蘭は強いです」

ミオの代わりに答えたのは傍らに立つシリアだ。

「でもやるね」

ミオはシリアを見上げて笑い、続けて言った。

「やらにゃアルテナの野郎と戦えない」

「はあ……はあ……はあ……な、何なんだ?」

撃ち込む事、数十。

華蘭は激しい息遣いで目の前の敵を見る。

馬に乗っているその姿は小さい。小さい筈が……

『こ、こんな所で苦戦して董子様に……!』

華蘭は大きく振りかぶり薙刀を振るう、金髪の敵の青龍偃月刀が
動く。

受け……ない。

振るわれた薙刀と交差しながら、偃月刀は初めて華蘭を目がけて

の軌道を煌めきながら進んできたのである。

馬上。

右腕で青龍偃月刀を振り切ったまま華蘭を睨む碧い瞳。

目の前で鮮血が散り、華蘭の首が宙を舞う。

志道董子軍随一の知勇兼備の将、華蘭は首なしの骸となり馬から、
ゆっくりとずり落ちた。

啞然。

華蘭軍の兵士達はこの行動しか取れずにいた。

金髪の美少女はその鋭い視線を将を失った兵士達に向け、

「華蘭はこのアーシェ・アルザードが討ち取った！ 次はどいつだ
！」

そう怒鳴り散らす。

華蘭軍の悲鳴と連合軍の歓声。

「今よっ！ 敵は総司令官を失ってるのよ！」

「あっ……ええっ、ヴァルナログ軍を先鋒に全軍突撃、突撃、突撃
！」

未来に促され、慌てて指示を出す真里亜。

ヴァルナログ軍が大喚声を上げて突撃を開始すると三万の華蘭軍はまるで虎に追われる羊の様に汜水関に算を乱して、逃げ始めたのである。

「やったぜ姉貴！」

「凄いぜアーシェ！」

突撃していく味方と通り過ぎるように馬を降り、手綱を引いて歩いてくるアーシェ。

ミオと祐一は嬉々として駆け寄る。

「ああ……」

遠目では判らなかったがアーシェの顔は玉のような汗で溢れている。

「姉貴でもかなりキツイ相手だったろ？ あんなやり方するからだ、ギリギリじゃんか」

「ああ……十合は待つつもりだったが、全く隙が無かった、結局は三十は撃たれた……」

「アーシェ……」

意外なミオの言葉、強気なアーシェもそれを否定しない事に祐一は驚く。

華蘭の攻撃を受け切ったアーシェが一撃で彼女を仕留めた格の違う勝利に見えたがそれは間違いであったのだ。

「この戦はもう勝てるだろう……そして、これでアイツも出て来る……私は少し休ませてもらいます」

疲れた足取りで歩き去りながらもアーシェの鋭い瞳がこの戦いの意味全てを物語っていた。

「妹君、誠にお見事な腕でした」

赤毛の少女シリアが祐一に頭を下げる。

「あ……いや、こっちこそ、あなたの出番を取っちゃったみたいで」

「良いものを観せてもらったから、ここは我慢しますね」

「次は妹に我慢させますから」

シリアの純朴そうな笑顔に祐一は笑い返し、

『シリアちゃんか、可愛い娘だな……』

なんて事を考えていると……

「カッコいい！ スゴくカッコいいよっ！」

「ええっ？」

高く黄色い声に背中の柔らかい感触。

祐一は振り返る。

亜麻色の髪を短いツインテールにした少女が祐一に抱きついていたのだ。

「な、なな……だれ？ 君は誰だよ？」

「い、妹のエリーゼですつ、な、何してんの？」

祐一にシリアが答える。

「シリアさんの妹？」

「そうだよ、祐一さんってカッコいい、妹さんの為に命をかけられるなんて、スゴくカッコいい！」

向き直った正面からもエリーゼは二重瞼を輝かし抱きついてくる。

「ああ……そう？ ありがとう」

「ホント……始めてっ、私祐一さんに惚れちゃった、スゴく惚れたの！」

「ええっ？」

いきなり現れたハイテンションなシリアの妹エリーゼに困惑しながら、祐一は胸板に当たってくる彼女の豊かな胸の感触に少し得をした気分になってしまったのであった。

続く

第73話「決戦 虎牢関？」

「汜水関が落ちたあ？ ううっ……ゴホッ、ゴホ」

虎牢関内に設営された帷幕で食事を摂っていた董子は急使からの報告に食べていた物を喉に詰まらせ、慌てて茶を口に運ぶ。

「はいっ、華蘭様は一騎討ちで討ち取られ、あえないご最期、反乱軍二十万の総攻撃に耐え切れず、約五万の兵の内、一万程になった味方がこの虎牢関に退却を開始しております！」

腕が地面に落ち、乾いた音を立て割れる。

「汜水関が落ちた……それは分かったわ……で？ 華蘭がどうしたって？」

膝まづく使者に机に両手を付き、立ち上がって問い直す董子。

「……華蘭様は敵将を二人斬り伏せましたが、三人目に出てきた金髪の女に……討ち取られました」

使者は答えにくそうに董子から顔を逸らす。

「な、なな……か、華蘭が……華蘭が……」

「董子様ッ？」

「大丈夫ですか？」

董子は力無げにヘナヘナとへたり込み、急報に駆け付けた將軍や文官達はその姿に驚き、それぞれ声を上げるのだった。

汜水関を陥落させた連合軍が更にその数を増やし、三十万の大軍となつて虎牢関全面に姿を現したのはそれから、約二週間後の事である。

「増えたわね……まるで蟻の大群だわ」

虎牢関の楼閣から全面に展開する連合軍を一瞥する董子。
情報によれば難攻不落を誇る汜水関、そして敵味方にも知れ渡る
勇将華蘭の死を受けて、今まで連合軍に参加しながらも直接に軍を
送らなかった諸将もこぞって集った様子だ。

「凄いな……」

「士気も上がっているだろうな……」

不安を口々にする董子配下の武将達だが、その中でも一人の金髪の少女は含み笑いを浮かべていた。

「あんなの数が多いだけじゃないですか」

アルテナだ。

普段は柔和な顔立ちの眼鏡娘も鎧兜を身に纏い、手には方天画戟を持つと、その眼鏡の奥の瞳は鋭い。

「……アルテナ」

「相国、相手は三十万、こちらは十万、基本的に籠城というのは賛成ですが、攻められてばかりだと私達も参ってしまいます、私に騎兵五千を与えてくれれば連合軍の氣勢を削いで来ますよ」

董子が名前を呼ぶと自信満々にアルテナは自分の胸を軽く叩く。

「ふん」

アルテナの申し出。

だが、董子は深くため息をつく。

長年の右腕、もっとも息の合う謀臣にして、頼れる戦闘指揮官であった華蘭を失ってから、思わず床にへたり込んだ精神状態から脱出していたが、万全の精神状態には程遠い物であったのだ。

どうにも迷いが出る。

「……とりあえずはそうしましょ、相手には遠征の疲れもあるだろうしね、でも深追いは禁物よ、一回駆け抜けたら止めんのよ?」

戦術的には全く無意味ではない、アルテナの提案に董子は少数での騎兵突撃について簡単な注意だけを与えて出撃を許可したのであった。

「虎牢関から敵軍が出撃してきました！」

その報告に三十万連合軍の本陣が緊張する。

「野戦でケリをつけるつもりか!？」

「面白い」

「やってやるか！」

「……で、敵軍の勢力はどれくらいですか？」

諸将達はいきまぐが、その中で鳳公子が落ち着いた様子で伝令に訊く。

「はっ……敵軍は騎兵が五千でございます」

「どうみても決戦じゃないわね、遠征の我が軍の鼻柱を叩いておく
槍ね」

「……ですね」

未来が笑うと、公子は肩をすくめた。

「五千……どうする？ 我々は三十万、万が一にも負けは無いけど
……」

参謀である未来をみる真里亜。

「相手は騎馬部隊なんだから、あんまり大部隊で動くと引っ掻き回
されるわよ、まず足止めしてからじゃないとダメよ、騎馬部隊を繰
り出して足を止めてから数の戦いに持ち込むのよ」

「そうね、我^が安^ん国^{こく}！」

未来の提案を受け、真里亜は同意すると部下の一人を呼び出す。

「はっ！」

現れたのは身長の高い青年。

年齢は四十代の前半。

筋肉隆々で手には槍を持ち、黒鹿毛の精悍な馬の手綱を引いている。

「私をお呼びですか、真里亜様！」

馬の手綱を長く持ち、槍を地面に置くと、平伏する我安国。

「ええ……敵の騎馬部隊五千が現れたわ、あなたの自慢の部隊で蹴散らして欲しいのよ」

「了解しました、鍛え抜いた我らの騎馬部隊で敵を蹴散らしてまいります」

真里亜の指示に我安国は不敵な笑みを浮かべると、馬に跨り頭を下げ、弓から放たれた矢の様に本陣を飛び出したのだった。

「我安国將軍戦死、敵の先鋒の武将に一撃で討ち取られてしまいました！」

「うそっ!？」

「なにっ、もうやられてしまったのか？」

「なんという……」

敵襲を受け、本陣を後方から戦鬪の様子の解る前線に移そうとした時に入ってきた報告に真里亜は信じられない、という驚愕の表情を浮かべ、周りの諸将も動揺する。

出陣を命じて僅かの間であり、無理もない。

「敵将は？」

その中でも未来はすぐに伝令に訊く。

「アルテナと！」

伝令の返事に再び本陣は慌てふためく。

「アルテナだと！」

「丁原殿に仕えていた時は一人で二十万の志道董子軍を引きずり回した武勇の将だ！」

「由々しき事態だ」

未来への返事なのだが、過敏に反応したのは周りの将達である。

「アルテナ……」

強気の真里亜もアルテナの強さは知っているので、それを諫める事も出来ずにその恐怖の名を呟いてしまうのだった。

「雑魚……雑魚……雑魚……雑魚」

振り下ろす。

頭を割られる。

横に凧ぐ。

真っ二つになる。

赤兎馬に跨る金髪眼鏡の少女は薄笑いを浮かべながら、五千の騎兵の先頭に立ち連合軍の兵士達の命をまるで埃を払うよりも軽く散らしていく。

「少しは骨のある人が出て来て下さいよ!」

アルテナが大軍にも関わらず逃げ惑う連合軍兵士に怒鳴り散らした時である、

「これ以上はもうやらせないっ!」

一騎の堂々騎馬武者の娘が槍を手に彼女の前に立ちはだかった。

「……あなたは?」

赤兎馬を止め、眉をひそめるアルテナ。

関係なしに叩き切れる雑魚でないと直観する。

赤茶色のミディアムヘア、碧い瞳、黄色の肌の少女は名乗りを上げた。

「西涼のアルファンス一族が長女、シリア・アルファンスここにあ

り！ いざ……勝負！」

漲る意気。

力強さ。

その雰囲気眼鏡の向こうの丸めの瞳を輝かせ、

「久しぶりにスツゴく……昂奮しちゃえそうです」

アルテナは口元を緩め静かに呟いた。

続く

第74話「決戦 虎牢関？」

見合う赤毛と金髪。

シリアとアルテナ。

互いに体格差はない。

得物は槍と方天画戟。

炎のようなたて髪を持つ赤兎馬。

堂々とした体軀の芦毛の馬。

「いきまゝす！」

眼鏡の奥の丸めの瞳を爛々と輝かせるアルテナ。

乗り役の合図なしに疾風の様に駆ける赤兎馬。

「こいやあああつ！」

気合いを込め、シリアも愛馬の腹を蹴ると、芦毛の愛馬が駆ける。

「死んでくださあい！」

叫ぶアルテナ。

風を裂く……では形容が間違っていた。

方天画戟の一撃はそれでは陳腐過ぎた。

その一撃はまるで大気を割る稲妻だ。

まともに受けたら肉は裂かれ、肉は砕け、急所でなくともそこは急所となり絶命する打撃。

高く響く金属音。

その一撃をシリアは受け切った。

「へえ」

「つつ」

通り過ぎる赤兎馬と芦毛馬。

アルテナは口元を緩め、シリアは唇を噛む。

「驚きました……凄く強いですね？」

「だまんなさいっ、今度はこっちからよっ！」

シリアは馬首を返し、笑顔を隠さないアルテナに怒鳴る。
たった一撃を受け止めた攻防にシリアの全身は鳥肌が立っていた。

『この娘……柝違いだ』

西涼太守の娘として生を受けてから、17年。

馬を友とし、草原砂漠を駆け抜けた年月。

武を重んじる家系に育ち幼い頃より、馬と武具を玩具代わりに育ったのだ。

シリアは同じ様に育ったエリーゼを始めとする姉妹達の中でも武術は突出して優れ、15の頃には父、父の家臣団、そして周辺部族にも彼女の槍と馬術に勝る者は居なくなっていたのである。

「中央の武将なんて、文官に毛が生えた程度」

「西域に較べたら、中央は馬も人も軟弱の集まり」

そう口々に聞いていた。

もちろん、それを真に受けた訳ではなかったが、幾らかはそういう部分があるのだろうとは思っていたのであるが……

『大きな間違いだ』

シリアはもう一度、唇を噛んだ。

『アルテナといい、汜水関で華蘭を切り伏せたアーシェさん、そして……彼女を信じて一騎討ちに命を張った祐一さんにミオさん、これだけの武士は西域にもそうはいない』

「今度はこちらからよ！ 受けてみなさいっ」

芦毛の馬に手綱で合図を送り、今度はシリアからアルテナに仕掛ける。

繰り出す槍の連撃。

速さだけではない、それぞれに力強さも併せ持つ。突き、屈ぎ、

振り下ろし、切り上げ。

間断がない。

全てが重く速い。

絶命の連撃。

だが……

「スゴイツ、スゴイツ……スゴイイイイイツ」

絶え間ない金属と金属がぶつかり合う音。

アルテナは玉のような汗をかきながら、シリアの連撃を方天画戟で受けながら、快感に震える様な高い声を上げ……

全てを受け切ってしまったのだ。

「……」

連撃が止み、シリアは馬上で齒を食い縛る。

初めての経験だ。

『逆襲!』

槍を構えるが、

「ああああああっ！ 素敵素敵素敵素敵……あなた素敵すぎます
ううう！」

目の前のアルテナは反撃をするどころか、赤兎馬の馬上で悶え、
打ち震え始めた。

『この娘……一体なんなの……強さ……異常さ』

「シリアさあん！ 私を……私を受け止めてくださあああいつ」

まるで愛の告白。

アルテナの瞳は笑っていた。

そして……恐怖の打撃の雨霰が赤茶色の髪の勇者に降り注いだ。

「くううううっ」

受ける。

防ぐ。

護る。

何でもいい。

余計な事を考える余地は無かった。

シリアは全身全霊を以てアルテナからの死の雨に立ち向かう。

圧されながらも、押し切られない。

シリアの姿にアルテナの強さを嫌というほどに知る互いの兵士から歓声が上がリ始め、恐怖の雨が止んだのである。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん、頑張れっ」

祐一の横でシリアの妹エリーゼが声を枯らす。

亜麻色の髪を肩に触れる位まで伸ばした多めのツインテール。

均整の取れた碧い瞳の顔立ちに、柔らかそうなふっくらとした女の子らしい体つきの娘。

年齢は15歳。

姉についての従軍であるが、アーシェが華蘭を討ち取った一騎討ち以降、すっかり祐一に惚れ込んだ様子で無理やりついてきてしまっているのだ。

「アルテナか！？ シリアちゃんとやりあっているんだな」

祐一は目を細める。

激しく繰り広げられる二人の戦い。

複雑すぎる感情を出してしまわない様、後ろに控える妹に振り返る。

アーシェは冷静な表情で一騎討ちを見つめていた。

「……アーシェ」

「……」

返事はない。

妹は引き締まった目線を逸らさず戦場に向けるだけだ。

彼女の目的は明らかにアルテナだ、しかし……ここで一騎討ちに乱入する訳にはいかないのだろう。

義理堅いアーシェにとっては汜水関に続いてシリアの一騎討ちを邪魔できないのである。

「……くううつ」

馬がジリジリ下がる。

赤兎馬に愛馬が圧されているだけでない。

馬上の自分も圧されているのだ。

「シリアさん！ はあはあ……少しずつ……すこしずつ……はあはあ、う、受けが遅くなってます！」

荒い息、玉のような汗でアルテナは笑う。

戦いの中のそれについてはシリアはだんだん理解できてきていた。

アルテナは飢えているのだ。

戦いに飢え、自らの力の全て解放できる相手に会えて快感を覚えているのだと解釈していた。

『戦闘異常者!?!』

目の前の少女は普通の精神の持ち主ではない。
何かしらの異常をきたしている。

「いただき……」

シリア数分の一秒の考えの結論。
そこに耳に聞こえるアルテナの眩き。

「し……しまっ」

時すでに遅し。

シリアは方天画戟の一撃を受けそこなう。
急所への命中は逸らしたが、刃は肩に深く刺さり、愛馬から転げ落ちてしまったのである。

「つう……」

「やったああああ！　いただきまあす！」

アルテナの歓喜。
響く戟。

「なっ!？」

攻撃が無い。

シリアは肩の痛みを耐え素早く起き上がる。

そこにはいつの間に駆け付けたのか、緑がかったショートカットの少女が乗った騎馬がいた。

ショートカットの少女は蛇矛と呼ばれる槍をアルテナの方天画戟と交えた状態だった。

「あ、あなたは!？」

声を上げるシリアに、少女はアルテナから目を逸らさずに不敵な笑みを浮かべた。

「おう、私はミオちゃんだ、もういいだろ? 今度はミオちゃんの番だ、姉貴には悪いが見てたら我慢できなくなってきた! この淫乱ボケ、兄貴をキズモノにしやがって……ミオが天誅くれてやるからよ!」

「兄貴をキズモノ?」

シリアにはその意味は解らなかったが、彼女と刃を交わすアルテナは、

「ああ……祐一様の妹さんでしたか、ええ……祐一様、スツゴく美味しかったでえす、今度は捕まえて尽き果てるまでやりまくりますからね」

そう言って、不気味ささえ匂わす笑みをミオに返したのだった。

続く

第75話「決戦 虎牢関？」

「ミ……ミオ!？」

予想もつかなかった。

それも身内の登場に愕然としてしまう祐一。

なんとミオがシリアとアルテナの一騎討ちに割り入ってくるとは！
よりによって……アーシェではなく、ミオが。

「……アーシェ」

先程まで背後に立っていた金髪の妹に振り返る。

彼女はアルテナを仇にして、汜水関で敵将華蘭との一騎討ちすら
その踏み台に過ぎなかったのだ。

それを末妹のミオは解っていた筈なのに、解っていたからこそ、
華蘭との一騎討ちに割り入った際、アーシェが華蘭を打ち逃せば首
を差し出すの約束をシリアにした筈なのに。

「困ったものだ」

ため息をつき、両手を腰に当て、アーシェは苦笑した。

「アーシェ……」

予想外の反応だった。

まるで彼女の反応は悪さをした子供を遠目でみる大人である。
とても仇敵との闘いを妹に先んじられた武人のそれではなかった。

「うおりやああああ！」

抜け気味の気合い。

ミオの蛇矛の穂先がアルテナ目がける。

気合いの掛け声は抜け気味だったが、その威力とスピードは必殺。

鋭い金属音。

刃と刃が交わる。

「んんっ！」

方天画戟でミオの攻撃を受け止めた途端、アルテナは驚いた。

『凄いつ！ シリアさんも凄かったけど……こっちもメチャクチャ
凄』

方天画戟を構えたアルテナの額から汗が噴き出て、頬を伝う。

「ミオさあん、シリアさんとの闘いに割り入られた時にははっきり
言ってムカついちゃいました……でも、あなたなら合格です、楽しい
続き、お願いしまあああす！」

頬を伝った汗をベロリと舐めると、アルテナは大きく振りかぶった。

「望むところだっ、てめえの脳天がち割ったらあ」

アルテナの攻勢にミオは防御の姿勢を取らない。
それどころか、自らも攻撃に行く。

「えええいいいいっ！」

「うのりやああああ！」

比喩ではなく、互いの穂先が擦り、ぶつかり合う度に火花が戦場に散った。

互いの攻撃を防ぐのではなく、互いの攻撃を攻撃で呑み込もうとする。

火花、金属音、金属音、金属音、火花。

火花、金属音、金属音、火花……

二人の少女の闘いは周りの戦を止めてしまった、両軍兵士はまさに固唾をのんだ。

「アーシェ……」

祐一は後ろに立つ金髪の妹に振り返る。

なぜ振り返ったかは解らない。

だが、目の前の一騎討ちは当然だが、それをアーシェがどう見るかが気になってしょうがないのだ。

「勝てんな……」

アーシェはポツリと短く呟く。

どちらが勝てないのか？ 彼女は言わなかったが祐一は何となく、それを察してしまう。

攻撃と攻撃。

ぶつかり合いは更に激しさを増して終わらない。

「シリアちゃんとの闘いもあつたのに……ミオともあんなに闘えるなんて」

祐一は漏らす。

互角に見える。

一見は互角に見える闘いだが、ほんの少しずつ、僅かに天秤はミオの皿を地面に押し付けようとしているのが解った。

最近の闘いで自分にもそれを観る眼が養われたと言えば聞こえはいいが、今は少しも嬉しくないし、後ろに立っていたアーシェがそれをつばぜり合いの初めから見切っていた様子に自慢げにもなれない。

「ちいいいっ！」

「当たったあ……あはははははっ、あははははははっ！」

ミオの舌打ちとアルテナの狂気の笑い。

方天画戟の穂先がミオの右肩にかすめて、鮮血を散らせる。
傷は浅くはない。

小さかった劣勢が眼に見えた物へとなくなっていく。

「負けるかあゝ！」

叫ぶミオ。

気合いと狂気。

火花と金属音。

「……っっ!？」

顔をしかめるアルテナの鎧の左腕を覆う部分が吹き飛び、下に来た着物の布が千切れて血が滲む。

「オオッ！ アルテナが手傷を負った」

「あの化け物に！」

諸将も兵士達も一斉に沸き上がる。

「舐めてんじゃねえ！」

負傷した腕をみるアルテナをミオが睨む。

「スゴい……スゴい、スゴい、舐めてなんてません！ むしろ、むしろ、尊敬しちゃいます！ ミオさあん、ミオさあん！」

自分の負傷を気にもせずにアルテナは嬉しそうな眼差しでミオを見つめる。

「ん」

相手の不可解な態度。

ミオは唸る。

まるで猫が不快を示し、相手を威嚇するように。

「んーっ！」

「……ミオさん？」

アルテナがその異様さに気付き、首をかしげた時であった。

「みくくおくく！！」

ミオが吠えた。

咆哮というには随分と可愛い声。

まるで怒った小さな虎の子。

「みくくおくく！」

繰り出される連撃。

それは速く、重い。

だが……アルテナは笑みを浮かべたまま、それを受けていく。

「うふっ、うふふっ……うふふふっ！」

「みくくおくくお！」

「あはははははっ！」

「み、み〜お〜!？」

「あらら、もう止めちゃうんですか？　せっかく凄くなってきたのにいい！」

鋭さを増した筈のミオの攻撃、しかしアルテナは狂気の笑いでそれを完全に防ぐ。

一直線なアルテナへの殺意が折れるミオの鳴き声にアルテナは瞳を爛々と輝かせ、方天画戟の渾身の突きを放った。

「み〜お〜!」

ミオは辛うじて、蛇矛で突きを受けるが、それを止め切れず、逸れた穂先が右肘に刺さり、大きくバランスを崩し、馬上から地面に転げ落ちた。

「ミオさん！」

そこには先程まで、目の前の怪物と闘っていたシリアがいた、彼女は横たえていた身体を起こしてミオを抱き上げる。

「フフフフ……ワタシハツヨインデス……」

ミオとシリア。

天下の豪傑二人を薙ぎ倒した無双の少女が呪咀の様に眩き見下げる。

「……くっ」

自分を援けに割り入ってきたミオをシリアは腕に抱くように護りながら、齒を食い縛る。

「しねええええ！」

アルテナは方天画戟を振り上げた。

「余興は終わりだ！」

方天画戟が止まる。

只の歓声などではない。

その叫びは自分へ向けての明らかな恫喝。

無双の少女の視線の先、金髪美麗の少女がゆっくりと歩を進めていた。

続く

第76話「決戦 虎牢関？」

「アーシェさんじゃないですかあ！」

赤兎馬の馬上、汗だくの顔を嬉々としてアーシェに向けるアルテナ。

「覚えていたか、そなたが闘うべきはシリア殿やミオではあるまい、貴公の同僚である華蘭を討ち取ったのが誰かくらいは知っておろうが！」

鋭い瞳に不敵な笑みを浮かべるアーシェ。

「そうですよね……華蘭さんを一太刀ですよね？」

「ああ、一太刀だ、あの程度の輩とは我が偃月刀は刃を長く交わさんのだ」

味方を斬られた割には嬉しげなアルテナにアーシェの反応は冷めている。

「シリア殿、馬を借り受けます」

近くにうろついていたシリアの芦毛馬の手綱を掴むと、華麗な身のこなしでそれに乗る、赤兎馬に跨るアルテナと正対した。

「正面から……今日は本当に嬉しいですう！ 私の正面に立つ人がまさか三人もいるなんてえ！ あははははははっ！」

狂気の笑いを取り戻し、方天画戟を大きく構えたアルテナを乗せ、

赤兎馬が駆ける。

疾風の如く。

芦毛馬に跨るアーシェは動かない。

「アーシェさあん！ 受け止めてくださあい！」

一旦、下を向きアーシェはゆっくりと顔を上げた。目の前には狂気の最強少女アルテナと世紀の名馬赤兎馬。

「死んじやってくださあああい！」

唸る方天画戟。

まるで萎れる花の様に馬上で揺らぎ横に倒れ込むアーシェの身体。

「えっ!？」

方天画戟は当たっていない、紙一重で金髪を何本か宙に舞わしたのみ。

そして、馬上から地に墜ちながら振り下ろす偃月刀が突然の動きに驚くアルテナの胸元をえぐる。

飛散する鮮血。

「悪いな……正面からでなく躲す形になって、この一撃しかなかった……」

地面に着地したアーシェは片膝を付き振り返る。

赤兎馬の馬上で胸元からの大量出血を左手で押さえるアルテナ。

「凄い、流石は華蘭を一撃で倒した武将だ！」

「アルテナをも倒すとは」

連合軍兵士達は沸き上がる。

だが……

「姉貴！」

「アーシェさん！」

アルテナと対峙し追い詰められたミオとシリアは同時に声を上げる。

その響きには歓喜は一切無かった。

「ミオ!？」

「浅い！ 寸前に対応しましたっ、深手だけど……獲れてないっ！」

警戒を促した妹に向いたアーシェにシリアが唇を噛み告げる。

「あのフェイントに対応した……だと？」

瞳を細めるアーシェ。

「アーシェ……さん」

アーシェ、シリア、ミオに背中を向けていたアルテナが呟く。

「喜びで興奮し過ぎてましたね……ついてっきりアーシェさんも真正面から来てくれるなんて勝手に思い込んで……私」

赤兎馬がダク脚を踏みながらゆっくりと振り返る。

微笑んでいた。

胸元を赤く染め、鮮血にまみれた少女は確かに微笑んでいた。

「私って……バカですよ、でも……もう、もうヘマをしてアーシェさんにご足労かけません、だから……だから……」

スウ……とアルテナは低い息を吐き、傷口を抑えていた手を離して両手で方天画戟を構えた。

「……どうかアルテナが弱いなんて、見限らないで下さい、私……落ち着いて頑張りますから！」

胸元から滴っていた血がピタリと止まる。

「ば……ばかな」

アーシェは立ち尽くす。手応えは悪くなかった。

興奮しきった相手を冷静に流したと言えば聞こえはいいが、シリア、ミオという桁外れの二人を相手にした後の高揚感の隙を突いた二度は使えない奇襲。

逆に言えば、そうでもしなければとプライドの高いアーシェに真っ向からの一騎討ちを躲させる程にアルテナは強い。

そして……

『そこまでしてでも、斬るつもりだったのに！』

アーシェは生き残ったアルテナに齒軋りした。

「いきます……」

「……ぐっ」

胸元を鮮血で真っ赤に染めたアルテナの瞳にアーシェは気圧されてしまう。

完全に冷めている。

先程までの興奮がまったく無い。

『こ、こいつは……』

唾を呑む。

馬上と地上。

手負いと無傷。

戟と偃月刀。

関係なかった。

討ち取られる……

背筋が震えた。

「待てっ！」

アルテナの冷めた殺気がまるで、その声に打ち消される様に散る。
自らの声が生み出した間隙をつき、アーシェの前に走りこみ、アルテナに立ちはだかる美しい少年。

「あ……兄上」

「ゆ……祐一さん」

アーシェとアルテナは乱入者に啞然とする。

「アルテナ……」

祐一はアルテナを見据えた。

「止めるんだ、アーシェもミオもシリアちゃんもやらせはしない！」
「祐一さん……」

祐一の手握られた剣。

それを一瞥すると、アルテナはクッククツと笑い始める。

「護れると思ってますかあ？　祐一さんが私に勝てるんですかあ！？」

冷めた笑み。

嘲笑。

「このっ……」

「護るっ！」

我慢できずアーシェが飛び出しそうになるが、祐一はそれをアルテナを見据えたまま、手を横に伸ばし制した。

「オレはアルテナには勝てないかもしれない、だが男だからな、勝てなくても大切な女の子は護る！」

「……！！」

祐一の臆面もない叫び。

アーシェ、シリア……そして、ミオもその言葉に言葉を失う。

「な……ゆ、祐一さん……あなたはわ、わたしと……ったクセに……よくも」

「アルテナ……お前がアーシェ達を傷つけようとするなら俺は意地でも護る、でも……」

祐一の瞳がアルテナの眼鏡の奥の瞳と交差する。

「……くうっ！」

堪えきれない。

そんな声を絞り出し、アルテナは顔を伏せると、赤兎馬の手綱を引き、

「撤退っ！ 撤退！」

そう叫び、馬の腹を蹴り身を翻したのだった。

「アルテナが退いた」

「あの化け物が！」

ドツと歓声を上げる諸将と連合軍兵士。

「追撃だ！ あの化け物は手負いぞ！ 今こそ討ち取ってしまえっ」

飛び跳ねるノイア。

「そうね、相手は少数、アルテナが怪我をしたならイケるわ！」

「そうだっ！ 討ち取れ、化け物アルテナを」

「化け物を討ち取れっ」

「殺せっ」

総大将の真里亜が拳を握り締めると、周りの諸将も拳や剣を振る上げる。

「……くっ」

連合軍の大歓声、奔る赤兎馬の上で金髪眼鏡の少女は顔を伏せて聞く。

傷だけでは決してない胸の奥からの痛み。
眼鏡の奥の目尻から流れる涙。

「うるせえ！ てめえら！ 動くんじゃねえ！」

動き出した数十万の軍勢の先頭に立つ形になった一人の男の怒鳴り声に全軍が止まる。

諸将の一人でもない、ましてや総大将でもない、その男は一介の部隊長。

だが、全軍が総大将に号令された様に止まってしまった。

「……よし」

頷く美麗の少年の瞳は鋭かった。

「一騎討ちを三回もやってみせ、怪我をした敵将を追撃だなんてお前等には武士の情けがねえのかよ!? 今日はやメだ!」

「バカなっ、今こそアイツを殺すチャンスだぞ」

「せめえよ! アルテナは立派に闘った、お前には奮闘に報いるって心意気がねえのか! それでも武将かよ!?!」

「……ぐっ」

ノイアが祐一に文句をつけるが睨まれて、言葉に詰まってしまう。

「あ、姉上、いいのか? あんな馬の骨に軍の統制が乱されているっ!」

「う……う、それも……それもそうね」

振り返る妹に、連合軍総大将の真里亜も同意を見せるが、

「いいねえ……いいよ、今日はあの子の言う通り止めにしようよ」

真里亜の肩に肘をかけてニヤニヤ笑う女丈夫が現れた。

ヴァルナログ軍の大將、ミネア・ヴァルナログである。

「ミネア殿、しかし……統制が」

真里亜は眉をしかめる。

立場は総大将だが、年上であり、連合軍でも目立つ奮闘を繰り返すミネア・ヴァルナログは人望も厚く、強くは出れない相手だ。

「統制? 今が十分にとれてるよ、あの子の号令で全軍止まったよ」

「ぐっ……」

ミネアの切り返しに真里亜は言い返せない。

「止めだよ、いいね？ 先陣のヴァルナログがやらないってんだ、今日はもう止めだよ」

ミネアは踵を返して自分の陣営に向かう。

「いいねえ……ああいう男前は、今のうちにアイシヤにでも婿に迎えるかねえ、サライでもいいか……するとヴァルナログを背負わせるかもしれないけど、ああいう男なら悪くない」

歩きながら、遠くの祐一を見てミネアはそんな独り言を呟くのだった。

続く

第77話「婿入り話に湧きだした策謀」



「祐一くんだ……」

一人の美少年に制止された大軍勢の先頭に私達、いや私は居た。
天草未来の名前を聞いた時から、彼女がいるのならと想い続けた
姿。

お互いに少し時間は経ったので格好は変わってしまった。

今でも鏡に映る自分の文官の着物姿には違和感が湧いてしまうの
だけれど、彼の着物に簡素な鎧を纏った姿があまりにも似合いすぎ
て私は茫然としてしまう。

やっぱり生きていた。

次元を越え、ただ単にタイムスリップしただけではない世界。

この異次元世界に祐一君が来ている。

ただ、それだけで私にはこの世界の放つ光彩が単色から、七色に
輝きだした様に思えたのだった。

早く会いたい。

元の世界でもそれほど親しかった訳でもない、会っても彼は私ほ
どの感慨は示さないかもしれない。

でも会いたい。

天草未来の存在が明らかになった時に、あまり会いたいという感
情が湧かなかったのは、彼女がいるのなら……という連動した思い
の先の彼に既に意識が指向していたからに違いないのである。

「祐一くん……」

私は意識して唾をゴクリと呑み込んだ。

「いやはや……凄いよね、あれで只の部隊長なんだからね」

夕陽が沈み始めた野営の陣地。

緑がかった細長く伸ばしたツインテールの少女、沙羅がため息混じりで、和川真奈美が座っていた丸太の横に座る。

手に持った盆には夕食に支給された一汁一菜と粥が乗っていた。
この夕食メニューはヴァルナログ軍独自の物だ、飯が粥なのは遠征が長くなり飯にかさ増しの必要性が出たせいかもしれない。

「みんなの噂ですね」

「そうだよ、あたしなんか先頭にいたからメツチャ見ちゃったけど、結構格好良かったわよ」

同じく膝の上に盆を乗せて、夕食に食べていた真奈美が苦笑すると、沙羅は人懐っこく笑う。

遠征の途中、江陵で劉表軍から援軍の形を一応はとった彼女だが、事実上は劉表軍を抜け出してヴァルナログ軍の武将として、ここまですで広刃の大剣を両手で振りかざし、大活躍をして、既にミネアの覚

えよろしくなっている。

魯陽、汜水関と彼女と戦場での交わりもあり、真奈美はスツカリ仲良しになり、年齢の関係もあって親しげに話すようになった。

今までは何かと同じ文官仲間の大瀬秋夜と一緒にいたのだが、秋夜はミネアの次女アイシヤと長沙で留守番である。

「ゆ……いや、あの人の事、噂になってる？」

真奈美が首を傾げて尋ねると、

「ええ……そりゃ凄いわよ、ここにいる二十万の軍勢の半数以上は女なんだからね、もう噂が駆け巡っているわよ、アルテナを追い返し、そしてそれを追う味方をも一喝しちゃったんだから当たり前か、さっそく中には祐一さまあゝってなってる連中もいるしね」

沙羅は肩をすくめて、粥をレンゲで掬う。

祐一に嫌悪感があるようには見えないが、騒ぐ女子にはそれがあのように見える態度だ。

「彼について何かわかる事はある？」

「あら？ 真奈美ちゃんも彼になんとやら？」

「違うよ、ほら何処の軍のどんな立場かくらいは気になるじゃない？」

「ああ……話によると北平太守鳳公子様の軍の部隊長らしいよ、戦術家として有名な鳳公子様に数千の部隊を任されているからには有能なんだろうね」

「そうなんだ……じゃあ、立派な武将だね」

『数千の部隊長……祐一君、この世界で武将として生きているんだ

ね』

真奈美は更に相づちを打ちながら思う。

「それだけ騒ぎになっているなら、その祐一君もミネア様に気に入られたりしてね？」

「え……さっき会った時は大層なお気に入り様だったわよ、サライ様か、あたしは会ったことないけれど、本国にいる妹のアイシヤ様の婿養子にするんだ、って結構本気で言ってて、サライ様にはああいう粗野な男は合わない、って瑜貴様がメチャクチャ大反対してたくらいだもん」

「ええっ？　祐一君がアイシヤの婿養子！？」

冗談混じりで言った筈なのだが、意外な返答に真奈美は盆の上の粥をひっくり返すくらいに驚き、逆に沙羅の目を丸くさせてしまうのであった。

「……気にしないでいいわ、洛陽に帰って傷を医者にみせるのね」

虎牢関に逃げ帰る形になったアルテナ。

董子は関内の広間で彼女に告げる。

その態度は労をねぎらう訳でもなく、敗北を責める訳でもない何か白けた風であった。

「怪我なら平気です、医者なら虎牢関にも居ますから、後方に下がる必要を感じません」

「そう……なら腕のいい医者を寄越すから部屋で養生していて良いわよ」

一騎討ちで怪我を負い、後方に下がるなどという行為は出来ないとばかりにアルテナが帯陣を申し出ると、董子は頷く。

表向きはアルテナの身体を庇った言葉であるが、彼女の心はここに有らずというのは一目瞭然であった。

「董子様はどうされたのだ？ 汜水関が落ちたくらいで、まるで魂が抜かれたかのようだぞ」

「そうだな、ここ数日は切れ者の董子様とはまったく思えんな」

虎牢関内の一角の陣地の幕舎で二人の中年の將軍が酒を酌み交わしていた。

李確りかくと郭汜かくし。

二人共に董子に仕えて長い古参の将だ。

「やはり頼みとしている華蘭が汜水関で討たれたのが痛いのだな」

「うむ……そしてアルテナが敗れたのだ、董子様といえど女子、少しは弱気にもなろう、だがそれでは困るぞ」

李確の言葉に郭汜は頷き、酒の肴を箸でつまみ口に運ぶ。

「こういう時こそ、我ら古参を頼れば良いのに……意見も求められ

んな」

「うむ……前から何かあれば華蘭、最近はアルテナ、この間の南方迎撃の件でも新参者の小娘、如月遼と、まるで我等を忘れているかのような……」

酒をあおる二将。

「如月遼……丁原や支永真里亜、天草未来が宮中で暴れ逃亡した時、わしが防備を担当していた洛陽に斬り込んできたのだ、あの小娘のせいで大きな恥をかかされた、今は味方ではあるが気分は良くない」

李確は齒を食い縛る。

以前、洛陽宮中に諸將を集め、董子が相国就任を宣言し皇帝を盾にそれを認めさせようとした時である、丁原や支永真里亜、天草未来が意義を唱え、董子に逆らい、宮中を強行突破した時の洛陽守備を担当していたのが李確である。

郊外に展開していた如月遼はわずか五百の部隊を率い、急激に戦力を膨れ上がらせて管理が行き届いていなかった董子軍に偽装し、李確の隙について洛陽城内に侵入し、見事に丁原らを救い出したのである。

ちなみにその中には未来を助ける形で一緒に逃亡していた祐一やアーシェもいた。

「あの件で俺は叱咤されて以来……どうも扱いが良くないのだ」

「あれは仕方がない、当時は近衛軍等を傘下に収め、軍内部の指揮系統や編成がごちゃごちゃだったからな、そこをたまたま突かれた形になったただけだ、貴公のせいではないよ……しかし、それで味方になった時に、如月遼の株が不当に董子様の中で上がっているのかな」

面白くないといった態度をとる李確の杯に郭汜は酒を注ぐ。

「なあ……噂によれば董子様はアルテナを大將軍、如月遼を鎮南將軍に任じるといふ噂も聞く、このままでは俺達はその小娘達に鼻で使われる様になるかもしれんぞ」

「……李確」

少々肥満した身体 of 李確、対し細目の郭汜。

二将は芽生えた何かの共通認識を確認しあう。

「しかしだ……知恵袋の華蘭が居なくなり、弱っているとはいえ、あの女は鋭いしそこまで隙はなからう……かといって素直に謀反も出来まい、アルテナが出てきたら話にならん」

先程までの様があの方に変わる郭汜。

「いや……ならばこちらも知恵者に頼むまでだ、話によると従軍戦史書記官をしている娘が非常に優秀でな、軍師の一人に推挙されるといふ噂を聞いた」

「女か、大丈夫か？ 大事を打ち明けて告げ口されたら……」

李確の提案に郭汜は眉をひそめる。

「いや、どうもその娘はその誘いを断り続けているらしい、破格の待遇向上にもかかわらず受けないのは志道董子嫌いなものではない噂だ」

「そうか……」

「それに色よい返事が貰えなければ……いくら軍師の誘いを受けて

いるとはいえ、断られたならば、一人の書記官など……」

李確は酒席から立ち上がり、腰に差した自分の剣を叩く。

「そうだな……難癖つけて斬り捨てよう、もしそうならず、全てが上手くいった暁には……」

郭汜が不敵な笑みを浮かべると、

「おう……もちろん、董子の首を差し出し連合軍とは和解して、董子の進めている例の計画を俺たちの手で実行して……今度は俺達が皇帝を後ろ盾に天下諸将を押さえ込み、酒池肉林の暮らしを謳歌するのだ」

李確は舌なめずりをして、盃を大きく上げるのであった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7450k/>

スウィートリベンジ 一天草未来の野望ー

2011年11月23日01時50分発行